
不機嫌な人々～変人達が織り成す事件簿～

プラスチック爆弾

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

不機嫌な人々～変人達が織り成す事件簿～

【Nコード】

N5710D

【作者名】

プラスチック爆弾

【あらすじ】

優男風だがグレてた過去を持つ、作中希少な常識人(?)主人公の鳳敦司。人をおちよくるの生き甲斐とする、実は警視総監の息子。刑事の矢嶋祐一。他にもゴーイングマイウェイ、傍若無人な女刑事、奇想天外な行動で他者を振り回すが、軍仕込みの卓越した身体能力と何事にも動じない肝っ玉で頼りになる、新進気鋭のヤクザの組長など、様々な変人奇人が織り成すストーリー。哀れ普通の高校生だったはずの敦司はいつの間にか非日常の世界にズップリ浸かることになり……。現在第一章は終盤、黒い車の惨殺事件を追

第二章にもつすぐ入ります。

1章 二重螺旋と悪夢 1話 悪夢（前書き）

ジャンルはコメディですが実態はコメディ&推理です。地名や店の名前等はデタラメです。ご了承ください

1章 二重螺旋と悪夢 1話 悪夢

そこには暗闇が広がっていた。その中をぼくは必死に走っていた。恐怖で涙が出てくる。

後ろを振り返るとチカチカ光が点滅しているのが見えた。

怒鳴り声が聞こえる。ぼくは焦り始めた。

逃げないと。

早く逃げないと。

早く逃げないと・・・。

気配が近くまで迫っているのが分かった。

ぼくは出来る限り手を大きく振って逃げた。

声が近く、近くまで来ている。

肩を掴まれた。

顔が恐怖で引きつる。ぼくは涙でぐちゃぐちゃになった顔をゆっくり後ろに向けた・・・。

6月19日 木曜日

僕はボンヤリと授業を受けていた。

・・・またあの夢を見た。小さい頃の僕が何かから逃げる夢。

なんなんだろう、あれは。決して気持ちのいいものではないし、何

回も同じような夢を見ている。いわゆる悪夢というやつか。

まあ、ね。授業聞かないで居眠りするからこんな夢を見るんだという気もしないではない。でもこの長々とした講義を一回も寝ないで聞くなんて不可能だ。神業だ。出来るはずがない。

そうだ、それどころじゃない。この時期の高校三年生というのは居眠りできる余裕などない（はずな）のだ。僕は眠気を押し殺しながら授業に集中した。

昼休み前の数学という地獄を乗り越えた僕は、そのまま机に突っ伏したいのを堪え、フラフラ食堂までやって来た。いつも食っている唐揚げ定食を受けとると空いているテーブルに座る。はぁ・・・。

眠い・・・。

あと3時間残ってる授業を終わらせ、予備校へ直行。帰ったら即寝る、と。近頃はいつもこの繰り返しだ。

「よお、キツそうだねえ」ふと見ると西岡がお盆を手にとって立っている。西岡は中学の頃からの腐れ縁で、ああだこうだ言いながら高校受験を一緒に乗り越えた。1年の時は同じクラスだったが2年の時僕は文系、西岡は理系を選んだため、一緒に授業を受けることは無くなった。しかし仲自体はまだ続いていて、よく昼にダべったりしていた。

「キツイよそりゃ。数学熟睡しちまったし」

「それはそれは」

西岡はフツと笑うとパンにかぶりついた。

「まああれだな、今は誰だってキツイ時期だもんな」

「はぁ・・・」

僕は大きなため息をついた。

「あ、そっぴやお前何処行く？今度の職業体験」

「職業？あぁ・・・」

職業体験とは就業の参考にするために行われる総合学習の一環で、

各自が学校で決めたいくつもの候補の中から思い思いの場所を選んで体験するというものだ。学校側の意図としては、大学受験を前にもう一度自分のやりたいことを確認しよう、とのことだ。だけどもかんせん時期が悪すぎる。どうせなら受験勉強が本格的に始まる前にやればいいのに。

・・・などと言いながら、僕はハナから真面目に職体を受けるつもりも無かったため、自分がどこに行くかすら覚えていなかった。

「おいおい、大丈夫かよ」西岡は呆れた声をだした。

「ま、待てって」

僕はカバンからがさごそ書類を取り出した。

「え」と、豊島遺伝子研究所ってとこ」

「は？お前文系じゃねーか、遺伝子研究してどうすんだよ」

「あゝ、まーね」

「文系ならもつと・・・そうだな、司法書士事務所とか行くんじゃないの？」

「あまーい！」

僕は大声を上げた。

・・・何が甘いのかはよく分からないが気にしない。

「遺伝子研究という専門的な知識を得ることで生物のテストを有利に進めることが出来るんだよ」

「・・・あ、そ」

僕の熱弁に対し西岡の反応は冷やかなものだった。

「何だよその薄い反応は」

「要はめんどくさかったわけだ」

「え？」

「めんどくさいから楽そうな仕事なら何でもよかったんでしょ？」

「・・・言ってくれるじゃねーか、そこまでいうなら今度の生物のテスト、勝負だ！」

「やめるなら今のうちだぜ？」

「・・・ッ！」

生物を専攻して授業数も多い理系の西岡に僕が生物で勝てるわけがなかった。

「ごめんなさい」

「ふ、分かればいいんだ」西岡はニヤリと笑った。

悔しかったので何か言い返したかったが言い返しようがなく、八つ当たり気味に弁当の唐揚げを乱暴に口の中へ放り込んだ。

「第一さあ、時期的におかしいだろ、今さら職体なんてさ。どっかの高校では同じことを一年でやってるらしいぜ？」

仕方がないので矛先を職体の方へ変えた。

「確かに。一日何も出来ないのは痛いよな……。別に課題の量はいつもと変わらないのにな」

「な！そくだよ！ったくかったりー」

「お前の場合ただひたすらめんどくさいだけだろ？」

「何を言う！勉強が出来ないことに心から憤りを感じているんだ！」

僕は真面目に言ったのに西岡は腹を抱えて笑っていた。

全く失礼なやつだ。

僕は定食のご飯を思い切りかきこんだ。

・・・僕の名前は鳳敦司^{おおとりあつし}。この西岡と同じく、ここ、県立智林高校の三年生だ。・・・別に超能力が使えるわけでも実はこの星の人間ではないわけでも高校生探偵なわけでもない。受験に追われる日々にうんざりした何処にでもいる高校生だろう。

そしてこれからも他の人と何ら変わらない人生を送る……………はずだった。

「・・・ただいま」

僕がボロっちい一軒家に帰って来たのは11時を回ったところだった。

夜が早い母はもう寝ており、父はテレビを見ていた。

「おう、お疲れさん」

僕はウンと頷くと台所の方へ向かった。物がゴチャゴチャ仕舞われている収納ケースから菓子を取り出すとソファーにドカリと腰掛ける。

特に話すこともないので黙って菓子を食った。僕は基本、家では無口だ。父も口数が多い人ではないので母が寝てしまふとこの家は静かだ。

もう夏になるうかという時期なので外からは虫の声が聞こえる。

・・・やっぱり静かだ。

「なあ」

父が話しかけてきたのはそんな時だった。

僕はちよつと驚いたけど何？と返事を返した。

「職業体験つてのがあるらしいな」

あれ、父さんには職体のことは言っていないんだけどな。

・・・母さんから仕入れたな？

「うん、あるけど」

それが何か？と首を傾げる。

「おまえ、将来何やりたいんだ？」「ん・・・決まっていなな」

決まっていなな遺伝子研究所なんて行かないよな。

「なあ、」

真剣味を帯びた声に変わったので僕は振り向いた。

「何になるうとお前の人生だ。好きにして構わないが、一人の人間として立派に生きて欲しい」

・・・特に俺のような奴にはなるな・・・。

と、最後に父は呟いた。

「ど、どうしたの？いきなり・・・」

「・・・なんでもない」

「・・・はあ、浮気でもしたのか？」

「何言つてやがる」

父は僕の頭を小突いた。

顔に笑みが戻る。

父に何かあったのは事実だろう。大方、仕事で自己嫌悪に陥るような嫌なことがあったのだろう・・・。しかし、それをどうこう僕ができる事ではないし、する事でもない。

とりあえず父が元気になったことを見届けた僕は、一安心して風呂へ向かった。虫の声はどこまでも、夜の静けさを引き立てていた。

2話 飯は黙って食べましょう(前書き)

初回取り敢えず1・2話同時投稿します

2話 飯は黙って食べましょう

――――黒。

むわっとした暑さ。

ぼくは音もなく歩いていた。

辺りを見ると、男性女性、爺さん婆さん、はしゃぐ子供。どいつもこいつも全身真っ黒。

あれは、喪服？ああ、葬式なんだ。でも、誰の・・・？

中央に花に囲まれた檀があつた。

綺麗な女性。

・・・誰？

どこかであつたような。

耳障りな経を詠む声とポンポンと響く木魚。

ふと隣を見ると父が僕の手を握っていた。痛い。

僕は母を見つけようと辺りを見回した。

・・・見つからない。

僕は・・・なんだかひどく悲しくなつた。

――――

「であるからして、体験ではDNA鑑定をやらせて頂けるとのことなので、家族誰かの髪の毛を忘れずに持ってくるように」

目が覚めるとそこは会議室。僕は司会からもっとも離れたポジション

ンで熟睡していたようだ。

今は職体グループ最終打ち合わせの真つ最中。

・・・あの夢。実はこの前の夢もそうだが見るのは初めてではない。もう何回見たことか。誰かに追われる夢や葬式の夢なんかを昔から見続けている。

こりや立派な精神障害ではないのか？

・・・まあ精神科なんてめんどくさいから行かないけどね。・・・

ああ、心療内科か。こいつは失礼。

「おい、おまえさつきから黙ってりゃいい気になってぐうたらと・・・」

堪忍袋も遂に切れたか、司会の内海が僕にガミガミいい始めた。

まあ無理はない。時計を見る限りでは僕は会議開始から5分足らずで寝ていたようだ。

「お前、行くのは明日なんだぞ！？それを・・・」

「あー、あー問題ない」

「本当だな！？お前忘れんなよ」

「あー、えつと・・・何を？」

内海の頭からからブチッという声が聞こえた。

あちゃー・・・。

「髪の毛だよ髪の毛！DNA鑑定用の家族誰かの髪の毛持ってこい
つつってんだあッ！」

「そう切れるなよ」

「キレてねえッ」

「キレてるよ・・・」

・・・にしても腹減ったな。僕は内海のなおも続く騒音から耳を背けながら思った。

食堂の向かい側の席には例によって西岡がいた。

・・・ある時はここに可愛い女の子が座ったこともあったのだが、ここところはご無沙汰である。飯食う相手が西岡だけとは、いやはや僕も落ちたもんだ。

いや、決して友達が西岡だけってことはないよ？そこは誤解されちゃ困る。

ただ皆受験勉強に必死。箸を片手に参考書のページをめくってる奴ばっか。そんな奴らと飯食っても旨くないだろうっての。飯食う時くらい落ち着きやいいのにね。

てなわけで僕はここ最近、僕と同じく受験ムードに取り残された西岡としか飯を食っていない、というわけである。

「でさ、どうよ」

そんな僕の心の内をさっぱり知らない西岡は飯を食いつつ言った。

・・・こいつも違う意味で落ち着きがない奴だな。

「・・・飯を飲み込んでから喋れよ。で、何が？」

西岡はゴクリと口の中の物を飲み込んだ。

「職体に決まってるだろ、確か今日最終打ち合わせだったよな、おまえらのチーム」

「あー」

僕は気のない返事をした

「おれらんとこはなんか無口な奴ばっかだな。肩がこってしょうがないぜ。・・・なんか間が息苦しい」

「ハハハハ、そりゃあお前には苦しいか」

西岡は昔から賑やかな奴で通っていた。そんな奴が無口な銅像相手につまらないジョークを飛ばしながらなんとか場を盛り上げようとしているのが目に浮かび、笑えてきた。

「笑うなよ・・・俺にとつちや死活問題だぜ」

「あ、そ」

「冷たいなあ・・・」

西岡は悲しそうに唐揚げを口に放り入れた。

しかし、すぐに気を取り直すと

「で、そっちはどうなんだよってば」

と改めて聞き直してきた。

「僕？うーん・・・知ってる人が少ないなあ」

「そりゃあお前、そうだろうよ。文系のクラスで遺伝子研究所いく変人はお前くらいなもんだからな」

「あー、やつぱ真面目に考えるべきだったかあ」

「いや遅えよ。その答えに辿り着くまで」

・・・とはいっても

「将来の希望なんてきかれても・・・しがないサラリーマンでいいだろ」という僕にとつて、こんなときは一番楽そうなものを選びたくなるのは至極当然なワケで。

「・・・あ、でも内海だけは例外だわ」

僕が呟くと西岡は吹き出した。

「内海！？あのうるせえ内海か！1年んとき一緒だった。アッハッハ。こいつはいい。おまえら相性最悪だろう。よお？」

「・・・ああ、今日も20分は怒鳴られた、な」

なんか急に嬉しそうな顔になった西岡をはっ倒したい衝動にかられた僕は、堪えつつ答えた。

ひとしきり笑いまくった後、西岡は僕の肩をポンと叩いた。

「同士よ、お互い大変だな」

「まあな。だけど明日当日で体験済んだらはいおしまいだから別にどうでもいいけどさ」

「ドライだねえ。そんなドライな鳳くん、今日女の子連れてカラオケどうだい？男のメンツ1人開けといてやったぜ？」

「あー、僕予備校だわ」

「んー、じゃ終わってから来いよ」

「・・・ちつ、仕方ねーなあ」

僕はなんとも気が乗らない。めっちゃ疲れるだろうし何よりああいうのは僕はそもそも好きじゃないんだ。

「頼むぜ、相手はここより少し都会の隣町の御嬢様高校生だからなあ、期待出来るぞ？」

隣町ねえ。僕らの町は東京に近いものの結構辺鄙な神奈川北部の小さな町。隣町は横浜に近づいた大きめの町だ。

隣町なら結構なお嬢様方だったりするのだろうか。

・・・やっぱり気が乗らない。やっぱり断ろうかな。

「西岡、僕やっぱり止め・・・」

その時チャイムが鳴り響いた。午後の授業開始の予鈴である。

「やつべ、じゃあ、頼んだぜ！」

「お、おい。人の話は最後まで・・・」

はあ。これで行くしかなかったわけだ。

西岡の慌ただしく駆けていく背中を目で追いながら、僕は大きなため息をついた。

3話 借金ばかりでなく合コンも計画的に！（前書き）

まだ話が全然進んでませんね。てかこの1章自体がプロローグみたいなもんです。気長に見てもらえると嬉しいです

3話 借金ばかりでなく合コンも計画的に！

僕は激しく後悔しながら夜道を歩いていた。

まったく一体誰だよ！隣町の御嬢様女子高生なら気品溢れる清楚な娘だつて言つた奴！

・・・はい、誰も言つてませんね。勝手な僕の思い込みだつたね。はいはい僕がバカだつたよ。

ただし一言言わせてもらつと悪いのは全面的に西岡。あの馬鹿が「お嬢様」というだけで顔写真も見ずに合コン取り決めやがつたせいでこんな目に・・・。普通顔チェックくらいするだろうよ・・・。

「はあ・・・」

それにしてもあれはない。お嬢様だつてあまり好みじゃないけど、あれに比べたら土下座してでも来てもらつ価値はあつたと思う。

あれはない。あれはないよ西岡君よお。

おかめみたいな奴が複数名下手くそな歌歌つて甲高い声で

「マジヤバ〜い！」とか騒ぎまくつて。

マジヤバいのはためーらだ！と言いたい。

しかし今思うと奴らが入つてきた後の西岡の顔。結構笑えた。

まああのときは僕の顔もかなり引きつった笑みを浮かべていただろうから西岡の顔を笑うどころじゃなかったけど。

そうして僕と西岡、西岡に引つ張つてこられた哀れなる男子2人の計4人はずっとジャパニーズスマイルを続け、2時間半堪え忍んだのだ。嫌ならさっさと帰ればいいのに、という人がいるだろう。勿論その通りだ。しかし帰らないのには理由があつた。

あのおかめ集団に結構可愛い子が1人混じつていたのだ。話から察するにどうやらおかめどもに無理矢理連れて来られたそうで。嫌々西岡についてきた僕は妙に同士の感覚を覚え、よく話しかけたのだが、西岡はそれを僕がその子を狙つてると勘違いしたらしく、とはいえストライクゾーンにあるのはその子だけなので、

「俺あの子狙うぜ」と敵対心むき出しで僕に宣言したのである。
知らねーよ。勝手にしてくれ。

んでもって、愚かな西岡は張り切ってこの救いようのない合コンを盛り上げ始め、『さあお開きにしましょう』とはいえない空気を作り出してしまったのだ。

僕はというと、興味が全くななんてワケではなかったが、僕はそれより家に帰りたかった。あの騒がしい甲高い声から逃げ出したかった。あつたかい我が家が待っている。

・・・ということで、僕は頃合いを見計らいあんまり遅くなると親が心配云々、と言ってそそくさと逃げてきたのだ。

・・・親には前に休んだ分の補講を受けると言っておいたので、遅くなっても問題ないはずんだけどね。

ま、今度西岡にはきっちり落とし前をつけてもらおうかな　フッフ、フッフッフ。

時刻は１１時４０分頃。

空を見上げると上弦の月と星、虫たちの声がより静かな夜を作り出していて、カラオケボックスの騒がしさが嘘のようだった。

そっぴああの救いの星。唯一可愛いかった子、なんて名前だったっけ？

・・・大川内碧おおかわうちみどりだったな確か。メルアドくらい確保しとくべきだったか。

駅についた。

早く家に帰りたい。

なんか急にホームシックになった気分だ。

「あれ？鳳くん・・・だよな？」

ため息をつきつつ1人佇んでいると声をかけられた。見ると女の子に可愛い！と言われそうな僕と同じくらいの年のが上目遣いで僕を見ていた。

「あ、確か・・・」

名前が浮かびそうだった。浮かびそうでは浮かばない。あとすこし。もうここんとこまできてるのに・・・。

「永・・・山？」

「森」

「あちゃ」

僕はわざとらしく額を手で叩いた。

そんな僕を見ながら永森は楽しそうに笑う。

あー、確かこんな奴だったよ。

ながもりしゅんご
永森俊吾。

皆の馬鹿なやりとりをいつも近くで楽しそうに聞いてたおとなしい奴だった。

「久しぶりだね」

「うん、2年まで一緒のクラスだったから半年振りくらいかな？」

「もうそんな経つんだね」永森は遠い目をして言った。昔を偲んでいるのだろうか。ジジイ臭いがこいつらしい。

「予備校？」

「ん、・・・ああ、そうだよ。そっちは？」

本当は深い事情でこんな遅くまで家に帰れなかったわけだが、そこは割愛させてもらおう。

「同じ。お互い大変だね」ああ大変だったさ！

あのおかめの！あと西岡のアホのせいで！

「・・・？どうしたの？」

「い・・・いやあ！なんでもないさ。あはは」
どうやら僕は根に持つタイプのように。

それから僕たちは他愛もない話を少し続けた。
異変に気付いたのはそんな時。

「・・・あれ？」

僕は腕時計と電光掲示板の表示を見比べた。

12時7分にくるはずの電車が10分になっても来ていない。

おかしい。首都圏あたりの電車は時間厳守が鉄則。・・・まあどんな電車でも時間厳守は当たり前か。でも首都圏サラリーマンの方々は1分1秒の遅れが命取り。商談が成立するかしないかの瀬戸際なのだ。つまり、the 崖っぷちおとーさん！にはこういうことはあつてはならないことなのだ！

説明しよう。the 崖っぷちおとーさんとは、妻には浮気され、息子には蔑まれ、娘には無視され、会社では窓際族もしくはリストラ一步手前の男性のことだ。

「君、君はもうわが社には必要無いのだ」

「待って下さい！課長！私にチャンスを！」

「・・・いいだろう。xx商事との契約を取りまとめて来たまえ。失敗したら・・・分かつてるね？」

「は、はい！」

しかし・・・。

「くそ！なんで電車が来ない！このままじゃ遅刻だ！俺の！俺の人生があああつ！」

・・・まあそういうわけで首都圏の電車に遅れはあり得ないと僕は言いたいわけで。崖っぷちおとーさんとかどうでもいいわけで。

「変だね、5分遅れなんて」うん、と僕が頷いたとき、アナウンスが入った。

【12時7分発横浜行き、遅れておりましてお客様には大変ご迷惑

をおかけしております。只今、当駅付近にて、人身事故が起こり、電車が停止する事態になっております。そのため、当路線は一時運行を見合わせまして、1時15分より運行を再開したいと思います。皆様には大変なご迷惑をおかけしまして

「マジですか」

「鳳くん、アナウンスは嘘言わないよ」

「・・・っ！分かってるよ！」

「冗談だよお、あはは」

「・・・くっ」

こいつ実はやなやつ？

僕らのやりとりをよそに、ホームの人達は怒ったりため息ついたり様々だ。向こうでは酔っぱらったサラリーマン風の男が駅員に怒鳴っている。

この電車がないと家に帰れないという人もいるだろうから当然といえば当然か。かくいう僕もその一人だったりする。

はぁ・・・帰るのは何時だろう？

そんなこと思ってしまう自分に嫌悪感。すぐそこで人が一人死んだからそんなこと考えるのは不謹慎以外の何物でもない。

でも今日は特別。

いつもの3倍は疲れている。

かつたるくて親に事情を話す気にもなれない。

・・・とはいっても連絡しないならしないであとが面倒かな。

僕は大きなため息をついて立ち上がった。

「どうしたの？」

「親に電話いれてくる」

ああ、と納得した顔の永森はフツと笑った。

「てつきり待ちぼうけしてる僕をおいて一人タクシーで帰っちゃうのかと思っただよ」

「あのね。僕がそんな贅沢行為できるわけないでしょ」

高校生の財政は厳しい。そりゃあもう地方交付金が欲しいくらい。

今の僕の財布の中は500円玉が1枚。100円玉が4枚。10円や1円がジャラヤラ。小銭入れに何も無いより1円ばかりの方が悲しくなるのは何故だろう。

そんなことを考えながら親に携帯で電話をいれる。

簡単に事情を説明し、遅くなる旨を伝えて切った。

「人身事故」というワードで僕を心配し始めたけどひかれたのは僕じゃない。

杞憂というか、時間の無駄だ。

・・・あ？言い過ぎだって？これは失礼。ただ、僕は母の過保護さに恥をかいたことが少なくないもので。

例えば・・・忘れもしない小学校の林間学校。バッグを開けてみたら何故か昨日自分で荷造りしたときは無かったはずの

包帯

傷スプレー

消毒液

絆創膏

虫刺されの薬

虫よけスプレー

目薬

胃薬

風邪薬

頭痛薬

整腸剤

アリナミンA

リポビタンD

オロナミンC

・・・いや、最後のは要らないだろう。これただのジュースだよな？不要物だよな？

ということ、半ば薬箱と化した僕のバッグは皆の笑いの的となり、

僕は先生に呼び出しを受けて、主に最後の物について、こっぴどく叱られたのだ。

僕は電話を終え、永森の元へ戻ると、大きくため息をついた。

「しっかしなあ。明日職体なのになあ」

「あはは、そうだね」

「どこ？」

「大友出版って出版社。そっちは？」

なんていったつけ？いかん、名前もろくに覚えてない。確か……。

「と、豊岡遺伝子研究所？」

「疑問形！……ていうか鳳くんは文系だよね？何たって遺伝子？」

「皆から言われたよ」

僕は苦笑いした。永森も小さく笑う。

こいつとこんなに話したのも久し振りだな……。ていうか同じクラスだった頃もこんなには話さなかったかもな。

そんなことを思ったら、ちよつと嬉しくなった。

4話 ほんのささやかな報復 良い子は真似しないでね（前書き）

進みが遅いです。ごめんなさい。てか今『推理』の要素無いですね。その内出てくるんでどうか見捨てないで・・・。

くどいようですが、地名やは筆者の創作です。実際にその地名があるわけではありません。（あつたとしても偶然です。多分・・・）

4話 ほんのささやかな報復 良い子は真似しないでね

永森と話してしばらくたった頃、遠くからパトカーのサイレンの音が聞こえてきた。

到着が遅いような気がするが、まあ事件性がないから遅くても問題ないのだろう。・・・いや問題あるか。事件性とか勝手に判断してのんびり到着とか、大いに問題だろ。

「パトカーだね」

永森が呟いた。

「・・・あの事故の人、やっぱ死んじゃったのかな」

「そりゃあ電車にはねられたらな・・・」

「さつきは足止めなんてついてない、みたいなこと言っちゃったけど実は大変なことなんだよね」

「ああ・・・」

さつき見た酔っぱらいサラリーマンはついに駅員につかみかかり、ちよつとした騒ぎになっていた。

「僕は、ああいう大人にはなりたくない・・・なんて言い方すると子供みたいだけど」

永森は少し照れたように笑ったが、言葉を続けたとき、こいつの顔は侮蔑と怒りの混ざった冷たい顔だった。

「人が一人死んでるのに自分の都合しか考えない。挙げ句の果てに騒動起こして人に迷惑かけてる。・・・駅員にいくらつかみかかったところでどうしようもないのにな」

永森は横目でリーマンを見つつ、一息でそう言いきった。

僕は少し驚いて、黙っていた。

永森はこんなに自分の感情を前に出す人じゃないと思っていたが。永森はいつもの表情に戻ると、静かに笑った。 「あ、なにこいついきなりムキになってんだ？て思ったでしょ？」

図星。

僕は答えずに口元を緩めた。永森も微笑すると先を続けた。

「僕の兄がさ・・・刑事なんだ」

「へえ」

初耳だ。

「24でさ。年の離れた兄なんだけど、優しいんだよ。両親が離婚して母親に育てられてさ。母さんが、その、早死したあととは一人で僕を養ってくれた。11の時からだから7年になるね」

「・・・」

永森がかなりの苦労人であることを初めて知った。こいつはそういう苦労を積み重ね、ここまで成長してきたのだ。両親もいて家もそれなりの豊かさがある僕には、その苦労は計り知れなかった。

「あ、ごめん変な話して。こんなことが言いたかった訳じゃないんだよね」

僕は無言で続きを促した。

「兄さんは交番勤務だったんだけど、去年偶然麻薬ルートを挙げて警視庁捜査一課に大抜擢。階級も巡査部長になったんだ」

「へえ、良かったじゃん」母を亡くし、弟を養い、頑張り続けた兄に天がご褒美をあげたのだろうか。微笑ましい。

「うん・・・だけどね、最近ちよつと・・・何ていうのかな。余裕がないっていうか。やっぱり本庁の刑事になるとさ、交番勤務と比べて事件と接する機会がとんでもなく多くなるんだよね。当然人が死ぬ事件にも多く関わるようになる。・・・まあ兄さんは優しすぎるんだろっね。起こる事件1つ1つにいちいち心を痛めてる。僕の前ではいつも明るいんだけど、最近はどうも陰りがあってさ。で、そういう兄を持ったからっていうのもあるのかな。ああいう人見ると余計・・・」

「余計ム力つくんだ？」

「そう。なんか腹立つちゃった」

永森は自嘲するように笑った。

「それこそそんなこと言ってもどうしようもないのに、ね」

僕は何も言えずに口を閉じたままだった。

しばらくの沈黙を破ったのは荒い音質の構内アナウンスだった。

> 現在横浜行き電車、人身事故のため大幅に遅れております、お客様には大変ご迷惑をお掛けしております<

「ホントだよ！ たくふざけやがってよお！」

アナウンスの途中で酔っぱらいバカリーマンの雑音が入ったとき、さすがに僕もプチツときた。

・・・ふざけてんのはお前の方だよこの社会のゴミ

フフ、どうやらこの愚かなリーマンはよっぽど誅伐を欲しているらしいな。そういうことなら仕方がない。この僕がささやかながら誅してやるう。フフフ、アハハハハッ！

ちよつとキすぎてテンションがおかしくなってしまったか。そもそも僕もああいう人種は大嫌いなんだってのに永森の話を聞いたから尚更キたんだな、多分。

これはちよつとギャフンといわせないと気が済まなくなってきた。・・・えげつない、それでいて知的かつ陰湿な手法で、じっくりお仕置きをしてやる。

僕はあのリーマンを懲らしめるための策を、普段の受験勉強でもあまり使わない脳みそを総動員して考え始めたのだった。

僕の思考をよそにアナウンスは続けられた。

まあ八割方は謝罪の内容だったが、要約すると、もうまもなく電車が来るということだ。

大声で怒鳴っていたリーマンは、まだぶつくさ言っている。しかし、電車のヘッドライトが見えると、他の客を押し退けて当然のように最前線を陣取った。

「・・・・・・・・」

永森は無言で奴を睨み付ける。

そんなこと素知らぬ顔のリーマン。

・・・情状酌量の余地無し。

僕はニヤリと笑った。

・・・これはかの有名なある人の言葉・・・などではなく、某有名国立大学の医学部にいる4つ歳の離れた僕の従兄の言葉である。

「いいか、敦司。社会人というものは大体において世間体のことで頭がいっぱいなものだ。それが悪いとは言わない。そう気にするようになったプロセスが誰しもあるものだからな。気にしないのは・・・まあ、傑物か変人くらいかな」

・・・彼が中3の時に小6だった僕に言った言葉だ。
性格ひん曲がつてやがる。中坊がそんな思考してていいのか・・・？
僕は聞きながら、きつと彼こそ将来世間体を気にしない『変人』になるんだろうなあ、と思ったものだ。

そう、社会人は世間体を気にするもの。なら公共の場、衆前にてあのリーマンに赤っ恥をかかせるのがいい。
さて、どんなシチュエーションが効果的かな・・・

ふと気が付くと、もう電車は到着していた。 「どうした？
大丈夫？ 鳳君」

「ん？ ああ、大丈夫だよ」僕は首を振って言った。
いかん、電車が来るのにも気付かないとは集中し過ぎたな。
「それよりもさ、永森、奴を公衆の面前で赤っ恥をかかせようと思うんだけど、興味ある？」

僕は永森に朗らかに笑いかけた。

電車に乗り込むと、なんとかあのリーマンの後ろの位置を陣取った。電車には事故の時にいて、電車が止まったのをひたすら待ちぼうけしていたらしい人が少なくなく、奴は最前線に陣取ったにもかかわらず、席に座ることはできなかった。ざまあみろ。

永森はちよつと離れた所でも人にもまれながら、いきなりリーマンの背後へと回った僕を心配そうに見ていた。

暴力沙汰でも起こすとも思ってるのだろうか。でも無論そんなことはしない。それじゃあ公衆の面前で皆に白い目で見られるのは奴でなく僕になる。僕がとるのはさっきも言ったようにもつと理知的かつ狡猾な策だ。

僕は

「心配ない」

と笑って返すとリーマンを見た。

・・・そろそろか。

ガタン、と音がして電車は傾いた。急カーブだ。乗客がよろよると揺さぶられる。

次の瞬間。

「キャアアッ！」

リーマンは目の前に座っていた女性に頭から突っ込んでいた。っし

やあッ！

僕は膝を打って喜びたい衝動にかられたが、我慢する。僕の構想は見事に成ったのだった。それはもう見事に。

他の乗客の反応も上々だ。話し声はピタリと止み、みな一様に白い目をリーマンに向けている。

リーマンはようやく自分のおかれた状況を理解したのか、即座に顔を上げた。さっきまでのエゴで尊大な態度はどこへやら。青い顔で、しどろもどろになって弁解を始める。

「ち、違っんだ、これはあっ・・・あ、ああ、う、後ろから押されて」

「何言ったって無駄ですよ？変態さん」

「ち、ちが・・・」

僕がリーマンの痴漢行為を見かねた好青年を装い、ここぞと追い込みをかけると今度は赤い顔をして小さくなった。

「何が違っの？ならさっさと手を離してくれないかしら？」

女性が鋭くリーマンを睨んだ。

女性の視線の先を見ると、・・・愚かなりリーマン。奴は女性に頭から突っ込んだ状態から起き上がり、必死に弁解を続けていたのだが、奴の手はそのまま、思いつ切りその女性の胸を掴んでいたのだ。

「ウワッ」

「キモッ」

周りから声上がる。

いや、僕も少し引いた。こいつ、どさくさ紛れの確信犯じゃないだろうな？

「いや・・・これは・・・」

「まだ言い訳？謝る気はさらさら無いわけね。この・・・変態野郎ッ！」

ガスッ

女性がリーマンの股間を思い切り蹴り上げた。

ウツ・・・！

うわぁ、やるなこの人……。僕は思わず股間を押さえた。痛い。ありや痛い。

「・・・・・・・・ッ！！」

リーマンは声にならない悲鳴をあげる。

そのとき電車が駅に着き、扉が開いた。

リーマンはよろめきながらホームへと降りていったのだった。

・・・なんと上手くいったことだろう。最後にはあのリーマン半泣きだった。

ちよつとやりすぎた感はあるな。うん。

僕が達成感に浸っていると、背中をポンと叩かれた。

「やることがえげつないね、鳳君」

声を潜めて永森が笑いかけてきた。

「モチ。当然

の報いさね」僕は親指をグツと立て、ニヤリと笑った。

ぶつちゃけ笑いが止まらなかったが、いきなり電車の中で高らかと笑えば

「何この変質者」

「ママァ、あのお兄ちゃんなんで笑ってるの？」

「シッ、見ちゃいけません」

・・・となること請け合いなので我慢する。

「しかし上手いことやったねえ。バレても『肩がぶつかっただけです』とかいくらかでも弁解できるし」

「そうそう。頭を使わなきゃね」

僕は自分の頭を指でツンとつつき、もう一度ニヤリと笑ってみせた。そう。僕のしたことは至ってシンプル。ただ急カーブでみんながよろめくタイミングでリーマンの背中をそつと押したただけだ。そうつと、ね。

>次は〳〵緑町〳〵、緑町〳〵<

「あ、僕もう降りなくちゃ」永森が立ち上がった。

「おう、じゃあね」

「ふふ、なかなか楽しかったよ。久しぶりに鳳君と話せて。・・・ちよつとスカツとしたし」

永森は含み笑いを僕にむけ、去っていった。

ちよつと照れ臭かったので顔をそっぽにむけて手を振った。
・・・さて、僕もそろそろ降りる準備をしないと。

>次は〽大峯〽大峯〽<

「さてと・・・」

僕は伸びをすると立ち上がった。

僕に向かっている視線には全く気付かずに・・・。

5話 夜道の1人歩きは危ないけど2人歩きも安全とはいえない(前書き)

今思ったんですが、機種やPCから見てるなどの環境の違いにより、もしかしたら変なところで改行してたりするかもしれません、ご了承ください

5話 夜道の1人歩きは危ないけど2人歩きも安全とはいえない

綺麗な上弦の月は少しだけ雲にかかりながらも輝いていた。

昔の人は満月よりも雲がかつた月を趣があると言ったそう。うむうむ、風情よのお。

僕はそんな光景に心を癒されながら電車を降りた。実は、こうやって夜道を一人でのんびり歩くのが僕のささやかながら楽しみだったりする。

は、なんか今日は疲れたわ。

当然か。平日、学校後に予備校行って、終わったらあんだけカラオケ歌って・・・疲れない方がおかしい。

さあ今日も癒されながらのんびりかえ・・・・・・・・ろうとしたとき、誰かが僕の右肩を叩いた。

サツと振り向くと、そこには見たことがないわけではないけどほとんど知らない女の人が立っていた。

詳しく言うと、彼女はリーマンの正面に座っており、奴を男に決して使ってはならない禁じ手で半泣きにさせた、例の女性である。

黒いスーツを肩にかけ、ピシッと糊の効いたワイシャツ。若干つり目でストレートショートカット。若干髪の毛がボサツと乱れているが。見た目かなりの美人といえるが、リーマンへのあの蹴りから考えて気は強い。

・・・こういう人を奥さんにして尻に敷かれる確率・・・95%。

「な・・・・・・・・なんですか？」

「やってくれたね、君」

「な、何をでしょう・・・？」

「さっきの黒幕はあんたでしょう」

「は・・・・？えっと、何のことですか」

「マズイ。」

計算外だ。

確実にバレてる。

しかもこの人怒ってるよ。呼び方が『君』から『あんた』になるもん。

「ふーん、しらばつくれるんだ」

「・・・あ、あははは・・・。。バレてました？で、でも僕は別に・・・ただ『不幸』にもカーブで車体が傾いた時にあの人の背中に肩が当たってしまったただけで」

「ふーん？・・・まあ歩きながら話そうか」

そう言う女性と女性はさっさと歩き出した。家と同じ方向なので、やむ無くついていく。

・・・というか、そういえばこの人は僕の計画の犠牲者なんだよな。僕はあのリーマンを懲らしめたいという自分の都合だけでこの人を犠牲にってしまったわけだ。

そう考えるとこの人が怒っても当然・・・ってか100%悪いのは僕じゃないか。

いや、あのリーマンさえいなければこんなことは起こらなかったわけだからあのリーマンが三割負担。

僕がああの行動を起こしたのは永森の発言によるものが大きいから永森が一割負担・・・いやむしろあのリーマンみたいな野郎を作り出してしまった神様が十割負担ってことで・・・。いや、あまり神様に負担をかけすぎると神様キレてラーメン屋始めちゃうからな。よしておくか。(セキスイハムのボックスラーメン！)

ってそんなことはどうでもいい。

「あの、すみませんでした」

「ど、どうしたの？急に素直になっちゃって」

「いや、よくよく考えればあなたが怒るのも当然かと思ひまして」
女性は何故か僕をじっと見つめた。

「・・・ふふ、君とは上手くやれそうね。あ、私こういうもの・・・」

女性と僕は歩みを止め、バッグをこそごそし始めたが目当ての物は見つ

からなかったらしく、頭を掻いた。

「あゝ、ない……。まあいいか、こっちで」

そう呟くと、ちょいちょいと僕を手招きした。

「はい、あげる」

女性が渡したのを見た僕は……。

俊敏なバックステップで彼女と距離を取り、そして……。

「申し訳ございませんでしたあああつ!!」

そのままひざをつき固いアスファルトに額をつけた。バックステップ土下座、である。

女性が渡したものは、名刺。そしてそこには

『警視庁 捜査一课 警部補 毒蝮美咲』

と、書いてあった。

「ちょ……。どうしたの？いきなり」

「ほんつとすみませんでした！僕が愚かでした！てかむしろ調子ぶっこいてました！ごめんなさい！謝ります！謝りますからあの……補導だけはあああああつ!!」

「ちよつと落ち着いて……」

「補導されたら！僕の人生おしまいなんですよお！親泣いちゃいますよお！うつつ、悪気があったわけではないんです……。ただ、あの、皆に迷惑かけてたりーマンを、見るに見かねて……。うつつ、うつ……」

僕はもうプライドとかそういうものを全てかなぐり捨てて、謝った。

頼んだ。最後は泣いた。

笑いたければ笑うがいい。こっちは人生がかかっているのだ。

「落ち着いて……。補導するなんて誰も言っていないでしょう？」

「ほ、本当ですか!？」

僕はガバツと顔を上げた。

「本当だって。ほら、行くわよ、立ちなさい。男がそう簡単に頭下げちゃいけないわよ」

「はあ、すみません」

あ、また頭下げちまった、と思いつつ、僕は言われるままに立ち上がり歩き出した。

「・・・大体、君は悪いことしてないんだからもつと胸張りなさいよ。隠すことないでしょう?・・・私が最初怒ってたのもそれが理由」

「はあ・・・てか悪いことじゃないんですか?」

「んーん、全然。むしろよくやったって誉めてあげるわよ。ま、君の行動のせいで胸揉まれたのはこの上なく不快だったけどね」

僕は苦笑しながら

「すみません」

ともう一度謝ったが、その時毒虻さんが『あのクソエロ豚野郎、今度あつたらしよっぴいてブタ箱（留置所）に入れてやる』とひどく汚い言葉を呟いたのを見逃さなかった。

「にしてもム力つくよねえ、あのリーマン!」

「ですねえ」

「あいつ、私の胸を揉んだばかりか、電車乗ってきたときシルバーシートのお婆ちゃんに席を譲れって言つたのよ。信じられる!？」

「ハ?」

・・・シンジラレナイ。

ヒルマン風になってしまった。

今度あつたら毒虻さんがしよっぴく前に俺が東京湾に沈めてやる。

・・・あ、キレた時とかになると、僕『俺』って言っちゃうんです、はい。

ま、昔いろいろありまして、いまでこそ僕の一人称は『僕』ですが、前は『俺』だったわけで。

「まあ、その時はお婆ちゃんの近くに立ってた兄さんが『てめえいい加減にしろよ』ってことで何事も無かったけど・・・」

僕は毒虻さんの肩に手を置いた。

「ん？何？」

「いゝまかゝらいゝつしよにゝ　これからゝいゝつしよにゝ
なゝぐゝりにゝいゝこゝつゝかゝゝゝゝ」

「yahゝゝゝyahゝyahゝゝゝyahゝyahゝyahゝyahゝ
yahゝ」

見事ともいうべき意思の疎通。

毒蝮さんのノリが良かったので息もピッタリだ。

「あつはつは、君結構面白いね」

「そっちこそ、合わせてくれるとは思いませんでしたよ」

僕、こういうノリのいい人結構好きだなあ。

空気が和やかになったところで、僕は自分の名前を名乗っていないことに気付いた。

「あ、どく・・・どくまむしさん？・・・プツ」

なんか名前を呼んだらなんか人の名前じゃないような気がしたり、勝手に『毒蝮三太夫かよ』とか、ツツコンだりしてしまったもので、思わず吹き出してしまった。

にしても変な名前。

「ねえ」

「なんですか、どくまあゝっっ！？」

グーで殴られた。

軽く2メートルは吹っ飛んだ。

「うぐ・・・な、何を・・・」

「察しろ」

・・・察した。恐らくこの人は幼少時代この苗字のせいで苛められるかなんかしてコンプレックスになってしまったのだろう。

その情景をまざまざと思い浮かべた僕は、なんだかひどく悪いことをした気分になった。

「あの、なんていうか、ごめんなさい」

「うん、分かればよろしい。あと金輪際私のことを苗字で呼ぶな。

呼んだら職質中にセクハラ受けたって言って補導してやる」

すなわち毒虻って呼んだ瞬間に僕の未来のウハウハキャンパスライフは夢幻と化すわけだ。気を付けないと。

「はい。了解いたしました」

毒虻さん・・・もとい美咲さんは満足そうに頷いた。

「それはそうと、美咲さん」

「ん」

「なんだかんだ言っただけで自己紹介してないと思ひまして。僕は鳳敦司。智林高校三年生です」

「ん、あっちゃね」

早くもあだ名をつけられてしまった。

はあ。もうどうにでもしてくれ。

それよりも僕は一つ、気になったことを聞いてみた。それは・・・

「美咲さんっておいくつですか？」

拳が飛んできた。僕はそれを素早い身のこなしで避けた。

「ちょ、いきなりストレートはない・・・」

「あんたは女性に歳を聞いていいと思ってるの？」

「う。じゃあ美咲さん、何年生まれですか？」

「ん、戌・・・ん？あああああつ！」

「いや、それ引つ掛かるなよ！」

言うわけねーだろ！ってツツコミを期待してたのにまさか引つ掛かるとは思ってたので、こっちがツツコンでしまった。

まあいい。えっと、今はねずみだから・・・ふむ、10歳はない。

34歳でもないはずだから・・・

「なんだ、22歳ですか。全然若い。隠す必要もないでしょうに」

「あっちゃんには分からないでしょうね・・・この刻一刻と近づく老いの足音の恐ろしさは。それに、女性はいつも女子高生の頃の若かりし青春を夢見、思い描くものよ」

「30過ぎてから心配しましょうよ」

「五月蠅い」

一蹴された。

「・・・22歳で警部補つてことはキャリアですか？」

「ん、まーね。キャリアは警部補スタートだから」

「・・・見えない」

「何か言った？」

「いえ・・・」

「まーね、キャリアつつてもなかなか大変なのよ。大体・・・」

「あーっと」

愚痴に入りそうだったので阻止する。人の愚痴を聞くほどかったるいものはない。

「そ、そっぴやあ警察手帳見せて下さいよ」

「手帳？・・・あ、そっぴえばあれつてもう手帳じゃないのになんで『警察手帳』なんだろう？」

「え？ああ、そっぴやあですつてね」

警察手帳は条令の改正に伴い、先年、あの手帳式のいわゆる『警察手帳』から、身分証としての機能のみの警察手帳に変わったばかりだ。

「でも、あれ。警察つていったら警察手帳じゃないですか。警察身分証じゃ締まりが悪いですよ」

「なるほど。それに昔から警察手帳つていってた慣習つてのもあるのかもね」

「ですね」

「・・・・・・」

沈黙。やむなく僕が尋ねる。

「で、あの、結局警察手帳は・・・？」

「あ？あー、あははは。実はさっき名刺じゃなくてそっち見せようと思っただけど、あれ、デスクに置きっぱなしにしちゃってさ・・・」

「」

「そっぴやあいいんですか！？」

「ま、固いことは言いつこ無しよ」

「・・・いいのかなあ」

不誠実な警察官を目の当たりにして、僕は首を傾げつつも、ま、世の中ってそんなもんか。と納得してしまうのだった。

ミニストップがある通りに着いた。

僕は右に曲がる。家はもう近い。

「あら、そっち？」

「ええ」

ちよつと考え込む様子を見せた美咲さんは、

「じゃあそこで何か食べましょ」

と、ミニストップを指して言った。

「え、ええ？」

「いいでしょ。お姉さんが奢っちゃうから」

「いきまーす」

即決。タダで何か食える！なにせ僕は金欠なんだって。

とかいって甘い誘いに乗ったのが間違いだっただってことに、愚かな

僕はまだ気付いてない訳だけど・・・。

「はあ、そうですか・・・」

僕は湿気ってきた美味くないポテトを食べながらうつろいして言った。

「そう！大体あの黒田の野郎がさあ！」

・・・さつきから職場の悪口を小一時間。

最初は『黒田さんって警部が・・・』だったのに今や『野郎』になつてしまつたか。

哀れではある。が、顔も知らない黒田さんよ。あなたのせいで僕は今大変なことになつてます。

「・・・つて言うんだよ！全く・・・」

「はあ・・・」

僕はさつきからはあとかへえとかしか言つてない。ぶつちやけ『もう嫌だあつ』つていつて逃げたい。

でもなあ。逃げたらまたさつきみたいになぶつ飛ばされそうだしなあ。

・・・愚痴が終わる気配はない。

美咲さんは泥酔している。もう缶ビール5本開けてるのだ。

「あつちやああん！ビールもう一本買つてこおい！」

「いや、僕未成年ですから売ってくれませんよ？」

「知るかあああつ」

・・・どうやら酔つ払いには常識的なツツコミは効果がないようで仕方ないので美咲さんの財布でビールを一本買うことにした。（せめてもの報復として勝手によく商品棚の上の方にあるあのやたら高いガムボトルを買つてやった。ざまあみろ）駄目って言われたら頼み込むしかないと思つたが、ミニストップの店員さんは何も言わずにビールを売ってくれた。

彼の心遣いに僕は思わず涙が出そうになつた。

涙ぐむ僕を見る彼の心から、同情する気持ちが心に染み、また、痛かつた。

「早くビール持つてこおい！」

・・・ぶち殺したるかこのアマ！

僕はさつきのリーマン以上の殺意を覚えたのだった。

「ぶわあーっ！旨い！サイコー！」
はあ、こっちは最悪だよこの馬鹿酔っぱらい女め……。
・・・この人が酔いつぶれたら僕はどうすれば……。
さすがに酔っぱらいを放置して帰るほど僕は鬼ではない。第一、こ
こに置いていたら多分あのバイトの兄ちゃんに迷惑がかかる。とす
ると……。。

不吉なことを想像しながら僕はため息をついた。

そしてその想像は現実のものとなる。

僕は倒れ込むように家にたどり着いた。

時刻は4時半。

当然父も母も寝てしまっている。

あのあと酔った美咲さんを背負い、家まで運ぶこととなった。
酔った美咲さんから家の方向を聞くのはとても大変だった。

が、こっちの苦労なんかどこふく風で、あの人、最後はなんか人の
背中ではいびきかいて寝てやがった。

これは今までの恨みを晴らすチャンス！ということで、鍵を開けて

部屋に入り、そのまま玄関に放置しておいた。
いい気味だ。彼女が風邪を引くことを、僕は神様仏様、鬼様悪魔様に祈った。

ちょっとは気がはれたけど、僕の疲労はもう絶頂だった。

手早くシャワーを浴びると、忘れないうちに母親がいつも使っているヘアブラシから職体に使う髪の毛を5本ほどくすね、プラスチックのケースに入れて通学カバンに放り込んだ。
よし、準備完了。

あとは寝るだけ・・・の前に、と。

僕は自分の部屋のテレビをつけた。あの人身事故がテレビで報道されてるか見てみたくなったのだ。
ブチッ

『おはようございます。早朝のニュースをお伝えします』
女性アナウンサーがにこやかに告げた。

えっと、こっちは今からお休みなさいなんだけど。

僕はやり場のない憤りを感じた。

初っぱなのニュースは玉川で刺殺体発見というものだった。

『・・・次のニュースです。西智林駅で今日未明、人身事故が起きました。所持していた免許証から死亡したのは戸川陽一さん42歳。警察では戸川さんの身元確認と共に事件性の有無を調べています。』

聞いてみると至って有りがちな、普通の事件だった。
どうせ、借金なんかで自殺したにちがいない。

・・・そうやって考えてみると、僕たちは人の死をあまりにも当然に受け止めている。

メディアから毎日のように報道される数々の事件が、僕らの心をマヒさせているのか・・・。

そのことに気付くと、僕はなんだか薄い寒気を感じた。

・・・てかもう寝よう。

世間の恐ろしさを考えることはいつでもできるが、睡眠時間は僕にはだいたいあと2時間しか残されていないのだ。僕にとってはその方が由々しき問題でもあった。

時刻は5時。僕は7時までの2時間だけでもしっかり寝ようと、ベッドにもぐり込み、死んだように眠った。

6話 24班編 時代に乗り遅れたくないからって知らない言葉を使っちゃい

はあ。読者数がSF書いてる友人に負けてます。ジャンル違うから比べるのもどうかと思うけどやっぱりちよつと落ち込むなあ。向こうは「もつとこうした方がいい」とかそんなコメしか来ない、とか言ってましたが、こっちはコメすら来ない・・・（笑）やっぱコメディって目立たないのかなあ。てかこの小説コメディとミステリーの境だからジャンル微妙なんだよなあ。・・・って愚痴っても仕方がない。本編どーぞ この話はストーリー都合上、全て三人称で書かれています。ご了承ください

6話 24班編 時代に乗り遅れたくないからって知らない言葉を使っちゃい

警視庁捜査一課の刑事部屋の一室で、永森明人^{ながもりあきと}巡査部長はデスクワークに追われていた。永森は、昨年から警視庁へ配属された刑事、24歳だ。

今はこの間検挙した連続放火魔についての報告書に取り組んでいる。もう夜の12時を回ったこの時間に、未だ残業を続けているのには訳がある。

永森は明日は非番なのだが、弟の俊吾も職業体験の関係で午後からはフリーになる。

何としても今日中に仕事を終わらせなくてはならない。というのも・・・。

「・・・あーっ！終わったあ！」

永森はグツタリと椅子にもたれ掛かった。所要時間4時間半。

溜まりに溜まった仕事が遂に片付いたのだ。

「おお、終わりました？」矢嶋が声をかけてきた。

^{やしまゆうち}矢嶋祐一警部補。キャリアで、1年目から捜査一課に配属された期待の星。よくいるキャリアのように人を使うばかりでなく、現場へ何度も出張り、幾度となく凶悪犯を検挙した。

勉強ができるだけでなく、現場の刑事としての能力も一流のようである。

先日の放火魔事件だって、矢嶋と永森でペアであたったのだが、そこで矢嶋との能力の違いを永森はまざまざと見せつけられることになった。

かといって威張るわけでもなく、人当たりも基本的にはいい矢嶋を、永森はわりかし尊敬していた。

「ご苦労様でした。はい、これどうぞ」

矢嶋はコーヒーを渡した。

「あ、すみません。上司にコーヒーもらうなんて」

「いえいえ、この24班じゃ僕が一番年下ですから」

そう。彼は20歳。ただでさえ若手の永森より4つも年下だった。

「しかし・・・何度も言うけど信じられませんか。高卒で公務員1科をパス、なんて」

「正確には大学1年で、ですが」

「変わりませんよ、そんなの」

そうですかね、と矢嶋は頭を掻いた。

「でも永森さん、あんまりすぐくもないですよ。僕の家系も家系ですから。もしかしたら不合格だったのに合格に結果が捏造されてたり・・・」

「ああ、そういえば。すごい家系なんでしたね」

矢嶋は叔父が警視總監、祖父が元警察庁長官の超大物、という血統書付きのエリートだと永森は聞いたことがあった。

「にしたって。ここでも実績挙げまくってるじゃないですか」

「まあそれはそれとして・・・」

矢嶋は誉められることがあまり好きではないのか、素早く話題を変えた。

「しかし、今時珍しいですよねえ」

「何がです？」

「あなたの弟さんですよ。仕事で疲れた兄のために、ささやかな慰労パーティを開く。なんて兄想いの弟！羨ましい限りです」

「ま、まあ・・・自慢の弟ですから・・・。親が死んでからは二人だけで頑張ってきたんですよ・・・」

「そうだったんですか・・・」
しみじみとした空気が流れる。

Bannon

扉が叩きつけられて大きな音を出した。

「おい！事件だ！」

空気をぶち壊したのは、2人の上司に当たる黒田だった。
くろたしやうじ

黒田正治警部は40歳。

痩せ顔。

一応この班のリーダーだ。といつても黒田は班のリーダーたちの中では一番下っぱなので、この班は以前、密かに見くびられていた。最近それがなくなったのはひとえに矢嶋の存在が大きいだろうと永森は思っている。

「な、なんだ、どうした？・・・なんなんだこの空気は？おい、矢嶋。なぜ私を睨む？」

「・・・いえ、何でもありませんよ、警部」

「口調と比べて目が笑ってないのは私の気のせいかな・・・？」
「・・・」

「だ、黙らないでもらえるかなあ、矢嶋くん？」

「・・・」

永森は耐えきれずに吹き出した。

「ハハハ、そのくらいにしましょうよ、矢嶋さん」

「・・・まあいいでしょう。フフツ、警部、ビビりました？」

「・・・心臓に悪い」

「普段にこやかな人が急に真顔になるって怖いですよえ」

永森は黒田を見た。

「全くだ」

「まあまあ、ほんの軽い悪ふざけですよ」

「・・・君の冗談や悪ふざけは君の思ってるほど軽くはないことを自覚したまえ」

「同感です。あははは、俺としては警部の若干怯えた顔という面白いものを見れたのでオツケーですが」

「貴様ら、あまり人をおちよくると、貴様らの無駄な捜査費用、主に張り込み時にアンパン買えばいいものをコンビニの中で一番高級な幕の内弁当買ってくるなどを、今まででは黙認してたけど、今後

「一切経費でおとさせないぞ？」

「「ごめんなさい」」

「分かればいい・・・さて、何を言おうとしたんだっけ」

「数分前のことを忘れるなんて、警部の頭もついにガタが来ましたか」

矢嶋はニヤリと笑って言った。

そう。矢嶋は基本的には人当たりも良い、いわゆるいい人なのだが、人をおちよくるのがこの上なく大好きという悪癖があった。

これさえなければいい上司なのになあ、と永森は思っている。

「俺の記憶では、確か事件だ！とかいつてましたよね」

永森が指摘した。

「おお、そうだった。東玉川署管轄内でコロシだ。ウチに協力要請が来た。えー、殺されたのは男。30半ばくらい。身元不明。死因はナイフで胸を一突き。・・・遺留品はガイシヤの胸に刺さったままだったナイフのみ。とうぜん指紋の類も見つかっていない」

「はあ・・・厄介なことこの上無いですねえ」

矢嶋が呟いた。

「全くだ」

黒田が頷く。

「・・・あの、こう言ってはなんですが、俺には至ってありきたりの事件のように聞こえたのですが」

「ええ、確かに『ありきたり』ですね」

「ありきたりすぎるんだ。分かるか？永森」

「はあ・・・」

永森は首を傾げた。

「余りにもありきたりなんです。手口がシンプルすぎて、逆に証拠が残りません。目撃者とかがない限りは、ですが」

そう言つて矢嶋は黒田を見た。

「・・・残念ながら今のところ目撃者は見つかっていない。東玉川署の連中が初動捜査を始めてはいるがな」

「ひゃあ、もう夜遅いのにご苦労なこつて・・・」

「ですね。まったく御愁傷様ですよ。がんばったって給料がよくなるわけでもなし、振り替えの休みができるわけでもなし。警察ってのはなんでこうなんでしょうねえ」

永森の呟きに矢嶋が答えた。

「・・・君らもつと自分の仕事にやる気を持つとよ・・・今の発言からしてやる気のなさを伺えて余りあるよ？最後ただの愚痴だし」

黒田の哀しそうな目を見て、矢嶋は話を元に戻すことにした。

「・・・あー、まあ現場が深夜の裏路地じゃあ目撃者がいないのもしょうがないですね」

「うーん・・・」

永森は腕を組んだ。

「でも、ナイフで心臓を一突きですよ。犯人は相当の返り血を浴びて目立つんじゃない？」

「永森さん、ナイフは心臓に刺さったままなんですよ？ナイフを抜けば大量に血が噴き出しますが、刺さっている限り、ナイフは蓋の役割をして、血はそんなに出血せん。返り血はあまり浴びないはずですよ」

「なるほど・・・」

永森は感心して唸った。

話を先に進めようと、黒田が口を開いた。

「シンプルな手口はむしろプロが多い。ヤアさん関わりも考えられないか？」

「確かにそれは僕も思います。ですが、先入観は敵ですよ。警部」

「うん・・・分かっているが・・・というかさっきまでやる気0だった君に言われると無性に腹がたつ」

「さっきはさっきですよ。・・・まずはガイシャの身元が分からないと。話はそれからですね」

矢嶋が締め括った。

「そうですね……。いや、しかし流石ゴールドンルーキー矢嶋祐一！もう事件をそこまで見抜きましたか」

「はぁ……。僕はそんなすごいことやっていませんよ？……大して見抜けてもいないし」

矢嶋の言葉をよそに、黒田が続ける。

「うーん、ゴールドンルーキーか。優秀なのは認めるが、ゴールドンルーキー2人のせいでこの24班が変人班と言われているのも否めないな」

そう。ゴールドンルーキーは二人いる。一人は無論矢嶋。そしてもう一人は……

「ちよつと。それは納得できませんね」

怒った様子で矢嶋が言った。

「事実だろう。やたらと優秀なくせに現場に出たがり、昇進試験を受けようとしないう、人をおちよくるのが大好きな奴」

「いや、最後のはその通りですが、試験受けないのはすぐに昇進しちゃったら警部の立つ瀬がないんでそれはちよつと可哀想かと思っただんです」

「……ッ！」

黒田は絶句する。

それを横目に、永森は矢嶋を見た。

「それをここで言っちゃうのも相当可哀想ですよ？」

「ははは、いや冗談だって。本当のところはペーパーテストに頼らず、実績での特別昇進をしたいんですよ」

「……やっぱり変人じゃないですか。特別昇進なんてそうありませんよ？」

「そうですね？やっぱ試験受けよっかなあ」

「「あはははははは」」

ブチッ

何かがきれる音がした。

「洒落にならない冗談で私を廃人同然にしておきながら、私の存在

を無視するなあああっ！矢嶋ああああっ！だからお前の冗談は
軽くないって言うてるだろうがああああっ！！！！！！！！」
怒声が響き渡った。

矢嶋が全員に入れたコーヒーでちよつと一息。

ちなみに黒田のコーヒーは特製スペシャルブックとなっており、
一口飲んだ途端黒田はそれを流しに捨てに行った。

「・・・まあ、もう一人は何故だか言うまでもないですね」

「ええ、あの人が変人なのは僕も納得します・・・あの人もまた警察
手帳机に置いてったよ」

「意味分かんないな。デスクワークするだけなのになぜ警察手帳を
出す必要がある！？」

黒田がツツコミを入れた相手・・・毒蝮美咲はもうここにはいない。
定時ピッタリに帰ったのだ。

無論彼女がほぼ今と同時期、1人の青年に絡んでいることを知る者
はいない。

思わず永森は呟く。

「なんかあの人が見ると俺らがこうやって真面目に残業してんのが
馬鹿らしくなってますね？」

「・・・それを言うてはいけない。言ったら負けだ」

「・・・はあ・・・」

三人は一樣にため息をつくのだった。

さらに数十分後。

さつさと帰ればいいものを、この3人はまだ無駄話に花を咲かせていた。

「・・・しかしいつまでこんな所でグダグダしてんですか？俺たち」
「まあ明日は朝一で捜査だろうから・・・。私は泊まるつもりだが」

「僕も泊まります・・・てか僕元々宿直ですし。ラッキー、得した気分」

「なんだあ」

永森は声を上げた。

「どうした？」

「いえ、俺明日休むのもう帰ろうかと」

「おいおい、いくら非番といってもこうして事件が起きてしまった以上は・・・」

黒田が難色を示した。

「明日は絶対外せないですよねえ、永森さん？」

「なんだ、彼女と約束か？」

「いえ、弟・・・」

「なんだ永森、ブラコン・・・もといBLにはしかったか。いくら彼女ができないからって・・・」

「「はっ倒しますよ、警部」」

「すまん」

黒田は素直に謝った。

「弟が俺のために慰労パーティーをしてくれるっていうんですよ」

「なんだその弟は！？一人くれっ！」

「冗談ですよ、警部？」

「冗談です、ごめんなさい」

「許して欲しければ明日の欠勤許可してください」

「ええ！？」

永森の無茶な要求に黒田はたじろいだ。

「・・・まあ許可してあげればいいじゃないですか。どうせ明日は

東玉川の方々がいろいろ頑張ってくれちゃうでしょうし。・・・本店の僕らに対抗心燃やして」

「・・・その考え方はどうかと思うが・・・まあいい。許可しよう」

「本当ですか！？ありがとうございます！」

「そこで、だ」

黒田は永森の肩に手を置く。

「私は深夜にまで及ぶ残業でとてもお腹が減っているのだが・・・」

「つつても無駄話ばかりかでしたけどね」

永森は笑い声をあげた。

「分かりました、なんか買ってきますよ」

「あ、僕のも頼みます」

矢嶋も笑いながら言った。

「はいはい」

あ、近くにマックがあった。・・・マックはこの時間でも開いてたよな。

「じゃあ、行ってきますね」

「「行つてらっしゃあい」」

永森は部屋を後にした。

部屋には二人が残された。

「・・・ところで警部」

「ん？」

「さっきのことですが」

「なんの話だ？」

「僕が試験受けないって話です」

「ああ」

「実は僕らキャリアって赴任1年経てば大抵の場合警部になれるっ

て知ってました?」

「は? いや・・・え? 冗談だろ?」

「いえ大マジです」

「そ・・・そうなの?」

「ええ。ですから今やっているのは警部から警視になるためのポイント稼ぎなんですね」

「ま・・・待て。すると君は」

「9月からは多分警部です」

「そ・・・そんなあ」

「まあまあ、警部だって頑張れば警視に上がれますよ」

「そ・・・そうかなあ」

「そうそう。・・・ま、無理かもだけど」

最後にボソリと呟くが、黒田は気にしなかった。いつものことだ。いちいち気にしてたら身が持たない。

「それはそうとよくBLという単語を知ってましたね?」

「ふっ、年をとると時代の流れについていくのに必死だな」

矢嶋は少し感心した。

黒田はさつきまでの落ち込みが嘘のように元気になり、胸を張ってさえる。

「へえ、すごい。じゃあBLはなんの略称ですか?」

「・・・え? り、略称?」

娘の電話話を立ち聞きして情報を得ていた黒田にそれが分かる術はない。というかBLが略称だということも今初めて聞いたのだ。

「え、えーと・・・」

考え込んで

「・・・ば、ば、バストの大きいレディ?」

「・・・」

爆沈した。やってしまった。しかも、ここでフォローを入れてくれるはずの永森はここにはいない。あるのは矢嶋の絶対零度の視線だけだ。

「ご、ごめん。悪かった」

「……………」

「謝る。ホントごめんなさい」

「……………」

「頼む。頼むから……そんな汚らわしい物を見る目で私を見ないでくれえええええっ！」

……警視庁捜査一課24班は、今日も平和である。

7話 『昔ヤンチャしてました』（前書き）

この話、なんでもないように見えて、実は後々につながる伏線が2つほどあります。・・・といっても、それを見抜くとかめんどくさいという方は、そんなの気にせずぽけっと見ていただければ幸いです。

7話 『昔ヤンチャしてました』

6月20日 金曜日

愉快的な夢を見ていた。

いつも例の悪夢ばかり見る僕にはとても珍しいことだ。

こう、笑いが心から込み上げてくるような。

こう、体がフワツとして気持ちいいような・・・。

ジリリリリッ

けたたましい音が僕を現実世界に引き戻そうとする。情け容赦も無く。

「う・・・うるさい・・・うるさい・・・うるせえわっ！」
バキッ！

僕は安眠を阻害する邪魔物にパンチを入れた。

邪魔物は沈黙した。

あ・・・頭が痛い。

目蓋が重い・・・。

眠い・・・。

おやすみなさい・・・。

ZZZ・・・。

僕はとんでもなく焦っていた。

ヤバい・・・ヤバい・・・ヤバすぎる・・・！

7時に目覚ましをセットしたはずなのに起きたのは何故か8時。

・・・おかしいなあ。

目覚まし時計も何故か原形をとどめていないほどぶっ壊されていたし。

僕を遅刻させるための何かの陰謀・・・？

・・・ってそんなことを考えてる場合じゃない！

慌ただしくリビングに出ると朝食が用意されていた。ありがたい！

僕はトーストにかぶりつくと、牛乳で流し込んだ。

「ごちそうさん！」

着替えて歯を磨き、髪を直した。

よし、準備完了！

時計を見ると8時20分。

集合は9時！間に合うか・・・？

カバンを持ち、玄関へと走る。

玄関にあった大きな黒いカバンをホイと飛び越え、靴を履いた。

「行つてきまあす！」

「行つてらっしゃい・・・職体ってどこ行くのかしら？聞きそびれてただけ」

母が見送りがてらそんなことを言い出した。

んなこと話してる暇はない！

「あとで話す！」

僕はドアを勢いよくあけ、飛び出した。

家を出て比較的すぐの所にバス停がある。

ここ大峯は、智林と同じく都市部から離れた比較的田舎な場所なので、バスでないと行かない所も多いのだ。

まあ、若い人は自転車を使うので問題はないのだが、今回の場合、原則として自転車移動は禁止となっていた。

つたく、頭の固い教員連中め。

僕は自転車を使いたい誘惑を振り払いつつ、バス停へ急いだ。

・・・悪いときには悪いことが重なるものである。

非情にも、1時間に4本のバスはついさっき行ってしまったばかりだったのだ。・・・なんてこった。

僕は愕然としながらも時計を見た。

8時45分。あと15分しかない！

僕は即座に決断した。

・・・走ろう。

次のバスは約15分後。天地がひっくり返ったって時間には間に合わない。

幸い遺伝研への行き方は把握している。

・・・もちろん僕が事前に体験先の場所をチェックしておくなんて殊勝なことをするはずがない。比較的近場だからとも知ってただけだ。

というか僕があ場所を選んだのは近いからというところが結構あった。

まあ近いと言ってもバスで10分。普通に歩いたら30分以上かかるが。

・・・ん？それって、相当ヤバいんじゃないか・・・？

冷静に解釈してる場合じゃねーよ！僕！

僕は自分の状況が非常にマズイことを再認識して、慌てて駆け出したのだった。

・・・結論から言おう。僕は間に合った。奇跡に近い。もう拍手物だ。

集合場所にたどり着いた時の僕はもうバテバテだったが、24時間テレビで100キロマラソンを完走した人さながらの充実感で胸が一杯だった。

しかし、昨日の肉体的疲労、精神的疲労、眠気が襲いかかり、遺伝研まで全力で走ってきた僕は集合場所でぶっ倒れてしまったのだ。

昨夜美咲さんに関わりさえしなければ・・・。

薄れゆく意識の中僕はそんなことを思った。

目を開けると、そこは雪国・・・ではなかったが、まさに雪国のように白い天井と壁に囲まれており、僕はこれまた真っ白なベッドで寝ていた。

「・・・？ここは・・・？」

「ああ、ようやく気が付いたわね」

ふと見ると、隣には、もう『おばさん』と言われても仕方がないだろうといった程度の風貌のおばさんが座っていた。

「ここは研究所内の仮眠室よ。あなたは倒れたの。覚えてない？」

「まあ・・・急にクラツときてコテツといてしまったような気がします」

「まさにその通りよ。記憶状態は良好のようね。点滴うつといたから少しは楽になつてるはずだけど」

「それはどうも・・・」

僕ははあとため息をついた。

まさか皆の前でぶっ倒れるなんて・・・。

情けない。かつ恥ずかしい。

時計を見るともう12時。

僕はとりあえず皆のところへ戻ろうと思った。

「あの、すみません。ご迷惑をお掛けしちゃったみたいですけど、もう大丈夫そうなので、体験に参加させてもらってもいいでしょうか？」

「そうねえ・・・」

案の定おばさんは難色を示した。

「あなたが倒れた原因は過労とストレスによるものなのよ。医学部卒の身から言わせてもらって安静にしてもらった方がありがたいんだけど・・・」

「ハハハ・・・そうですか。過労とストレスですか。フフフ」

僕は、あのアマどうしてくれよう、と残虐に笑った。いつか仕返ししてやる。

「でもこの通りもう元気なんで大丈夫です」

嘘だ。まだ頭は痛いし、何よりとても眠い。点滴のおかげで倒れることは無さそうだが。

「この通りって・・・私の見る限りくまはできてるし顔色も悪いし元気には見えないんだけど・・・」
やっぱり。

「のーぷろぶれむですよ。」

僕は強がった。ホントは極めてプロブレムありまくりなのだが、今の僕は1つのことしか頭になかった。

課題！

恨めしき課題！

あれさえ無ければここでグッスリ寝かせてもらっただけだなあ。

「・・・課題って何のこと？」

おばさんは怪訝そうに聞いた。

「へ？どうしてそれを？」

「どうしてって・・・、あなた、今までそれこそ気違いのようにぶつぶつ『課題課題課題』って呟いてたわよ」

し・・・しまった！感情が高ぶりすぎて口に出してしまっていたのか！

「いやあ、ハハハ。課題っていうのは学校から指示されたレポートでしてね。いわば感想文みたいなもんなんです」

「なんだ、簡単じゃあないかい」

「でもここで寝てたら書けないでしょう？」

「なんだ、具合が悪くて寝てましたって書きゃあいいじゃないの・・・そういうわけにもいかないだろう。」

「休んだ人とかもちやんとレポート仕上げなくちゃいけないんですよ。だから先方の都合がいい限り自分1人でもう一度訪問しなくちゃいけないんです」

「あらあ、そうなの。大変ねえ近頃の学生は」

「そうです、大変なんです」

「私があんたくらい若い頃なんてねえ」

「ええ」

「好き勝手に遊んで気に入らない先公はみんなでリンチしたものよ」
「・・・」

僕も中学のとき、少しだけヤンチャ者だったが、そこまで人様に迷惑をかけた覚えはないし、先生をリンチとか、そこまでひどいこともしてないつもりだ。

今の不良はだいぶ丸くなってるようで。

・・・うわあ、この人昔を思い出して笑ってる。
こ・・・怖い。

なんて残忍な笑み。うわ、今度は嘲笑？哄笑？

このお婆さんの本性を見た僕はさっさとここから退避することにした。

しかしお婆さんの話は終わらない。

「私が15の頃は盗んだバイクで走り出したものよ」

「尾崎豊!？」

思わずツツコんだ。

「あら、あなた尾崎豊知ってるの？」

「ええまあ」

「そう、そりゃあ知ってるわよねえ、有名なもの。私の仲間内では尾崎豊が流行ってねえ。カラオケ行っっては歌って。みんな歌詞の真似して『16歳の誕生日を迎えるまでに盗んだバイクで走り出すぞ!』って張り切ったものよ」

「あ・・・ははは」

「あなたいくつ？」

「17です」

「なに、駄目ねえ。男なら15でバイク乗らないと」

「もう『十五の夜』談議はいいですから・・・」

「あらそう」

お婆さんはあっさりと引っ込んだ。

「それはそうと・・・」

・・・と思つたらまた出てきた。

「うちは大分暇だからまた後日来ても構わないわよ」・・・？
ああ、体験のことね。オバサン武勇伝、十五の夜談議と来たもんだから話が飛びすぎて分からなかった。

「いえ、今日やります」

「無理はしない方が・・・」

「無理は承知です」

「じゃあなんで・・・」

「またここに来るなんてそんなめんどくさいことできません！」
きつぱり。

「はあ・・・そこで『友達との思い出を作る機会に休んでなどいられません！』とか言つたらかつこいいシーンなのにねえ」
「ほつとして下さい」

時刻は12時半。談笑してたら少し元気になった。・・・無論眠いが。

「じゃあすいません。お世話になりました」

「はいよ。無理しないことね」

おばさんは笑顔で僕を送り出してくれた。

「ありがとうございます・・・。じゃ、失礼します」

僕はゆっくり仮眠室を後にした。

・・・広いな。

仮眠室を出ると、そこはながーい廊下。

廊下の両脇には、部屋、部屋、また部屋。

よし、いこうか、みんなの所へ！

・・・。

みんなの所って・・・どこ？

僕は到着後、即おねんねだったので、当然皆が今どこで何をやっているかなど知らない。

「・・・おばさん！」

僕は回れ右して、慌てて仮眠室へと引き返したのだった。

8話 職業体験は往々にして職業見学となる（前書き）

はい、無意味に投稿に間が空いてしまいました。小説自体は充分先までストックしてあるんで、別につまつてた訳じゃ無いんですが・。
・。さて、今回は短いですね。本当は次の話と連結させようかなあ、なんて思ってたんですが、めんど・。オホン、諸事情によりそのまま行くことにしました。

8話 職業体験は往々にして職業見学となる

おばさんに案内され、僕はみんなのいる第2会議室に着いた。

・・・おばさんは点滴の関係で以後3時間飯を食ってはいけな
言っていたのだが。

みんなは昼飯真っ最中。

ははは・・・なんていうかこうまざまざと見せつけられてるみたい
でムカつく。

・・・はあ、腹減った。

「鳳！」

真っ先に声をかけてきたのは内海だった。

「よお内海。はは、あんまり眠いんで仮眠をとって来たぜ。・・・
それと俺の目の前で美味しそうに飯食ってんじゃねえ」

「ちょ・・・お前何言い出してんだ。口調もキレモードになってる
ぞ？・・・まあそれでも俺は食うけどね」

「そうかい。まあ今のキレは冗談だから気にするな。本当にキレて
たら口より先に手が出る」

それを聞いて箸を止めていた班員たちもみんなホッと息をついて食
べ出した。

「・・・鳳くん、大丈夫なの？」

同じ班の女子が心配そうに顔をこちらに向けた。

見ると、班員は皆一様に僕を見ている。

「ははは、大丈夫。昨日は合コンでさあ、ちょっと疲れちゃっただ
けだから」

「なっ・・・馬鹿だなあ。何時に寝たんだ？」

呆れたように内海が聞く。

「えっと、朝5時・・・」

言ったあと、しまった！と思った。

このパターンじゃあ合コン ホテル 朝帰り 午前5時就寝。が簡

単に連想できる。

案の定班員は軽蔑の表情で僕を見ていた。

「ち・・・違う！君らが想像しているようなことは全く無くてだなあ」

「ああ、ハイハイ」

「ちよつと俺人付き合い考え直すわ」

「私も」

「ご・・・誤解だ！大体あんなメンツで僕がどうこうするわけないだろう」

「あんなメンツねえ・・・」

「ほ、本当だつて！僕は途中で帰った！嘘だと思っなら西岡に聞いてくれ！」

「怪しいな、西岡もグルなんじゃないの？」

クソ、みんなしてしつこいぞ！

「違う！僕は潔白だ。みんな信じてくれよお、うっうっ・・・」
僕は涙を流して訴えた。

「な、泣くなよ！信じるからさあ！」

ふ、泣き落とし成功。

僕は内心ほくそ笑みながら演技を続けた。

「本当？本当に信じ・・・」

カシャッ

し・・・しまったあ！

その時僕の手からあるものがこぼれ落ちた。
うっ・・・みんなの視線が痛い・・・。

「・・・鳳くうん、・・・何かなあこれは？」

内海がみんなを代表して優しく聞いた。

「な・・・なんだろう」

「目薬、だよねえ？これ。」

「・・・う」

「嘘泣きだったんだね？」

「・・・す・・・すみませんでした」

「で？どこまでやったんだ？ああ？」

班員の男子が迫る。

「だから・・・何もやってませんって」

「じゃあなんで帰りが遅かった！？」

「なんていうか・・・その・・・」

正直に言ったら美咲さんがどうこう悪く言われるのではないかと考えた僕は躊躇った。あんだだけ迷惑は被ったが、僕は美咲さんには好感を持っていたので、（あくまで好感だ。好意ではない！）一応庇っておこうと思ったのだ。

「まあ・・・酔っ払いに絡まれてお酌してた」

「ハア！？」

全員驚いたようだ。

「・・・まあ嘘はついていない。確かに酔っ払いに絡まれてお酌してた。

「いや意味わかんねーよ。どうやってたらそんなシチュエーションになる？」

「酔っ払いに絡まれて、兄ちゃん奢ってやるから付き合えよって言われて飯奢ってもらったけどお酌させられた」

「本当かよオイ・・・」

「んー、ずっと職場の愚痴を聞かされ続けたよ。それも延々1時間半」

「・・・大変だったなあ」

内海はあの時のコンビニの兄さんと同じく、心から同情する眼差しを送ってきた。

「分かってくれるか・・・内海」

「ああ分かるさ同志よ。俺もよく親父の愚痴に付き合わされる・・・お酌しながら」

「一昔前の日本の奥さんか!？」

班員からツツコミが入ったが気にせず、僕らは分かり合えたことを喜ぶようにガシツと握手をした。

ガチャツ

その時、白衣を着た男性が入ってきた。

歳は30前後。

蛇のように油断なく光っているその細い目は、些細な変化も見逃さない研究者特有のものだった。

その瞳が僕を捉える。

「やあ君が鳳くんか？」

「あ、はい。・・・ご迷惑かけてすみません」

思いの外優しそうな声だった。

さあ真面目モード。

僕は内海と手を離してペコリと頭を下げた。

男性は僕の顔を見つめた。

「顔色がよくないな。体調が良くないなら休んでいてもいいんだぞ？」

「あ・・・はい、大丈夫です」

「そうかい？無理はするなよ。・・・あ、申し遅れたが私は石山。

今回の体験の責任者だ。案内や説明は私がするから分からないことがあつたら聞くといい」

「はい。よろしく願います」

僕はもう一度石山さんに頭を下げた。

「こちらこそ」

石山さんはにつこり微笑んだ。

みんなの方へ向き直る。

「午前は雑用業務お疲れ様でした。さて、最後にメインオフィスと第1研究室の見学、そこでお待ちかねのDNA鑑定体験をやっ

ただき、今日の体験は終了です」

石山さんは手早く予定を説明した。

「さて、メインオフィスに行きましようか」

石山さんを先頭に歩き出した。

似たような扉がある長い廊下をスイスイ進み、迷うことなくひとつの扉の前にたつた。

「ここです」

石山さんがドアを開け、ぞろぞろと入っていく。

オフィスは仕事中的ということもあってか、非常に静かだった。

・・・というか、オフィスは広々としているのに人が少ない。

壁の一面はガラス張りになっており、研究室の様子が見れるようになっていいる。なるほど、研究室内はそれなりに人がいた。

「はい、ここがメインオフィスです」

「・・・なんというか、人が少ないですね」

男子班員がポツリと言った。

「ははは、確かに少ないですね。実はメインオフィスといっても名ばかりのもので、日常、研究員がオフィスに居ることは少ないです・・・ああ、でも電話の受け答えのために常時1人はいないとまずいです」

「普段は研究員の方は何処にいますか？」

「普段といっても人によって様々なんですけど・・・まあやはり研究員なので研究室や実験室。あとは2階の仮眠室、休憩室ですかね。テレビは上にしかないんで、みんなよくサボってテレビ見に行つてます」

僕は眠くてあくびが出そうになったが、真面目に聞いてないと思われるのも嫌なのでなんとか噛み殺した。

「ちよつと石山あ。あんまり変なこと吹き込まないでくれるかなあ。俺は常に真面目に日々頑張ってるんだけど」

オフィス内から擲掄が入った。

「彼は同期の佐々井です。休憩室テレビ視聴時間の長さで、彼の右

に出るものはいません」

「ちょ・・・ちよつとお！何ばらしちゃってんのお！？・・・あ、君ら！今の嘘！嘘だから！」

佐々井さんは慌てて取り繕う。

しかしもうばらしちゃって云々って言っちゃってるし。

僕たちは吹き出してしまった。

「さあ、馬鹿は置いといて実験室にいつてみましょうか。」

「おうい！待てやコラ」

佐々井さんは石山さんに突っかかってたがあっさり無視された。

なんかちよつと可哀想。

僕は佐々井さんに軽く会釈して、みんなの後を追った。ふわああ・・・

・

大きなあくびが出た。

・・・こんなことでは先が思いやられる・・・。

ふ・・・ふわあああ・・・。

9話 眠気覚ましのインパクト（前書き）

はい、ようやく話が進み始めましたね。この話を境に、敦司くんは平和な日常から外れていくわけですが……。敦司くんの出生の秘密や敦司くんに降りかかる事件、愉快な仲間たちの活躍に乞うご期待！と言ったところでしょいか。

9話 眠気覚ましのインパクト

「ではエアシャワーを浴びたあと、白衣をきてもらいます」

「はい」

僕は指示にしたがってエアシャワーを浴びた。埃を落とすためのものらしいがなんだか気持ちいい。

「・・・じゃあ行きましょうか」

僕らがエアシャワーを終えるのを見計らうと、石山さんは実験室の扉を開けた。

さすがに実験室では、オフィスよりも多くの人が働いていた。

「さあ、実験に入る前にここでどんなことをやっているのか説明したいと思います。・・・ここ、豊島生物遺伝子研究所は、豊島財閥の援助のもと、研究を行っているわけですが・・・」

ん？豊島・・・？

なんか誰かに豊岡だかTOYOTAだか適当なこと言っちゃったよ
うな・・・。まあいいか。

石山さんの説明は続く。

「援助を受けている以上豊島財閥に利益を提供しなければなりません。さて、どのような方法で利益を上げるかという・・・これです」

石山さんはパネルを取り出した。

「これは・・・そっくりですね」

僕は呟いた。

パネルには2枚のネズミの写真。それぞれにモルモットA、モルモットBと書いてある。

注意深く観察すると、他のネズミに比べて1本指が長いところも、

前歯が一段と発達しているところも同じだ。

「同じっていうより・・・これはクローンですよね？」

内海が口許を指で触りながら聞いた。

「その通り。これらはクローンです。私たちはクローン技術で利益を得ているのです」

「はぁ・・・」

見当がつかない様子だ。

・・・僕は眠い。

そもそも文系の僕は興味ない。

「・・・牛で説明しましょう。あるところの高級ブランド牛。高級といってもピンからキリまでありまして価格は一頭200万円から2000万円。普通に生殖させても平均1100万円の牛しかできないわけです。そこでクローンです。2000万円の牛のクローンを作ることと2000万円の価値の牛を大量生産します。すると牛平均価格は一頭につき1100万から一頭につき2000万へ。単純計算、企業は900万の利益をものにできるわけです。つまりこれは・・・」

「牛版遺伝子組み替えのようなものってわけですか！」

内海は興奮したように言った。

「2000万の牛を大量生産すれば牛の価格は下がります。つまりこの技術を使えば僕らは高級な牛を本来より安値で食べられるようになるわけですね！」

ああ内海。君はどうしてそうやる気があるのか。僕は眠いし頭が痛いし・・・っと！

よろめいてバランスを崩したが、幸い誰も見ていなかったようだった。

見ていたら絶対仮眠室へ逆戻りだ。

レポートのためにはここは堪えなければ。

「ふふ、その通り。企業のために提供する技術が結局は人々のために役立つというのは面白いものだね」

「すごいです！」

オイオイ、目がキラキラいってるぞ・・・。

2人は別世界へ飛んでいこうとしている。

・・・これだから理科系オタクは。

ビリ ダマだの コ ルだのしか出さなくせに。

「さて、そろそろ実験の方に入ろうか。皆さん親御さんの髪の毛は持ってきましたね？」

「はい」

髪の毛を取り出す。

・・・前から思っていたが、髪の毛、特に女性のものはなんというか、怖い。

「やり方は至って簡単。髪の毛と決められた分量の試験薬を試験管に入れ、スキャナーでデータを取り込むだけです。それで、画面に2つの線が出ます。一致率が60%以上なら、科学上その2つの髪の毛の持ち主同士に血の繋がりがあることが証明されます。・・・まあ親子なら80%くらいにはなりますが。スキャナーは1人ずつあります。補助員が1人ずつつので安心して行ってください」
ホッとした。眠いから実験失敗しないか不安だったけど、補助員つくならなんとかなるだろう。

試験管を2本用意し、試験薬を入れる。親の髪の毛の分とと自分の髪の毛の分だ。

「へえ、君なかなか手際良いじゃんよお」

そう言って僕を誉めるのはさっき置いてきばりにされた佐々井さんだった。

「えっと、これで問題ないですか？」

「おーし大丈夫！んじゃあスキャナーにかけてみようか」

「はい」

実はこれが苦戦するところだった。

試験薬は数種類入れるのだが、その試験薬が混ざってはいけない。試験薬が分離した状態を保ちつつ慎重に……。

そおっと。

そおっと。

なぜか頭にはテストの問題。

『プレパラートに気泡が入らないようにするにはどうするか、述べよ』

慎重に作業をするという点は同じなので連想してしまったのだろうか。

中学の時やったなあ。

文系の僕は実験なんてそれ以来。

確か僕のその時の答えは

『注意する。』

……ははは、昔は僕もひねくれてたもんだ。

確かテスト返しの後呼び出し食らったんだっけ。

ピン！

「お、結果が出たぞ」

「えっと……？」

2つの線は見事に……一致していた。

「おお！一致率86%！」

「成功だねえ」

僕と佐々井さんは無事に実験が成功したことにホッと胸を撫で下ろ

したが、突然佐々井さんは

「あれ？」

と声を挙げた。

僕の持ってきたプラスチックケースを見ている。

「どうしました？」

「いや、試験管の髪の毛と、この髪の毛、どうも違うものみたいなんだけど……」

「ええ？」

僕はさっきの試験管とプラスチックケースに残った4本の髪の毛を見比べた。

「確かに……」

明らかに試験管にあるのは男性の髪の毛だった。比べてみたら一目瞭然。

なんで作業のときに気が付かなかったんだろう。

……あ、そうか。眠くて注意力散漫だもんなあ。

さっきは手際いいと誉められたが、実験開始直後に僕は試験薬が入ったビーカーを落として割っている。

やはり最初に心配したようになり眠気は手強いようだった。

「……とすると、これは君のお父さんの、かな？」

「はい。だと思います」

父さんめ、母さんのヘアブラシを無断で使うとは……母さんにバシたら殺されるぞ？

「じゃあこれはお母さんのな訳だ」

「はい」

「……時間も余ってるし、せっかくだからこっちも調べてみるかい？」

「んー、はいお願いします」

僕の手際は本当によかったのか、周りはまだ実験を続けている。僕の他は理系のはずだが、貧乏校のうちは、実験の設備も悪い。だから、理系といっても実験はめったにやることはないのだとか。西

岡から聞いた話だが。

「……めんどくさいのは嫌いな僕だが、待っているよりは何かしらやっていた方がいいというものだ。それに、この実験はなかなか楽しい。」

僕は理系でも良かったかななどと思った。

「……ただし、うちではないもつと金持ちの高校に限り。」

「よっしゃ」

佐々井さんは満足気に頷くと、

「そうと決まればさっさと準備しないとな」

と、僕なんかでは到底及ばない早さで試験薬の調合を終えた。

すごい……。

やる気無さげに見えてもさすがは本職。

僕の感心をよそに佐々井さんは怪訝そうな顔で

「どうしたあ？早くやってくれよ」

と、僕を急かした。

「あ、はい！」

慌てて、といっても失敗しては意味がないので丁寧に、作業を終えると、スキヤナーに乗せた。

僕がやることといえば佐々井さんの調合した試験薬を一定分量試験管に入れるだけなのだが、佐々井さんの調合よりも時間がかかってしまった。

「うーん、やっぱり手際いいなあ。君、こういうの向いてるかもよ？」

とはいっても佐々井さんから見れば手際の良い方だろうだ。

それともお世辞か？

「あはは、あ……ありがとうございます」

あいにく僕は文系なのだが……

ピン！

「お！出たぞ」

「えゝ、一致率・・・37%!?」

「んな馬鹿な・・・」

佐々井さんが思わずというふうに呟いた。

「・・・メンテナンスは昨日行っただかりの機械で誤作動・・・？
いや、有り得ない」

佐々井さんはぶつぶつ呟いている。そこに、いつものおちゃらけた表情は、ない。

「なあ、これは本当に君の母親の髪に間違いはないのかい？」

僕はちよつと考えた。

あれは家にある、母さんが昔から使っているヘアブラシから採った髪の毛だ。

母さんのじゃないとすると、誰の髪の毛かって話になる。

・・・まさか父さんは本当に浮気してたつてのか!?

いや、家にはいつも母さんがいるんだぞ？母さんが浮気相手連れ込むなら話は別だが、父さんは不可能。

かといって自然に考えるならあのヘアブラシが母さん以外に使われるのは、誰かが家でシャワーを浴びるなりしたときだけ・・・。

いや、待てよ。逆はどうだ？父さんが浮気相手と会ったときにそのヘアブラシをそこへ持っていった！

・・・何のために？浮気相手は自分のヘアブラシも持っていない女性だと？

・・・無理がありすぎる。と、なると・・・。

「ええ・・・間違いありません」

「本当かい？」

「ええ」

僕は今考えたことを佐々井さんに告げた。

「うーん」

佐々井さんは唸った。

「確かに普通に考えてこれは君の母親の髪の毛だね・・・」

「試験管が上手くいつてなかったのでしょうか」

「うーん、そうだとしてもそんな顕著な違いは・・・でもそうかも
しれない。やってみる価値は・・・ある、かな」

・・・恐らくその可能性は低いのだろう。佐々井さんの目がそれを
語っていた。

「や・・・やってみましょう」

僅かな望みをかけて・・・。そして浮かび上がりそうな嫌な予感・
・今まで考えたこともないような最悪の結末の予感を押し潰して。

「・・・」

「・・・」

僕らは何も言えず黙りこくっていた。

もうすっかり眠くない。・・・まったく、とんだ眠気覚ましになっ
たもんだ。

あのあと、全ての髪の毛を使ってやり直してみたが、結果はかけら
も変わらなかった。何度やっても37%。

佐々井さんがプレパレートを作ってみても失敗したのだから、プレ
パレートのせいではなかったのだろう。今はもう実験室には学生は
僕しかない。

実験が上手く行かなくてくやしい。最後までやらせてくれ、と嘘を
つき、みんなには先に終わってもらっていたのだ。今ごろ会議室で
反省会だろう。

「は・・・ははは、機械の故障だろう」

佐々井さんは笑って僕を安心させようとした。

しかし、その笑いは明るい佐々井さんには似合わない、作り笑いだ

った。

「佐々井さん、機械は昨日メンテナンスをしたばかりなんですよね？さっき言ってたじゃないですか」

「あ……聞かれてた、か」

佐々井さんは若干青くなつた顔を僕に向け、僕にとって死刑宣告並みの重みのある発言をした。

「こんなこと俺が言っているのか分からないけど……はっきり言おう。君とこの髪の毛の持ち主……つまり君の母親は、君の本当の母親ではない。……もちろん機械の不備の可能性もある。だからこの髪の毛は預からせてもらいたい。もっと精密な検査をしてみる。……ただ……」

「あまり期待はするなっということですか……」

佐々井さんは力なく頷いた。

「はつきり言ってもらえてよかったですよ。逆にボ力されたりしたら現実から逃げたくなるだけですもんね……」

「……まだ分からない。その髪の毛は本当に母親のなのか!？」

「ありがとう……ございます……だけど、それは母の髪の毛です。間違いありません……」

僕は佐々井さんが必死になってくれたことがとても嬉しくて、涙が出てきた。

「あの……佐々井さん」

「なんだ？」

「この事……誰にも言わないでもらえますか……？周りから変な同情受けたくないんです」

佐々井さんはちよつと迷っていたようだったが、しっかりと頷いた。

「ホント……ありがとうございます」

「気にするな!……俺は今すぐ鑑定に出しに手続きをとってくる。結果は君宛に後日封書で送る。いいか？」

「……はい」

「じゃあ、今日はもう帰りな……皆にはやっぱり体調が思わしく

ないので帰ったって言うておくから。あと、俺の名刺。メルアド書いてあるから、何かあったら連絡してくれ」

「はい・・・じゃあ、失礼します・・・」

「・・・おう！気を付けろよ！」

敢えて元気に声をかけてくれた佐々井さんの心遣いに、また涙が出そうになる。

僕は上を向きながら研究所を後にした。

涙が、こぼれないように。

10話 矢嶋編 波平さんはハゲじゃない！何本か毛残ってる！（前書き）

今回からしばらく矢嶋編となります。矢嶋編は外伝として別に投稿しようかなとも思ったのですが、結局読者が読むのめんどくさくなるかな、と思い、取り止めました。

いや、外伝にした方がいい！というご意見があればお寄せ下さい。それによってはこの10話が外伝の1話になるかもしれません。よろしくお願ひします。

10話 矢嶋編 波平さんはハゲじゃない！何本か毛残ってる！

僕は1人車を運転していた。

行き先は東玉川警察署。警視庁からの応援のためである。

実をいうと僕は免許を最近とったばかり。

先ほどから自分でもよく分かるくらい非常に危なっかしい運転が続いていた。

「えーと・・・、この交差点を右に曲がって・・・。あ！ウインカー出し忘れた」

キキイッ

直進しようとした車が慌ててブレーキを踏んだ。

パーッ！パーッ！

抗議のクラクションが鳴り響く。

「はいはい、ごめんなさいよ・・・っと」

ブオオオ

僕はアクセルを踏み込んでさっさとトンズラこくことにした。

僕の車は加速し、抗議する車から一気に遠ざかった。・・・いや、正確にいうと僕のではない。

僕は免許こそってはいるものの自分の車はない。この車は黒田警部が心優しく貸してくれたものだ。決してこの前の自爆発言（6話参照）を皆にばらすと脅しつけたわけでは、ない。

しつこいクラクションも、もう聞こえなくなった。

まあ一般道でこの速度だ。当たり前といえば当たり前か。

無論、速度オーバーである。だけど、生憎僕はそんなことをいちいち気にする殊勝な人間ではない。

『・・・いや警察官なら気にすべきだろ！』ってツツコミが欲しいところではあるが。

24班が、ただし黒田警部以外、共通してよく使う言葉は『細かいことは気にするな！』なのだ。

・・・だが黒田警部の髪の毛が最近薄くなった原因は、その言葉に基づく、我々の引き起こした数々の面倒事ではなく、もともと彼の毛根が弱かったのであると、僕は強く主張する。

車を振り切つても、僕は車を速度を落とさず走らせ続けた。

・・・パトカー近くに來たら速度下げればいいや。
見つかったら減俸だろうからね。

さすがに警察署に近づいたら速度を落として、僕は東玉川署に無事到着した。

「ご苦労様ですっ！」

入り口にいた警官が敬礼してきた。

「本庁捜査一課、矢嶋祐一警部補です」

「矢嶋警部補ですか・・・？あの、記録では毒・・・なんと読むのでしょうか、これ？」

警官は書類を渡してきた。だが受けとるまでもない。僕はちょっと笑いながら

「どくまむし、ですね」

と答えた。

「ああ！まむしって読むんですね、この字。・・・で、ですね、毒虻さんが来ることになっているのですが」そうなんだよなあ。

うちら24班からの応援は1人で十分。あとは事務やら本部に合流やらして、楽な作業。

というわけで、もともとは美咲さんに行ってもらう予定だったのだが、何故かあの人、今朝まで連絡がつかなかった。と、思ったら、いきなり朝電話が入り、

「ひどい頭痛と吐き気。おまけに風邪もこじらせたから休む」ときた。

・・・あの人、残業もせずに帰つといて、いったい何をやってたんだ？

・・・ということで、永森さんもないわけだし、僕が代わりに行くことになったのだ。

ちなみに黒田さんはデスクワーク。今残ってるのは黒田さんだけなので、それはそれで寂しいと思う。

「彼女は体調不良で欠勤でして、代理で僕が来ました」

「ハッ！そうでありましたか！失礼しましたっ！」

「いえいえ、お勤めご苦労様です」

「き・・・恐縮です！」

固まった警官に苦笑しながら、僕は入口を抜けた。

「矢嶋警部補、ですね」

見ると、スーツを着こなした初老の男性が静かに笑って立っていた。

「はい、そうですか」

「入口では手違いがあったようで申し訳ありませんでした」

深々と頭を下げる。

「ちょ、ちよつと、そんなに頭下げないで下さい」
僕は少し焦って言った。

「では捜査本部へご案内します」
こちらです、と恭しく右手を廊下の方へ指すと、歩き出した。

・・・この人、刑事っていうより執事って感じがするのはぼくの気のせいだろうか・・・。

しばらく歩いてあるドアの前で立ち止まり、ノックした。

コンコン

「失礼します」

ドアを開け、部屋に入る。

「こちらが、捜査会議が開かれる第1会議室です」
僕にそう言つと

「矢嶋警部補をお連れ致しました」

と、やはり恭しく頭を下げた。

・・・やっぱり執事って感じがする。

「ご苦労だった」

ここにいる20名くらいの刑事の中でおそらく一番偉いと思われる、奥に座った恰幅のいい男性が告げた。

執事さんは頭を下げ、部屋を出ていく・・・と思いきや、捜査会議に加わった。

あ、そうか。この人はあくまで刑事なのだ。

「これは矢嶋警部補。お会いできて光栄です。私がこの署長の戸塚警視です」戸塚と名乗った恰幅のいい人が立ち上がった。

「あの・・・戸塚さん、僕もお会いできて嬉しいですが、僕は一介の警部補に過ぎませんから・・・」

家のことでなんやかんやの特別扱いを受けなくなかった。

「・・・む。これは失礼」

戸塚署長は、僕の言わんとしていることを察したのか、コホンと咳払いをして話を取り止めた。

「矢嶋警部補、事件の概要は・・・」

「聞いています」

「そうですか。ではそろそろ・・・」

「署長、小田口がまだ来ていませんが・・・」

近くの刑事が告げた。

「何い！？あの馬鹿はまた遅刻か！」

署長は目を剥いた。

「・・・申し訳ない。あなたとペアを組むはずの小田口という者がまだ来ておりません」

「はあ、別に構いませんよ。少しくらい遅れたところでどうってことありませんしね」

僕はそんなことよりもさつきから署長が自分に対し余りに丁寧に接していることの方が気にかかった。

僕は警部補。

相手は警視。

普通に考えて警視は警部補にこんな態度はとらない。・・・所詮僕は警察界では祖父や叔父の七光りだと言うことだ。

自嘲気味に僕は笑った。

ガチャツ

「すみません！タバコ買ってたら遅くなりましたあ！」

慌ただしく男が入ってきた。

長身で若い。小田口という人だろうか。

「遅いぞ小田口っ！お前はいつもいつもいつも遅れてきおつて！捜査会議にも遅れるとは一体どういう見だ！」

「署長、そんなに怒らないで下さいよ。髪の毛抜けて、海の幸一家

のお父さんみたいになっちゃいますよ?」

小田口さんは署長が青筋を立てて怒るのをサラリと受け流し、からかった。

クスリと周りから笑い声が漏れた。どうやら髪の毛の話は署長の前ではタブーなようだ。小田口さんはこちらに気が付くと近寄ってきた。

「ああ、あなたが本庁の助っ人さんですね。よろしく」

手を差し出してきたので握手した。

「捜査一課、矢嶋祐一警部補です。よろしく」

「刑事課、小田口^{おだぐち}猛^{たけ}巡查部長です」

小田口さんは軽く頭を下げた。

歳は永森さんと同じくらい。顔はにこやかだがどこか隙がない。

「あなたが噂の矢嶋さんですか。若いんですね」

「おい！小田口！いい加減にしろ！失礼だろうが！」署長がついにキレた。

「はい、すみませんでしたあゝ」

それをものともせず、小田口さんはこちらをチラリと見て、

「かったい男なんです。うちの署長」

とボソツと囁いた。

僕は思わず声を上げて笑いそうになったが、含み笑いに留めた。

うーん、この小田口さんなかなか面白い人だなあ。

この人と捜査か。楽しくなるかもしれない。

捜査会議はなんだかんで始められ、今まで聞いていたことの他に、解剖の結果、不審な点は見つからず、ナイフで心臓を一突き。即死であったことが分かり、今日から本格的な聞き込みを始めることが決められた。

小田口さんかというと、さっきまで耳をほじくってたかと思えば、今は熟睡体勢に入っていた。

・・・こりや起きたらまた署長の大目玉だなと、笑いつつも、

やっぱりこの人大物だなあ・・・いろんな意味で。と思ってしまう僕なのであった。

しかしながらこの小田口さん、他ならぬ僕のせいで、近い将来キヤラ崩壊を起こしてしまう。でも当然、僕はそんなこと、まだ知るよしもなかった。

11話 矢嶋編 Which do you like summer or

ながらく間があいてしまいました。なんだよこいつ、もう飽きたのか。とお思いかもしれませんが、そうではありません。我が校の学年末テストの影響で、執筆を一時中断せざるを得ませんでした。かといって、さあ春休みだ執筆に集中・・・という訳にもいかず、休み中ほぼ毎日部活が組み込まれてる訳で。文化部入りやよかったなあと思う今日この頃。まあ気長に見て下さい。ハンター×ハンターみたいにならないように（笑）頑張りたいと思います

会議は30分くらいで終わり、僕は支度をする自分のデスクへ戻った小田口さんを駐車場で待っていた。

・・・ずいぶんと暑い季節になったものだ。6月だつてのに蝉がちらほら鳴いている。

僕は昔から夏より冬の方が好きだった。

それこそ小さいわんぱく坊やだった頃は、夏はたくさん友達と遊べる！なんてほざいていたが、中学・高校ときたら合宿で死ぬ思いこそすれ楽しい思いでなんて全く無かった！今は夏を殺したいほど憎んでいる次第である。

こんなジメジメした不愉快な感じを味わうくらいなら寒くても乾燥した冬の方がまだいいというものだ。

汗が一滴流れたのでハンカチで拭う。

ああ。夏は嫌だ。死ねばいいのに。夏。

チャラララチャララ

僕は、軽快なメロディが流れ出した携帯を取り出す。

液晶画面を見ると、そこにはよく見知った名前があった。

通話ボタンを押す。

「はい矢嶋です」

「おう祐一！俺だ俺」

「はあ・・・」

僕は大きいため息をついてみせた。

「今時ねえ、そんなオレオレ詐欺に引つ掛かる奴がいると思ってるの？僕は刑事だ。今回は見逃してやるからもつと真つ当なことに精を出すんだな」

「はい・・・どうもすみませんでした。・・・ってうおい！ちげーよ！俺だよ井原幸一郎！」

ほう。ノリツツコミ。

「なんだ、幸兄か」

僕は何事もなかったかのようにさらりと返した。

「なんだじゃねーよ！お前着信した時点で俺の名前がディスプレイに出るはずだろうが！」

「・・・まあもちろん分かってたけども」

「やっぱりか！やっぱそうか！お前人をおちよくって楽しいか！？」

「うんとつても」

人をおちよくるのは僕の生き甲斐の1つだ。楽しいに決まっている。それより、この電話越しで怒鳴っているのは井原幸一郎。

働き盛りの34歳。

きれいな奥さん有り。

（井原奈緒さん。気立てがよくて美人で割りと何でもこなすスーパー奥さん。32歳。）

かわいい娘さん有り。

（井原美緒ちゃん。10歳。素直でかわいい。一昨年、井原邸で飲んでいたら、美緒ちゃんに『将来祐一さんのお嫁さんになる！』って言われた。幸兄にめっちゃ睨まれ、奈緒さんは歓声を上げた。ロリコンではないのでその場ははぐらかしたが、とても嬉しかった。ぶっちゃけ次の日殉職してもいいと思った。）

マイホーム有り。

（なんか首都圏に2階建て新築一軒家もってやがる。流行りの木の家オール電化。羨ましい。ちなみに、ローン30年だそうだ。地震起きないかなあ。大きな地震起きないかなあ）

公私共に順風満帆な警視正だ。

なぜ、僕がこの幸福者を幸兄と呼ぶのかというと、それにはさして深くもない訳がある。

彼は昔僕の近所に住んでいた。東大生だった彼は近所で評判の秀才

君だったのだが、子供好きとしても有名で、よく遊んでもらっていたのだ。

確か幸兄が引越していったのは僕が小3の頃だった。

まあそれ以来会ってもいなかったのだが、警察学校後の研修期間中、バツタリと再会。それからしばらくよく会うようになった。

最近嬉しかったことは美緒ちゃんが地域のお絵描きコンクールで入賞したことと、僕が20歳になったので飲みに誘えるようになったことだそう。

「あー、もういいわ。お前と話すとなんか疲れる。ったく、なんであんなに素直で可愛かった子がこんなになっちゃうんだろ。・・・それはそうとお前今東玉川署にいるのか？」

「うん、そう。今から現場に向かう」

「そうか。・・・ホシはその筋のプロかもしれない」

「ヤクザとか、殺し屋とか？やっぱりそうかなあ。だしたらだいぶ面倒だよ。迷宮入りも有り得る」

「ああ・・・てなわけでそちらに捜査本部が作られることになった」

「ご苦労様です。ねえ本部長殿」

「あ？なんで俺が本部長だって分かった？」

「だって事件ファイルを読まなかったらホシはプロだなんて指摘できないでしょう？事件ファイルを読むだけなら捜査員でも読めるけど、警視正程の人がまさか捜査員なはずがない。とすると、指揮官ってことになる」

「はあ。理屈っぽくなりやがって」

「素直にすごいと言いなさい」

「あーあー、すげーよ。お前はすごい」

「ようやく分かったか幸兄」

「お前はすごいナルシストだって言おうとしたただけだが何か？」

「ははは、ふざけるこの子煩惱ダメパ」

「ははは、父親ってのは娘ができたらみんな子煩惱になるんだよこのガキ」

「はっ、今は美緒ちゃんが10歳だからそう言えるのさ。せいぜいあと5年経って『パパウザい』って言われるまでそうやって可愛がつとくんだな」

「ぐ……。お前こそ人のこととやかく言う前に自分の身を固めることを考えろ」

「はっはっは、そんなこと言っているの？相手は美緒ちゃんになるかもよ？」

「てめえ絶対許さねえ。10も離れてんだぞ？しかもお前なんかとくつつけたら美緒が一生苦労するのが目に見えている」

「そこまで言うか。まあそれは冗談としても、身を固めるなんて大きなお世話だ。今平均結婚年齢は30くらいなんだよ」

「バーカ、10年なんてあつという間に過ぎ去っていくんだよ！」

「ほざけ年寄り！」

「黙れクソガキ！」

「……！」

「……！」

口喧嘩の応酬中、小田口さんがちょっと引いてこちらを見ていることに気付いた。

「はあ、はあ、悪いが休戦だ。幸兄。こっちは今から現場行かなくちやいけない」

「はあ、はあ、そんなこといったらお前、俺は捜査本部作る手続き

しないといけないのに。なんか周りに引かれててイタいしさ」

「そりゃ自業自得ってやつさ」

「うるせえ。だいたい俺は暇じゃないんだ。それをお前が・・・」

ピッ。プツッ

このままじゃあ喧嘩ラウンド2へ突入しそうな流れだったのでガチヤ切りしてやった。

おそらく怒り狂ってまたかけてくると思ったので先手を打ってマナーモードにしてカバンの底へ放り込んだ。

ブーッ ブーッ ブーッ

やっぱり。

「あの・・・電話鳴ってるけどいいんすか？出なくて」恐る恐るといったように小田口さんが聞いた。

「いいんです。さあ、そろそろ行きましょうか」

僕は助手席に乗り込んだ。

「あれ？矢嶋さんの車なんですから矢嶋さんが運転するんじゃないんですか？」

「・・・命懸けの、ジェットコースター以上のスリリングをあなたが求めているならそうしましょう」

「俺、運転します」

いそいそと運転席に乗り込んだ。

「お、おーし、出発しましょうかあ！」

さっきの口喧嘩の勢いに吞まれていた小田口さんは、ようやく自分のペースを取り戻したのか、元気に言った。

車は僕が運転したときよりもずっとスムーズに進んでいく。

あー、車が喜んでるような気がする。

「・・・ところで、さっきの電話の相手は誰なんスか？お兄さんとか？」

「ああ、あれは腐れ縁というか、古くからの友人です」

「お兄さんじゃないんスか。『幸兄』とか言ってたからってつきり」

「ははは、彼のが年上ですからね。実際兄のようなものだったんですよ」

「はあ、そうだったんですか」

小田口さんは黙り込んだ。僕と幸兄のあの口喧嘩も、実は親しみの裏返しだったとかそんなこと考えているのではないだろうか。

確かに幸兄はそうかもしれない。だが、はつきり言おう。僕は素だ。昔からの付き合いってのもあつてか、僕は幸兄の前では素が出る。

さつきも述べたように、もともと僕は人をおちよくって楽しむところがあるが、それが幸兄の前では顕著になる。いわば暴走する。

哀れな幸兄はその暴走をもろに受けてるわけだ。

ああ可哀想。

「あ、もう着きますよ」

「はあ・・・このくそ暑いのに聞き込みか」

「あれ？でも噂ではキャリアのくせに聞き込み大好き人間って聞きましたけど」

「小田口さん。この炎天下で聞き込みするのが大好きな人なんているわけないじゃないですか」

「ははは、確かに。じゃあ噂はガセッスか」

「そうですね。まあ周りからはそう思われても仕方がない節はありますけども。確かに僕はよく聞き込みに出てますけどそれは若造の僕が会議室で偉そうに指示したりするのが嫌なだけです。ほら、テ

レビで緑色の刑事が言ってたでしょう。事件は会議室じゃなく現場で起きてるって。現場のが楽しいでしょうね・・・夏場でなければ」

「はあ、なるほど。・・・でも後でおばさんに事件は会議室で起きてるんだって言い返されましたけどね」

「うつ・・・あれは空気読めないおばさんの戯言です。気にしちゃいけません」

「ははは、そうですね」

そんなことを話しているうちに現場にたどり着いた僕らは、適当な場所に車を停めて聞き込みを始めたのだった。

日も落ち、ぼちぼち引き返すことにした。成果はさっぱりだ。

まあ予想はしてたけど。

相手は恐らく『プロ』なのだ。

目撃者を出すへまをするはずがないし、仮に目撃されたとしても目撃者を生かすはずがない。

はあ。

なんか1日を無駄にした気分だ。

被害者の身元が分からない限り、こつちもお手上げだな。

この後は一回署に戻ったあと捜査会議。多分そこで幸兄が出てくる。それでもって今日は署にお泊まり。

男ばかりズラツと布団を並べて眠る。

・・・むさ苦しくてやなんだよなあ。

時刻は6時半。

どうやら僕の憂鬱な夜は始まったばかりのようだ。

12話 矢嶋編 Sっ気爆発！真夜中の怪談（前書き）

はい。めつつつつちや久し振りの更新です。合宿明けて一息つけたので更新です。何回も通ってくれた方、ありがとうございます。

さて、ゆっくりできる期間もそろそろ終わりを告げ、またしても部活、勉強の日々な訳ですが、更新は遅くても絶対止めないよう頑張ろうと思います。だって構想が30話くらいまでまとまってるのに書かないのは勿体無いですからね（笑）

ひとまず、これからよろしくお願いします

12話 矢嶋編 Sつ気爆発！真夜中の怪談

「どうかしました？・・・疲れたんスか？」

ムスツと黙り込んだ僕を心配してか、小田口さんが声をかけてきた。

「いえ。別に・・・。渋滞ですか？」

さつきから車が動いてないように思える。

「ええ。ご覧の通り」

小田口さんは前を示した。車。車。車。

はあ。ここまで来るとむしろ見事なもんだ。

「よく考えたら今日は金曜日でしたね。土日の旅行に向けて、今のうちに出発する家族が多いのかなあ・・・。脇道逸れとくんだったなあ」

腹立たしげに小田口さんが言う。

東京は混む。金曜の夜、土日は特に。

だから電車というものがああして発達したのだ。

「時間かかりそうですね」

「あ！そういうええ気になってたことがあるんスよ」

「なんですか？」

「いや、来るときに、入口にいる警官に聞いたから今日来たのが矢嶋さんだって分かってたんスけど、今日俺とペア組むのは毒蝮美咲さんって女の人のはずでしたよね」

僕はフフと笑った。

「女の人の良かったですか？」

「え・・・ええ、まあ、正直」

小田口さんは照れながら言った。

「だって、矢嶋さんたちがいる24班は変人班で有名ですけど、優秀な人材ばかりってことでも有名なんですよ」

「え！そうなんですか！？」

「そうツスよ。知らなかったんですか？」

知らなかった……。一時期は馬鹿にされてた24班が……。

僕は感慨深いものを感じ、嬉しくなった。

「で、毒蝮さんは24班の紅一点ですごい美人って評判ですから、才色兼備の……」

「小田口さん」

僕は小田口さんの肩に手を置き、首を振った。

「確かに美咲さんは美人で優秀です。そこは否定しません。……しかし、忘れてはいけません。彼女は変人班の一員です。しかも彼女は一番タチが悪い。怒ったらスパーサ ヤ人並の戦闘力になり、酔ったら幼児並の我が儘になります。しかも自分の要求を拒否するとぶたれます。手に負えません」

「なんか……すごいですね」

「すごいなんてもんじゃないんですよ……」

「……お察しします」

「どうも」

僕はペコリと頭を下げた。渋滞はまだ続く。

「にしても、なんでこんなに混むんでしょうねえ」

「確か……この辺に『世界料理博物館』っていういろんな国の料理が食べられる施設が出来たらしいツスよ。その関係ですかね」

「はあ、なんでよりによって……行きたくなっちゃいますよ」

僕は腹を押さえて言った。小田口さんはクスリと笑う。

「行きたいのは山々ですがねえ。捜査会議間に合いませんよ」

「ですなえ」

「「腹減ったなあ」」

程なく車内に笑い声が響いた。

前にも車。後ろにも車。横にも車。横の車にはカップルが乗っていて、渋滞で車が進まないの进行いいことになんかいろいろしちゃって

る。

やれやれ。

「はあ。渋滞はまだまだ続きそうですね」

「あ、そうだ！」

小田口さんは声を上げた。

「暇潰しに面白い話があるんですよ。……矢嶋さんは『緑の鏡』
って知ってますか？」

「え、紫じゃなくて？」

僕は聞き返した。『紫の鏡』は有名な都市伝説だ。

確か、20までに紫の鏡という言葉を忘れないと死ぬとか何とか。
……まあ僕は生きてる訳だが。

「うーん、『紫の鏡』から出来た都市伝説の一種です。これはちょ
っと長い話になりますけど……」

断りを入れて、小田口さんはゆっくりと話し始めた。

緑の鏡っていうのは俺が住んでた地方……西東京の方に伝わって
いた話なんですがね。簡単なものです。緑の鏡という言葉が20に
なるまで覚えていたらその人は死んでしまふというものです。これ
は、紫と同じですよ。

それで、これは紫の方には無かった話なんです、これを3人以上
に伝えれば『緑の鏡』を覚えていても助かるって要素が加わって
るんです。

ある時急に流行り出したんですよ。その話。

で、ある日、20の誕生日を迎えたばかりの若い男女が死ぬ事件が起きました。被害者は5人。3ヶ月に渡って起きました。死因は心臓麻痺。そして死体には意味不明の印が焼き付けられています。

警察はこの情報をひた隠しにしましたが、噂としてまことしやかに流れていたんですね。大騒ぎになりましたよ。

緑の鏡だ！

緑の鏡の呪いだ！

・・・てね。

最初の犠牲者から4ヶ月目に入ろうとしたころ、1人の19歳の青年が逮捕されました。

新たに人を殺そうと家に入ろうとしたところを現行犯で逮捕されたそう。

しかし、話はそれで終わらなかったんですね。

その青年は裁判で無期懲役を言い渡され、刑務所に居たわけですが、どういふことかまた20歳になった人が死に出したんすよ。

犯人は捕まっていたので警察としては偶然の事故ってことにしたかったらしいんです。

そして、12月21日。その青年が20歳になった日。どういふわけかピツタリと死ぬ人はなくなっただんです。

・・・その青年を最後にして。

なんとも不思議な事件だ。刑務所に犯人がまだいるというのに人は死に続けた……？

何らかの経路で殺害方法を知ったコピーキャット、つまり模倣犯の仕業だろうか？だがしかし……。

「まあ当時は俺もしいがないう学生でしたからね。事件についてよくは知らないし、警察がなぜ犯人の行動を読んだかのように現行犯逮捕出来たかも知りません。ただ、これは俺が警官になってから聞いた話なんです、この事件の解決には本庁の一ノ瀬警視正が深く関わっていたとかなんとか……」

「一ノ瀬警視正ですか！？」僕は思わず聞き返した。

一ノ瀬拓馬警視正。

警視庁捜査一課特別事件処理部という部署の部長をやっている。

2、3回しか会ったことはないが、欲はなく、決して怒らず、いつも静かに笑っている。……そういう人に私はなりたい。

といった感じの人で、まあ要は温和でいい人っぽくていつも笑っているから掴み所のない、腹の下じゃあ何考えてるのか分からない人だ。

そもそも僕は、あの部署は何をしている所なのかもよく知らない。今度行ってみようにもあの部署がどこにあるのかも知らない。捜査一課という名前はついてるものの、実態は全く違った、謎に包まれた存在なのだ。

……というか、そんな存在が警視庁内に存在すること自体どうかと思う。

「お知り合いだったスカ？」

「いや、2、3度しか会ったことはないですが。なんというか、雲

みたいに掴み所がない人です」

「はあ、なるほど……。あんな事件を解決できるような人ならきつとすごい刑事なのでしょうが」

小田口さんはそれよりも……。と、口を開いた。

「どう思います？ 2 回目の事件の方について」

「ああ、そうですね。模倣犯という考え方ができなくはないですが……。犯人の心臓麻痺については、分かりません。正直、偶然にシては出来すぎてる気がするのですが」

「ですよねえ。よりによつて20歳の誕生日に死ぬなんて偶然、ないですよ」

そう言つて小田口さんは僕を見据えた。

ん？ なんか震えているような……。。

「俺、考えたんですけど、犯人が勝手に呪いに見せかけた演出をしたのが許せなかった鏡の怨霊が呪い殺したのでは……。すみません、んなわけ、ないですよ……。？」

はあ。

小田口さん、この手の話に弱いのか。

てかこの話自分で振つてきたくせに。

「いや、それを偶然としてしまうよりはむしろその方が自然かもしれないですよ……。？」

「そ、そうですね？」

小田口さんは否定して欲しかったようだ。

「いやね、僕は割りと幽霊とか信じてるんですよ……。というのもですね」

ああ、おもしろい。

僕は声色を変えた。

「い、いや！ もっと楽しい話しましょう。そういえば楽天の田中が」

「そう。……あれは僕が高校生の時」

僕は無視して話し始めた。

僕が高校生のときは、よく渋谷とかに繰り出して遊んでたものでした。

ある日、ちょっとカラオケが盛り上がりすぎて帰りが夜遅くになってしまったんですね。

渋谷駅前の交差点をいつも通りに渡ろうとしたとき、僕は見てしまいました。

向こうから、白いコートを真っ赤に血で濡らして歩いてくる女の人を。まあ女の人っていつでも当時の僕と同じくらいに見えましたが・・・しかしおかしいんです。

あんなに大量出血しているのにも関わらず、誰も気に留めないんです。

いくら、東京が冷たい街だと言っても、死にそんな人を誰も気に留めないことはないでしょう。僕はもしかするともしかするんじゃないかと思いました。

まあ少し興味はあったのですが、流石に怖いので見ぬふりをして帰ることにしました。

しかしどうしたことでしょう。不審に思っただけでガン見していたのがいけなかったのでしょうか。女の人是一直線にこちらに向かってくるのです。

回れ右して逃げようかと思いましたが、そこは渋谷の交差点。逃げようにも人の壁が邪魔して逃げられません。

マズイだろ。

こりゃ本当にマズイ。

流石に僕も焦りました。

女の方はどんどん近づいてきます。

大丈夫。

いくらなんでもこんなたくさん周りに人がいるところで幽霊に殺されたりはしない。

僕はそう自分に言い聞かせて、覚悟を決め歩き始めました。見えないふりをして通りすぎようとする。

ちよんどすれ違おうとするとき、

『クスリ・・・』

女の人の口から笑いがこぼれました。

『見えてるくせに』

ギョツとして僕は思わず立ち止まってしまいました。・・・間違いない！あれは幽霊だ！

僕の第六感がそう告げています。

ふつと振り向くと、やはりそこに血に濡れた女の人はどこにもいませんでした。

「ちよつ。怖いじゃないですか。止めてくださいよ、もう」
小田口さんはマジで怖がつてる。

「イヤです。まだ続きがあるんです」

僕はキツパリ言っただけ。

ここからが肝心なのだ。

あときは、結局何事も起こらずにすみました。

しかし問題が起きました。

あの女の人、僕の夢に出てくるようになったんですね。

血に濡れた姿でこっちにゆっくり、ゆっくり近づいてくるという夢です。

憑かれてる、と思いました。

これではおちおち夜も眠れませんのでですね、ちょっとあの交差点の辺りを調べてみたんです。

そうしたら・・・1つの地蔵を見つけたんです。

気になって交番のおまわりさんに聞いてみると、あの交差点で事故死した女子高生のためのものだというんですね。

僕はてつきり大人かと思っていたのですが、遊びの服装だったので大人っぽく見えたんでしょうね。その子が。

僕は頼み込んでその子の名前を聞き、その子の家に行ってみたんです。

お母さんがいたので、線香をあげさせてもらうことにしました。仏壇の写真を見れば誰だか分かりますからね。

といっても、まさか『娘さんの幽霊を見たので線香をあげさせてもらいに来ました』とは言えません。

とりあえず僕も高校生だったので中学の時の友人だったが自分は遠方に引越してしまい、今回久しぶりに戻って見たら友達から亡くなったことを聞かされ慌てて駆けつけた、と作り話をしてなんとか上がらせてもらいました。

仏壇の写真は、紛いなくあの女の人でした。いや、女の子、というべきかな。

そうと決まったらやることは1つしかありません。

僕は母の日でも行ったことのない花屋で生まれて初めて花を買い、地蔵の前に供えました。

すると、パツタリ夢に女の子は出てこなくなったわけです。

「幽霊確定じゃないですか！」

小田口さんは悲痛に叫んだ。

「まあ。そうです」

「・・・でもいいとこありますね、矢嶋さん。花供えてあげるなんて」

「ははは、そうですか？まあ今も2ヶ月に1回くらい供えに行ってるんですが。別に殊勝な考えではなく、夢に出られると困るんでね。やってるだけです」

「クスリ・・・」

「え？」

小田口さんはギョツとした。

ははは。面白い。驚いた顔が金魚みたい。

「ちよっと、今クスリって・・・ギイイヤアアアアアー――ッ」

その時突然小田口さんのものすごい悲鳴が響き渡った。

ああ面白い。

なぜ小田口さんが突然悲鳴をあげたのか、それは……。

13話 矢嶋編 『オカルトチック』なマジ話

小田口さんが突然叫び声をあげた理由、それは・・・

僕はすっかり分かつているが、おもしろいのでとぼけた。

「どうしたんです？つてか笑い声なんて聞こえました？」

「き、聞こえましたよ！しかも・・・う、後ろに！」

「後ろに？」

「う、後ろに！女の人が！」

「さあ、もしかしたらさつき話した幽霊が来たんですかねえ」

「え！？呪いは解かれたんでしょ？」

「いやあ、最近忙しくて。お墓参りもご無沙汰なんですよね」

「ですよ じゃないツスよ！しまいにやキレますよこの野郎が！」

アハハと僕は笑う。

「・・・で、笑い声が聞こえたんですか？」

「聞こえましたって！」

「いや、僕は聞こえませんでした」

実は聞こえてたりするが、ここは小田口さんを怖がらせるためにシラを切る。

「嘘でしょう！？聞こえましたよね？」

「・・・聞こえてるくせに」

後ろから声。最高のタイミングで。

・・・小田口さんにとっては最悪のタイミング、かな。

「え、また声！しかも後ろに女の人がいるんですよ！バックミラー越しにさつきからチラチラ見えてるんですよ！」

小田口さんはもう泣きそうだ。

「いえ、僕にはさっぱり」

「実は見えてるし聞こえてるでしょう？」

また声。

「さあ、見えないし聞こえません」

「いや少なくとも聞こえてるよね!？」

後ろからの的確なツツコミ。

「ちよ、ちよっと！何幽霊と仲良くボケとツツコミ交わしてるんですか!？」

そろそろいいか。

僕は後ろに現れた美人ともいえる顔立ちの『彼女』を紹介することにした。

「いやあ、小田口さん、紹介します。こちら、さっき話に出てきた女性。早瀬由希さん、享年18歳です」

「享年って・・・」

小田口さんはあんどりと口を開けた。

「いつもいろんなところほつつき歩いてはたまに僕のところに戻ってくるんですよ」

「ほつつき歩いてるって。そんな言い方はないでしょ」

由希が抗議する。

「ほつつき歩いてるじゃん」

「ほつつき歩いてない」

「ふうん、姿消して映画館だの漫画喫茶だのに入り込んで映画タダ見や漫画タダ読みしておいてそんなこと言うのか?・・・ああ、ほつつき歩いてたんじゃないかって遊び呆けてたっていいいたいのか」

「うわっ、ホント性根腐ってるっていうかなんというか。小田口さんでしたっけ?大変ですね、こんな奴とペアになっちゃって」

「え?ああいえその」

幽霊にいきなり振られて小田口さんは動揺しまくっている。

「由希、小田口さんはまだ目の前の現実を信じきれていないんだよ」

「あ、あなた、本当に幽霊なんですか?実は隠れて前から車乗ってた訳じゃなくて?それに、ほら、白いコート着てないし血塗れじゃないし」

「この季節にコートなんか着てたら姿現したとき思いっきり不審じゃないですか。血なんて論外ですし」

由希は淀みなく答える。

「普段姿現すんですか？」

「姿現さなかったら漫喫で漫画読むとき漫画が独りでに浮かび上がった！って大騒ぎだもんな？こいつが姿消すのは漫喫の出入りの時だけです」

僕は横槍を入れた。

「なるほど・・・」

小田口さんは少し納得したようだったが、

「いや、しかしいきなりあなたが幽霊だと言われても・・・」
と、信じるには至らなかったようだ。

「じゃあそれでいいです。あたしはどっちかっていうと生身の人間だっと思ってた方がいいんで」

「うおい、それじゃあ僕がつまらな、ゴホン。小田口さんが気になるって夜も眠れなくなるだろう」

「あ、今本音出た！・・・まあいいか。小田口さん、よくあたしを見ててください」

フッ

由希の姿は一瞬の内に狭い車内から消え失せた。

「う、うわぁ！本当に、本当に幽霊だったのか！」

小田口さんは喚いた。

しかし、すぐに立ち直る。

「でも、正直、格好が普通の女の子過ぎて幽霊に思えません」

「あっはっは。確かにそうですね。あんなの怖くないですよ。やつはお岩さんくらいの迫力が無いと」

「よっく言っよ！あたしと初めて会ったときはビビってたくせに！」
姿が現れる。

「自分が死んだのが納得できないからって自暴自棄になって人を脅かしまくってた奴がなんか言ってるよ。てか血塗れのコート着てこ

「うちに向かってくる人がいたら誰だって怖いと思うだろ」

「確かに……。俺だったら逃げ出しますよ」

「小田口さんは怖がりだから参考になりません！」

「ううっ。傷ついた」

小田口さんはおどけて胸を押さえてみせた。

ずいぶん余裕ができたもんだ。

微笑ましき半分、つまらないじゃないかの不満半分で小田口さんを見た。

「もう署に着きますね」

「ええ、渋滞も抜け出しました」

今は車はスムーズに進んでいる

「ねえ、今はどんな事件追ってるの？」

「警察には守秘義務があるのだよ、小娘」

「小娘って……。初めて会ったときは歳変わらなかったくせに！」
由希はまた怒り出す。

「本音を言っと、めんどくさくて説明したくないだけだ。お前、どうせ姿消して捜査本部に入り込むつもりなんだろう？」

「う、バレたか」

「あたりめーだよ。付き合い長いからな」

僕はニヤリと笑った。

付き合い長い、か。

そういえば、この奇妙な幽霊との付き合いは長い。

僕が公務員試験1科を受ける前からなのだから、2年以上だ。2年

以上、何だかんだ言って僕を助けてくれている。

しかしこいつは会ったときから変わらず18歳のままだ。幽霊は不老なのだ。

しかし、不死という訳ではない。

「そう。付き合い長いね。全く、変な人に憑いちゃったなあ……。早瀬由希一生の不覚」

「バーカ、死んでるから一生じゃねーよ」

「あの、ちよつと気になったことがあるのですが」

僕と由希のやり取りをよそに、小田口さんが口を開いた。

「どうしました？」

「あの、話を聞いていると幽霊になるといいことばかりで、なんかこういうのはアレなんです。死んで幽霊ライフをエンジョイした方が得つてこともあるのでは？」

「あー、ところがそうでもないらしいんですよ。ねえ、由希ちゃん？」

「ゆー君にちゃん付けで呼ばれると、なんか気持ち悪いんだけど。・
・はい、えーと、まず、あたしの存在自体が稀なんです。普通、死んだら冥界へ逝くわけですが、あたしみたいに不慮の死を遂げたような思念の強い魂で、しかも冥界の扉がたまたまその時閉じてしまっていたときに死ぬという条件を満たさないという風にはならないんですね」

「なんか急にオカルトチックな話になりましたね」

「小田口さん、オカルトチックというよりオカルトですよ。僕も最初聞いたときは信じられませんでした。ぶっちゃけ今も半信半疑ですが。冥界の扉？ププツ。どこのオカルトマニアの発想だ？」

「もー怒った。いいもんもう話さないから」

「ちよつ、ここまで話して終わりですか！？」

「おいおい、冗談だって。軽いブラックジョークさね」

「ゆー君の冗談はブラック過ぎるってよく言われない？」

「ん、昨日言われた。そんなようなこと」

「ほら見なさい」

「バーカ、僕はブラックジョークで人をイジることに人生かけてんだよ」

「ホントにやな男！」

「別にお前なんかにかかれようと思ってねーよ」

「ぬぁんにをっ」

「ああもう！あんたら話逸れすぎです！冥界の扉だろうが何だろうが信じますから続きを話して下さい！」

「はあい」

由希は素直に返事をして続きを話す。

「いいこともあるけど、この状態っていうのも、何かと苦勞するもんなんです。普通、冥界の扉がもう一度開いたら逝くんです。魂は。だから、あたし達は憑依することで留まろうとするんです。しかし一回憑依してしまったら戻れませんし、憑依の相手が弱って死んだら呪い殺したことになる、その魂は『無』になります。消えてなくなっちゃうんです。天国にも地獄にもいけません。だから、守護霊としてとかですね、相手に負担をかけない憑依の方法をとるわけです。ちなみに今あたしはゆー君の守護霊ですよ？」

「ひゃああ。ついていけなくなってきた」

「全く。変なのに守護霊になられてもありがた迷惑だ」

「ハア？何言って」

「はい！続きをお願いします！」

進行役を勤めるのも楽ではない。小田口さんはこのやり取りを早々に打ち切らせた。

・・・僕は意図的に話の進行を乱して遊んでいるのだが、由希の方はまあ天然だろうな。

「はい。えーと、守護霊っていうのは主の命令には逆らえなくなるんです」

「ちなみに、僕は人をイジって遊ぶのは好きだけど人を操って遊ぶのは嫌いなので、『金輪際誰の命令も聞くな。自分の思うままに行動しろ』って命令しました」

「へえ。なんか大人物って感じですね」

「好人なのか嫌なやつなのか分かりにくい奴だね、全く」

2人の僕を見る目が暖かくなる。

「いや基本やな奴だから安心しろ」

「・・・続けます」

「・・・どうぞ」

のも束の間、一気に冷たくなった。

2人は僕を無視して話を始めた。

何？僕そんな悪いこと言ったか？正直なこと言っただけなのに。

「・・・こいつはこんなバカだから、あたしは助かったといえるわけですが、あるところでは命令に背けないのを良いことに、奴隷のように守護霊を使ってる人もいます。そんな霊達は、死ぬより辛い思いをしているそうです」

「ひどいですね」

「幽霊をいくらこき使っても、当然現代法ではしょっぱくこともできない。何ていうか、非常に残念だ」

僕が言うと、由希も悔しそうに唇を噛んだ。

「あたし達も泣き寝入りするしかないみたいで・・・。あと、あたし達の姿は家族には見えないんです。1番会いたい人たちには見えないなんて、結構悲しいですよ？それに、守護霊と主は一蓮托生。主が死んだらあたし達も冥界逝きです」

「なるほど・・・。いろいろデメリットもあるんですね」

「でもま、こいつは運がいいんだな」

「そうね。さつきはああ言っただけ、ゆー君みたいな変人バカに憑いたのは幸運だったのかもね」

「変人バカねえ。ま、否定はしないけどさ、ニート幽霊」

「に、ニートお？」

「1日の大半を漫喫で過ごし、働きもしない人を何て言うかして
るか？」

「ム、ムキヤアアツ！こんのおおっ」

「はい！いい加減にしなさい！着きましたよ！」

・・・一瞬小田口さんがお母さんに見えた。

車を停めて東玉川署の入口へ向かう。

道すがら、一応小田口さんに謝る。

「あはは、すみませんね。幸兄やこいつとしゃべると、僕はどうも
素になるようで」

「勘弁してくださいよお。俺、こういうキヤラじゃないんですよ？
なんか自分の中でキヤラ崩壊の危機ですよ・・・」

「すみません」

2人揃って頭を下げた。

確かにキヤラが崩壊しつつあると思ったからだ。

「いえ、いいですよもう・・・」

小田口さんは半泣きで笑った。

「ご苦労様です！・・・あれ？その娘は？」

そんなこんなで入口に着くと、やはり朝も会った警官に質問を受け
た。

まあそうだろうな。刑事2人に少女1人。明らかに奇妙な組み合わ
せだ。

僕は適当に誤魔化した。

「ああ、ちよつと捜査中、素行が悪かったので連れてきたんです」

「そうでしたか、ご苦労様です！では、少年課に連れていきます」
変に気を回す警官だな。

「あ、いえ。こいつは顔見知りでしてね。僕が嚴重に注意して帰しておきますので」

「そうですか。ご苦労様です!」

会話の中で『ご苦労様です!』を3回も使った警官は、また敬礼すると、署の中へ僕らを通した。

「ふう。もう捜査会議始まりますね。しかし、さすが矢嶋さん!どうなることかとヒヤツとしましたが見事な機転です」

「いやあ、それほどもイタァツ!」

痛みの元を見ると、由希が僕の足を思いつきり踏んでいた。

「悪かったわねえ、素行が悪くて」

「うん。僕は嘘をついた覚えはない。この暴力女」

「知ってる?言葉の暴力つてもっと痛いのに」

「知らない」

キツパリ。

「こんの・・・」

「黙って!」

小田口さんが静かに制した。見るとあの執事刑事が前の方にいた。

「由希、付いてくるなら姿消せよ」

「うん」

由希は頷くと空気に溶け込んだように消えた。

「桃井さん!」

小田口さんが声をかけた。あの人桃井さんっていうんだ。

「ああ、小田口君、お疲れ様でした」

「お疲れ様です」

桃井さんは僕を見た。

「お疲れ様でした」

「お疲れ様です。桃井さん、捜査会議は」

「少し前に本庁の方がたくさんいらっしやって、あと15分で始まります」

危ない。ギリギリセーフだったんだ。

「時に、矢嶋さん。さっきあなたの近くにいた女の方はどなたですか？」

「女？」

僕は怪訝な顔をしてみせた。

「知りませんよ？・・・もしかして桃井さん、幽霊でも見たんじゃないですか？」

冗談めかして言う。

「・・・失礼しました。どうやら、わたくしの勘違いだったようです。さあ、捜査会議が始まります。参りましょう」

桃井さんが後ろを向いたので小田口さんと顔を見合わせ、ホッと胸を撫で下ろした。

・・・さて、いよいよ幸兄指揮する捜査会議か。

果たして事件に進展はあったのだろうか？

僕達3人と後ろに付いた幽霊1人は、捜査会議会場の第1会議室へと足を踏み入れたのだった。

13話 矢嶋編 『オカルトチック』なマジ話（後書き）

はい、いかがだったでしょう。何気に長い13話。 タイトル
コールが思い浮かばなくなつて困つてゐる今日この頃です。

さて、最初の勢いはどこへやら、すっかり更新ス
ピードが落ちてゐる近頃です。いや、飽きたんじゃないで忙しんで
すつて。ホントホント……。まあ他のを見るついででもチラツと
覗いてつてくれると嬉しいです。続編とか考えてましたが、なん
としてもフィナーレまで書き上げるのが当面の目標です。あと、最
後になりましたが、誰かコメント下さい。ないのは寂しいです。批
判でも嬉しいです。（Mじゃないよ？）

14話 矢嶋編 井原本部長の初舞台（前書き）

捜査会議入りました。しばらくは矢嶋編行きます
ロジエクト試験的に実行します。あとがきへどうぞ。

新しいプ

14話 矢嶋編 井原本部長の初舞台

「ひゃあ」

第一会議室に入った僕らは啞然とした。

桃井さんがさつき本庁の方がたくさんいらつしゃつてとかなんとか言っていたのは聞いたが、ホントに『たくさん』いた。

本庁と所轄合わせて刑事は100名以上。庶務の人とかを合わせるともつとだ。

それらの人員を今回取り仕切るのがあの幸兄、いや、井原幸一郎警視正なのだ。なぜ、たかがといつてはなんだが、1人殺されただけの刺殺事件にここまで大規模な捜査体制をとるのだろうか。

僕は首を捻りながらも、空いていた最後尾の方の席へついた。

「お、矢嶋あ」

本庁の奴らはみんな最前列にいて、顔見知りか1人僕を見つけ、こつちへ来いと手招きしたが、僕は苦笑を浮かべつつ首を横に振って動かなかった。

僕は今東玉川の助っ人だからね。

隣には小田口さん。さらに隣に桃井さん。

姿は見えないが、おそらく由希は後ろにいるのだろう。少し肌寒い。

「あー、皆ご苦労」

いつもとは違う威厳たつぷりの井原警視正の言葉で捜査会議が始まった。

「私が今回この事件の指揮を執ることになった井原幸一郎だ。至らないところもあると思う。そのときは上下の關係に躊躇せずに、指摘して欲しい」

井原警視正が頭を下げるとパラパラと拍手が起こった。

それに対してもう一度軽く頭を下げた井原警視正は、

「ではこれより、捜査会議を始める！」

と高らかと告げた。

「まずは確認のため事件の概要を」

「ハッ」

かなり前の方の刑事が2人立ち上がり、概要を話し始めた。

スクリーンが事件現場や被害者の顔のアップ写真を映し、それに合わせて2人の刑事が代わる代わる語る。ざっと話し終えたら席につく。

「次！捜査の進展は」

「はい」

ガタリと近くから音がしたと思いきや、桃井さんが立ち上がっていた。

「今日一日、我々東玉川署員は本庁の矢嶋警部補を始め、数名の本庁捜査員を迎え、聞き込み等の大規模な捜査を行いました。が、手掛かりとなることは聞けませんでした。しかしながら、事件が起こった時間が深夜だということを考えると聞き込みはむしろ昼間よりも深夜の方が効果的と考えられます。ですので、現在も少数ですが東玉川署員が現場付近の聞き込みを続けております。以上です」

鮮やかに一礼して桃井さんが席につく。

執事っぽい。やっぱり。

いつそのことスーツではなく執事服を着せたらどうだろうか。

井原警視正も一瞬桃井さんを興味深そうに見つめたが、すぐに本部長の顔に戻った。

「次！検死での新しい情報があるはずだ」

「ハッ、傷口の状態から犯人を右利きと断定しました。また、心臓が貫かれているため、凶器は刃渡りの長い刃物。被害者に刺さっていた大型ナイフで間違いないと思われます。さらに、心臓を守る骨やその他の臓器がほとんど傷ついていないことから、犯人は相当殺しに手馴れた人物と考えられます」

「そう、その話だがこちらから補足がある」

井原警視正は口を挟んだ。

「手口から考え、犯人は捜査一課で長年追っていた殺し屋の可能性

がある。氏名・住所・国籍などあらゆる点で謎に包まれているが、存在だけは確認している。すでに10人以上殺している危険人物だ。これからの捜査は十分気をつけてくれ。では次・・・」

バンッ

「すみません！遅れました！でも重要な手がかりが入ったんです！そう言って飛び込んできたのは何回か顔を見たことがある一課の刑事。」

「貴様！捜査会議中だぞ！」

怒鳴ったのは井原警視正の隣に座った偉そうな禿げ頭だ。どうやらその刑事の上司らしい。

「構わない。どうした？」

「ハッ、自分、一課に残り事務作業をしていたのですが、そこに電話がかかってきてまして、自分は被害者を知っていると」

『なんだと！？』

不特定多数の人が同時にそう叫んだ。

隣の小田口さんもその1人だ。

まあ当然だろう。今までさっぱり身元が分からなかった被害者を知っているという人が現れたのだ。

「電話の相手によると、被害者は新宿で小さな事務所を開いている探偵だそうで、自分は被害者の飲み仲間だと言っていました」

「そいつと連絡はつくか？」

「いえ、それが、警察がどこまでちゃんと捜査してくれるかわからないから捜査の様子を見て追って連絡すると言っただけ言って、切られてしまいました。あ、でも切られる前に事務所の場所を教えられましたのでメモしました。読みます」

狭い室内に刑事が読み上げる事務所の住所をメモするペンの音だけが響いた。

その音が消えたのを見計らい、井原警視正が口を開いた。

「ここにきて重大な事実が発覚した。被害者は探偵。明日事務所を調べる班を今から構成しようと思う。今から名前を呼ばれたものは事務所班だ」

14人の名前が呼ばれ、その内、矢嶋・小田口両名の名前もあった。「では次、これからの事についてだが。夜は自由だ。夜の聞き込みに出るもよし。寝て鋭気を養うもよし、だ。明日からは今日と同じ割り振りで、聞き込み班、現場班、資料調査班、待機班の4つに分かれてもらう。但し、先程事務所班と言われた14名はそちらへ行くものとする。以上、解散！」

ザッと一斉に立ち上がると一同礼。

こうして只の刺殺事件にしては仰々しい捜査会議は終わった。

「矢嶋警部補」

刑事たちがゾロゾロと席を立つ中、井原警視正が僕を呼んだ。

僕は明日の事について小田口さんとおまけ約1名と話し合うつもりだったので、小田口さんに待合室に行ってるよう言っただけで井原警視正の方へ向かった。

「お呼びでしょうか、井原警視正」

「・・・堅苦しいのはやめるか。なんかお前にそう言われるとむず痒い」

少し笑みを見せて井原警視正の本部長としての顔が、いつもの幸兄の顔に戻る。それを見て僕もニヤリと笑った。

「了解、で、何？幸兄」

「どうだった？俺の本部長っぷり。俺これが本部長初めてなんだけど」

「え、そうだったの？」

「ああ」

意外。てつきり本部長なんてバリバリでやってるのかと思った。

初めての割には堂々としてたと言えなくもない。が。

「んー、20点」

「低っ」

幸兄は小さく萎んだ。

かわいそうなので

「50点満点で」

と付け加えてあげる。

「ああ、そうか。それは良かった。・・・って、いや、それでもなお低いと思うぞ俺は」

「うるさいなあ、模試の全国平均くらいいつてるだろ。幸兄の大学にもいけるレベルさ」

「いやいやいや！俺一応大卒だからね！？」

ふ、さりげない自慢か？それは。

「冗談はさておき、あの大袈裟なまでの人数体制はその殺し屋とやらの影響なのか？」

「俺結構真面目に聞いたんだけどな・・・。ああ、あの体制は上からの指示だ。今回こそ捕まえるって奴さんら息巻いてるよ」

「手柄争い、ね」

「ったく、どつかの会社の営業の成績争いと変わらないな。でも、今回の件、危険なのに変わりはない。相手は相当腕の立つ殺し屋だ。命最優先だ。事件解決しようとして刑事が殺されちゃあ元も子もない。拳銃携帯命令をいつでも出せるよう上に申請している」

「上は通すかな？」

「通させるさ。百人以上の命を預かってるんだ」

フフ、頼もしいじゃないの。

「了解。だけど大丈夫だよ、相手はプロの殺し屋。どうせ見つかるようなヘマはしないだろうから」

僕は笑って言った。

「いや、まあそれはそうなんだろうけども、仮にも刑事がそう言っちゃうのはどうなんだ？それに、危険なのは殺し屋だけじゃない。殺し屋に仲間がいるかもしれないし、もしかしたら殺し屋がヤクザとかと繋がってるかも知れない」

「確かに。でも今時刑事がヤクザとドンパチやんないって」

「・・・昔はやってたのか？」

「テレビでやってたよ。『危ないデカ』だっけ」

「テレビの話かよ。もういい、お前人待たせてんだろ？」

「お、知ってたの？」

「あの人も災難だな、お前なんかとペアになって」

「なんかそれさつきも言われたけど何気にそれ酷いよね」

「酷いのはお前の性格だよ」

「・・・美緒ちゃん寝取ってやる」

ブチ

「ぶっころおおおおすッ！」

あ、キレた。

「ブッコ・ロース？何の肉？それ。美味しい？」

それでもなおおちよくる僕。

「ぶっ殺すつつってんだあ！人の娘寝取るだど！？死んで謝っても地獄へ送って針山にしてやる！」

「ああ、ハイハイ。ただの冗談・・・冗談だつて。おいじょう・・・」

┐

問答無用で拳が伸びてきた。

無論それをくらう僕ではない。日々美咲さんの鉄拳をくらってる僕には三十路を迎えたオッサンのパンチをかわす事くらい造作もない

ことだ。ヒラリとかわすとさっさとんずらく。

これだから子煩悩は困る。軽ういブラックジョークも理解できないとは。

幸兄を振り切った僕は、これから僕らのチームがどう動いていくか検討するべく待合室へ向かった。

14話 矢嶋編 井原本部長の初舞台（後書き）

（裏コーナー）

敦司 えー、何故か司会進行

役を任されました、鳳敦司です。本コーナーは、我々登場人物が、
適当にダベるといふものです。これを見なくても、本編には何ら支
障は無い・・・はずです西岡 あーっ、固い固い！敦司クン、いつ
からそんな真面目キャラになった？・・・あ、皆さーん、アシスタ
ントの西岡研あきひです。

敦司

なんだ来たのか西岡。てかスペース無いって。もう締めないと

西岡 は？俺もう終わり？ 敦司 終わり。

西岡 （；'；）

敦司 じゃ、また次回とゆーことで。

15話 矢嶋編 待合室の捜査会議（前書き）

（今さら）人物紹介 No.001 おひとりあつし 鳳敦司 県立智林高校の3

年生。もう受験だが、自分の希望進路は漠然としておりあまり受験勉強に身が入っていない。基本的に冷めた部分が目立つが、ここぞという時（主にツツコミ時）にはリミッターが外れる。過去に秘密あり（物語が進むにつれ明らかに）。小学生の時には、全国ジュニアボクシング大会で3位入賞した腕前だったが今はやめておりサッカー一筋。とはいっても、サッカーではあまり活躍できないまま引退を迎えてしまった。ちなみに実はモテるのだが、とある力ラクリにより本人は知らない。

15話 矢嶋編 待合室の捜査会議

「しかし、動きましたねえ、事件」

待合室にて。僕と小田口さん、由希は明日以降の事について缶コーヒ―を片手に話し合っていた。

幽霊が物を飲み食いできるのか、というと、できる。食わなくても死なないが（当たり前か）、別に食っても差し支えはない。

空腹感も満腹感も感じないそうなので、つまるところこいつは半永久的に食いつけることができる。

・・・あれは忘れもしない初任給の日、僕は奴を回転寿司に連れて行き、ささやかなお祝いをした。

機嫌が良かった僕は奴に言ってしまった。

『好きなだけ食っていいぞ』、と・・・。

一夜にして記念すべき初任給は露と消えたのだ。

今もはつきり思い浮かべることができる、お皿のエベレスト。

一夜にして20万とちよつとが・・・。

悲しい脱線話はこころでやめておこう。

最初、幽霊といえども民間人の由希が話し合いに加わるのに小田口さんは難色を示したが、由希はどこでも入っていけるので、情報収集に適任だ。

ということ僕が話して由希も晴れて今回のチームの仲間入りをしたわけである。

フラリと僕のもとに姿を現してしまったからにはしょうがない。捜査の手伝いをしてもらおう。

ちなみに、彼女に捜査を協力してもらうことは初めてではないが、我が24班の方々とは即刻溶け込んでしまった。無論幽霊と言うことを承知の上で、である。

美咲さんなんかとはかなり仲良いらしく、一緒に買い物行ったりしたらしい。（由希の買い物予算源が僕のサイフだということは言

うまでもない)

この辺りが24班の変人班たる由縁かもしれない。

「ええ。じゃあここらでちょっと本腰入れて考えてみますか」

僕は2人に言った。

推理開始、かな？

「まずさっきの新事実についてですが」

「被害者が探偵だったってやつですか」

「そうです。まあ殺したのが殺し屋だとすれば、殺されたのはまったくの堅気な民間人ではないと思ってましたが。探偵なら場合によつてはヤクザと繋がりがあつたりしますからね。まあ僕はつきり被害者はヤクザなんじゃないかと思ってましたが」

「アハハ、大ハズレ」

「うるさいな」

「しつかし今時『殺し屋』なんて。そんな人とは一生会う機会なかったけど」

変な表現だが間違つてはいない。

「殺し屋と会う機会がそうそうあつてたまるか」

小田口さんは考え込む仕草を見せた。

「殺したのが殺し屋・・・ってことは、殺しを依頼した人がいるってことですよね」

「ええ。ま、何にしても依頼した人が分かれば捜査は一気に進展しますよ」

「じゃあ、明日事務所を調べてみて何か出てくるかもしれませんね！」

「あゝ、それはどうでしょうか」

興奮し始める小田口さんだったが、僕はロウテンションで言った。

「どういう事ですか？」

「まあ、実際行ってみないことには始まりませんがね。探偵殺しを依頼するのはその探偵に調べられたら困る何かを持つ誰かです。それも、雇ったのが凄腕の殺し屋とくれば恐らく個人では難しい」

「組織……。暴力団ですか？」

「僕はそう思います。暴力団なら殺し屋とのツテもありそうですね。ヤクザが事が露見したときに備えて、犯罪を犯すのに自分の組の者じゃなく、第3者を雇うことはよくある話です。ヤクザなら殺し屋雇うくらい訳もないですしね。相手がヤクザなら、自分達が不利になる証拠を残しておくようなヘマをするはずがない。恐らく事務所は奴さんたちにとっ散らかされてるでしょうね」

「証拠は望めませんか……」

小田口さんは残念そうに言った。

「もう、なんでそうやって人のやる気を削ぐこと言うかなあ！」
由希が怒り出した。

「んなこと言ったって、やる気満々で捜査して、ハイ何も見つかりませんでした、じゃ余計がっかりするだろ？ここで見つからないって思っておいた方がいいと思うけどなあ」

「ムウ……」

珍しくまともな反論を僕がしたので由希は黙り込んだ。

僕だって常に人をおちよくってふざけてる訳ではない。

「でもまあ、絶対に何も見つからないというわけでもありませんし、そう気を落とさずに」

なにやら下を向いてしまった小田口さんに言う。そんなに落ち込んでしまったのだろうか。

「あ、いえ。そうじゃなくてちょっと思っただけですけど」

小田口さんは難しそうな表情だ。

「どうしました？」

「えーと、吸っても？」

タバコを取り出して言う。

「どうぞ」

僕はタバコは吸わない。なんか息が苦しくなるだけのような気がするからだ。

しかも、聞いた話ではタバコは、種類にもよるがその害の大きさは

麻薬に指定されている大麻、マリファナよりも大きいというではないか。

皆さん、タバコは世間で思われてる以上に有毒ですよ。未成年は当然ダメだし、成年の方もホドホドに……。吸うにしてもウルトラマイルドとかそういうのにしましょうね。

そんな僕の思想をよそに、小田口さんは旨そうにタバコを吸うと口を開いた。

「殺しを依頼した人も気になりますが、探偵だって誰かの依頼で動いてた訳ですよ？依頼人は誰なんでしょう？」

「確かに！」

僕は声をあげた。そして続ける。

「探偵に何かの調査を依頼した人。その人はまだ警察に名乗り出ていません。立場上表に出れない人なのか、それとも違法まがいの内容の依頼をしたのか。探偵はどこかの組に関する何らかの情報を手にしてしまい、よって消されてしまったと考えられる。それが依頼の内容によるもののためだったとすれば、依頼人はこの事件を解決に導く鍵を持つてることになりますね。故に奴らに狙われるかもしれない。その人の保護は最優先事項ですね」

僕の話に2人は同意を示した。

小田口さんは灰皿をタバコの先をトントンと当てて、言った。

「あと、もう1つあるんですが、探偵事務所って他に働いてた人いなかったんでしょうか」

それで僕は小田口さんの言いたいことを理解した。

小田口さんは何故か非常に冴え渡ってる。うん。

「……！マズイ状況かもしれないですね」

「そうです」

小田口さんは頷く。

「え？え？どういうこと？」

由希は分からなかったようだ。

「つまりですね」小田口さんが煙を吐き、説明する。

「矢嶋さんの推理通りヤクザが依頼主で、なおかつ事務所の証拠を処分しようとして押し入ったなら、そこにいた従業員の人はどうなったでしょうか？」

「あ！」

由希は合点がいったように頷いたが、すぐに元の？の顔に戻って、
「でもそれだつたらむしろ従業員がいるからヤクザは証拠に手を出せないんじゃないの？」

と言った。

それに対しては僕が口を開く。

「捜査会議ちゃんときいてなかったのか？事務所は新宿にある小さな事務所つつてただろ。多分従業員はせいぜい2、3人だと思う。その程度の人数ならどうにかしたかもしれない。ヤクザなら、ね」

「うう、じゃあヤバイじゃん！」

「だからヤバイんだつてば」

ようやくその結論に辿り着くことができたようだ。

「もしかしたらその人たち今頃富士の樹海の土の中か東京湾の底かも・・・」

「おいおい、縁起でもない」

僕はたしなめた。

「でも実際、あり得ない話ではないですよ」

小田口さんが言った。

「まあ、確かに・・・でも今時、ヤクザだつて足が出るのは怖いからそう簡単に人を殺したりはしない。監禁くらいされてても、多分命までは取らないと思うが」

僕は呟くように言った。

「そうなの？」

由希が尋ねる。

「安心はできないさ。だから早急に何とかしないと」

「ですね」

「うん」

2人が頷いた。

「えっと、結局これから何をすればいいの？」

「うーん、まずは事務所付近の聞き込み。事務所に従業員がいないか、いるなら何人いるか、その人の特徴などを聞く」

「他には？」

「タレコミしてきた人ともう一度接触し、事務所が最近受けていた依頼、並びに探偵の依頼主についての情報を持っていないか聞いてみる」

僕の言葉に小田口さんが補足する。

「これは相手がもう一度電話して来ないことには始まらないので待つしかありませんね」

「他には？」

由希が全く同じトーンで聞く。

こいつ真面目に考えてんのか？

ちよつとムカついた。

「・・・お寺に行ってお祓いを受ける」

「他に・・・ち、ちよつとお！？」

由希が慌てる。面白い。

「南無妙法れ・・・」

「わあゝっ！ストップ！ストップ！ストオップ！」

「冗談だよ」

「タチ悪っ！今一瞬消えかけたよ！？」

「ドンマイ」

プチッて聞こえた。

「マジで呪い殺すよ？」

「わあっ、悪霊だ！悪霊退散！南無阿弥陀・・・」

「わあゝ！ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい！」

「もう、いつまでやってんスカ！さっさと聞き込み行きますよ！」

「「え？行くの明日じゃないの？」」

僕と由希の声がハモった。

「あんだねえ、従業員の命は安心出来ないから早急に何とかしないといけないつつたのは自分でしようが！」

「ははは。そうでしたね。チッ、要らんこと言っちゃったな（ボソッ）」

「なんか言いました？」

「いえ何も」

「そうですか？」

小田口さんは如何わしそうに僕を一瞥すると、何も言わずに缶コーヒーをゴミ箱に放り込むと

「じゃあ俺は車表に回してくるんでお二方は玄関で待っててくださいい」

と言って待合室を出ていった。

・・・そういえば黒田警部の車の鍵、小田口さんに預けっぱなしだったな。

危うく忘れるとこだった。

「えゝ、休んでから行こうよ」

「僕も休みたいのは山々だが自分で言ったことだからな。てかお前疲れないだろ」

「じゃあご飯食べてからにしようよ」

「お前腹空かねえだろ」

「・・・幽霊つてつまらないねえ」

「言つな。言つたらなんか重くなるだろ。空気が」

「ご託を抜きにするとめんどくさいんだよね」

「あ、そ」

「行きたくない」

「一緒に来なさい」

「行きたくない」

「・・・」

「行きたくない」

「南無」

「行きます！行きますよ！行けばいいんですよ！もういいよ！ゆー君なんか死神に呪い殺されちゃえ！」

由希を引きずって玄関に向かう。なんか相当怒ってるようだ。

しかし、玄関に向かう途中、『ラルゴ』のケーキ買ってきてやるからっていったら一発で機嫌が治った。

ラルゴってのはちまたで評判のケーキ屋で、なかなか安いのに相当美味い。

それはそうと、ああ、こいつなんて単純なんだろうって僕は思ってしまったわけで。

玄関では小田口さんがもう車に乗って待っていた。

「遅いッスよ。なにやってたんですか？」

また怒られた。

「さ、時間がありません。行きましょう」

車は勢い良く発車・・・しなかった。

「あれえ？さつきから調子悪いんですよえ、この車」

おいおいオイオイ。調子が悪いダツテ？

脅迫同然に車を持ち出した挙げ句、壊しちまったらいくらなんでも黒田さんはキれる。僕の全額補償は免れないだろう。

マズイなあ。ああマズイ。

「そついえばさあ」

由希が口を開いた。

小田口さんはエンジンをガチャガチャかけようとしている。

「ゆー君なんであんなにヤクザとかに詳しかったの？」

「え？」

「あ、それ俺も気になりました」

小田口さんが手を止めて口を挟んだ。

「ああ、それはね」

僕には組長やつてる友達がいてね。彼によくヤクザの情勢とか聞くからだよ。

・・・なんて言えるはずがない。

「研修時代、世話になったマル暴（暴力団担当の刑事）の人がいてね。その人から聞いたんだ」

僕は即座に嘘を考え、顔色一つ変えず嘘をつきとおすという特技を持っている。・・・褒められた特技ではないが。

「そうだったんですか」

小田口さんはまた作業を始めた。

僕は何となく奴の事を思い出した。

奴は中学時代の友人だった。

成績優秀。

スポーツ万能。

前途有望。

ただ如何せん変わりすぎていた。

奴は中学を卒業すると渡米し、訓練を受けて米軍多国籍部隊へ。そこで大活躍。

『侍の国から来たワンダーボーイ』という異名までつけられるが、富を得ると即座に退役して帰国。その時19歳。しばらくぶらぶらしていたらしいが、親戚の野沢組組長が急死してから後釜に収まる。その後、組の大改革を始めて、小さな組だったのが最近は勢力をグツと伸ばし始めた新興勢力となっているそうだ。

今は勢力を伸ばすのに都合のいい、あまり強い勢力がない名古屋に本拠をおいているらしい。

相手がヤクザがらみなら協力してもらうこともあるかもしれないな。

「な・・・おつたあ！」

カチツと鍵を回すとブォンとエンジンが動く。

「よし！出発！」

元気よく小田口さんが声を出す。

後ろにはめんどくさそううな顔をした由希。

なんだこのギャップは。

まあ僕はというと車が動いたことに安心して一心に『神よありがとう』と神に祈っていたので人のことはいえないが。

そんなこんなで車は事務所へと向かう。

とりあえず事件解決の第一歩を踏み出した感触を僕は感じていた。

（裏コーナー）

西岡 わーい、広いぜ！

敦司 ふう、これでのびのびできるな。前はかなり無茶な終わり方だったからなあ。ったく、締める方の身にもなってくれ

西岡 ま、司会進行、そしてなんといっても主役なんですから。義務ってやつだな。ま、そんなくらの苦勞はしてもいいんじゃないの？

敦司 主役、か。そういえば僕って主役だよな？

西岡 …… 変なこと言うね、君は。あらずじ見てみ？主人公は鳳敦司って書いてあるぜ？

敦司 うーん、そりやそうなんだけどさ、最近僕出てないじゃん？
いつの間にか主人公交代とか……

西岡 無いだろ。……多分

敦司 無い、よなあ……？

西岡 まあ俺はさあ、俺の出番が増えりやそれでいいんだけど

敦司 おいおい、親友らしからぬ発言だな。僕ら中学の頃は一緒に・
・

西岡 ストップ！ストップ！これ以上言ったら本編に関わる！

敦司 あ、ゴメンゴメン

西岡 まったく、本編に関わらない無駄トークっていうコンセプト
崩しちゃマズイだろお！

敦司 いやあ、悪かった、つと。じゃ、そろそろ締めますか

西岡 え、終わり？

敦司 うん

西岡 なんかいいい加減な……

敦司 いいか、西岡。僕らの使命は『適当にトークすること』だ。
だから、適当に終わらせてもなんら問題は無いんだよ

西岡 …… なんだかなあ。それはそうと、次回はゲストが来るらしいぞ。楽しみだな！

敦司 めんどつちな

西岡 ……

敦司 じゃ、そういうわけで次回もよろしくお願いします。ではさ
よーならー

(……矢嶋編、まだ終わんないのかな……。)

15話 矢嶋編 待合室の捜査会議（後書き）

はい。なんで更新にこんな時間がかつたんでしょう。・・・忙しいんですかねえやっぱり。次からも引き続きやれ大会やれ学園祭やれテストですごぶる忙しいです。まあ・・・多少更新遅れるのはご容赦下さい。

16話 矢嶋編 幽霊を前にやプライバシーもクソもない(前書き)

一期目矢嶋編ラスト前です。思ったより長くなったなあと思う今日この頃。 なお、人物紹介二回はあとがきに回しました。よかったですご覧ください

16話 矢嶋編 幽霊を前にやプライバシーもクソもない

6月21日 土曜日

「・・・というわけなんだ」

「なるほど。分かった。確かに依頼人の存在は気になる所だ。それに、従業員のことは盲点だった。危険が及んでいるとしたら、早急に対処せねばならんだろう」

車の中。

日付が変わった深夜の道はさすがに車の通りが減り、ようやく車がスムーズに進むようになった。

僕は幸兄にさつき皆で考えたことを話していた。

幸兄が堅苦しい真面目な話し方をしている所を察するに、誰かが近くにいるに違いない。

ボロが出るのを恐れてか、そそくさと電話を切ってしまった。ち、つまらない。

「誰と電話してたんですか？」

運転席から首をこちらに向けて、小田口さんが尋ねた。

「井原のダンナです」

「井原さんかあ。最近話してないな」

後ろの由希が口を挟んだ。由希も井原さんとは付き合いがある。もっぱら美緒ちゃんの遊び相手だが。

「部長の井原さん・・・なんて言っていました？」

「別に特には」

なんせすぐ切られたからからかう暇もなかったし。

僕は幸兄をからかえなかった欲求不満を小田口さんをいじることです晴らすことにした。

「それより小田口さん、意気揚々と飛び出てきましたが、何するんですか？今は深夜です。やれることは限られていますよ？」

「うう、確かに」

「しかもこれっていわばフライングでしょう？明日調べるっていった事務所の周りを調べるんですから。マズイと思うなあ。僕らみたいな若い組が他を差し置いて。頭ガツチガチのオヤジ共がキレますよ？」

「え」

小田口さんの顔がサツと青ざめる。

「怖いですよあ、怒らせると。面目潰しちゃったわけですから、恐ろしいほど辺境の地へ左遷という名の島流しとか・・・」

「そんなあ・・・なーんて、言うと思いましたか？矢嶋さん」
「へ？」

思わぬ小田口さんの言葉に僕は間の抜けた声を出した。

小田口さんは不敵に笑っている。

「いいツスか？あなた方のせいでキャラ変わってしまいました、俺はもともと、東玉川署の問題児なんです。頭の固いオヤジが怒る？そんな人にはとくに嫌われてるんツスよ、僕はね。もうあの連中に何回ハゲだの波平だのクリリンだの言ったか分かりません」

「ムウ・・・」

小田口さん、それはそんな胸張って言うことではない。
でも言い返せない。

そういえばそうだった。小田口さんはそもそも捜査初日に遅刻するほどの問題児だ。

最近の母性（？）溢れる小田口さんのためかすっかり忘れていた。

「誰がそうさせたんですか、誰が」

「う、僕です。ごめんなさい。・・・ってか、小田口さん、地の文を読まないで下さい」

「あっはっは、ゆー君、やられたねえ」

他人事のように後ろから笑う由希。

「お前も責任半分持つてるだろうが」

由希は僕と目を合わせずに後ろにひっこんだ。
にやろっ。

「・・・とにかく、そんな脅しは無用です。てなわけで、張り切つて例の事務所へゴー！」

「・・・どうでもいいけどテンション高いですね、小田口さん」

「ハッハッハ、そりゃあいつもいじられてる宿敵矢嶋祐一を言い負かしたんですからね！テンション上がりますよ！」

「・・・」

なぜだろう。ヒジョーに悔しい。

「さあレッツゴー！」

僕の気持ちとは裏腹に、黒田さんの車はエンジン全開で突っ走った。
・・・速度違反。

アクセル全開、小田口さんのテンション全開で事務所まできた僕たちだったが、事務所前で持ち手無沙汰にせざるを得なかった。

『やることは限られてる』とは僕がさっき言ったが、事務所の自動ドアには鍵がかかっており、聞き込みするにも、深夜の事務所前通りの人通りは、無いと言つてもいいほど少なく、たまに来る人も、職質かけた方がいいような不審者である。

ようは、裏通り。

もう少し奥に行ったら、麻薬の販売くらい行われているかもしれない。

その不審者にもとりあえず聞き込みしてみたが、当然探偵事務所など知りはしなかった。というわけで、僕らの事務所前での聞き込みは早くも頓挫してしまっただけだ。

「こんな場所に事務所構えて、真つ当な探偵では無かったんですかね」

小田口さんは呟いた。

「まだそうとも言いきれませんがね」

「ねえ、ねえ」

「なんだよ」

僕は由希の方を向いた。

「事務所、入ってみようか」

「事務所？事務所に鍵かかっているからこうして聞き込みしかできないんじゃないか・・・って、あ」

忘れてた。こいつは鍵のかかっている所には入れないという一般認識は通用しない。

もうスラスカだ。プライバシーもクソもあつたもんじゃない。

「で、さあ」

由希はニヤニヤ笑いを始めた。

こいつがニヤニヤ笑いをする時は・・・。

「・・・いくら？」

「分かっているう！ラルゴのケーキ3000円分で手を打つよ」

「3000円!？」

ふう、1万とか言われなくてよかった。と、僕は驚きながらも内心胸を撫で下ろした。

「・・・分かったよ」

「えへへ、交渉成立！」

「あ、そうだ。どうせなら入ってから鍵内側から開けてきてくれなにか？そうしたら僕らも調べられる」

「ん、分かった」

由希は事務所の壁へ文字通り突っ込んで消えた。

が、すぐに戻ってくる。

「ダメ。自動ドア開かない」

「へ？電源入れりゃいいじゃないか」

「でも、どこが電源か分からないんだよ。この辺り街灯もないし、真っ暗過ぎて部屋の中よく分からないんの」

参ったな・・・。

やっぱりそう上手くいくようには出来ていないか。

「仕方ない。お前が探して、何かしらの手がかりをここまで持ってきてくれ」

「何かしらの手がかりって何さあ」

「それが分かっていたら何かしらの手がかりなんて言わない」

「う、確かに・・・」

「頼むぞ。お前だけが頼りだ」

「うっ、そんな時ばっか・・・自信、無いからね」

そう言つて由希は消えていった。

「見つかりますかね」

小田口さんが呟く。

「さあ。こればかりは何とも」

そもそも、探偵殺した奴らにすでに手がかりは持ち去られているかもしれないのだ。

それに加えて、探すのはあのそそっかしい由希。

これでは見つかるものも見つからない。

「そっいえば矢嶋さん」

「はい？」

「ラルゴとやらのケーキっていくらくらいするんですか？高級スイツって感じとか？」

小田口さんが尋ねた。

「いや、そんな高くないですよ。1つ300円から500円ってトコですか」

「あー、普通ですね」

「ええ、リーズナブルで美味い。ラルゴのいいところです」

「・・・でも、300円ってことは、あの子1人でケーキ10個近く平らげるつもりなんですか？」

「つもりなんです。にやろう、幽霊だから腹膨れないんですよ」

「じゃあ食べ始めたらキリがないですね」

「そうなのだ。奴にケーキを食べさせたら、例え10個の約束でも収拾がつかなくなる。」

もう1個、もう1個と連呼し、邪魔するとパンチが飛んでくる。

だからといって痛いのは嫌だから好きに食わせとく、というわけにもいかない。ほっといたら1日で自己破産の憂き目に逢うだろう。いや、大袈裟でなく。

僕はこれから起こるであろう修羅場を想像し、ため息をついた。

「あ、来ました」

それから10分くらい経って、由希はふわふわこっちに飛んできた。白い紙を抱えて。

「や、諸君」

「何かあったか？」

「うん。・・・というより、何が何か分からなかったから机の中の書類、手当たり次第に持ってきた」

「手当たり次第？」

「はは。これ全部領収書の束とか言わないよな。ちよつと不安になる。」

「あ、でも重要な物もあるはずだよ。このクリアファイルは、鍵のかかった引き出しから持ってきたからね」

「本当か！」

「うん」

僕は由希が手渡したクリアファイルを開いた。

「・・・ビンゴ」

「「え？」」

由希と小田口さんが同時に聞き返す。

「ビンゴだ！でかした由希！小田口さんこれは調査の記録です！」
「調査？」

「ええ。この探偵、結構危ないヤマを追ってたようですね」

「危ないヤマ？」

「咲元組の若頭筆頭が、組長の座を狙って組に反旗を翻すという噂を追っていたようです」

「えっ！そりや大事だ」

「咲元組？」

由希が首を傾げた。

死ぬまでは普通の高校生だった由希がこの辺を縄張りになっている暴力団を知ってるはずはない。

咲元組とは関東蓮武会と並ぶ関東1、2の大型暴力団だ。

僕が説明したら、由希は大声で

「そうか！」

と叫んだ。

「決まりだよ。その咲何とか組の若頭？が犯人だね。きっと探偵にチクられるのを防いだんだ」

「俺もそう思います」

小田口さんが由希の言葉を肯定する。

重要な手がかり発見。めでたしめでたし。

と、言いたいところだが、僕には気になる点があった。

「・・・まあ、普通に考えればそうなんですがね」

おかしい所はある。

それはこの調査記録の存在そのものだ。

「何か問題でもあるツスカ？矢嶋さん」

「・・・犯人は、なぜこの資料を奪っていかなかったのでしょうか？」

「これを？」

「ええ。探偵を殺してまで隠したかったこの事実、この資料がこ

ここにあることで警察の調べで白日のもとに晒されます。これでは探偵を殺すだけ損というものです」

「調査記録があることに気付かなかったのでは？」

「・・・その可能性は否定できません。ただ、咲元組の若頭ともあるう者が、そんなことにも気付かないのでしょうか？」

「うーん・・・なら、鍵が閉まっていたから回収をまたの機会に見送った、とか」

「小田口さん、人1人殺した奴がそんな律儀なわけがありません。回収したいのなら自動ドアをぶっ壊せばいい。鍵が欲しいのなら管理人から奪えばいい」

「うーん、確かに。なら、矢嶋さんはどう考えているんで？」

「さあ、それはなんとも。さっき小田口さんが言ったようにそこまです頭が回らなかっただけかもしれないし、僕の考えすぎなだけかもしれない」

調査記録がここにあるという点。僕はそれに対する不自然な点を指摘したわけだが、それが示す意味が僕にはまだ分からなかった。

・・・何にしても情報が足りない。

今回の事件はやっぱりヤクザ関連が関わっているようだ。

僕はそれについての知識があまりない。

調べるとするか。

この辺りのヤクザ情報や咲元組の内情に詳しくそうな人物、か。

僕の頭には2人の男の顔が浮かんでいた。

1人は即除外する。

いくら幼なじみとはいえ、ヤクザの組長に話を聞きに行くのは気が引ける。できれば、彼に話を聞くのは最後の手段にしたい。

まあ、何にしても今は深夜。話を聞くにしても明日だろう。

「そうだ由希、助手の人はいたか？」

「人はとりあえず誰もいなかった。助手の机とかはあったのかもしれないけど・・・ゴメン、暗くてよく分からなかった」

助手が拉致られてるかはまだ分からない、か。

これも明日、ビルの管理人やタレコミの電話の男に聞くしかないな。さて、大体ここでやれることは終わっただろうか。

「じゃあ由希ちゃん、それ元あった場所にお片付けしてきてね」

「へ？」

「いーから」

「うう、暗いの苦手なんだよね」

そんなこと言いながら由希はまた姿を消した。

幽霊が暗いの怖がつてどうするんだらう。

「せっかくの手がかり返しちゃうんですか？」

「ええ」

僕は頷いた。

「僕らがあの資料を持つてる理由が説明できません。鍵のかかった部屋に鍵も借りずに入り込み、証拠だけかつぱらったとなれば、弁解が面倒です。泥棒への転職を勧められちゃいますよ」

「まさか幽霊が・・・なんて言うわけにもいきませんしね」

「そういうことです。ただ、今得た情報だけは捜査本部に流したいと思います。そうしないと苦労した意味も、ラルゴのケーキ代の意味もありませんからね」

「信じますか？入手先も明かせない情報を」

「うーん、本部長が幸兄でなければ信じないでしょうね」

僕はそう言つて笑つと、携帯を取り出した。

相手はもちろん幸兄。

暇だったのだろうか。幸兄は電話にすぐに出た。

「よ、幸兄。元気か？」

「・・・元気じゃない」

お、不機嫌な声。

「どうしたの？美緒ちゃんに彼女でもできた？」

「違う！・・・拳銃携帯命令の件でな」

「ダメだつて？」

「ああ。あのクソ共、人の命より自分の責任逃れのが大事らしい」

「ははは、そんなもんさ。上に立つ人つてのは」

父も祖父も、決してクリーンな人とは言えなかったしね。

「笑い事じゃない。何が刑事が発砲して民間人に当たったらどうする、だ。そうならないように訓練してきたんだろぅが」

幸兄は珍しく愚痴り始めた。

某女刑事と酒を飲むといつも愚痴られるので、別に幸兄の愚痴を聞くのは苦ではなかったが、これでは話が進まない。そして電話代もバカにならない。さっさと本題に移ろぅ。

「ところで幸兄、報告したいことがある」

「・・・そっぴゃお前も用があつて俺に電話したんだつたな。なんだ？」

僕は調査記録について入手の経過から自分の見解まですべてを語った。

加えて言つておくと、前述べたように由希と幸兄は顔見知りなので鍵のかかった部屋に侵入したくんだりも報告しておいた。

「おい今すぐその資料元あつた場所に戻せ」

報告を聞いた第一声である。

「もう由希に戻しに行かせたよ」

僕は苦笑しながら言った。報告に関する感想が欲しいのだが。

「・・・不自然な点はある。しかし、それしか証拠が無い以上、その咲元組若頭は重要参考人になるだろう」

「なるほど」

「このまますんなり解決すればいいんだが」

「何？今度の美緒ちゃんのピアノの演奏会に間に合わない？」

「ああそっうだ・・・ってコラなんで知つてる」

「あつはつは、企業秘密だね」

真相を言つと、僕は美緒ちゃんとメールのやり取りをしているのだつた。

心配だからって10歳の娘に携帯持たせるからそうなる。僕というタチの悪い虫が引つ付いたわけである。いやはや全く。

「じゃあね、また連絡する」

「おいコラ話はまだ終わって」

ピッ

慌てる幸兄の声を聞きつつ、僕は通話の終了ボタンを押した。
うーん、ガチャ切りつて楽しい。・・・こっちがする分には。

もう由希は戻ってきていた。2人共僕の電話が終わるのを待っていたようだ。

「ゴメン、待たせたね」

「相変わらず好きだねえ。井原さんいじり」

「まあな。これはもう反射だ。幸兄と話すといつの間にかおちよくつてる」

「・・・可哀想な井原さん」

「だな」

僕はヘラヘラと笑った。

反省はしてない。

「で、これからどうするツスか？」

小田口さんが尋ねる。

ふむ。今できることはもうないように思える。

・・・そういえば眠い。昨日から一睡もしていなかった。

「小田口さん、帰って寝ま」

「ねえねえ、ひよっとして時間空いた？」

由希が嬉々として割り込んでくる。

う、嫌な予感。

「・・・ああ」

流そうかなとも思ったが、こいつも捜査に協力してくれたわけなので、眠いからと無下にはできない。

「ホント？だったらさあ・・・」

僕はその先に続く言葉を予想してため息をついた。

（裏コーナー）

西岡 はい、今回も始めました裏コーナーのお時間でございます！本編もヤクザだの何だのが関わってきて物騒になってきましたねえ！

敦司 ……おいおい、テンション高いな西岡

西岡 お前こそテンション低いんだよ！ さあ今日は記念すべきゲスト初来場の回！一体誰が来るのか！ヒジョーに楽しみです

敦司 ぶっちゃけた所誰なの？ゲスト

西岡 え、知らないってばさ

敦司 なんだ、お前がそんなにテンション高いからてつきり美人さんでも来るのかと思ったよ

西岡 来んのか！？美人さん来んのか！？

敦司 知らないっちゅーに。・・・てかいつまで僕らだけで話してんだ？さつさとゲスト呼ばーぜ

西岡 おう、そうだな。じゃあゲストさん、どうぞ！

おばさん　ぬうすんだバイクで走り出す

西岡　はい。えーっと・・・

敦司　どうした？待ちかねたゲストだぞ？しかも女性の

西岡　まあ女性にはかわりないが・・・

敦司　が？

西岡　俺は『美人さん』と言った

おばさん　失礼だね！それでも昔はブイブイ言わせてたんだよ！
イケイケガールズ

威氣威氣俄亜廬図』初代女番長とは何を隠そうこのおばちゃん・・・

西岡　え。このおばさんが女番長・・・

敦司　人は見かけじゃわからないの典型例だな。さて、ここまで話が進んで忘れちゃってる人もいるかもしれないので・・・

西岡　更新も遅いしな

敦司　一応紹介しておきます。僕が遺伝子研究所でぶっ倒れた時、介抱してくれたおばさんです

おばさん　ちなみに好きな物は尾崎豊の曲、好きな人は尾崎豊！昔ヤンチャしてました！夜露死苦う！

西岡　・・・

敦司　どうした？

西岡　なあ敦司よ。今回、記念すべき一人目のゲストを呼ぶつてこ
とで、俺は無理矢理にもテンションを上げて、がんばってきた

敦司　うん。偉い偉い

西岡　そしてその結果がこれか？・・・いやこの際美人さんじゃないか。でも、この人・・・

敦司　・・・

おばさん　・・・

西岡　何かしたか？

敦司　・・・

おばさん　・・・

西岡　お前を介抱して尾崎豊トークしてはいおしまいじゃねーか！何？記念すべき一人目にはもつとこう・・・ストーリー上重要な役どころの人を連れてくるんじゃないの？

敦司　西岡・・・

西岡　なんだよ

敦司　お前は知らなかったかもしれないが、このコーナーは使い捨てキャラの救済所でもあるんだ

西岡　な、な、な、な、な、な、なんだってえええええっ！

敦司　知らなかったか

西岡　聞いてねーよ・・・なんだ、じゃあ俺らの役割は・・・

敦司　そう。哀れな使い捨てキャラを目立つように仕向けることだ
おばさん　ちよっと！そう思ってるならおばさんにも話させなさいよ！

西岡　・・・よし、決めた。今回からこのコーナーのタイトルは『裏コーナー』使い捨てキャラたちの墓場』で決まりだ

敦司　い、いやいや。何も使い捨てキャラだけしか来ないコーナーじゃないからね？

西岡　え、そうなの？じゃあもういいから次行こうぜ次。さあ次のゲストは誰かなあ。美人さん来るかなあ・・・

おばさん　・・・そうかい。あんたたちアタシに喋らせる気はないということかい。ならおばさん歌っちゃうよ！

西岡　ほら何やってんだ敦司！そうと決まったらさっさとこのコーナー終わらせろ！

敦司 いやあ、それはさすがに・・・おばさんが可哀想だろ

西岡 早くしろ！早くしないとこのおばさん尾崎豊の曲歌い出して
版權問題やらなんやらでこの小説終わるぞ！

敦司 え！

おばさん 歌います！聞いて下さい・・・氣 團のわんないとかー
にばる（片言）！

敦司・西岡 尾崎豊じゃないんかいいいいッ！

チャララララッラッラッラッ

おばさん 俺んとこ来ないか？

チャンチャンチャンチャンチャラララン

おばさん アフォーッ！

敦司・・・似合わねえ

西岡 早く終わらせよう。このままだとおばさんフィーバーし過ぎ
て死ぬぞ？

敦司・・・だな

西岡 それでは皆さん！

敦司 また次回！

おばさん わんないとかーにばる胸の奥・・・って待てやコルア
アアアッ！

了

16話 矢嶋編 幽霊を前にやプライバシーもクソもない（後書き）

人物紹介No.002 西岡 研

にしおかあきら

県立智林高校

三年生。実家はすごい財閥。ムードメーカー兼トラブルメーカー。剣道部で、最後の県大会では優勝者の倉本と当たり、破れた。お調子者で女好き。ルックスはいいのでモテるが、行動に問題有りなので敬遠する女子も多い。そっち方面では、敦司をライバル視している。敦司の彼女ができない事情を知っており、最近彼女がいない敦司をからかって遊んでいる。一応友情には厚い。隠しているが実はかなりの怖がりで、オカルトその他云々聞くだけで拒否反応が起る。

17話 矢嶋編 疑惑とケーキと手がかりと（前書き）

人物紹介No.003 矢嶋祐一 今のところ第2の主人公。20歳。人をおちよくるのが大好きなキャリア警察官。実はとてもないエリート。祖父は元警察庁長官、父は警視總監。由希に憑かれたのち、高校を中退し父のツテでアメリカへ。アメリカの某有名大学を2年足らずで卒業、帰国し公務員1科の試験を受け、現在にいたる。おちよくりは好きだが、時と場合をわきまえる分別はもっており、よく被害者となる井原にも周りに彼の部下がいるときには自重している。・・・その反動でその後のおちよくりは酷くなるらしい。

17話 矢嶋編 疑惑とケーキと手がかりと

夜が明けて。

僕らはケーキと紅茶がうまい、喫茶店兼ケーキ屋『ラルゴ』で一息ついていた。夜までぶっ通しで続いた捜査のせいで、体はガタガタだ。その疲れを、ほのかに甘く香り立つアップルティーが癒してくれる。

僕はフランスの貴族さながらに、ティーの香りを楽しみつつカップをゆっくりと口に運ぶ。

僕は優雅なひとときを過ごしていた。

「すみませーん！ショートケーキとショコラ、2個ずつ追加！」
優雅な・・・ひとときを・・・。

「由希さん、そんなに食ってホントに大丈夫なんですか？」

「ん、大丈夫大丈夫！なんてったってほら、幽霊だし、わたし」

「・・・いや、俺がいたいのはそういうことじゃなくて」

小田口さんがこちらをチラリと見る。

「お金、大丈夫なんですか？」

「ん、大丈夫大丈夫！」

「大丈夫なわけあるかいっ！」

僕はツツコむ。

「だってゆー君、あれでしょ？お偉いさんでしょ？警察の」

「違う！ただの警部補！お偉いさんってのはせめて幸兄くらいの人
のことを言うの！」

「なーんだ。ふふん、案外大したことないんだね、ゆー君も」

「・・・なぜだろう。今無性にこの目の前にやけヅラをはっ倒した
くなった。」「そ、そんなことよりほら。会計！早くしないと値
段がタイヘンなことに」

僕の殺気を敏感に察知したのか、小田口さんが話題を変えようとする。

しかしその通りだ。

由希のやつ、3000円分の約束のはずが、あれよあれよという内にはるかにオーバーしている。

・・・怖くて伝票を見てないから今いくらかは分からないが。

僕の財布にはどこぞのセレブのようにたんまり札が入ってるわけではない。

早く止めないと僕の財布はあっさり全滅を迎えるだろう。

「あゝもう！ほら帰るぞ由希！」

僕はケーキを貪る由希の肩を掴む。

由希は最後のひとかけらをゴクンと飲み込んだ。

「あ、待って。じゃあショートとモンブラン3つずつお土産で」

プチッ

僕の中で何かが切れた。

「いい加減に・・・しろっ！」

スパアアアッ！

僕のハタキが由希の頭に炸裂した。

うーん、いい音。

いつまでもいい気分でいられるわけではない。ブレイクタイムを終え、捜査再開だ。

とはいっても、由希をひっぱたくことで生じたいいい気分は、その後数十秒後に伝票をカウンターに持っていた時には見事にぶっ壊れていたが。

当初の予定では野口さん3人に別れを告げるはずだったが、それに樋口さんが1人加わった。

ただのケーキ屋に8000円費やしてしまった僕って一体……。

僕は車に乗り、もう一度あの事務所に戻った。

出直したとはいえ、まだ早朝なので一番乗りには変わりなかった。

僕は1人事務所のあるビルに入る。

由希は後部座席で爆睡、小田口さんもさすがに眠かったようで、居眠り運転されてはたまらないので僕が運転を代わると、死んだように眠ってしまった。

おかげで黒田さんの愛車は、デリンジャーな爆走劇を繰り広げることとなったが、車内にそれに気付く者はいなかったようだ。

おっと、余計な話だった。さて、管理人さんに鍵借りに行きますかね。

「すみません」

管理人室に、初老の管理人さんが眠るように座っている。

「あ……はいなんです」

「警察のものです」

僕は警察手帳を見せる。

管理人さんは一瞬驚いたようだったが、恐る恐ると言ったように「……何か？」

と尋ねた。

僕はほどほどに事情を話し、鍵を貸してくれるよう頼んだ。

「ええ。それはいいんですが……」

「何か、あの事務所について知っていることでもあるのですか？」
「いえ、あの、実はですね・・・」

管理人さんの話によると。昨日昼過ぎ、車の停まる音がした。
黒のローレンロイス。

最初は、ああ、どこかのお客かな、と思ったそうだ。ところが、いつまで経ってもお客は入ってこない。変だな、と不審に思っていたら、不意に上の階からもみ合うような音が聞こえてきた。少しして静まる。

迷ったが、さすがに不安になり、上の様子を見に行くことにしたという。

しかし、探偵事務所を始め、上の階に異常は無かったため、あるいは気のせいだったかもしれないと思い直し、戻ってみるとローレンロイスは消えており、現在にいたる、と。

「ということは、あなたは不審な人物を見てはいないわけですね？」
「はい・・・」

ふむ、大体は分かった。しかしまだ不可解な部分がある。

「1つ聞きたいんですが、あなたはその車に乗った不審な人物を見ていないわけですか？」

「は、はい」

「・・・裏口とかあるんですか？」

「あ、あります・・・」

「では犯人は裏口から入った、と」

「は、はい。多分」

「あともう1つ。この事務所に、助手や従業員といった方はいましたか？」

「あ、え、その、いました。1人、若い女性の方が・・・」

やっぱり・・・。

従業員に危害が及んでいる可能性がますます高まってきたな。

「従業員の方の連絡先や住所、分かりますか？」

「わ、分かりませんよ！そんなの！」

裏返った声で管理人さんが叫んだ。

さっきから余りにも怪しい。怪しすぎて疑っていいのか不安になるほどだ。

しかしなにぶん情報が足りないので、管理人さんが何を隠してるのかは分からない。

「ひとまず、鍵を」

「あ、ああ、はい、どうぞ」

僕は鍵を受け取るとそのまま管理人室を後にした。
管理人。要マーク人物かもしれないな。

しばらくして。

僕は久しぶりに警視庁に戻ってきていた。

小田口さんと由希はあっちで捜査を続けている。

僕が戻ってきたのは、ある人物に会うためだった。

しかし。さすがに天下の警視庁。正面玄関でもやたら人が多くて待ち人を見つけれられるか分からない。

「やー！矢嶋さん。何か久しぶりですね」

後ろを振り返ると、永森さんが片手を挙げて立っていた。

なんだか機嫌がいい。

察するに、弟さんに慰労パーティーを開いてもらったからだろう。

「やあ、永森さん」

「どうしたんですか？こんな所で。玉川署の件はどうなりました？」

「あはは、鋭意調査中です。永森さんはどうして？もしかして捜査にでも行くんですか？」

「はは、ご存知の通りウチの部署はそんな殊勝じゃないですよ」

「そらそうか」

あははと笑う。

まったく警察官としてどうかと思う。・・・改める気もないけど。

「雑用ですよ。なんか美咲さん、今日も休みだね。おかげで仕事は一拳に僕に回ってくるっていう」

「へえ、珍しいですね」

僕の記憶では、美咲さんはいつも部屋でぐうたらはしてるものの、欠勤はなかなかしないはずだったが。

「悪いものでも食ったんですかね？」

永森さんがあははと笑いながら言う。

「まさか」

いくら美咲さんでも落ちてる物を拾って食ったり、賞味期限切れの牛乳飲んだりしてないだろう。・・・多分。

「風邪、だそうです」

「はあ。あの美咲さんがねえ」

もちろん、それが鳳敦司という1人の男子学生の呪いの成果だということを僕は知るよしもない。

「で、矢嶋さんは何を・・・？」

「・・・ちよつと待ち合わせをしているんですよ」

「待ち合わせ？」

「ええ、今回の件はやくざの連中が関わっているらしいので、その筋のエキスパートにちよつと話を聞きたくて」

「え、もしかしてそのエキスパートってー」

「ええ。『泣かしの元さん』です」

「うへえ」

永森さんが声を漏らす。

泣かしの元さん。やくざをも泣かせたという伝説からついたあだ名である。

マル暴、暴力団取締のベテランで、その筋の話には詳しい。

以前、元さんがやくざによって負傷させられた時、リハビリとして警察学校教官に回されたことがあった。その時生徒だったのが僕。

昨夜小田口さんと由希についた嘘はあながち全部偽りというわけはなかったということだ。

「はあ。あの人に会うなんて俺は嫌だな。あの人、好物は生肉って聞きましたよ？」

「い、いやいや。さすがにそんなことは」

「誰の好物が生肉だって？」

背筋を震え上がらせる低い声。

「げっ！」

「・・・永森。恩師捕まえて『げっ』とはご挨拶じゃねーか」

「ひっ！ごめんなさああい！」

永森さんは走ってどっか行ってしまった。

・・・永森さんも『泣かしの元さん』の生徒だったんだな。

「お前が俺を呼ぶとは珍しいな。何の用だ」

冷静に見ればそこまで怖い人ではないのだが、つい学校時代を思いだし、体が拒否反応を起こす。

あれは警察っていうより、軍隊だよ。うん。

「あ、立ち話もなんなので外の喫茶店ででも」

「いい。矢嶋、俺は別件のために本庁まで来て、そのついでにお前に話を聞かせてやるんだ。あまり時間は割けない」

「あ、そうですか」

うう、やっぱり怖い。

元さんは、階級こそ僕と同じ警部補だが、残念ながら纏うオーラが

違う。いやまったくもって。

「で、話はなんだ」

「あ、いえ、実は」

僕はかいつまんで事情を説明する。

「咲元組、か」

「ええ」

「・・・」

なぜか元さんは黙った。

「どうしました？」

「いや、咲元組か。うん、奴らが犯人ってんなら俺も納得ってところだ」

「それは、どういう？」

「手段を選ばない。自分に課せられた仕事のためなら利用できるものは全て利用し、使えるものは全て使う。邪魔なものは排除し、犠牲もいとわない・・・たとえそれが自分の命でも」

「・・・怖い、ですね」

「ああ、怖いよ」

真顔で元さんが言う。

「・・・あなたの顔もなかなか怖いですよ？とは間違っても言えない。だから、その若頭だったか？そいつには会ったことはないが、恐らくはそいつも・・・」

「人を殺すくらいなんとも思わない、ですか」

「ああ」

「でも変なんですよ」

「どうした」

「いえね、そんなに徹底的っぽい組織なら残さないはずの証拠が、現場に残ってるわけじゃないですか」

「・・・クリアファイルか」

「ええ。どうも僕はそこに違和感を感じるんですよ。ま、この調子じゃあその若頭が重要参考人となるのも時間の問題みたいです

が

「・・・」

「元さんの証言で容疑も強まったし」

「そうか」

「ええ、ありがとうございます」

「いや、別に構わん。・・・すまないが時間だ。俺は失礼する」

「あ、はい。お世話様です」

元さんは片手を挙げて僕の挨拶に応じると、廊下の奥へ消えていった。

僕もいつか、あんな刑事になれるのだろうか。

・・・無理っぽいな。

「・・・さてと」

用も済んだことだし、捜査に戻るか。

僕は幸兄への報告のため携帯を開きつつ、警視庁を後にするのだった。

僕は東玉川署の捜査本部にいた。

報告の電話もそこそこ、幸兄に呼び出されたのだ。

どうやら、今朝の内に例のタレコミ主から接触があったらしく、そこで捜査進行を話したところ、話にならないと言われたそうだ。

よって、今現在一番進んだ情報を持っていると思われる僕が、交渉役として抜擢された、というわけ。

・・・でも捜査している全ての捜査官からの情報を持っている幸兄でもダメだったのに、僕でなんとかできるものなのだろうか。ま、失敗したらその時はその時だ。

タレコミ主からまた電話すると言われた時間までもう間もなく。

僕らは緊張した面持ちで電話機を見つめていた。

ブルルルル

「きたっ」

誰かが叫ぶ。誘拐犯からの電話じゃないんだからそんな力まなくとも・・・。

「レコード、準備完了」

「こちらもOKです」

ずいぶん仰々しい。

僕は受話器を上げた。

「はい」

「・・・さつきと違う刑事だな」

低く少し掠れた男の声。

そんなに年ではないと思う。

「ええ。代わりました。矢嶋といいます」

「矢嶋さんか。俺は坂井だ。よろしくな」

くぐもった笑い声が響いた。

「で、ご用件は」

「何度も言ってますがね、警察の方は忘れっぽいんでしょうかねえ」

また笑い声。

神経を逆撫ですが、そんなことでいちいち怒ってられない。

「さつき交代したって言ったでしょ？悪いけど何聞きたいのか分か

らないんですよ」

敢えてとぼける。タレコミ主とより多く会話するためだ。

こいつには何か目的があるはずだ。怒って切ることはないだろう。

「・・・フン、まあいいか。警察の捜査状況を知りたいんだよ。警察が信用に足るか見極めたいからな」

「足りなかったら？」

「あんたに言う必要は無いね」

「そうですか」

話が途切れた。

僕は話を繋げるため、自分の得た情報をここでぶちまけることにした。

「さて、ではあなたのご要望通り、捜査の内容を話しましょう」

「フン、素直だな」

「まあ、こちらとしてもあなたの情報は欲しいですからね」

僕は今までの経過を話した。もう何人にも話しているので我ながらスムーズにまとまった。

「というわけで、今のところ咲元組の若頭が容疑者ですね」

「・・・あいつが咲元組の調査を？」

「違うんですか？」

「いや、俺は・・・なんでもない。あんた、矢嶋って言ったか？」

「はい」

「ちよっと、会って話したい。俺の情報もその時話す」

「いいですよ。場所は」

「渋谷駅前。フフ、ここはベターに八千公前といこうか。時間は夜9時」

「分かりました」

「何かあった時のために番号を教えてください」

「はい。×××です」

「控えた。じゃあな」

「あつ、ちよっと待って！」

僕はではと電話を切ろうとしたが思い直し、1つ尋ねることにした。
「あんたに話すことはない」

「待ってください！そちらばかり一方的に情報を得るのではフェアじゃないでしょう。そちらも少しはこちらの質問にも答えてください」

「俺の情報は会って話すと言っただろう」

「まずい。ここで聞けないと夜まで無駄に時間を費やすことになる。」

「急を要するんです！」

僕は必死に言った。

「・・・なんだ」

よかった。聞いてくれるらしい。

「あなた、例の探偵と親しいんですか」

「・・・飲み仲間だ」

「事務所にいる従業員について何か知ってますか」

「事務所・・・志保里ちゃんか？」

「志保里さんっていうんですか」

「ああ。水谷志保里だ」

「彼女の連絡先、分かりますか？」

「いやそこまでは・・・なんでだ？」

「彼女が危ないんです」

待合室で考えたことを坂井に話す。

「・・・志保里ちゃんが危ないのか」

「はい」

「搜してみる。その事についても後で話そう」

僕が返事をするまえに電話が切れた。

平静な声だったが、内心は焦っていたようだ。

「逆探知！公衆電話！渋谷方面です！」

「本当に会いに来てくれるんなら、逆探知する必要もないが」

幸兄が呟く。

「会いに来てくれますよ。なんか、志保里さんが危ないって聞いた

途端あの人慌てだしましたから」

幸兄に敬語とは変な感じた。まあ周りに人たくさんいるから仕方がない。

「そうか。そうだな」

幸兄は納得したように頷く。

「助手の名前が水谷志保里って分かっただけでも収穫です。我々はこれから彼女の保護を最優先に動きたいと思います」

「分かった。くれぐれも気を付けてくれ」

幸兄の言葉に、僕はにっこり敬礼で返した。

とは言ったものの、名前だけではどうしようも無かった。

僕は小田口さんと由希と3人で、事務所の辺りの地域の聞き込みに戻ったが、有力情報はほとんど得られなかった。

「・・・で、その人ホントに来るのお？」

由希が気だるそうに言った。

「らしいんだけどな。来るかどうかは分からない」

約束の時間10分前。僕ら3人は八チ公前に佇んでいた。

時間も時間なので、周りはカップルばかり。何やら気まずい。

「おーおーいいご身分なこと。ちくしょう、警察官になんかなんじやなかったぜ」

「まったくツスね。あーあ」

僕と小田口さんは下を向いてふてくされた。

「まーまー、ここにこーんなカワイユイ子がいるんだから、良しとしない？」

「・・・・・・・・」

僕と小田口さんのため息が交差した。

チャラララチャラ

陰鬱な気分には軽快なメロディ。

僕の携帯が鳴り出したのはそれから30分後、やはり来ないのだろうかと諦めかけてきた頃のことだった。

液晶を見ると見知らぬ番号。

架空請求や詐偽を警戒してる僕としてはいつもなら叩き切るが無視するところだが、今回は事情が違う。

僕はすぐさま出た。

「はい！」

「・・・・・・・・」

様子がおかしい。

水が流れる音が聞こえる。川か？

「坂井さん？」

「矢嶋・・・サン。志保里・・・助けて。あいつ、危ない」

「坂井さん？あなた一体・・・」

「木谷町・・・」

「え？」

「木谷町・・・だるまハイム206号・・・」

「坂井さん！？」

「頼む・・・志保里・・・このままじゃ殺される・・・拷問されて、殺される・・・」

「・・・」

「頼む・・・志保里、助け・・・て・・・」

「さ、坂井さん！？坂井さん！」

電話からはただ水の流れる音。

僕はすぐさま幸兄に連絡し、総員でだるまハイムへ向かった。

鍵が開けっ放しだった部屋に乗り込んだ僕は愕然とした。

もぬけの殻。

椅子と縄と志保里さんのものと思われる血液が残されていた。

助けられなかったのか・・・。

いや、まだだ。拷問ということは犯人は彼女から聞き出したいことがあるのだ。彼女が口を割らなければ、すぐに殺されるということはないはずだ。

拷問されて、殺される！

坂井の叫びが頭をよぎり、焦りばかりが募る。

夜空にはパトカーのサイレンの音ばかり響き渡っていた。

捜査隊がだるまハイムの裏の河原で携帯電話を握りしめた男の死体を発見したのはそれから1時間後のことだった。

（裏コーナー）

西岡 シリアスな気分をぶち壊す裏コーナー！

敦司 いいのかなあ、本編が緊迫しているのにこんなふざけモードで

西岡 いいんだよ！ ウザッ！って思った人は飛ばしてね

敦司 いいのかなあ

西岡 さてさて、今回のゲストは・・・

敦司 手元の資料によると、都合により顔にモザイク修正、あと音声修正を加えての登場らしい

西岡 なんだそれ！犯罪者？

敦司・・・まあ犯罪者と言えなくもないかな

西岡 おーっと！これは楽しみになってきた！それではゲストさん、どうぞ！

田中 田中太郎（仮名）と申します。某大手貿易会社に勤めております

西岡・・・えっと、誰？これ

敦司 これって言うな。彼を覚えてないとは。彼は3話から4話にかけて出てきた、ある種可哀想な酔っぱらいお騒がせ男だ。

西岡・・・一言、いいか？

敦司？

西岡 使い捨てキャラ救済にも限度つてもんがあんだろ！

敦司 まあまあ、なんか次回はレギュラーキャラ出るらしいからいいじゃないか。ちなみにそんな時僕は休暇をとる

西岡 なんて？

敦司 なんでも

西岡・・・まあいいや。じゃあ質問とかしろよ

敦司 分かった。えーと、田中さん

田中 はい

敦司 股間はまだ痛みますか？

西岡 いきなりそれかああ！

田中 かなり痛みます

西岡 あんたも真面目に答えなくていいから！

敦司 かわいそーに

西岡 全ての元凶が言うセリフか

敦司 いやいや、一見普通のあの女性が、まさか股間を蹴り上げるなんて誰が予想できようか

西岡 ……手元の資料によると、田中さんはこの一件で某病院のあまり大きな口では言えない科に長期通院となってしまうとか

敦司 かわいそーに

西岡 ……敦司くん、心込もってないとウザイだけだからやめようか

敦司 はい

西岡 ……

敦司 あと田中さん、やりすぎてすみませんでした

田中 いえとんでもありません。私も酔って己を見失ってまして……。ご迷惑をおかけしてすみませんでした

敦司 酔うといつもあなるんですか？

田中 いえ、いつもはそれほど……。ただあの時は会社で嫌なことがあつて悪酔いしてしまったのです

敦司 そうですか、よかった

田中 ？

敦司 いつもだったら世のため人のためにあなたを社会的に抹殺していました

（敦司、田中が美咲の体を触る瞬間の写真を取り出す）

田中 げっ！

西岡 お前……黒いな

敦司 まあな

田中 えっと、私はいくら払えば・・・

（田中、財布を取り出す）

敦司 そうですね・・・

西岡 いやいやいや！ユスリタカリは犯罪だから！

敦司 ちっ

西岡 そこ！舌打ちしない！

敦司 僕がツツコミ担当なんだけどな

西岡 だったらダークモードやめろ！

敦司 ハイハイ

西岡 では気を取り直して。田中さん、どんな嫌なことがあったんですか？

田中 いろいろです。派遣の女の子に笑われ、新入社員に無視され・・・

敦司 窓際族か

西岡 そんなはつきり言わんでも・・・

田中 いいんです。私、窓際族なんです

西岡 ま、まあ、良いことがありますって！

敦司 そうです。定年まで頑張ってください

西岡 ・・・

田中 そうか、定年までなんとか頑張れば・・・

西岡 納得！？

田中 分かりました。私、頑張れそうです

敦司 頑張ってください

田中 はい！ありがとうございます！

ボタン

西岡 いいのかなあ

敦司 いいんだよ

西岡 ・・・

敦司 ・・・？

西岡 グリーンだよ！って言えばよ

敦司 あーハイハイまあ僕次回休むからよろしく

西岡 スルー！？・・・何？誰来るの？

敦司 お前お待ちかねの美人さんだよ

西岡 え！

敦司 ついでに次回予告しとくと、今回は西岡編らしい

西岡 え！え！・・・よっしゃあ！こんな回やめやめ！早く次回

次回！

敦司 ・・・フツ、浮かれているのも今の内だがな（ボソリ）

今回少しダークモードな敦司くんなのであった。

17話 矢嶋編 疑惑とケーキと手がかりと（後書き）

二週間くらい空きましたか？（聞くな）まあテストやら大会やらいろいろありましたがようやく一段落つきそうです。・・・かといって小説のペースが上がるかというと、そうでもないような・・・。えー、今回で一期目矢嶋編はラストです。この後1つ西岡編を入れてから敦司編に戻ります。まあ西岡編はほぼおまけみたいなもんだから見なくてもさほど問題ないような気もしないのですが。

18話 西岡編 因果応報。悪いことをすると必ずしつぺ返しに逢う（前書き）

人物紹介 No.004 毒蝮 美咲 22歳。

警視庁捜査一課24班の紅一点。

だが、大の男を凌ぐ膂力と、酔った時のスーパーサイ 人並の戦闘力、愚痴や説教のトークマシンガンに泣いた男は数知れず。実は才媛で、キャリア、将来有望のエリートだったが、入庁1年目からのぶつちぎりの奇行のためか、早くも出世街道から遠ざかりつつある。恋愛などについてはまったく考えておらず、彼氏いない歴ウン年だ。がなんのその。日々楽しく愉快に、がモットーのある意味幸せな人である。

18話 西岡編 因果応報。悪いことをすると必ずしつぺ返しに逢う

6月22日 日曜日

気持ちいいくらい晴れた日曜日。

こんな日はパークとどこかに遊びに行きたい。

こんな日に予備校通いというのは、受験生の悲しき性というヤツだろう。

あーっあ、サボろっかなあ。

俺はのんびり空を見上げた。

俺の名前は西岡研。ケンではなくアキラ。

智林高校っていうまあまあいい高校の三年生。

昔は札付きのワルだったこともあったけど、ある人物の影響で更生した。・・・ハズだ。

家は西岡財閥ってけっこうスゴい財閥。

俺はそこのお坊っちゃんってワケ。

こんなルックスも良くて金持ちの男は他にいないよ？ねえ、そのスキミ。

・・・といつても、ハナから金目当ての人はキライなんだけど。

と、ここまですぐ空元気。最近彼女できてない気がする。一発逆転狙ったこの前の合コンだったけど、まさかあんなおかめ納豆が来るとは。唯一可愛かったミドリちゃんは、敦司とばっか話してたし。あー畜生！

あーあ、どっかにいい女落ちてねーかなあ・・・ってこれじゃあその辺のチンピラの思考じゃねーか。

と、そこに見覚えのある顔を見つけた。

「・・・敦司？」

敦司はフラリと俺の反対側の歩道を歩いている。

そのまま曲がった。

・・・あつちは予備校の方角じゃないぞ？なにやら様子がおかしい。

そついやあ敦司、金曜から様子変だったよなあ。

俺が話しかけても、どこか上の空でそつけない返事しかない。てつきり俺はあのおかめだらけの合コンを根に持って、シカトぶっこいてんかと思ってたけど、そうじゃなかったとしたら？

他の理由、つまり・・・

ミドリちゃんに恋の病！

あの2人あのあと付き合い出して、敦司は今日ミドリちゃんに会いに行くに違いない。

あの野郎、予備校サボって彼女とデートとは、いいご身分じゃねえか。

・・・ツケてやる。

俺はそう決めると敦司の曲がった路地へいそいそと向かった。え？予備校？そんなもんサボるに決まってるでしょーが。

敦司が向かった場所は駅だった。いつもの智林駅。

そついやあこの路線で最近人身事故があったんだっけ。

まあ通勤通学とあるから運休なんてことはないみたいだけど。

・・・おっと、敦司が切符を買う。

どこまで買ったかは分からないので、とりあえず適当に1枚買う。そして敦司を確認できる位置に乗り込んだ。

敦司は横浜で降りた。

俺もとりあえず横浜まで買っておいたのでビンゴ、というわけだ。
いやーさい先いいねえ。

・・・というか敦司め。横浜で降りるということはやはりデートか。
クックク。邪魔してやる。邪魔してやるぞあ。

敦司は出口には向かわないで、別の路線に乗り換えた。
ヤバッ。

俺は慌てて敦司の背中を追いかけた。

敦司が乗ったのはオレンジのアレだ。東海道線。
しかも東京とは逆方向。

・・・あいつ、デートってわけじゃないのか？
俺は今になってそう思った。

敦司は席を見つけるとヨイショと座った。

俺も座って一息つきたいところだが、そういうわけにもいかない。
ここで気付かれたら今までの苦労が水の泡・・・ってあれ？

俺はハタと気付いた。

デートじゃないと分かった今、敦司から姿を隠す意味があるのか？
・・・とはいってもそのままヤアと出ていくのもなあ。

妙案を思い付いた。

俺のイタズラ心に炎が灯る。

携帯を開くとゴホンと咳払い。設定で非通知に設定するのも忘れない。

突然だが俺には特技がある。特技というよりは生まれ持ったの性質、
と言った方が正しいが。

それとは、好きな声色を出すこと。

ゴツいやくざの凄んだ声からアニメのヒロインの声までなんでもこ

ざれた。

もともと、俺には声変わりというものがなかった。声膜が人と違うらしい。（状況としては、一時期アメイジング・グレース歌って評判になったちょっと太めの男性ソプラノ歌手を思い浮かべていただければ問題ないだろう）

小学校高学年の時は周りが次々声変わりしていくのをみて焦ったものだ。

そうして、低い声を意識的に出すようにしたのは中2の時。ワルブってのにハスキーボイスじゃ格好つかないからだ。というわけで、俺は今でも高い声は問題なく出る。

なんで俺がこんなこと言い出したかというと、携帯から変な声で電話し、敦司をビビらせるためだ。

さて、どんな声にしよう……。

そんな時、1つの都市伝説が浮かんた。

『メリーさん』である。

メリーさんを演じるためには、甲高い女の子の声を出せばいい。

あー。

あー。

こんな感じだろうか。

準備は万端。いくか。

ブルルルルル

・・・出ない。

まあ電車で非通知の電話がかかってきても普通出ないか。

よし、次の作戦を……。と、敦司が席を立った。

ん？こっちに来る？

まさか気付かれた！？

俺は慌てて隣にあったトイレに駆け込んだ。

「はい」

お。電話に出た。そうか、電話に出るために移動したのか。

「わたし、メリーさん」

「・・・は？」

「わたし、メリーさん。今、1号車にいるの」

「ち、ちよつと冗談はやめて」

「今からあなたに会いに行くわ」

プーップーップーッ

すかさずガチャ切り。

しばらく経ってからトイレから出てみる。

敦司は席に戻ったようだ。だがビビってる。さっきの電話からそう判断した。

隣の車両に移り、2回目の電話をする。

「・・・はい」

「わたし、メリーさん。今、2号車にいるの」

「おいしい加減に」

プーップーップーッ

おーおー。敦司のビビる様子がここからはよく見えるなあ。

俺はニヤニヤ笑いながらもう一度電話を開いた。

と、俺の携帯に着信。誰だろう？

見てみると、聡美だった。聡美は女友達で仲がいい。もう少しで付き合ってもらえるカモとかなんとか。

「なあに」

「ひっ！キヤアアアッ！」

プッ。プーップーッ

しまった。メリーさん声を出してしまった。
慌ててかけ直す。

「ごめんごめん。ちょっと事情があつて」

「もう！ホントびっくりしたんだけど！」

ご立腹。

「ごめんつて。そんなに怖かつた？」

「怖いっていうか・・・不気味」

「ふふ、そうか」

「どうしたの？嬉しそうに」

「いやなんでも」

そーかそーか。聡美が怖がるなら敦司に効き目は抜群だろう。聡美はオカルト系が大好きで、たまに友達を心霊スポットに誘ってるらしい。

俺も誘われたが断固拒否した。

べ、別に怖かつたわけじゃない。そーゆーところに興味本意で立ち入っちゃいけないっていうじいさんの遺言があっただけだ。

・・・じいさんまだピンピンしてるケド。

「で、予備校までサボって何やってるの？」

「素行調査」

「西岡くん、探偵始めたの？」

「まあ俺の俺による俺のための素行調査だ」

「何それ？」

聡美が笑う。

「あ、ごめん西岡くん。次の講義始まるから」

「おう。じゃーな」

ピッ

さて、もういっちょ。
敦司に電話を入れる。

「・・・」

「もしもし。わたし、メリーさん。今、3号車にいるの」

「待て」

「もうすぐ会えるわね」

ゴクリと息を飲む音が聞こえた。

プーップーップーッ

ギャハハハ。ビビってるビビってる。

敦司は携帯を持ったまま固まっている。

よしもういっちょ。

ん？

男の子がこつちをじっと見てる。

「お兄ちゃん」

「なあ・・・ゴホン。なあに？」

ついメリーさん声を出してしまったので修正して、俺は男の子に向き直った。

「お兄ちゃん、トナンなの？」

「へ？トナン？」

「お兄ちゃん、トナンみたいにいろんな声出せるの？ネクタイ型変声機持つてるの？」

「あ？えーと」

説明しよう。トナンとは子供に人気のアニメ、『名探偵トナン』の主人公である。・・・俺は見たことないけど。

「フッフッフ、お兄さんはトナンよりすごいぞ。なんてったって変声機が無くてもあるんな声出せるからなあ」

「ホント？すごい！」

ふっ、子供の尊敬の眼差しほどいいものはないな。

「じゃあお兄さん、トナンやって！」

「え」

だからトナンは分からないんだって！

「トナンは、ちよつと・・・」

「なんで？」

「え、あ、ほら。トナンを演じるにあたっているいろいろと著作権問題だの小難しい大人の事情が出てくるわけで」

俺は子供相手に何を言っているんだ？

「・・・つまんない」

案の定男の子は去っていった。

「・・・はあ」

思わずため息が出る。

よし、気を取り直して・・・。

ブルルル
ブルルル

「・・・止める」

「もしもし？今4号車よ？あと2つね」

と、クイクイと腕を引っ張られる。

なんだよ、今電話中・・・。又オオツ！？

さっきの男の子がいた。

去ったんじゃないかったのか、少年よ。

男の子は僕を見つめて口を開い・・・。

待て！居場所がバレたらどうする！

俺は慌てて左手を突きだし、制止した。

黙れ！黙ってくれ！

俺の必死の願いが通じたのか男の子は口を閉じた。
ホッ。

「待て！お前何者なんだ！」

敦司の必死の声。

「わたしはメリーさ」

「たろうちゃん！こんなところにいたのね！」

うおおい。

甲高い声が響き渡った。

見ると真っ赤なルージユに厚化粧のオバハンが男の子を叱っている。
叱るな！黙れ！

俺は慌てて物陰に姿を隠した。

敦司が声の方を向いたからだ。

「電話中の人に話しかけるなんて！あなた、本当にごめんなさいね」
オバハン！あんた言ってるそばから電話中の人に話しかけてんじやねええ！

・・・ああ。終わった。

これで誰かのイタズラだってことはすぐ分かる。
はあ・・・。

俺はしかし諦めきれず、もう一度電話をかけてみることにした。

プルルル

プルルル

出ない。

シカト決め込むつもりか。あーあ、やっぱりさっきのでバレたか。

あの厚化粧さえいなければ、全てうまくいったものを。

俺は電話を切った。

・・・予定外の事態。敦司がこっちに向かってきた。犯人探しでもするつもりかな、と最初は思ったがどうもそうではないらしい。

敦司の顔は怯えきっていた。

変だな。もしかしてバレてなかったのか？

俺は、思わぬ好機に小躍りしながらチャンスを待った。

俺はトイレのドアの前に立った敦司の後ろに立ち、コールした。

プルルル
プルルル

「もしもし。わたし、メリーさん。今、あなたの後ろにいるのよ」
ビクンと敦司の肩がはね上がった。

何やらぶつぶつ呟いている。

ふふふ、まあこれくらいで許してやるか。

俺は敦司の肩に手を伸ばし

「死にさせええッ」

叫んだかと思つた時には俺の腹に敦司の拳が突き刺さっていた。

「ーッ！」

声にならない悲鳴。

そして、俺の視界はブラックアウトした。

（裏コーナー）

西岡・・・

敦司 どうした？やけに静かだな今日は

西岡 いや。結局こういうオチなのねと思って。

敦司 まあまあ

西岡 フッフ、しかあし！今日のゲストは確か美人さんなんだよな！

敦司 そう。そして僕は帰る。じゃあな

?? 帰らせるかああつ

バキッ！

ラリアットが敦司に決まる。

敦司、白目を剥いて倒れる。

西岡 ゲツ

美咲 ふつ、決まったわね・・・

西岡 ごめんなさあい。俺も帰ってもいいスかあ

美咲 ラリアット喰らってみる？

西岡 いやいいです

美咲 じゃあ今日は飲み明かそお！

美咲、どこからかビールを取り出す

敦司 ちよつ・・・と・・・待て・・・ゲフツ

西岡 敦司い！死ぬなあ！死んだら終わりだあ！

敦司 悪い・・・僕はもうダメみたいだ・・・僕が死んだら、主人公を・・・

西岡 おう！主人公継いでやる！

敦司 ・・・永森に

西岡 なんで永森！？

敦司 ガクツ

美咲 いつまで続けてんの、飲むよホラ

敦司 ・・・ハイ

西岡 いやいやいや！ハイじゃないよ！

敦司 おおそうだ。美咲さん、使い捨てキャラ救済の場である裏コーナーを勝手に飲み会場にしないで下さい

美咲 知るかあ グビグビグビグビ・・・

敦司 ああ飲んじやった・・・僕は退避する。西岡一等兵、後は

頼む

美咲 逃がすかあ

バキッ！

敦司 グハアッ！

西岡 本日2発目のラリアット。・・・生きてるか敦司

敦司 ・・・まだまだあ

美咲 お。よく立ち上がったねえ。ハイ、ご褒美のビール

敦司 わーい、どーも・・・って僕未成年ですけど

美咲 気にしない気にしない。どーせこんなバカみたいな裏コー
ナーなんかみんな読み飛ばしてんだからバレないって

敦司 あんた警察官だよな！？

美咲 固いこと言わない。ホラ、西岡君を見なさい

敦司 え・・・西岡ア！

西岡 へ？

敦司 お前なに飲んでんのぉ！？

西岡 え・・・旨そうだったし

敦司 ウイー！アー！未成年！

西岡 だってお前、俺ら昔『ピーツ！』だったときは普通に飲んでたじゃん

敦司 注。今の音はこの馬鹿が本編に関わることを言ってしまったことによる修正効果音です

西岡 お前誰に向かって言ってるの？バカじゃね？

プチッ（血管と敦司の中の何かが切れる音）

敦司 ・・・せいやっ

バキッ

西岡 ぐぼお！？・・・うゝ・・・吐く・・・

西岡 トイレに駆け込む。

美咲 やー決まったねえ。ストレート

敦司 美咲さんの禁じ手急所蹴りほどじゃないです

美咲 あっはっは。あの人どうなったのかなあ

敦司 全治半年だそうですよ。この前会いましたから。・・・可

哀想に

美咲 あっはっは、悪いことしちゃったねえ。グビグビ

敦司 だからここ宴会場にするのやめて下さいってばあ

美咲 そんなこと言ってえ。だいたい男ってのはどういつもこいつ

も・・・

敦司 うわあ始まった恐怖の愚痴モード！

美咲 ちゃんと聞きなさい！まったく・・・グビッ！グビッ！

敦司 わーん助けてえ・・・

その後、部屋の明かりは朝まで消えなかったという・・・

18話 西岡編 因果応報。悪いことをすると必ずしつぺ返しに逢う（後書き）

はい、久々の更新。これ何度目のセリフでしょう。そして、この話書いて一言。これ意味あったのか？ 次回の話さえあればまったく問題ない気もしますが、まあ前回の裏コーナー、ノリで次は西岡パートだよなんて言っちゃったからしょうがない。自業自得。さて、次回からはお待ちかね（？）敦司君の視点からしばらく物語は進んでいきます。蛇足等多々あると思いますが、お付き合いいただけたら幸いです。

19話 メリーさん（前書き）

人物紹介 No.005 小田口猛 東玉川署の若き巡査部長。26歳。高卒、交番勤務からスタート。それなりに優秀で、成り上がりでここまで来たが、主に戸塚署長にハゲだのクリリンだの暴言を吐きまくったことがたたったのか、出世から遠ざかりつつある。当初は問題児キャラだったが矢嶋や由希のボケに圧され、半ば強制的にツツコミへの道を歩まざるを得なくなった可哀想なやつ。ヘビーではない程度のスモーカーで、タバコを吸うと彼の頭の回転は早くなるらしい。好きなものは肉。嫌いなものはナスとピーマン。・・・好き嫌いはちよつと子供っぽい。

19話　メリーさん

さて、久し振りの主人公、鳳敦司です。

皆さん今までの展開をお忘れの方もいらっしやるかと思いますが、ここでざっとあらすじを。

僕は受験競争真っ盛りの高校3年生。

日々勉強に励んでいた（ホントか？）とかいうツツコミは無しの方向で）。

学校の行事、職業体験の前日、西岡にバカみたいな合コンに連れて行かれたり、変な女刑事、美咲さんに絡まれてほとんど眠れなかったり、そのせいで寝坊した挙げ句到着直後にぶっ倒れ、尾崎豊フリークの元ヤンおばさんに看病してもらったりと色々あったが、最終的に、僕は体験の一環、DNA検査体験で、母親と血が繋がって無いことが分かったわけだ。・・・って、こうあっさり言えるようになるまでに随分かったが。

そしてその2日後。

本来なら予備校でひたすら勉強しているであろう日曜日の午前中。

僕は1人電車で揺られていた。

遺伝研から帰った後の僕は明らかに不自然だっただろう。

学校では授業もまったくといっていいほど頭に入らなかったし、家に帰ってからも、いきなり飛び込んだできた事実を頭で処理することができずつと上の空だった。

しかし、佐々井さんが詳しい検査結果を調べてくれるまで何もせずにボーツと待っているのも気が引ける。何かアクションを起こさなくてはならない。

そこで僕は閃いた。

ばあちゃん家行けばあちゃんに僕の出生について聞いてみよう。

でもって保管されてあるアルバムやら何やらも調べさせてもらおう。さらに。

ばあちゃん家行けば小遣いがもらえる！

紙のお金が財布から無くなって久しい僕には、この小遣いは魅力的過ぎる。

・・・おっと、不謹慎なことを考えていた。

下心が入ると大抵物事は失敗するというものだ。

そもそも、名古屋まで行つて帰ってくる金も馬鹿にならないのだ。

小遣いもらつても利益はいつもほど多い訳じゃない。

僕はそのために、今回半年振りに通帳を引き出しから取り出す羽目になったのだし。

というか、今回は遊びに行く訳じゃない。もつと重い理由で行くのだし。・・・でも、こういう馬鹿なことを考えてないとやっていけなかつたりする。

思い立つたら吉日ということで本当は土曜日に行きたかつたのだが、予備校をサボつて行かなくてはならないことを考えると、親がいない時に行かなくてはならない。

日曜は父は休日出勤、母は母親仲間と遠出のショッピングだそうで、絶好のチャンスが早くも到来。

そうして日曜、僕の隠密行動は始まつた。

新幹線で行くようなりツチな真似はもちろんできない。なので東海道線のんびり1人旅である。

席も確保できたので、順風満帆な船出だ。

まだ発車したばかりだが、ガタンガタンという単調なリズムが僕を眠りに誘う。うーん、良い景色。

建物がほとんどない田園地帯を列車が走る。

きっかけはどうあれ、こういうのもたまにはいいな。僕はゆっくりと目を閉じた。

ブブブブブ
ブブブブブ
ブブブブブ

眠りにつく寸前、電車に乗るのでマナーモードにしておいた僕の携帯が鳴った。なんだあ？人が寝ようとしてるのに。

ブブブブブ
ブブブブブ
ブブブブブ

バイブが鳴り続けている。電話か？

ディスプレイを見ると、非通知。

出ようか出まいか迷う。最初は無視しようかとも思ったが、バイブは鳴り続ける。これじゃ寝ようにも眠れない。

仕方ないな。

僕はバッグから財布と携帯を出すとバッグを席におき、席を守っておくと席を立った。

連結部の辺りでこっそり電話に出る。

僕はマナー違反は好きではないのだが。

「はい」

「わたし、メリーさん」

セールスか詐欺か。なんて思ってたら聞こえて来たのは女の子の声。しかも・・・メリーさん？

「・・・は？」

思わず声が出る。

「わたし、メリーさん。今、1号車にいるの」

背筋に寒いものが走る。

「ち、ちよつと冗談はやめて」

「今からあなたに会いに行くわ」

プツリ。プー。プー。プー。

「ちよつ、おい待て！」

僕の声も空しく携帯からは電子音しか聞こえない。

なんだってんだ？

これは明らかに都市伝説の一種である『メリーさん』の展開だ。いたずら？しかし誰の？

西岡の顔が一瞬浮かぶ。

やりそうなのはあいつだが、あれはどう考えても女の子の声だった。第一、あいつは今ごろ予備校でひたすら眠い講義を聞いているはずだ。しかし、そこでふと思いついた。

あいつの特技を。

あいつは声変わりしなかったからか、高い声も低い声も自在に操れる。アニメの女の子の声を出せるなら、メリーさんの声も出せるのではないか？

しかし、あの電話の主は、『今1両目にいる』って言った。

つまり、犯人は僕が電車に乗ってるって知ってる人。僕は今回隠密行動でここまで来た。親はもちろん、友人にも誰ももらしていない。僕が電車に乗ってるなんて知ってる訳がないんだ。なら可能性は2つ。本物のメリーさんがいる。もしくは偶然乗り合わせた僕の知り合いによるイタズラ。

メリーさんがいるなんて認める訳にはいかない。つまりこれは、タチの悪いイタズラだ。

ブブブブブ

まただ！

僕は電話にすぐに出た。

「・・・はい」

「わたし、メリーさん。今、2号車にいるの」
「おいしい加減に」

プツリ。プー。プー。プー。

・・・イタズラはやめろと言うこともできずに切られた。
チツ。と舌打ちをすると電話をしまう。

つたく、暇な奴め。んなイタズラしてる暇があつたら勉強でもしと
け！

いや、予備校サボった僕が言うセリフじゃないか。

イタズラだと分かった途端に僕は元気になる。

いや、やっぱ気味悪いですから。

小さい女の子の声っていうのが恐怖心をさらにそそる。

これがもし西岡のイタズラだったらはっ倒してやる。

ブブブブブ

「・・・」

「もしもし。わたし、メリーさん。今、3号車にいるの」

「待て」

「もうすぐ会えるわね」

ハッと息を飲んだ。

ブツリ。プー。プー。プー。

間違いない。犯人は近くにいる。なぜならもうすぐ会えると言った
から。

これは僕の居場所を特定してなきゃ言えないセリフだ。犯人は、近
くにいる。

・・・まあこれをイタズラと仮定しての話だが。

僕はサツと辺りを見回した。

怪しい人間はいない。

まあ当然どこかに隠れてるだろうからな。

しかし誰なんだろう。こんなことする人は。

西岡じゃなかったら当然犯人は女となる。

女の子でこんなことしそうな友人は思い当たらないのだが。

ブブブブブ
ブブブブブ

「・・・やめろ」

こうなったら乗った振りして恐がって、犯人を引っ張り出してやる。

「もしもし？今4号車よ？あと2つね」

フン、言ってる。

「待て！お前何者なんだ！」

僕は必死な感じを演じ、電話の相手を問い詰めた。

「わたしはメリーさ」

「たろうちゃん！こんなところにいたのね！」

・・・！

電話越しからと直に耳からと同じ声が響いた。

どこだ・・・いた！

もう1つ向こう側の車両にいる派手な服装のオバサン。

あの近くに犯人が！

「電話中の人に話しかけるなんて！あなた、本当にごめんなさいね」
待ってるこんにやる。

僕は電話と一緒に電源を叩き切ると、向こう側の車両へ歩き始めた。
叩き切ったのは、もうくだらない電話がかかってこないようにするため。

さあて、待ってるよ、メリーさん。

ブブブブブ
ブブブブブ

「・・・ッ!？」

電話が・・・鳴っている!?馬鹿な。電源切ったはず・・・。
待て。落ち着け。きつと切ったつもりでも切ってなかったんだ。

出ようか出まいか迷った挙げ句、僕は電話を耳に当てた。

「・・・はい」

「わたし、メリーよ。もうあなたのそばにいるわ」

「・・・」

僕はそろそろ本気でイラついてきた。

「・・・いい加減にしるよあんた」

僕は電話を切った。と同時に携帯の電源も落ちた。

やっぱり電源はちゃんと落としていた・・・？

「ちくしょう、どうなってるんだ」

僕は毒づくのと辺りを見回した。

近くにいるって・・・どこにもいないじゃないか。

ブブブブブ

ブブブブブ

またか。

電源は切れてたのに勝手に震えだす携帯。

「ふざけやがって」

僕はひたすら無視することにした。

10回・・・。

20回・・・。

コールは10回続けば留守番電話サービスにつながるように設定してあるはずなのだが、そんなのお構い無しだ。

まだ鳴ってる。

僕は着信中のディスプレイを睨み付けた。

こうなれば根比べだ。

と、僕は見た。

着信中のディスプレイがいきなり通話開始に切り替わるのを。

「どうして出てくれないの？」

・・・ッ！

携帯から声が流れてくる。その声はまわりつくように僕の鼓膜を刺激した。

「でもいいわ。こうして会えたんだもの」
やめる・・・。

「ずっとあなたを見ているわ・・・」

「やめる！」

電話を切る。

切れなかった。

何度ボタンを押しても通話は終了してくれない。
キャハハハと、甲高い笑い声が電話越しに響く。
そして。

プツリと音がしたかと思うと、プープーと無機質な電子音が聞こえてきた。

切られた。

僕はホッと息をつく。

しかしまたかかってくるだろう。

僕が何をしたっていうんだ・・・。

ブブブブブ
ブブブブブ

出なくても無駄だ。

僕は連結部の窓に向かってため息をつく、携帯を開いた。

「もしもし、わたし、メリーさん。今あなたの後ろにいるのよ」
後ろに、いる？

この楽しい声は確かにそう言った。

そして、確かに誰かの気配を後ろから感じた。

メリーさんとやらが今うしろにいるってのか？
ムカついた。

電話の声は、どこまでも、どこまでも楽しげだった。人を怯えさせ

ておいて。
許せない。

敵わなくてもかまわない。通用なんかしないかもしれない。
ただ、一発ぶん殴ないと気が済まなかった。

僕は大きく息を吸った。

「死にさせえッ！」

振り返りざまにフックを叩き込む。

・・・ん？

手応え？

ふと見ると、よく見知った顔が白目を剥いて悶絶していた。

「西岡！？」

どういうことだ？メリーさんは本物ではなかったのか？

僕は頭が混乱するのを感じた。

（裏コーナー）

西岡 いやあ今回敦司くんは踏んだり蹴ったりですなあ！

敦司 嬉しそうに言うな。嬉しそうに。

西岡 いやあ、前は俺が落ち込んでたからねえ。ハッハッハ

敦司 あ、前回といえば

西岡 ？

ドスッ

西岡　ぐばあっ!?

敦司　てめえ前回はよくも逃げやがったな

西岡　あ、ああ・・・あのことね

敦司　てめえ前回トイレ行つてなかなか帰ってこないと思ったらそこには誰もいなくてトイレの窓が開けっ放しだったっていう

西岡　いやあ、身の危険を感じたもんで

敦司　僕が何時まで愚痴聞いてたと思ってる

西岡　・・・さあ?

敦司　6時だ。朝の

西岡　うひゃあ

敦司　完徹だよ。もはや

西岡　ははは。・・・助かった(ボソッ)

敦司　まあ今回我々が得た教訓は

敦司・西岡　ゲストは選べ!

西岡　てなわけで今回のゲストいつてみようか

敦司　今回のゲストは?

西岡　この方です!どーぞ!

佐々井　やあこんにちは

敦司　佐々井さんって使い捨てキャラなのか?

西岡　いや、一応今の段階では、けっこう本編に関わってくる・・・

・可能性が高い

敦司　なんだそりゃ

西岡　いや、作者のいい加減な現段階の構想では登場させるつもりだけど、もしかしたらあと1、2回出たら使い捨てキャラに成り下がる可能性もあるから一応ここで出しておこうっていう意図

敦司　なんでそんな説明的!?

西岡 んー、大人の事情ってことで

敦司 ……

佐々井 で、あの、俺は……

西岡 おおそうだった。遺伝子研究所で初登場、現在敦司に協力してくれている佐々井さんです。

敦司 御世話様です

佐々井 いえいえ

敦司 ではさっそく質問コナナ！

佐々井 へ

敦司 佐々井さん、ぶっちゃけいくら貰ってますか

佐々井 え？えーとお

西岡 いきなりそれか……

佐々井 まあ……『ピー』くらいかなあ

敦司 ……

西岡 へー

敦司 なあ西岡

西岡 なんだよ敦司

敦司 僕、大きくなったら研究員になるわ

西岡 ……？へ？そう？どーぞ勝手に

敦司 なあ西岡！お前この金額を言われて何平然としてるんだ！
西岡 へ？別に普通じゃね？『ピー』万なんて俺の小遣いくらい

だけど

敦司 ……

佐々井 ……

田中 ……

西岡 ……？

敦司 佐々井さんが真面目に働いてなくてもそんな金貰ってんのはム力ついた……だが貴様が！高校生風情が！小遣いと同じだとお！？

田中 高校生のガキが人の給料の何倍小遣い貰ってんだあ！

佐々井 え？誰？この人。田中って誰？

西岡 え、あの、窓際族のサラリーマンです

田中 窓際族いうなあ！

西岡 え？た、確かこの前は自分で認めて・・・

田中 知るかああ！

美咲 待つて待つて。わたしも一発ぶん殴る

敦司 美咲さん！？

西岡 出たあつ

敦司 美咲さん、2週続けては反則・・・

美咲 はあ？じゃあんたらはどうなのよ

西岡 いや俺らは司会・・・

田中 ギャーッ！お許しく下さいお許しく下さい

美咲 ？誰コレ？

敦司 これゆうな。田中さん（仮名）。あなたに蹴り潰された人

美咲 あー・・・アハハ

佐々井 あのお、俺忘れられてない？今日のゲスト俺・・・

美咲 とにかあく！高校生がわたしの倍小遣いもらってるなんて、悪よ悪！公務員が地べた這いつくばっていくらもらってると思つてんじやあ！公務員は給与もらいすぎて、そんなの官僚と高級管理職だけ。下っぱは安いんだコラアアア！

西岡 あ、あなたの事情はいいから

美咲 さあみんな！目の前の巨悪に、今こそ立ち向かおうじゃないか！

敦司・田中・佐々井 おー！

西岡 え！佐々井さんまで。てか事の発端あんたじゃ・・・

佐々井 だつてこうでもしないと話に混ぜてもらえそうにないんだもん

西岡 なっ！？

一同 死ねえ、西岡あ！

西岡 え、ちょ、こんなものって・・・アリ？・・・ンツギアアア

ア
ア
ア

ア
ア
ア
ッ
!

19話 メリーさん（後書き）

前回の話、敦司視点です。敦司がいきなり西岡を殴ったのは、本物のメリーさんと勘違いしたせいでした。でもまあ西岡くんも楽しんだことだし（笑）仕方ないっちゃあ仕方ないですね。 次回は電車の中続き、おまけとしてメリーさん編の完結（？）編です。お楽しみに・・・してる人いるのかなあ・・・。

この時点で4分の1くらいできあがってるんで次の更新まで2週間はかからない（はず）です。ではでは

20話 メリーさん解決？篇（前書き）

人物紹介 No.006 井原幸一郎 警視庁勤務、働き盛りの警視正。今回の事件で初の捜査本部長を務めた。キヤリアだが、分け隔てないその性格に、ノンキヤリからの信頼も厚い。むしろ、キヤリアのライバルからは嫌われてるとかなんとか。親バカ。娘のこととなると人が変わる。家では典型的なマイホームパパで、忙しい中家族サービスも欠かさないが、矢嶋らと家で飲み明かした際、酔っぱらい共の世話を焼くのに、奥さんは結構迷惑しているらしい。

20話 メリーさん解決？篇

それから。

僕は気絶した西岡を自分の隣の席まで引きずっていき、一息ついていた。

納得がいかない。

あれらの電話がすべて西岡によるものだとは思えないのだ。いくら西岡でも電源切った携帯を無理矢理鳴らすなんてこと、できるはずがない。

だったら何か？メリーさんがいるってのか？と言われると、信じたくない自分もいる。

・・・まあいい。こいつが目を覚ませば解決だ。

「おらあ、早く起きろ、起きないと次の駅で降ろしてくぞ」

僕は西岡の頭をベシベシ叩いた。

ベシベシ。

「う・・・」

ベシベシ。

「うぐ・・・」

ベ・・・。

「お、おいおい。そんなに叩いて大丈夫なのか？」

スーツを着た若い男性が声をかけてきた。

「ええ。全く問題ありません」

「というか、なんで白目剥いてるの？彼」

「ちょっと、救いようのない馬鹿による自業自得が招いた事故がありまして」

「・・・？どんな？」

「話すとまた1話同じ話を繰り返さないといけないのでやめときます」

「そうか、それは困る」

納得した。

「・・・どちらまで？」

「ちよつと所用でね。浜松まで」

「浜松・・・ああ、花博があつたところですな」

「君は？」

「ちよつと、名古屋まで。万博があつたところですよ？」

「いや知ってるよ」

男性は、クイとペットボトルの茶を飲んだ。

『落武者』。確か、今売りだし中の新商品だ。

・・・ネーミングセンスはどうかと思う。

「高校生？」

「ええ、3年です」

「受験シーズンに名古屋？」

「ああ、それにも事情があつて」

「へえ・・・どんな？」

「話すと10話以上同じ話を繰り返さないといけないのでやめときます」

「ああ、そりゃ困る」

やっぱり納得した。

「・・・」

不意に男性が僕の顔をまじまじと見つめた。

・・・まさかソツチの気が？

「な、なんですか？」

僕はおどおどしながら聞いた。

「いや、これは失礼。だけど俺と君って初対面じゃないような気がする」

うわあ、口説きか！？

口説きモードに突入か！？

「い、いや、すみません。ボク、ソツチの気は・・・」

男性はポカリと口を開け、やがて意味を理解したのか大声で笑い始

めた。

「ちよつと、車内車内」

「あつと」

男性は口をあわてて閉めた。が、目はまだ笑ったままだ。

「いやあ、傑作だ。ハハハハ」

「な、何がおかしいんですか！」

最初は誤解したことを申し訳ないと思いこそすれ、あまりに笑うので、僕もだんだん腹が立つてきた。

「いや、俺の視線でビビるやつはいても、そんな捉え方をするやつはいなかったもんでな」

「ビビる？」

僕は思わず怪訝な表情を浮かべた。

この気の良さそうな男性が、怖い？

「・・・ビビった方がよかったですか？」

「いや、大いに結構さ。いやあおもしろいおもしろい」

男性は一通り笑ったあと、僕に向き直った。

「で、話を戻すけど、やっぱり会ったことない？」

うーん・・・。

僕は正直彼に会った覚えはなかった。

「すみませんが、覚えは・・・」

「そっかあ・・・」

男性は考え込んだ。

「絶対どこかで見たこと会った気がしたんだけどなあ・・・」

男性はまあいいか、と笑った。

少なくとも僕にはこの男性にビビる要素はないと思う。

「う、うーん」

その時西岡が唸り声をあげた。

「お目覚めかな、お連れさん」

スーツの男性は立ち上がっていた。

「あれ、どちらへ」

「電話だよ。じゃ」

男性は右手の携帯を振りながら立ち去った。

いい人そうだったな。あの人、何してる人なんだろう……。

「う、ん？お、俺は……」

西岡が目を覚ました。

「お、お目覚めか。メリーさん」

「おう」

しつかり男の声。

「大丈夫か」

「腹がズキズキする」

「ん、腹痛？トイレ行ってこいや」

「……」

睨み付ける西岡。怖くない。

「しつかり何だな。ボクシング日本3位が本気でパンチかますか？普通」

「あつはつは、本当に本気だったら多分お前は即病院行きだ。というか、日本3位は小6の話だぞ？」

「俺みたいなボクシング素人にはそんなこと関係ねーよ」

「ま、そうか。ところでさっきから非常に気になっていることがあるのだが」

「なんさね？」

「なぜお前がここにいる？」

「神のお導き」

「アホか」

一蹴する。

「まあ、なんていうかだね。予備校行く途中でお前を見つけてね。予備校サボってどこいくんだろうって気になって後をつけてみたってワケ」

「じゃああの電話は」

「バッチリこの電車の中で喋ってたよ」

やっぱり。

西岡はしたり顔だ。

「ハハ、お前本気でビビってんだもんよ、見てて面白かったぜ」

「最初はイタズラかと思って怖がるふりしてしっぽ掴んでやるうつて思ってたんだけどな」

「ああ、それそれ。なんかお前、電話無視しだして、てつきり気付かれたって思ってたんだけど、やたらビビって最後電話でたからこつちが驚いた」

「・・・あれ、お前じゃないのか」

「あれ？」

「オバサンの声が入った時があつたろ？」

「ああ、あの時終わった、って思った」

「あの後、もう一度電話があつた。メリーさんからな」

「？俺じゃないぞ。最後の電話までお前出てくれなかったじゃないか」

「・・・やっぱり」

「？どういうことだ？俺の他にメリーさんやる物好きがいたって？」

「ああ・・・本物が、な」

「本物・・・？ハハ、まさか」

西岡は笑って取り合わない。が、僕にはあれは本物に思えてならなかった。

・・・まあいいや。

今あれこれ考えても仕方ない。憑いてきたらその時はその時。どうかの神社でお祓いでもしてもらおう。

僕は気分を変える（という名の現実逃避）ため、もうひとつ気になつていることを西岡に尋ねた。

「なあ」

「あ？」

「僕を見つけて後を追ってきたつてのは分かった。でもなんで？お前は僕の行くところ行くとこ全てに現れるのか？」

「まさかあ、俺はそんな暇じゃねーよ」

西岡は呆れたように言った。

ム力つく。

「じゃあなんで」

「お前が抜け駆けしてミドリちゃんと遊びに行ったのかと思ったんだよ」

「・・・は？」

思わず聞き返した。

「・・・ま、違ったみたいだけど」

「えーと、ミドリちゃん？・・・ミドリミドリ・・・ああ、この前の合コンに出てた！」

「そ。お前あの子と雰囲気良かったろ？で、それに加えてお前あの合コン以来変だったから、これは決まりだってね」

「・・・はあ」

呑気で羨ましい。まったく。こっちは真剣な用で来てるつてのに。加えて言わせてもらおうと僕が変になったのは職業体験からだ。さらに言うと僕と大川内さんは別にいい雰囲気でもなんでもない。単に無理矢理連れて来られた者同士で会話を交わしてただけだ。

「なんでもいいがお前はんなことのために往復4900円を無駄にするのか？」

「そう。それは誤算だった。まさかお前が名古屋まで行くつもりだったとは」

「いや、普通往復500円でもやらないだろ」

「いやあ、ミドリちゃんとどうこうなんて死んでも邪魔してやろうと思って」

「救いよりの無い馬鹿だなお前は」

これだから金持ちは。

4900円程度の出費なんてなんとも思っていないに違いない。

「まあそう言うなよあ。割りと心配もしてたんだしさ」

「その気持ちは有り難く受けとるがメリーさんは悪趣味が過ぎたな」

「なかなかスリリングだっただろ」

「スリリング過ぎるわこのボケ」

「ふふふ、そんなくらいがちょうど良いんだよ。リアリティー溢れるメリーさんをお届けしてやったぜ」

「本物に呪われるのがお前であることを祈るよ」

「ハハ、まだ言ってるのかよ」

「言うね。あの恐怖は電話された奴じゃないと分らない」

「またまたあ、そんなに恐がって。だいたい、電話かけられたのはお前だろ？俺が呪われるわけじゃないじゃん」

西岡は鼻でフフンと笑った。

「どうか。よく聞くじゃないか。霊を侮辱するような奴が霊に呪われるって。ほら、お岩さんとか将門さんとかの映画スタッフが謎の急死とかあるだろ？」

「う・・・ちよつと自重するよ。だから呪わないでメリーさん」

「そうしろ。だいたいなんだ？あの声」

「ふふふ、あれぞメリーさんの声さ」

「確かにあの声は不気味だったけども」

「だろ？なんつったって聡美のお墨付きだし。俺の血の滲む努力の甲斐があつたというものだ」

「・・・誰？聡美って」

「俺のコレさ・・・あ痛い痛い痛い！」

西岡の立てた小指を変な方向に曲げてやった。

「ギャーッ折れる折れる！」

「折れるボケ。何がミドリちゃんとかどうこうなんて死んでも邪魔してやるだ。二股か？二股狙ってるのかコラ」

「痛い痛い！謝る！ウソ！俺が狙ってる子！」

「ほお、その子狙って、ついでに大川内さんも狙ってみたと」

「可愛い子と付き合おうとするのは自然なことだろ！悪いか！」

西岡は開き直った。

「悪くはない。悪くはないが、そんな西岡君にピッタリなことわざ

を1つ」

「なんだよ」

「二兎追うものは一兎も得ず」

「・・・ムギユウ」

あ、へこんだ。究極までへこんだ。

少しフォローするか。

「ま、動機はどうあれ、あの声は確かに一種の才能ではあるな」

「だろ？だろ？俺スゴいだろ？」

立ち直りの早い奴。

「その類いまれなる才能をもっと他のことに使って欲しかった」

「他のこと？そうだな、声優にでもなるか」

「お、一発芸」

「ああ、女の声でハイジのテーマ歌ったやつか？あれはイマイチだったなあ。思い切りが足りないってゆーか」

「思い切り？」

「そ、やるならもっと大胆に」

「というと？」

「ゴスロリ魔女っ子って感じで。衣装もつけて」

西岡はニヤリと笑った。

「それは・・・ヒクよ？みんな」

「ウケるって。俺、今年も文化祭の実行委員だからさ、来る11月3日にそなえ、一芸でも用意しとかないと」

「つつつてもなあ」

僕はこいつのゴスロリ魔女っ子姿なんて見たくもない。僕がそうなのだからきつとみんなそうだろう。

「やめとけて。悪いことは言わないから」

「そっかなあ・・・ま、そこまで言っんなら」

納得した西岡。が、直後とんでもないことを言い出す。

「じゃ、お前も出る」

「・・・は？」

「いいじゃん。ああいうのは大体グループって相場は決まってるんだよ。それにホラ、お前も顔いいから女子にウケるぞ?・・・あと一部の男子に」

「おい」

一部の男子にはウケてもらいたくない。

「僕はそんな人気ないさ。彼女もご無沙汰だし。つかお前今『も』つつつたな。これは『俺も顔いいけどな、へっへーん』の意思表示と受け取れるんだけど、どう思う?」

「あ?ああ、そうだけどそれが何か?」
シレッと言いやがる。

「ナルシーもいい加減にしろよ?このアホ」

ボスツと西岡の腹にパンチを入れた。

「ウーウグオツ!同じところをピンポイントで!・・・グウツ」
悶絶してる。まったくいい気味だ。

・・・そういえば。

「どうした?」

西岡が聞いてくる。

「・・・お前、治るの早いな」

もつと強めに打ち込めばよかったってちょっと後悔するくらいケロツとしてやがる。

「は!お前との付き合いも長いからな。俺も打たれづよくなったんだよ」

「分かった。今度から全力でいく」

「・・・。で?どうしたんだ?」

「いや、お前が起きる前、30代くらいの気のいいスーツの人と話してたんだけど、あの人電話するっていったまま帰ってこないなって思ってた」

「もう降りちゃったんじゃないの?」

「あの浜松で降りるって言ってた。浜松まだだろ?」
「んー」

西岡は辺りを見回した。

「それって、あの人？」

ふと見ると、先程の僕のように、連結部のところでさっきの男性が電話をかけている。

西岡はスクツと立ち上がると、男性の方へ歩いていく。

「お、おい」

「盗み聞き」

西岡はぐつと親指を立てた。

「ぐつ、じゃねーよ馬鹿。常識人としてそんなことは止めなさい」

「だって、気になるじゃん。その人、俺が起きた頃から今までずっと話してんだろ？」

「そりゃそうだけど・・・」

「嫌ならいいよ。俺だけで聞くから」

西岡はどんどん行ってしまう。

「ま、待てって。僕も行く」

西岡は何も言わずニヤリと笑った。

ちくしょう、好奇心に勝てなかった自分が恨めしい・・・。

でも僕は普通俺はビビられる、と言った彼の言葉が気になってならなかった。

もしかしたらうちの父親と同じ人種？・・・なんてね。

僕らはドアが勝手に開いてしまわない程度に距離をとり、聞き耳を立てた。

「・・・だからそうしろって言ってるだろう！」

覗き込んだ途端押し殺した怒声のようなものが僕らを迎えた。

「あちらに動きがあったら知らせろって言っただろう！キャッチ出来なかった？あちらが隠し通してたのか。くそっ！やられたな」

何の話だ？

「いいか、必ず取り返せ。億だ。億が動くからな。天方さんには知らせるな。俺らだけで内密に処理する。あと・・・奴ら、最近東京の方ばっか動いてるけど、なんか知ってるか？奴らは東海に勢力を

広げるのが方針じゃないのか？」

億って・・・金か？勢力？方針？

「ああ、そりやそうだが・・・。アタマ連中は最近東京に急遽帰ったって話だぜ？」

アタマ？

「・・・まあいい。とにかくアレは何がなんでも取り戻せ。じゃあな」

そう言う人とスーツの人は電話を切った。

僕は慌てて西岡に戻れと合図して席へ走った。

しかしスーツの人は戻ってこなかった。

「何の話だあ？」

西岡が言った。

「さあな。ま、気にすることはないさ」

正直かなり気になった。いつもの僕なら追求しようとするだろう。

しかし、今回に限っては僕は僕でやっかない問題を抱えているわけだ。

面倒事はこれ以上回避したいという思いがあった。

「いやでも気になんね？億が動くって。ヤバイ臭いプンプンじゃね？」

「ならない。プンプンするのはお前の体臭だ」

「ええ！？ちよつ、ちよつと、マジ！？」

慌てて自分の臭いをクンクンかぎだす。

「ウソウソ」

「勘弁してよ。洒落になんねー。体臭とかホント気になるからさ。

俺がい使ってんだからマジで」

「悪い悪い。でも僕はさっきのを詮索する気はないからな」

「なんでだよ」

西岡は食ってかかった。

「お前いつもはもつと食い付きいいだろ？こういう話にさ」

「・・・僕が何しに名古屋くんたりまで行くと思ってんだ」

「知らねーよ・・・あ、そういえば聞いてなかったな。予備校サボって名古屋行く理由」

「聞きたい？」

西岡は笑顔でうなずく。

「かなり重い話で、それでもってマジな話だけどそれでも聞きたい？」

西岡はちよつと驚いたような表情を見せたが、真顔でうなずいた。僕は息をつくと、西岡に今までの経緯を話すことにした。

DNA検査のこと。佐々井さんが協力してくれることになったこと。今日お祖母ちゃん家に手がかりを求め向かっているということ。ヤツはアタマのネジが外れたりずれたりしてるところはあるが、まあ悪い奴ではない。むしろいい奴だ。でなかったら僕はヤツと交友関係を続けてたりはしない。

「・・・」

西岡は神妙そうな顔で話を聞き終えると、口を開いた。

「つまり、そのオバチャンは元ヤンで、昔はブイブイ言わせてた、と」

「重要なのはそこじゃねえええッ！」

僕の全力のツツコミが炸裂する。僕は本編では基本ツツコミ担当なのだ。

「いやあ、ちよつと重い空気になったから。場を和ませよう」と

「時と場合を考えろやボケエッ！」

スパアンとハタキがヒットする。

・・・にしても、少なくともこいつのおかげで最初ほど暗い旅では無くなったな。

僕は、頭を押さえ苦しんでる西岡を見て、苦笑するのだった。

それから約2時間後、僕らは名古屋駅に降り立った。スーツの兄さんは結局帰ってこなかった。多分浜松で降りたのだろうが、それまですつと何をしていたのだろうか？

まあとにかく、名古屋に到着した僕らだったが、この時にはまだ、名古屋であんな厄介事に巻き込まれるとは想像もしなかった。

僕の『平凡な日常』というのは、あのDNA検査の日から大きく狂い始めていたんだなあと思ってしまうのである。

ここから先は僕は知らない話である。

「名古屋〜名古屋です。お降りの際は足元にお気をつけください」

「ママあゝ、あそこ空いてるよ！」

「コラ、桜、大きな声出さないの」

一組の母娘が電車に乗り込んできた。

桜と呼ばれた娘は走って、さっきまで敦司たちが座っていた空席に座る。

「ママ〜！こつち！早く！」

桜はさつきたしなめられたのも忘れ、大声で母親を呼んだ。

母親は、やれやれと苦笑しながら娘の席へと歩み寄る。と。

「あら？何かしらこれ」

「え？そこにおいてあるメモ帳のこと？・・・うわあすごい！なんか女の子の名前と電話番号がいっぱい書いてあるよ！」

「え？」

その持ち主にドン引きする母親。

「い、いやそうじゃなくて。ホラ、このお人形さんよ」

母親が指差したのは座った席の下に置いてあった一体の西洋人形だった。

「え？あ！ホントだ！かわい〜！ねえママあ、これ持って帰っても

いいでしょ？」

「うーん、そーねえ・・・」

桜はキラキラした目で母親を見た。

母親は考え込んだ。

彼女は、娘のこの目には弱かった。

周りに荷物はないみたいだし、多分誰かの忘れ物だろうけど・・・。
本当は駅員に届けなきゃいけないんだろうけど、この子も欲しがっ

てるし別にいいのでは・・・。

「しょうがないわねえ」

母親は人形に向かって手を伸ばした。

抱き抱える。結構重い。

母親は桜に人形を手渡そうと・・・

「・・・キャッ！」

その瞬間彼女は人形を手放していた。

・・・動いた？

彼女には、確かにこの人形が自分に向かって微笑みかけたように見え
たのだ。

この人形は、危険だ。

彼女の本能が、ガンガン警鐘を打ち鳴らしていた。

「どうしたの？」

桜が不思議そうに人形を拾おうと手を伸ばした。

「待って！」

「・・・どうしたの？ママ」

「ダメ。これに触っちゃダメ」

「なんで？」

「こ・・・これは他人のなの。勝手に触っちゃいけません！」

「でもお」

「まもなく」　　「お降りの際は・・・」

ほっとした。これでなんとも不気味な空気から逃れられる。

「ほら！降りるわよ、桜！」

「でもお」

ぐずる桜。母親は最後の手段に出た。

「もう。マジカルリリイちゃんのお人形、買ってあげないわよ!」
マジカルリリイとは今女の子に絶大な人気をほこるキャラクターである。桜も大ファンであり、誕生日までいい子にすれば、桜に一番高価なマジカルリリイの人形セットを買ってあげる約束になっていた。

その効果たるや、まさしく絶大である。

「あ、待ってよ。ママあ!」

案の定桜は西洋人形など忘れたかのように、母親についていった。

．．．．．。

「ドアが閉まります。ご注意ください」

．．．．．。

．．．よくも捨てたわね．．．。

わたし、メリーさん。今からあなたに会いにいくわ。

く裏コーナーく

西岡 コワッ!

敦司 怖いなあ。やっぱりメリーさんの呪いは本物だったんだ

西岡 てか俺らが馬鹿話してる間にも、あの人形椅子の下にあった
っていうことか？

敦司 まあ・・・そういうことになるかな

西岡 コワッ！

敦司 いやまったく

西岡 なんかこの話、謎のスーツの兄さんとか今までいろいろと
伏線っぽいもの積んできたけど、最後のインパクトで全部吹っ飛ん
だって感じだな

敦司 うーん、確かに。でもって、裏コーナーの雰囲気がこれま
た本編のホラーな雰囲気をぶち壊したな

西岡 ・・・そりゃあまあ、お約束ってことで（笑）

敦司 （笑）じゃ済まないと思うんだけど・・・あ、これ飛ば
して読んでもストーリー本筋にはまったく問題ございませんのであ
しからず

西岡 そんなセリフもお約束だよな

敦司 ・・・確かに

西岡 さて、気を取り直して・・・今回のゲストは誰かな？

敦司 今回のゲストは、この人です

西岡 どーぞ！

敦司・西岡 ・・・

西岡 え？なんで誰も出てこないの？

敦司 ・・・あ、台本に書いてあるよ

西岡 台本！？そんなもんあったのか！てかこんな裏コーナーに
台本なんざいらねーだろ！

敦司 ・・・まあね。台本つつつてもホラ。2ページしかないし。
書いてることもほとんど『適当にトーク』だし。

西岡 ・・・はあ。もういいよ。で？台本になんて書いてあった
んだ？

敦司 『今回はネタが浮かばな・・・メリーさん後日談を入れた

ことによるスペースの関係により、ゲストトークは中止とします』

西岡 ネットが浮かばなかったのか・・・

敦司 そろそろ使い捨てキャラでなおかつキャラ立ちそんな奴がいなくなってきたからなあ・・・ってわけで、次回は永森兄弟だつてさ

西岡 お。やつとか。永森いつ来るかなあって思ってたんだけど敦司 まあゲストがいない関係で、今回は僕らで話を繋げないといけないわけだがどうする？

西岡 よーし！ぶっちゃけトークだ！

敦司 ・・・めんどつちな

西岡 まあそういうなよ。お前が今まで付き合ってた子たちがなんで急によそよしくなつて破局・・・というパターンになったかを教えてやろうと思つてな

敦司 ・・・！

西岡 お。興味を持ったな。フフ、それはだ・・・『鳳敦司ファンクラブ』だ

敦司 な、ナンデスカソレハ？

西岡 密かに構成されたファンクラブらしいね。ま、俺は羨ましいとは思わないけどな

敦司 と、いうと？

西岡 構成員が男ばっかなんだよ

敦司 ・・・は？

西岡 いやあ、お前男子に人気あるんだな

敦司 ・・・・・・

西岡 で、最初に付き合ってた由加ちゃんはそのクラブの存在に引いて、二番目の涼子ちゃんはそのクラブの男子の無言の圧力により押しきられた。いやあ、かわいそうに

敦司 ・・・

西岡 おい、どこ行く？

敦司 そのクラブちよつと壊滅させてくる

西岡 ダメダメ。殴っても。殴ったところであいっすら喜んじゃうよ？

敦司 ……ッ！

西岡 ま、災害にでもあったと思って諦めるんだな

敦司 ……なあ

西岡 ん？

敦司 ……うちの学校は変態ばっかなのかチクショーツ！

西岡 どこも似たようなもんだって（根拠なし）

敦司 ……帰る

西岡 あ！ちよつと！敦司くん…行っちゃった。さて、傷心の敦司くんですが、本編の敦司クンに春は来るのか！？これも1つの見所ですねえ。ではまた次回までごきげんよう！

西岡 ……あーあ、今回はひどい目遇わないでよかった

20話 メリーさん解決？篇（後書き）

意外と時間が空きました。あと2日くらい前に投稿できたのですが、まあいろいろありまして……。さて、本編ではようやっと主要キャラが出始めます。（話の長さも初1話1万字超えっていう）人物紹介で矢嶋編のキャラばっかでてんのは、敦司編の主要キャラがあんまり出てないっていう裏事情もあるのです。

21話 機械も人間も、壊れたらまず叩いてみるべし（前書き）

人物紹介 No.007 永森 俊吾（弟） 智林高校3年生。

ベビーフェイスでシャイボーイ。女子に大人気。捜査一課の刑事を兄に持つが、近頃兄が陰惨な事件を担当することが多くなり、家で時々暗い表情を見せるのを心配に思っている。また、気が弱い性格でありながら正義感は一倍強く、敦司や西岡といった他の男子からも一目おかれている。今のところ目立った出演機会はあまりないが、作者としては一度目立たせてみたい存在である

21話 機械も人間も、壊れたらまず叩いてみるべし

名古屋に降り立った僕らはさっそくバス停へと向かった。

おばあちゃんの家は名古屋といっても外れのほう。バスを乗り継がないといけないのだ。

しかし……。

「げえ、30分待ちかよ」

西岡が呟いた。

最悪のタイミングだったようだ。ちょうどバスは今行ったばかり。次のバスが来るまでは32分あった。

「……なあ、飯食わね？」

西岡が顎で近くにあった定食屋をしゃくる。

『お食事処 まきはら』

店の前に立てられている品書きを見ると、なかなかリーズナブルだ。近くにあったファミレスなどよりかはよっぽど経済的だ。

「よし、行くか。もう昼時だしな。僕も腹減った」

時刻は12時半過ぎ。

席空いてるかなあ。

一抹の不安を感じつつも、僕は定食屋に入った。

「いらつしやいつ！」

出迎えたのは快活な声。

やはり昼時とあってか店はなかなか混んでいたが、なんとか空席を見つけた。

元気の良かった店員はショートカットの女の子でなかなか可愛い。

店員が水を持ってくる。

「どうぞ！お水とおしぼり……あれ？」

「え？」

「あ」

3人して固まった。

そこにいたのはちよつと前話題に出てた大川内碧その人だったのだ。

「鳳くんだよ。この前のカラオケの」

「あ、うん」

「ミドリちゃん！」

西岡が立ち上がる。

「な、何かな」

「僕は！今とても！運命というものを感じていますっ！」

「は、はあ・・・」

戸惑う大川内さん。

「ミドリちゃん！僕と付き合って」

「あのお。ごめんなさい、誰でしたっけ？」

「・・・ッ！」

西岡が目に見えてへこむ。僕は爆笑した。

「あ、ご、ごめんなさい！その・・・ちよつと、鳳くん、笑わないでよ！」

「アッハッハッハッ！いや、ごめんごめん」

にしてもかわいそうに。合コンの時はあんなに張り切って歌ってたのにな。

さすがに哀れになった。

「ほら。いたじゃん。この前のカラオケで幹事やってたうるさい奴」

「ああ。あのうるさ・・・賑やかな人が！」

「そ。西岡研くんです」

「もういいよ・・・どうせ俺は煩くてウザくてどうしようもないクズさ」

いじけちゃった。

「大川内さん、なんでここに？家は・・・」

「うん、家は神奈川だけどね。この店は叔母さんが道楽でやってる店なんだ」

「ど、道楽？」

「うん。叔父さんはライフテックっていう会社の社長でね。叔母さんはやることないから昔からやりたかった食堂を開いてるんだ」

「ら、ライフテック！」

驚いたのは西岡だ。

西岡によると、ライフテックはＩＣ企業の先駆けとなり、今はパソコン・家電・その他もろもろなんでもござれの大企業らしい。

僕が、西岡財閥よりも？と耳打ちすると、

「バカ、格がちげーよ」

・・・バカって言われた。西岡に。

「で、私は時々小遣い稼ぎに手伝いにいくの。この後は、そのお金で友達とお買い物」

「友達？」

「そ。私昔名古屋に住んでたから」

「そ、そうなんだ」

「そういえば鳳くんたちこそなんでまた名古屋なんか？」

「うん。ちよつとばあちゃん家に用があつてね」

「お祖母さん・・・？もしかして、三田の鳳さん家って鳳くんの親戚だったの！？」

「え」

確かにばあちゃん家があるのは三田というところだった。

「もしかして・・・知り合い？」

「知り合いも何も・・・昔あの辺りに住んでた時からの付き合いだよ」

「あの辺りに住んでたあ！？」

「そ、そうだけど・・・どうかしたの？」

大川内さんが不思議そうな顔で僕を見つめた。

これは思わぬところで情報を得られるかも……。

「い、いや。実は僕も昔あの人に住んでた時期があっただ」

「え！？そうだったの！？」

「うん……。あの、なんでもいい。僕や僕の両親について何か覚えてることないかな？」

「え？そう言われても……」

大川内さんはしばらく考え込んだが、

「ごめんなさい。覚えてないわ」

と、頭を下げた。

「そつか……。いや、別に謝らなくていいさ。変なこと聞いてゴメン」

「ううん。それはいいの……。あの、注文何にする？まさか、2人とも水だけで帰ったりしないよね」

いたずらっぽい笑みを浮かべる。

「ふうん、こういう顔もできるのね」

「……。やべえ、持ってたかたあ」

西岡がボケた顔で言った。おまえ、それ某ドラマのパクリだから。

「で、ご注文は？」

「俺カツ丼！」

元気のいいやつ。

「……。僕はさばの味噌煮定食で」

「渋いの来たね」

大川内さんが笑った。

ほっとけ。僕はこういうの結構好きなんだ。

「少々お待ちください」

大川内さんは厨房へ入っていった。

「……。可愛いよなあ」

西岡がさらにボケた顔で言う。

「……聡美ちゃんはどうした、聡美ちゃんは」

「うう、そこを突かれるとイタイ」

言ってる。

僕はさりげなく西岡の腹にパンチを入れるとため息をついた。

大川内さんは覚えてなかったか。・・・やっぱり、そう上手くは事運ばないよな。

しばらく西岡ととりとめのない話をしていると大川内さんが料理を持つてやってきた。

「お待ちどお」

「うおっ！んまそー！」

西岡が舌なめずりする。

西岡のカツ丼はホカホカ湯気がたって確かに美味そうだ。

「はい、こっちはさばの味噌煮ね」

「ども」

こっちも美味そうだ。

「じゃあ、いただきますか」

僕は手を合わせ・・・ってもう食ってるし。

がつつく西岡を苦笑して見つめた。

「でも驚いたなあ」

「何が？」

大川内さんが口を開いたので僕は尋ねた。

「鳳さん家が君の親戚だったってこと」

「ああ、ハハ」

僕は曖昧に笑みを浮かべた。そりゃ僕だって驚いたさ。

「実は、今日一緒に買い物に行く友達って早紀ちゃんだったんだ」

「早紀？」

早紀は僕の従妹。昔一家で一緒に住んでた頃は兄妹のようなものだった。

「そう。鳳くんが遊びに行くことが分かったから、今日の買い物は中止にして私も家に遊びに行くことにしちゃった」

「え？そうなの・・・」

大川内さんがいて、僕はばあちゃんに話を聞けるだろうか。

「・・・迷惑だった？」

「いやあ、そんなことは・・・」

努めて自然に笑う。

「よかった」

大川内さんは笑い返すと席を立つ。

「待ってて。私、仕事もう上がるから」

「うおお！ミドリちゃんが一緒に来てくれるなんて、テンション上がりまくりだぜコラア！」

「・・・西岡。おまえ帰っていいよ」

「ああんもういけずう」

キモい。

「でもすごいね。ホントに近くに住んでたんなら、もしかしたら一緒に遊んだことがあったかも・・・」

「ハハ、そうかも」

大川内さんの言葉にうなずいた。

・・・！

その時激しい頭痛が襲った。

締め付けるような痛み。経を唱えられた時の孫悟空はこんな思いだったのでは・・・なんて考えてる余裕もなくなってきた。

僕はテーブルに突っ伏した。

だんだん頭が真っ白になっていく。

・・・そして。

公園。

砂場。

笑う女の子。

そして、女性。あの葬式の夢で白黒で笑ってたあの女性。女性の後ろには・・・誰かが・・・。

誰かが・・・。

そこで僕の意識は元に戻った。頭痛も嘘のように消えている。

周りを見ると、西岡と大川内さんが心配そうに僕の顔を覗きこんでいる。

「・・・大丈夫？」

僕は、まるで100メートル走を全力で走りきったあとみたいに呼吸を荒げていた。

答える余裕もなく、僕はお冷やをグイと飲み干し、コップをテーブルに乱暴に置いた。

「お、おかわり持ってくるね」

大川内さんはぎこちない笑みを浮かべると厨房へと去った。

・・・なんだったんだ？あれは。

一瞬だけいくつか光景が浮かんだ。

それはまるで1シーンをカメラで撮ったような。

いつもの夢とは違う。第一僕は寝ていない。

ただ、大川内さんの『一緒に遊んだことがあったかも』という言葉に触発されて起こったのだということは、紛れもない事実だ。

あの女の子は・・・大川内さん？

あの女性は・・・？

何も分からない。

僕は大きく息をついた。

「おい、どうしたってんだ？ミドリちゃん怖がってたじゃないの。可哀想に」

「・・・夢」

「夢？」

「夢だよ。夢を、見たんだ」

「夢ってお前、寝てなかったじゃん」

「・・・ああ。厳密には夢じゃない。夢みたいな何かをみたんだ。フラッシュバックっていうのかな」

「はあ？」

「ほら。お前に言ったことあったよな」

僕は以前、西岡にあの奇妙な夢のことを話したことがあった。

「ああ……。小さい頃から追われる夢とか変な夢みてたんだっけ」

「今回はバリエーションが違ったらしいけどな」

「どんな？」

説明する。

「なるほどねえ」

西岡はでかい口を開けカツにかぶり付く。

「やっぱそれは、お前の過去の記憶じゃないかな」

「……やっぱり？」

僕もそう思っていた。1つは夢にしては余りに鮮明であること。そして、大川内さんらしき女の子と遊んだことまで出てきたとあつては……。

しかし。

「でも、それには分からないことが出てくる」

「？」

「それが本当なら僕は実際に誰かに追われて死にそうになったり、誰かが殺される現場を見たってことになる。さすがにそんなことは忘れないだろう」

うーんと西岡は腕を組む。カツ丼のどんぶりはすでに空だ。

「トラウマ、じゃねえかなあ」

「トラウマ？」

トラウマ。心的外傷。幼いころの出来事においての恐怖などが原因で、本来そこまで恐怖を覚える必要もないような対象に強迫観念が植え付けられ、その対象に異常な拒否反応を起こすことだ。

例えば、小さいころ首を絞められたから首にネクタイやらネックレスやらを巻けなくなった、とか。……どっかの漫画から引用。

または許容を越える恐怖、悲しみなどを味わい、自我を保つためにその記憶を封じ込めてしまう、とか。

「僕が……トラウマに？」

思いもよらなかった。しかし、筋は通っている。

「でも、近くで人が殺されたとかそんな話聞いたことないし」

「そりやお前、トラウマになった張本人に殺人やらの話を聞かせたりはしないつしょ」

ううん、確かに。

僕もさばの味噌煮定食を完食すると息をついた。

・・・待てよ？

「お待たせ。おかわり・・・とついでに着替えてきちゃった。ご飯も終わったみたいだしそろそろ行かない？」

お冷やを受けとる。

「ありがとう・・・とごめん。ちよつとさっきの僕変だったよね」

「う、うん・・・ちよつと驚いたけど・・・なんだったの？」

「いや・・・うん、その・・・」

誰彼構わずペラペラ喋れる内容ではない。

僕は、躊躇して口ごもった。

そんな僕に、大川内さんが笑みを向ける。

「言いたくないなら言わなくていいよ」

「うん・・・ごめん」

僕は、大川内さんの気遣いに感謝して、小さく頭を下げた。

「もう、大の男がそう何度も謝らないの」

・・・ん？デジャブが・・・。

それより。

「大川内さんが引越したのっていつ？」

「え？・・・5歳の頃だけど・・・」

うーん。じゃああまり頼りにならないかも。

「住んでた頃に、殺人とかそんなことあったとか覚えてる？」

「え？殺人・・・」

「ごめん。変なこと聞いて」

「殺人・・・鳳くんは覚えてるの？」

大川内さんはじつと僕を見つめた。

「・・・いや、覚えてるっていうか知らないけど」

フツと大川内さんが息をつく。ため息？

と思ったのも束の間、笑顔で僕を見た。

「でしょ？そりやそうだよ。殺人なんてなかったからね」

「うん・・・」

僕はお冷やを飲み干す。

「そろそろ行こーぜい」

西岡が立ち上がる。

お勘定を済ませると、大川内さんは厨房に声をかけた。

「叔母さーん！じゃあ行ってくるね！」

厨房から白い割烹着を着た40過ぎくらいの女性が出てきた。あの人が大川内さんの叔母さんか。

「あらあら。あらあらあら」

その女性は僕らを見ると声を上げた。

「碧ちゃん、あなたもスミに置けないわねえ」

「え？」

きよんとする大川内さん。

「ボーイフレンドなんていつの間に来たの？」

「「へ!？」」

すつとんきょうな声を上げたのは大川内さんと僕だ。西岡はボケた顔でニヤニヤしている。

「参ったなあ。やつぱりそういう風に見えますか。いや実際そうなんですけどあゝ」

「調子に乗るな」

本日何度目か分からない鉄拳を西岡の脇腹に突き立てた。

「のべばあつ！」

「November?今はJuneだボケ」

「い、いや、そうじゃなくて・・・」

西岡はその場に崩れ落ちた。

「なんだあ、そうならそうと言ってくれればよかったのに」

牧原さん（大川内さんの叔母さんだ）の元気な声が響く。

昼時も過ぎたということ客足も無くなってきたのか、暇になったらしい牧原さんと僕らはすっかり話し込んでしまった。

「じゃああなたがあの早紀ちゃんの従兄なのね？」

「ええ、一時は家族一緒に住んでたんで、妹みたいなものだったんですが・・・」

「いつ頃引越されたの？」

「えっと・・・僕が中学に上がると同時に引越したんで、5年とちよつと前ですかね」

「あら。じゃあ、碧のこととか覚えてるんじゃない？」

「うーん・・・覚えてないです」

僕はかぶりを振った。

大川内さんが引越したという5歳くらいのとき、そのくらいの年代だ。夢で出てくる僕の歳は。

これは偶然なのだろうか・・・。

「そうだ」

僕は顔を上げる。

「大川内さんが引越されたところに、殺人とかありませんでしたか？」

「さ、殺人？」

穏やかな話ではない。牧原さんは驚いたようだ。

「うーん・・・分からないわねえ。このあたりで殺人なんてあったら忘れはしないだろうけど・・・」

「そうですか・・・」

やっぱり殺人なんてのは僕の思い過ごしなんだろうか。

「まーたその話かよ、敦司」

「すみません、変なこと聞いて」

「気にしないで」

牧原さんの笑顔にもう一度頭を下げると、僕らは食堂を後にした。

「はー、食った食った」

西岡が腹を叩いて笑った。確かにポリウムとしては十分で、値段も頃合いだった。

文句なし。

「でもさ」

僕は気になったことを口にした。

「正直、とても社長婦人とは思えない人だったね、牧原さんって。社長婦人っていったら、もつとこう、お高くまとまって、『あら、私紅茶が飲みたいザマス』みたいな」

大川内さんは苦笑する。

「あの人はもともと、令嬢でもなんでもないからね。跡取り息子の叔父さんの一目惚れって話だよ」

「はああ、それはそれは。燃えるような恋愛ってやつ？」

僕の言葉に、

「俺もそんな恋愛してみたいもんだぜい」

西岡が大川内さんに意味ありげな視線を送る。

大川内さんはそれをさらっとスルー。

もう手慣れてきたようで。いやあ感服感服。

僕と大川内さんは落ち込み西岡を尻目にさっさと通りに行く。

「ちょ、待てつてば」

西岡の情けない声が駅前通りに響き渡った。

「　　そうですか、失礼しました」

僕は丁寧に礼をすると、その場を後にした。

「まだやってんのかよ、敦司い」

西岡が声をかけてくる。

僕は念のため、殺人がなかったかどうかばあちゃん家近所の方々に聞いて回っていた。

普通に聞いたらただの変な人なので、地元の高校の新聞部というこ
とにして。

結果は全員『知らない』。やはりあれは過去などではなく、ただの
妄想なのではないかと僕は思い始めていた。

大川内さんには先に行ってもらった。

西岡も先に行くよう勧めたのだが、初対面の人の家にズカズカ入っ
ていくのは気が引けるそう。意外と常識人な西岡。「もういいか・
・」

僕は呟くとばあちゃん家に歩き出す。

ピンポン

ドタドタ音が聞こえて、

パンツ！

「つつつつてえええええ！」

勢いよく開いたドアにしこたま額をぶつける。

・・・西岡が。

僕はそれを予期し、一步後ろに下がっていた。
いやあ。

だって経験者だもの。

西岡は額を流血させながらクラクラしている。

「おそーいつ！・・・ってあれ？・・・あなた、誰？」
戸惑う少女。

こいつが僕の従妹、早紀である。

ドシャツ

崩れ落ちる西岡。

「僕のダチさあ」

「え、ええっ！？あ、あのすみません。大丈夫・・・ですか？」
ムクリ。

立ち上がる。

鮮血を撒き散らして。

「あーっはっはっは！あーっはっはっはあ！見よ！人がゴミのよう
だあ！わあっはっはっは！」

発狂した西岡は大声で笑いだした。

「赤パジャマ黄パジャマ茶パジャマあ！茶パジャマなんてねーよ！
あっはっはっはあ！」

「あ・・・あの・・・」

「待て。黙らす」

「あつはっは！どうわーはっはっは！はっ」

ドスッ

みぞおちに正確なパンチを叩き込む。

西岡は魚みたいに口をパクパクさせて動かなくなった。

「よし、行こう」

気絶した西岡を抱え、僕は家に入った。

「こんにちは」

「あら、敦司君、こんにちは」

伯母さんが迎えてくれた。隣には伯父さんもいる。

「ご無沙汰です。伯父さん、伯母さん」

「で・・・その子は？」

西岡のことだろう。

「ダチ。家の前でちよいアクセシデントがあつて、うるさかったので黙らせて連れてきました」

「ああ、さっきの笑い声ね」

合点がいったように伯母さんが頷く。

「とにかく、寝かせときましようか」

「うーん・・・私も手伝うね」

伯母さんと早紀がぐったりした西岡を連れ、居間へ運んでいった。

「しっかしすごい笑い声だったなあ、何があつたんだ？」

と、伯父さん。

「一言でいうと、狂った。詳しくは早紀に聞いて。・・・ところで」

「？」

顔をあげる夫妻。

「僕がここに来た理由ですがね」

「ああ、そうだ！いきなり敦司君来るって碧ちゃんから聞いて、驚いたよ」

碧ちゃん。

この家ではもう随分馴染むほどの交流があったようだ。

「実は、卒業に向けて自分の生い立ちの記をかかなきゃならなくなりました、それについて聞きたいことがいくつか」

僕はここに来るまでに考えていた嘘を述べた。

「生い立ち？そんなの親に聞けばいいじゃないか」

「親に内緒のプロジェクトなんです」

「あー、なるほど」

伯父さんが納得したように頷く。

「で、何が聞きたい」

「・・・？い、いやいや！聞くのは伯父さんではなくてばあちゃんにです」

「おふくろに？」

「ええ。第一僕が生まれる時伯父さん達ちょうど海外旅行行ってたんですよ」

「あー、そういえば・・・常夏のハワイに絶世の水着美女が・・・」
うつとり。

「はいはい」

この人本当に父さんの兄なのか？

「まあそれはそうとしてだ」

「ん？」

「碧ちゃんと付き合ってるのか？」

「・・・はい？」

「いや、目のつけどころは良い。さすが我が甥」

「いやいやいや勘違いよ勘違い。あの子とは偶然会ったの！」

「偶然？横浜に住んでるあの子に名古屋でまさかの再会？ああ、青春よ。これこそ運命の出会い」

「言ってて恥ずかしくない？伯父さん」

「恥ずかしいものか！俺こそ恋の狩人鳳公太！生涯現役よ！」

「あーはいはい」

相手にしてられん。50のオヤジがいい歳こいて。

「ばあちゃん、上？」

「ん！ああ……。つておーい！伯父さんの話を最後まで聞けえ！」

無視して2階に上がろう……。とした時、早紀が大川内さんと西岡を連れてやってきた。

「西岡さん、気が付いたよ」

「早いな」

「敦司いいつ！こんなかわゆい子が従妹なんて、聞いてねーぞ！」
階段を登りかけていた僕にすがり付く。

「言つてないもん。……。てか従兄弟がいるとは言ったろ？」

「ああ……。そういえば昔聞いた気がする。けどお前、それは何
考えてるか分からないサイエンティスト兄に凶暴ゴリラ妹とか、確
かまともなの姉しかいなかったような……」

「あ……」

僕は階段を登りきろうかという所で足を止めた。

ふふ、よく覚えてるじゃないか西岡。

サイエンティストは青龍兄はるきよさん。まともな姉は（あかね）姉さん。

そして、ゴリラ妹が……。嗚呼、西岡よ。何故このタイミングで
それを言う？

……。む、殺気。

僕は恐る恐る振り返る。

「ねーえあっちー？」

あっちーとは早紀が言う僕の呼び名。

早紀はまぶしいような笑顔で僕を見ていた。

ああ、このスマイルは高くつきそうだ。

「誰？凶暴ゴリラ妹つてえ」

「さーあ、誰だろうねえ……。いやまったく」

いつしか早紀は僕の進行方向に立ち塞がっていた。

逃げ場なし。

チラと早紀を見ると、どす黒いオーラが巻き起こり、それが早紀を包んでいる。・・・来る！

「死いにさらせええっ！」

渾身のストリート。否、正拳突き。

早紀は、空手家の伯父さんの影響もあり、空手黒帯、この辺りでは高名な選手でもある。

そんな奴の正拳突きを食らったら、比喻でなく死ぬ。マジで三途の川を渡るハメになる。

だが、早紀の拳に全神経を集中させた、元ボクサーの僕には、避けることは十分可能はず。

拳が繰り出される瞬間、後ろに引いてギリギリかわす。

スカッ

早紀の拳は空を切った。

そして・・・僕の足も。

気付くべきだった・・・。階段にいて、『後ろに引いたり』したらどうなるか・・・。

そう、すなわち。

「ああアああああアアアッ！」

ゴロゴロとどまる事を知らず落ちてく僕の体。

僕は『S O C K』の堂本光一さながらに転がり、叩きつけられた。

ああ・・・光が・・・遠く・・・。

僕の手は高々と空を掴み、そして世界は真っ暗になった。

（裏コーナー）

西岡　なんかすごいカッコいい描写してるけど、結局はただ階段から転がり落ちただけだよな

敦司　・・・若さゆえの過ちってやつだ（謎）

西岡　いや意味わかんねえよ

敦司　だから謎ってつけただろ

西岡　・・・にしてもさ、どうよ、ストーリー展開

敦司　大川内さんが出てきたのは意外だったな

西岡　ふっふっふ、運命の出会いってやつさ

敦司　・・・？僕と大川内さんの？

西岡　俺！

敦司　・・・！お前と僕？やめろよ気色悪い！

西岡　ちゃうわい！俺と大川内さん！

敦司　・・・ああ、なんだ・・・。あり得ない

西岡　苦労した挙げ句一蹴された・・・（泣）

敦司　お前のくだらない妄想はもういいからゲスト呼ぶぞ

西岡　よっしゃ！ゲストはこの人！どーぞ！

敦司　・・・立ち直り早いやつ・・・（ボソッ）

永森弟　あ、こんにちは鳳くん！西岡くん

敦司　よ、おひさ

西岡　永森い！お前なんかが・・・お前なんかが女子に人気の男

子ランキングベスト3なんて納得できねえっ！

永森弟 ええっ！？何かの間違いだよ

敦司 西岡だってキャラさえ改めればベスト3いけると思っただけだな・・・（ボソツ）

永森兄 なんだ！モテモテなんだな俊吾！

永森弟 ち、違うって兄さん・・・

敦司 補足するとこの恥じらいが可愛いつて評判だそうなの

永森弟 えっ！？

西岡 ぬおおっ！そうか！そうなのか！よし俺も恥じらう。今日から俺は恥じらいの研だ！

敦司 やめとけよ、お前がやってもキモいだけだ

西岡 キモいつていうな！キモいつて言っただ奴がキモいんだ！わーん・・・

敦司 なんだよそのバカつて言っただ奴がバカつていう幼稚園児論

理は

永森弟 あはは、相変わらずだね

永森兄 仲良きことは良い事なりつてね

敦司 お前はもういいよ・・・時にお兄さん、あの美咲さんと同僚らしいですよ

永森兄 ふ、フフ、あの人に酒を飲ませたら2パターンの動きをする

敦司 2パターン？

永森兄 そう。すなわち絡と暴！

敦司 あー、分かる気がする

西岡 ・・・俺いまところ実害無いな

敦司 宴会中トイレから逃げ出した奴が何を言うか

永森兄 いや、それはむしろ賢明といえるかも

西岡 やっぱり。ほら見る、お前がバカなだけなんだよ、バーカ！

敦司 ・・・（プチッ）

ガラガラガッシャン！

西岡 ま、待て！話せば分かる！

敦司 問答無用ツ！食らえ、必殺奥義！リストクラッチ・エクスプロイダアアアツ！

西岡 うわ待て！待て！ちよ、死ぬ！下固い！エクスプロイダーはマジで死ぬ！あ、アアアア・・・
グシャツ

敦司 説明しよう。エクスプロイダーとは、相手の足首を持ち上げ、相手の肩を支点に自分の頭上を通過、そのまま下に叩きつけるという技である

永森兄 誰に向かって喋ってるんだ？

敦司 いや、最近独り言が多くて

西岡 ……（ドクドクドク）

永森弟 ……大丈夫かな？ピクリとも動かないけど・・・

永森兄 あーあ、これは殺人現行犯逮捕かな

敦司 ついかツとなってやった。後悔はしていない

永森兄 犯人の供述の典型だな

西岡 ……ウオオオラアアアアツ！勝手に殺すなああああつ！

永森弟 うわっ！出た！

敦司 南無阿弥陀仏

西岡 死んでねえつつてんだろがあああツ！

敦司 つつても頭から血いドクドクさせながら言っても説得力ないぞ？

西岡 やつたの誰だよ・・・あーイテエ

敦司 本来ならあーイテエじゃ済まないので良い子の皆、真似は絶対やめましょうね。くれぐれも仕事帰りで疲れたお父さんを実験台にしちゃダメだぞ

西岡 いや無理だろ子供には

敦司 さて、500文字近く脱線しましたが、話を戻しましょう。お兄さんが美咲さんから受けた実害とはどんな物でしょう？

永森兄 え？ああ・・・いや拳げろつつつても拳げきれねーよ？

ほぼ毎日のことだし

敦司　ピックアップしてどうぞ

永森兄　そうだな・・・絡の方はまあヒドイけど命の危険はない。
だが暴の方は死を覚悟しなければならいだろう

敦司　と、いうと？

永森兄　いつか、皆で仕事帰りで歩いていたとき、一軒のおでん屋の屋台を見つけた。

矢嶋　お、いい雰囲気ですね。一杯クイツとやってきましょうよ

黒田　いいな。・・・おっと美咲君、君は飲むの禁止だ

美咲　えーっ！そりやないですよ班長！

矢嶋　班長っていうと小学校を思い出すね

永森　あ、分かります。　君班長なんだからこれやっというて！

とか。　班長って結局雑用係なんですよね

矢嶋　大人社会にも通ずるものがありますよね・・・ふふっ

黒田　ここにその班長がいるのだが何か言ったか？

矢嶋・永森　いえ！何も

黒田　よし、寄ってくか。今日は私の奢りだ

永森　ヒャッホー！太っ腹！

矢嶋　太っ腹！痩せてるけど太っ腹！もう骨みただけけど太っ腹！

黒田　・・・・・・あれ？美咲君は？

矢嶋　もう入っていききましたけど

黒田　・・・・オイ

美咲さんはさつさと一杯引っかけていた。

美咲　プハアッ！生きててよかったあ！

黒田　うおい！飲むなつつつたろうが！

美咲　え、何の事です？

黒田　・・・

30分後

美咲　大体ねえ・・・分かってんのお？

矢嶋　分かってる・・・分かってますともハイ

美咲　いんや！お前は分かってない！そこに直れ！

矢嶋　ヒヤア

さらに30分後

おやじ　もう店じまいしたいんだけどねえ

美咲　どいつもこいつも分かってなあああいつ！

そう叫んだ瞬間、俺は確かに見た。美咲さんの体が赤く光るのを。

永森　こ、これぞ正しく・・・界　拳・・・10倍だあああつ！

矢嶋・黒田・おやじ　なにいいいつ！？

美咲　うおおおりヤアアッ！

何キ口あるか分からない屋台が軽々と持ち上がっていく。

矢嶋　おやじさん！逃げて！早く！

おやじ　どわあああ！

避難するおやじさん。

美咲　ダアアアアッ！

次の瞬間。

屋台は空高く舞い上がり・・・
グワシャンッ・・・！
俺たちの目の前で粉々になった。

敦司 そんなことしてクビにならないんですかあの人はっ！？
永森兄 いや、弁償したから。屋台
敦司 弁償！？あの何気にセレブ？
永森兄 いや、黒田さんの実家が大工でさ。まあそのツテでなんとかなった。

敦司 ひゃあ
永森弟 兄さん、その人は・・・人類？

西岡 ヒト科サイ 人じゃね？

全員 アハハハハ

ガシャーン

全員 ……！？

美咲 悪いごはいねがああっ！

敦司・永森兄・西岡 出たあああああっ！

ドタタタタ・・・

永森弟 あ・・・皆・・・待ってよ

美咲 あ、可愛い子発見 ちよっとついてきなさい

永森弟 へ？
ドンッ

美咲　　やっぱり夏はビールでしょ。ほら、飲む？

永森弟　　い、いやあの、未成年なんで・・・（みんなあ、僕を置いてくなんてひどいよおお・・・）

翌日の昼頃、永森少年が自宅前で目にものすごいクマをつけて倒れているのを近所のオバチャンが発見したという

21話 機械も人間も、壊れたらまず叩いてみるべし（後書き）

21話、ようやく投稿できました。22話がまた長くなってしまった上に、途中思い切りシナリオ変換したのでかなり遅くなりました。23話が完成したら、22話を投稿したいと思います。　　）

お知らせ　　18話のまえがきに間違いを発見しましたので訂正し、ついでに全文書き換えました。そんなに大きな間違いではありませんが、読んでいただいた方の中には変に思った方もいたかもしれません。申し訳ありませんでした。　　次回22話は矢嶋編となります。お楽しみに

22話 矢嶋編 毒蠅暴走紀present by 小田口猛(前書き)

人物紹介 No.008 大川内 碧 神奈川県内、智林市の近くの市にある、私立王条女子学院というお嬢様学校の学生。3年生。叔父がとんでもない大企業の代表取締役。昔は敦司の地元の近くに住んでいたが、何らかの事情で今の家に移った。だが、そこにある叔母さんの食堂を手伝ったり、友人である早紀と遊びに行ったりと、まだ敦司の地元へちよくちよく足を運んでいる。

22話 矢嶋編 毒虻暴走記 present by 小田口猛

「はぁ・・・」

僕は仮眠室でゴロリと横になっていた。

ここは警視庁。捜査一課の仮眠室である。

「大丈夫ですか」

小田口さんが心配そうに言った。

「いやあ、ちよつと・・・疲れただけです」

「昨日も俺がのんきに寝てる間、1人で捜査を続け、今日だってあの従業員・・・水谷志保里さんを探して一睡もしないでかけずり回って」

「疲れない方がおかしいよねえ」

小田口さんの横にひよつこり顔を出した由希が楽しそうに言う。

昨日今日と、寝ないで僕にしては頑張ったものだと思う。体は休息を訴えてるし、頭だってガタガタだ。

必死の捜査にも関わらず収穫はまるでなし。

唯一ともいえる手がかりは、志保里さんのものと思われる血液の他に、正体不明の血液、それに皮膚の破片が残っていたことだ。だが。

血液型はAB型。警察資料の咲元組の資料の中に、AB型の組員は記載されていない。

そして、咲元組の前科者リストの中に、その皮膚に一致する細胞を持つ者もいなかった。

咲元組にだって新規参入の組員はたくさんいる。それが上の考え。しかし、僕はやらなきゃいけなかった。

あの男・・・坂井は死して僕に志保里という女性を守りたいという想いを遺した。

僕はそれに応える義務がある。

僕が彼に出来ることは志保里さんを何が何でも救出すること。

それが僕らに犯人の手がかりを残そうとして死んでいった男へのせめてもの礼儀だ。

「・・・すみません、1時間ほど仮眠をとったら捜査を再開します。それまでは休んでいてください」

「しかし・・・」

小田口さんが何か言いかけたが僕は首を振ってそれを制す。

「1時間あれば十分です。僕は、志保里さんを助けなければならぬ」

「でも」

「大丈夫です」

大丈夫な訳がない。

頭はクラクラ、眠すぎて気持ち悪い。

「じゃ、ちよつと寝ます。小田口さんも由希も休んで下さい」

「・・・」

「私も、休んだ方がいいと思うけどな」

いきなり背後から声が聞こえた。

「美咲さん！」

「よ、おひさー」

「風邪は治ったんですか？」

「んー、大変だったよ。ミニストップの飲食コーナーでかわいい子と酒飲んでから何も覚えてないんだよなあ。気が付いたら玄関で寝てただけど・・・」

はあ、まったくこの人は・・・。

そのかわいい子がとんでもなく哀れになる。

「そんなことやってるから風邪ひくんです。まったく学習能力がないっていうかなんていうか」

「今グツタリしてる人が言っても説得力無いけどね・・・。そうそう、休みなよ、ゆーちゃん」

「・・・嫌です」

僕はきつぱりと言った。

「これは、僕の責任なんです。僕は、何としても志保里さんを見つけて出し、犯人を捕まえなくてはいけないんです」

「ゆーくん……」

由希が僕を見つめる。

「うるさいな、大丈夫って言ってるだろ？」

「でも」

「しつこいな！大丈夫って言ったら大丈夫なんだよ！」

ついに怒鳴ってしまった。由希に本気で怒鳴るのも、初めてのこともしれない。

「……ごめん、なんか気が立つちゃって……らしくないな、クソッ」

僕はため息をつく。

気が立つてるのは疲れてるからだけではないことに気付いた。

坂井をみすみす死なせてしまったこと、志保里さん救出が間に合わなかったこと。

あまり気にしないようにしてたが、やはりそれへの悔いが心の中に巣くっていた。

自分への無力感。怒り。

それをぶつけてしまったことにまた後悔する。

ハハハ、無限ループだ。

自嘲した。

「もういい……僕は休んでられないんだ」

「ゆーちゃん、仲間を信頼してないんだ？」

「え？」

「仲間が信頼出来ないから任せることができないんでしょ？」

「ち、違うつ！僕は……僕はみんなを信頼してる！でも……」

「頼る時に仲間に頼ることができないで、何が信頼だっ！」

「……」

「そうやって抱え込まれた方の身にもなって考えてみなよ。……寂しいんだよ？由希ちゃんだって、その彼だって」

「・・・ッ！」

固まった。

そんなこと考えもしなかった。僕は、自分のことしか考えず、勝手に責任を感じて抱え込み、1人ヒーロー気取りだったのかもしれない。

「頼るときは頼る。それがデキル男ってやつだよ」

そう言つて、美咲さんはウィンクした。

思わず笑みがこぼれる。

「ん、どしたの？」

「・・・あーあ！美咲さんに説教されるなんて、僕もヤキが回ったもんだな」

「・・・それどういう意味？」

「あはは・・・」

笑つてごまかす。

「・・・ま！由希ちゃんと彼だけなら心許ないかもしれないケドさ。私も手伝つてあげるから安心して駄眠を貪りなさい」

苦笑する。

「美咲さん、ありがとうございました」

僕は頭を深々と下げた。

「・・・目を覚まさせてくれて」

「・・・庁内屈指の皮肉屋矢嶋祐一が素直にお礼を言うなんて、明日は雨かな？」

「それだけ感謝してるってことですよ」

「ちなみに明日は晴れらしいですよ」

と、由希。

「だけど由希ちゃんも可哀想に、また捜査に引つ張り出されたのね」
「ホント。いい加減にして欲しいですよね」

「ま、待てい！お前のケーキのせいで僕の財布の中には氷河期が到来してるってのに、なんだそりゃ」

「こいつホントにケチだからね。前なんかおでんの屋台壊れちゃっ

たときも、頑なに弁償拒んで、私1人に押し付けたんだから」

「いやいやいや！あれは美咲さんの自業自得も甚だしいでしょ！？」

「なんにしても思いやりが足りないよね」

「ねー」

「・・・」

泣きたくなつた。

唯一、小田口さんが憐れみの目を向けた。

「はあ、つたく女共はこれだから」

「でも・・・お噂はかねがね聞いておりましたが、お綺麗ですね」

小田口さん。鼻の下伸びてる。

そっぴい、最初本庁から美咲さんが来るっていうの聞いてやったら
楽しみにしてたっけ。

「そう？」

美咲さんはまんざらでもない様子。

「綺麗な花にはトゲがあるらしいですよ」

ガンッ！

「ブホアッ！」

ボソリと言うと、肘鉄が額を直撃した。

痛い。

脳が揺れる。

頭がクラクラする。

てかお前ら僕をいじめに來たのか。休ませてくれるどころか肘鉄も
らっちゃったんだけどそこんとこどう思う？という旨を伝えたところ、3人揃って

「あ、忘れてた」

おい。

「それじゃま、矢嶋君もうるさいしさつさと行きますかねえ」

美咲さんはヤレヤレといった様子で席を立つ。

ム力。

そのまま仮眠室を後にする。

「・・・あ、そうそう。小田口さん」

僕は皆に続き仮眠室を立ち去ろうとする小田口さんに声をかける。

「はい？」

「何があっても、彼女に酒を飲ませないこと。・・・命が惜しかったら」

「は、はあ・・・」

釈然としない様子で首を傾げる小田口さん。

そして慌てたように駆けていった。

・・・はあ。つて、あ。

もう1つ言うことを忘れていた。

まあいいか。メールしとこ。

「ふう」

メールを終えて一息。

これでやるべきことは大体やったかな。

後は仲間を信じるのみ、か。

さっきの嫌なイライラは、どこかになりを潜めていた。

「・・・こりやみんなに感謝かな」

呟いた途端、急激な眠気が僕を襲う。

そのままゆっくりと眠りに包まれていった。

仮眠室を後にし、俺たちは廊下を歩いていった。

両手に花だ。悪い気はしない。

それにどっちも美人だし。にしても、毒蝮さん、矢嶋さんが言うほど悪い人には見えないし、それでこんなにも美人じゃパーフェクトじゃないか？

「ねえ毒蝮ざつ！？」

次の瞬間鼻っ柱に裏拳を叩き込まれた。

「がつ！？ぐうう・・・」

鼻を抑える。生暖かいものが鼻先を伝った。

「美咲さんと呼ぶときは、名前で呼ばなくちゃダメです」

「な、なんで・・・？」

「察しろ、だそうです」

「・・・？」

試しに呼んでみる。

「・・・み、みみ美咲さん？」

「なに？」

満面の笑み。

「・・・？」

訳が分からない。

まあとにかく、美咲さんに名字呼びは禁止と。

俺は、まだ吹き出る鼻血と引き換えに、それを学んだのだった。

1人しみじみしてる俺に美咲さんが声をかける。

「ほら、さっさと車回す。その東高間田署に行くよ！」

「・・・東玉川署です」

ツツコミも空しく、駐車場に追いやられた。

「さて・・・」

東玉川署に着いて、俺らは地図とにらめっこしていた。

周りの東玉川署員も似たようなものだ。

「車の中で資料にはざっと目を通したっ。早速捜査開始といきたいとこだけど・・・今までは矢嶋君指揮のもと、どういう捜査をしたの？」

「手がかりが無い以上片っ端から。玉川管内のそういった人物が入りしそうな場所をしらみ潰しに探しましてね、見つからないんで捜索範囲を広げるところでした」

「ふーん・・・」

「でも東京都内片っ端探すとなると、とても人員が足りませんよ」

「ふふん、東京都内なんて調べる必要ないよ」

美咲さんはにこやかに笑った。

「そ、そりやどういう・・・」

「ヒント。携帯電話」

「け、けーたい？」

「ふわああ。そういえば私、眠くて仮眠室行ってたんだっけ。寝よーっと」

机につっぱす。

眠くても眠れない東玉川署員の方々が鋭い目線で刺してくる。

俺と由希さんは小さくなって考えを巡らせた。

「・・・あーっ、わかんねえっ」

頭を働かせるためにポケットからタバコを出して口にくわえ
また全員にジロリと睨まれた。

なんやねん、一体。

って、あつ。

そういえば、昨今の嫌煙の波に飲まれ、ついにこの東玉川署も禁煙
となったのだった。

俺はそそくさと由希さんに待合室でタバコを吸うと告げて、席を立
つ。

冷たい目線が追ってくる。皆さん、相当お疲れでイライラしてるよ
うで。

「カルシウム摂れやあつ！」

そう捨て台詞を残して俺はこの場を後にした。

いきなり叫び出した俺に、由希さんを含め、東玉川署員はみんなポ
カンと口を開けて俺の退出を見送った。

待合室にて。

1人タバコをくすぶらせる俺。

ああ、ハードボイルドな感じ・・・って、俺には無理だな、うん。

さて、美咲さんのヒント、携帯電話。

携帯をどう使う？

というか使うのは誰の携帯だ？

・・・志保里さんの携帯？　そうか。志保里さんの携帯を電話会

社に問い合わせて居場所を特定すればいいんだ。

いや、しかし。

それには携帯番号が必要だ。

あいにく、警察には志保里さんの携帯電話の番号の情報はない。

ない？

本当に無いのだろうか。

志保里さんの携帯番号を知る方法・・・。

いや、発想を転換しよう。番号を知ってる人は誰だ？志保里さんの携帯番号を知ってる人・・・。

あ。

いた。

気付いた時には、俺は全力で走り始めていた。

「美咲さんっ」

勢いよくドアを開けて駆け込む。

また冷たい視線が襲うが気にしない。

美咲さんは起きていた。

不機嫌そうに携帯をいじっている。

「あ、小田口さん、おかえりなさい」

「どしたの？コレ」

由希さんはさあ、と肩をすくめた。

「さっきムクツて起き上がったて、携帯取り出してからあの調子」

「あ、帰ってたの。小田口君」

「は、はあ」

「で、分かった？」

「あ、はい」

「はぁ・・・せっかくゆーちゃんに勝てたって思ったのになぁ」

口を尖らせてぶつぶつ言いながら、携帯を見せてくる。

「あ・・・」

そこには、俺が今さっき気付いた方法。すなわち、坂井の携帯から志保里さんの番号を調べだし、電話会社に問い合わせ場所を特定するというやり方が書かれたメールがあった。

差出人はゆーちゃん（矢嶋祐一）。

なるほど、それで美咲さんは不機嫌だったのか。

美咲さんはよっこらせと立ち上がった。

「いつまでもぐちぐち言っても仕方ないか。さあ小田口君、やることはわかってるわね？」

「アイアイサーッ！」

俺はまた部屋を飛び出した。

証拠物品として保管されている坂井の携帯を借りに行くためである。

俺はやる気に燃えていた。やる気があると仕事の効率もいい。

坂井の携帯を借りたあと、俺は、もう志保里さんの居場所を特定するステップまで至っていた。「志保里さんの居場所が分かりました！西東京です！西東京！」

西東京はその名の通り東京の西側に位置する。

東京とはいっても田舎町だ。

「あ、おかえりなさい。小田口さん」

「うん。それよ」

「おつつそおい！」

美咲さんの怒声が飛んで、俺は首をすくめた。

「なにやるべきか分かってるって言って待って見たら・・・あんたのやるべきことはやる気になった私を称えるコーヒーを淹れてくることでしょうかあ！」

んなバカな。

俺のやる気は？努力は？

だが体育会系で青春を過ごした俺には一種の戒訓が頭をよぎっていた。

一、目上の人には絶対服従。

「すいやせんしたああつ！」

勢いよく頭を下げる。

青春時代はこの数十倍の理不尽さ極まる命令にも耐え抜いたのだ。

「よろしい。まあそれは冗談として・・・」

冗談かああつ！

俺は思いつ切りずっこけた。

「西東京か・・・。山奥の別荘や今は使われてない倉庫なんかが狙い目ね」

スクツと立ち上がる。

俺はポカンと美咲さんを見送った。

昨日の会議で井原さんが立っていた台に乗る。

「ちよつ、美咲さん、なに・・・」

「聞けえツ！東高間田署員諸君！」

「美咲さあん・・・東玉川ですう・・・」

後ろで由希さんが小さな声で恥ずかしそうに訂正する。

署員は全員呆気にとられている。

それにも気にせず、美咲さんは続けた。

「水谷志保里の居場所は西東京！その人気の無い倉庫や廃ビルなんかを徹底的に調査する！」

バン！と勢いよく机を叩く。

「聞き込み班！付近の聞き込みから西東京の拡大地図に怪しい場所をマーク。調査班！そのマークされた場所を徹底的に調べる。犯人は複数が予想される。調査班は3人以上で動くこと！それに場合によつて応援を呼んでも構わない！」

次々と指示を飛ばす。その目は真剣そのものであり、俺は少し気圧された。

「タイムリミットは夜9時！各員！捜査開始ッ！」

「は・・・ハッ！」

署員に思わず返事をさせてしまう何かが美咲さんの迫力にはあった。・・・カリスマ性？

署員がドタバタと捜査に乗り出すと、美咲さんはよっこらせと椅子に座った。

「お疲れ様です」

「や」

軽く片手を挙げると俺が淹れてきたコーヒーを受け取った。

「ふう・・・。よし今日の仕事終わりっ！」

「い、いやいやいや！これから始まるんでしょうが！」

俺が慌ててつつこむと、美咲さんは口を尖らせた。

「にしても、驚きました。美咲さんが女性管理官だと言っても、誰も疑いませんよ」

「ホントホント」

俺と由希さんは口々に美咲さんを褒め称える。

「まあ・・・ね。ゆーちゃんに偉そうなこと言った手前、真面目にやらない訳にはいかなくなっちゃったからね。せっかくだからゆーちゃんが目覚める前に居場所を突き止めようと思って」

「あ、それでタイムリミットは9時とか言っただんですか」

納得がいった。さっきの話で、タイムリミットなんてものが出てきて一体何かと思っただら。

「ん？あ、いやいや」

美咲さんは笑って首を振る。

「それは関係ないよ」

「関係ない？そりやどいう・・・」

「私は9時から見たいテレビがあるの」
ずっこけた。

さつきから美咲さんの後ろで、やーすごい、だの、人間って分からないもんだなあ、だのしきりに感心していた由希さんも同様だ。

「あ、あのねえ」

「小田口君見てない？『ロンバケ』」

「ろ、『ロンバケ』？」

ずいぶんと古いドラマが出てきたものだ。

「うん、『ロンドンで化けちゃった』略してロンバケ」

「はえ？なんスカそれは？」

「ロンドンに飛んできたお岩の幽霊が、ロンドンに留学していた秀才の日本人留学生と鉢合わせるんだけど、その日本人はなんと伊右衛門の生まれ変わりなのよねえ」

「・・・なんスカその無茶苦茶なストーリー」

「あ、あたしも見てる、それ」

「いやまず場所がロンドンである必要がないだろ」

「違う！ロンドンだからこそ・・・」

「・・・」

「・・・」

『ロンバケ』談義を終え、俺らが捜査に乗り出すのは1時間後のことである。

「ぬあゝっ、飽きたあ。ジュース飲みたゝい」

廃ビル、廃墟と何件か回った辺りで助手席の美咲さんが足をダランと投げ出して言った。

時刻は夜7時を回るところ。

さすがに疲労が溜まってきた。

「子供ツスかあんたは」

「疲れたあ、ビール飲みたゝい」

「いや子供呼ばわりされたからってビールに変えても、根本は変わってませんから。いやむしろひどくなってる。……ってか美咲さん、シートベルトちゃんとしてください！」

「えー、めんどっちい」

俺は、ブーブー言う美咲さんを見殺し、運転に集中することにした。
「次は……この先の山の上ですね」

由希さんが地図を見ながら言った。

「山の上え！？・・・もういい。あんただけで行ってきて」

「美咲さん！」

由希さんがたしなめる。

「うー、分かったわよぉ・・・ブツブツ・・・」

さつきからこの調子だ。

あのカリスマの片鱗は一体どこに消えたのか。

「・・・うーん、車じゃあここまでしかいけませんね」

美咲さんの強い押しもあつて、車が走るような道ではないところを無理矢理走ってきたが（俺はこの車は黒田さんの、とかいう話だったので反対したのだが、美咲さんが、黒田あ？知るかあ！とわめき散らしたのでやむなくそうなった）さすがにもう無理だろう。先は獣道といった感じだ。

「まだまだあ！」

意地でも山道を歩きたくない美咲さん。

「いい加減にして下さい。死にますよ？」

「うるさい！どきなさい小田口君。私が本物のドライビングテクニクつてやつを見せてあげる」

「え、ええ？」

あれよあれよという間に美咲さんと席をチェンジする。というよりされた。

まさかこの人本気でこの獣道を車で登るつもりか？

いやヤバイって。ジープやランドクルーザーだって危ないような獣道だぞ？

むしろ普通の乗用車で今までの山道を登れただけでも勲章ものなのに。

不安になつて後ろを見ると、由希さんが真つ青な顔で震えている。

やつぱ怖いよなあそりゃあ。

「止めて！小田口さんっ！」

「え」

「美咲さんのドライビングは、死人が出る！」

「へ？」

「し、洒落にならない……。あ、あたしはここで消えるから！じやつ！」

「え？ちよつと……。」

止める間もなく由希さんは消えた。

「よつしやあ！いつくぜえええっ！」

美咲さんが吠える。

グギャギャキャキャキャキャッ！

タイヤが変な音を立てて回り出す。

「や、ヤバいッスって美咲さん！」

「おらおらあ」

ブオンブオンブオンブブブガガガッ！

エンジンまで変な音を奏でる。

と、信じられないことにあの獣道をただの乗用車が登り始めた。

「んなアホなああああっ！」

俺の絶叫も空しく、黒田さんの愛車は傾斜45度の体制で走り始める。

タイヤは軋み、エンジンは悲鳴をあげる。

そんなのお構い無しの美咲さん。

「いつけえええ！」

ノロノロだが、確かに進んでいる。

ただ、これだと普通に歩いていてもさほど速度的には変わらない気がする。

・・・まあ言える雰囲気ではないが。

不意に明かりが見えてきた。

目指す山荘だろうか。

「ビンゴッスよ美咲さん！あの山荘は今は使われてないって話です！」

「よーし！全速前進！」

美咲さんはさらに強くアクセルを踏み込んだ。

グワァ・・・ガガガッ！キュルキュルキュルキュル！

エンジンの音が怪しい甲高い音になってきた。

だが、本当に獣道を超え、山荘にたどり着いてしまった現実に、俺はそんなことを気にする余裕がないくらいエキサイトしはじめていた。

「すげえ！もう着いちゃうよ！行けえっ！ゴーゴー！」

「ゴーゴー！」

2人して叫びながら車は山荘に近づいていく。

山荘はもう目の前。テンションは最高潮だ。

プスッ

空気の抜けるような音。

それと共に車はみるみる速度を失っていく。

そして遂にとま・・・らなかった。

場所は獣道。そして坂道。ズズズズズと嫌な音を立てながら少しずつすり落ちていく。

すぐ後ろにはでっかい松の木。

「小田口君！緊急回避ッ！」

「ラジャッ！」

俺と美咲さんは同時に車を飛び出した。

そして車は、松の木に正面衝突（正しくは後面衝突）し、力尽きた。

「ありがとう、君の犠牲は忘れない」

俺は力尽きた戦友に黙祷を捧げた。

横を見ると、美咲さんも手を合わせていた。

空には一面に星が輝いている。

さすがは西東京。東京といいつつ田舎だということだけのことはある。

あ、流れ星。

ああ、我らが戦友も今星に

「よし、行こうか」

美咲さん、ドライだ。

「オッス」

俺らは明かりがとうとうと輝く山荘の玄関に歩を進めた。山荘は口グハウス仕様の小さなものだった。

ドアベルはない。

「すみま」

「シッ！」

扉を叩こうとしたところ、美咲さんに止められた。

「ここは強行突破でしょっ」

小声で俺に言う。

「っていつても、令状も無いのに踏み込んだら問題ッスよ」

俺も小声で応じる。

途端に美咲さんは笑顔を浮かべた。

「規則ってね、破るためにあるの」

その言葉と、美咲さんが動くのは同時だった。

俺が止める間もなく美咲さんの足は山荘のドアを蹴破った。

バン！と激しい音がし、ドアが吹っ飛ぶ。

中は意外に広がった。

テーブルでビール片手にトランプ（ポーカーだろうか。チップもばらまかれていた）をしていた4人の男が呆気にとられ、ポカンとドアを蹴破った侵入者を見た。

どうも若い。未成年飲酒だ。

「な、なんなんだてめえらはっ！」

1人が精一杯ドスをきかせた声で叫ぶ。

「警察だっ！」

俺が叫んだ瞬間、胸ポケットから電子音が響いた。

携帯？まったく、締まらないなあ・・・。

とはいってもこの状態で呑気に携帯に出てる訳にもいかない。

その間に美咲さんが前に出る。

固まって動けない4人をゆっくりと見回した。

と、その時脱兎の如く駆け出した1人が、奥の部屋へ叫んだ。

「警察！警察です！」

「チッ！」

俺は舌打ちをすると叫んだ1人の首根っこを思い切り掴み、腹にパンチを叩き込んだ。

その瞬間奥の部屋のドアが開き、男が2人俺の脇をすり抜けた。

逃げられる！

「美咲さんっ！」

とっさに美咲さんを見ると、美咲さんはトランプをやっていた3人に囲まれていた。

美咲さんは圧倒的なパワー、そしてスピードで3人を瞬く間にぶちのめした。

が、その隙に2人は逃げてしまった。もう追い付かない。それよりも。

ここに、水谷志保里はいるのだろうか。
俺は奥の部屋へと入った。

「な・・・」

そこへ入った俺は絶句していた。

中にはベッドが1つ。その上に、縛られて、血だらけで半裸の女性が1人。

慌ててズボンをはこうとしている全裸同然の男が3人。

事にはまだ及んでいなかったようだが、何をしようとしていたのかは十分に分かった。

「・・・」

吐き気がした。

「・・・誰？」

女性が弱々しく尋ねる。

「警察です。水谷志保里さんですね？」

女性は小さく頷いた。

俺は安心させるために精一杯の笑みを浮かべていたが、ちゃんと笑えたかどうか自信がない。嫌悪感と怒りで、はらわたが煮えくり返りそうになっていたからだ。

耐えきれなくなって男3人を睨む。

「てめえら」

「ずいぶんと卑劣な真似するじゃない」

後ろから声が聞こえた。

さっきまでとは似ても似つかないような静かで、深い怒り。
美咲さんだ。

「あんたたち、覚悟はできてんの？」

そう言うや否や、美咲さんは1人に目にも止まらない速さで近づき、
顔面にストリートを決めた。

血飛沫を上げて1人が倒れる。

その間に、俺も1人のボディにパンチを入れて沈めた。

あと1人。

その1人に美咲さんがおどりかかる。

パンツ！

乾いた音が響いた。

さっきまで何も持ってなかったはずの男は黒光りする拳銃を持って
いた。

美咲さんが崩れ落ちる。

真っ赤な血だまりが広がった。

「イヤーツ！」

志保里さんが叫ぶ。

「美咲さんっ！」

「・・・くう・・・！」

急所ではない。足を撃たれたようだ。

「てめえ！」

「ううう動くなあ！」

殴りかかろうとした俺を、男の拳銃が封じた。

人を撃ったことに動揺しているのか、口調が変わる。

いや、こいつイってやがるな。

シンナーで歯はぼろぼろ。注射のしすぎか、左腕が変に腫れている。
目は焦点を合わせていない。

典型的な薬中だ。

「電話をよこせええ」

俺は胸ポケットの携帯を取り出す。

気が付かなかつたが、何回も着信があったようだ。

また電子音になる。

「うるさい」

男は携帯を撃ち抜いた。

あー、俺の携帯……。

俺は物言わぬ塊と化した携帯に、本日2回目の黙祷を捧げた。

まだ心には余裕があることに安心した。ビビってたら助かる命も助からない。

「おおお俺はなあ！ま、まだままだ捕まる訳にはいい、いかないのよお！」

男は窓を開ける。

そこから逃げるつもりなのか。

背を向ける一瞬に飛びかろうと心に決める。

「つ、つつ捕まれて言われたけどお！捕まるかってんだあ！」

気を引く発言。

「捕まれて言われた？どういうことだ？」

「しい、知らねーよお！ハア、ハア、俺はあ！薬がいつぱああい貰えるってえんでえ！手伝ってやったあだけだあああ」

「誰に言われた？」

銃を向けられているのも忘れ、俺は食いついた。

「い、いい、言ったら殺すってよおお！あ、あいいつ本気だあ！」

いろいろ聞いている内に結構時間が経った。

美咲さんをふと見ると血だまりはかなり大きくなっていた。

大した怪我じゃないにしても、このままじゃ危険かもしれない。

「美咲さん……」

「ハア、ハア……ダメね。血と一緒に力が抜けてく感じ」

力無く笑う美咲さん。

このままじゃまずい。なんとかしなければ。

「なな、なな何2人してしゃべっててるるうんだあ！余裕がまああしてんじゃああね、ねねねぞお！」

銃口を俺の頭に押し付けた。

そのまま俺は突き飛ばされた。

思い切り柱に頭を打ちつけ、目から火が出た。

「ぐう・・・」

「大丈夫！？オダッチ！」

床に倒れている美咲さんが叫ぶ。

「・・・オダッチて」

「や、今考えた」

血をダラダラさせながら美咲さんはニヤツと笑った。まったく、この男じゃないが、余裕がましてんじゃねーよ・・・。

といいつつ、それにより俺もまた落ち着きを取り戻せたのだが。

「ウワアアアッ！」

男が突然咆哮した。

「ど、どいつもこいつももおお！お前らも！檜崎とかいったかああ！ヤツもお！俺をな、なな舐めやがってえ！」

・・・檜崎？誰だ？
なな

「おい、檜崎って」

「・・・」

と、突然饒舌だった男が黙りこくった。

「・・・い、いけねえええ。しゃ、しゃべっちゃいけないことをしゃべり過ぎたなあ・・・」

男は俺を見た。

「や、やややっぱ殺しとくしかねえかああ」

カチャリと銃口をこちらに向けた。

来る。

考える。考える。この状況で奴をとつちめる方法を・・・タバコが吸えれば頭も回るのだが。

まさかこいつがご親切にもタバコを吸わせてくれるはずもない。
今の俺にはこれしか考えられない。

一か八か。

俺は勝負に出た。

素早く手をポケットの中に滑り込ませ、その中の物を力任せに奴に向かつて投げつけた。

それは真っ直ぐに男のこめかみにぶち当たった。

ライター。

それも自慢のジッポだった。

初任給で買った、十萬くらいする高級品で、あれが奴の血で汚れるのは心苦しいが、背に腹は変えられない。

「グウツ！」

こめかみを押さえた男に俺は飛びかかる。

俺は奴に全体重をかけるように押し倒すと、そのまま銃をもつ右手を押さえつけた。

取り押さえた。

俺は安堵した。

が。

腹に衝撃。

男の膝げりが腹部を直撃していた。

「ウグツ・・・」

痛みで一瞬息ができなくなる。

「オダツチ！」

いつの間にか形勢は逆転していた。

見上げているのは俺の方。見下ろす男の顔がニヤリと歪んだ。
銃口がゆっくりと持ち上がる。

やられる！

俺は迎えるであろう衝撃を覚悟し、目を瞑った。

「・・・」

永遠ともいえる時間。

銃声が響いた。

（裏コーナー）

西岡 はい。てなわけで裏コーナー！

敦司 毎度毎度思うよ。空気読め！

西岡 っていつてもこれがおれらの仕事だし？

敦司 ……まあそうなんだけど

西岡 今日は思ったより本編が長くなってしまったという都合のため、ゲスト無しのショートバージョンでお送りするそうだよ！

敦司 ……なんで他人事なんだよ？

西岡 や、だって台本にそう書いてあるし

敦司 ……僕それもらってないんだよなあ

西岡 まあまあ、それはさておき！小田口さん死んじやったなあ
敦司 待てって。まだ死んだとは書かれてないだろ

西岡 ……え？助かるの？

敦司 そんなん知らんわ

西岡 ははあ、助かるんだな？

敦司 知らんってば……まあそここのところも次のお楽しみ
こと

西岡 てかさあ、あの幽霊どこ行っただろうね。車から逃げて

それからの行方が分らない

敦司 それもまあ次回のお楽しみ

西岡 絶体絶命の危機に陥った小田口と美咲！彼らの運命やいかに！

敦司 乞うご期待！……ってなわけで矢嶋編の宣伝が終わったところで

西岡 なに？

敦司 問題は敦司編なわけですよ

西岡 うわ、もういいよ。お前この前階段から落ちただけじゃねーかよ

敦司 玄関先で狂ったお前に言われたくないな

西岡 いずれにしても……

敦司 なーんかシヨボいよな……いや僕は僕で大事なわけだけどさ

西岡 ストーリーの魅力に差がある気がする。差別だ差別

敦司 まあいまのところもったりのんびり系が敦司編、バリバリサスペンス系が矢嶋編って感じかな

西岡 もったり嫌あー。もっとカッコいいことしたいー

敦司 ま、いつかは僕らもそうなるだろうが……でもお前なんか真っ先に死にそうだよな

西岡 うおいつ。縁起でもないこと言うんじゃないっ！

敦司 まあまあ。のんびり結構。それが日常ってやつさ

西岡 なんかいいいこと言った風にして誤魔化そうったってそうはいかねーぞ敦司。謝れコラ。てか日常離れしつつあるお前がそんな

こと言っても説得力無いな

敦司 めんごめんご

西岡 こいつは……

敦司 まあさておき、僕らも頑張らましようや。矢嶋さんには負けてられないからね

西岡 俺もお前にゃ負けねーぞ敦司い

敦司 な、なんでお前が僕に敵意むき出しなワケ？

西岡 まだ俺は主人公の座を諦めたわけじゃねーからな・・・

敦司 諦めろよ！

西岡 なーに、ルイ ジだって主役になれたんだ。俺だって・・・

敦司 はいはい。馬鹿はほっといて・・・次回は矢嶋編、そのあ
とは僕らの話が続きます。お楽しみに。それでは皆さん、ごきげん
よう

西岡 ルイ ジだって・・・ルイ ジだって・・・あり？誰もい
ない？・・・フッフ、ハーハハハ！ついに、ついに俺様の時代がや
つてき
了

22話 矢嶋編 毒蝮暴走記 p r e s e n t by 小田口猛（後書き）

えー、今ちよつと落ち込んでます。というのも、今回赤点をと……
いえいえ。そういうことではなく。この前ある友人……といえる
か微妙なやつが書いたやらせに等しい感想を消してみました。とい
うのも、評価のいい感想があるせいで、なかなか批評が書きにくか
ったりするのかな、とか思ったからです。ただ、それが大失敗。あ
れを消したら総合評価ががた落ち。閲覧者数も目に見えて落ちてし
まりました。評価値の重要さを痛感した次第です。おい、例の友人
といえるか微妙なやつ！もう一回書いて？（笑）嘘です。皆様から
の評価・感想をお待ちしてます。

23話 矢嶋編 救出戦（前書き）

長い間投稿しないでえらいすみませんでした。いやちよつと軽い投稿拒否にかかって・・・って、つまらないツスね。すみません。夏休みから今にかけてなかなか忙しく、いや、今も忙しいんですが、「この小説は3ヶ月以上更新されていないため、更新されないおそれがあります」とか書かれるのイヤだったので投稿しときます（笑）小説自体は進み、今25話（あれ？26話？）書いてます。15000文字の大台も突破し、ボリューム大きいです。読むのタルい？すみません。てなわけで、次回から一個2500文字くらいで区切るうと思います。人物紹介は今回お休みですm（――）m

23話 矢嶋編 救出戦

「うおおおっ」

美咲が咆哮し、車は獣道を進み始めた。

ホントに行っちゃったよ。

それを呆れて眺める影が1つ。由希である。

あんなことやってうつかり死んでみれば、幽霊である由希の存在は消えてしまう。それを恐れ、由希は早々に退避したわけだが。

しっかしなあ・・・。

美咲のドライビングテクニックの恐ろしさを知っている由希だったが、その腕の良さもまた知っていた。

その裏付けとして、車はぐんぐん獣道を進む。

由希は少し感心してそれを眺めていた。

美咲のドライビングテクニックに感嘆したのは由希だけではないらしく、最初は難色を示していた小田口も、今や

「ゴーゴー！」

なんて美咲と一緒に叫んでいる。

おい。

それはさておき、由希はやることなくってしまったわけだ。

「そうだ」

ちよっと考えたあと、由希は煙のように消え去った。

「おい、起きろって」

うーん・・・誰だ？

美咲さん？由希？小田口さん？永森さん？

誰でもいいや。

「・・・あと5分」

「3回目のあと5分だ。いい加減にしろ」

「・・・む」

「そんなに起きないと、お前が小学4年生の頃、お前が夜中1人でトイレに行くとき、天井裏に忍び込んだ俺が飛び出したらチビつちやったことみんなに言いふらすぞ」

ガバツ！

慌てて飛び起きる。

「その本人すら忘れた恥ずかしい過去をチマチマと覚えてるのは幸兄か」

「よお、もう夜だぜ」

「ああ？マジ・・・？あー、すっごい寝ちゃったなあ」

僕はうーんと伸びをする。小田口さんたちはしっかりやっているだろうか。

「まあ俺としても疲労困憊の奴を起こすのは忍びなかったが・・・事態が事態だ」

「事態？」

僕は首を傾げた。

「ああ、咲元組の若頭筆頭、あのファイルにあった奴だ。名前は鹿波栄一郎^{なみ}。そいつが、重要参考人として任意同行を受けた」

「任意・・・同行？」

この場合の任意同行はよっぼどのが無ければ逮捕と同義となる。「・・・なんで？血液から何から、咲元組を示す証拠はあのファイ

ル以外何も無いんだよ?」

「・・・上層部のオヤジ共の判断だ」

幸兄の顔が苦々しく歪んだ。

「やられたよ。部下が上と繋がってた。俺に報告もなしにさっさと任意同行。俺はとんだピエロさ」

幸兄は自嘲気味に笑う。

「そんな・・・」

だが考えられることではあった。

警察なんて所詮ただの企業。

僕の父親もよく口にしていた言葉だ。

支店長の命令よりは社長の命令に従う。それは当然のことではあった。

「上は、さっさと事件を終わらせたいんだろう」

幸兄は言う。

「最初の刺殺体発見から何日かで、女の失踪、坂井の殺害。もういい加減に解決しないとメンツに関わるってことなんだろうな。マスコミも騒ぎ出してる。警察は無能かつ!ってな。この上女が死体で発見されでもしたら・・・」

「志保里さんは小田口さんや美咲さんらが探してくれてる。念のため助言のメールもしたから問題ない。僕はあの人たちを信じる」

助言のメールなんて意味なかったかもしれない。美咲さんならそれくらい気が付くだろう。

幸兄は僕の言葉に笑みを見せた。

「そう・・・だな。信用してみるか」

「ま、美咲さんだからね。裏切られることも数知れず、だけど」

「おいおい」

「じょーだん」

僕は笑ったが、もしかしたらじょーだんにならないかもしれないのが悲しいところだ。

「そう、それで、だ」

「ん？」

そうだった。幸兄は僕に用事があったようだ。

まさか愚痴を言いに来ただけということはないだろう。・・・美咲さんじゃあるまいし。

「俺にも意地がある。上層部に抗議し、交換条件を認めさせてやった」

「交換条件？」

「拳銃携帯命令だ」

ああ。

そういえば捜査会議のとき言っていた。

「やろう、もし簡単に刑事に銃なんて持たせて、誤って市民に当たたらどうするんだ、なんて言ってきやがる。だからこのチャンスに認めさせたってわけだ」

「大丈夫？そんな楯突いて」

僕は心配になった。幸兄は腐った警察機関を変える希望の星だと僕が勝手に決めている。

「は、せいぜい食えないやろうだとも思わせとくよ」

「ま、安心しな。幸兄が辞職に追い込まれても、美緒ちゃんの面倒は僕がみてやるから」

「・・・お前ってさ、ロリコンなわけ？」

「そんな低レベルと一緒にするな。かの光源氏が紫の上にやったのと同じように、幼少時から目をつけ、自分好みの女に育て上げ・・・」

「やつはお前は死ね！おいこらお前俺を殴れ！正当防衛で撃ち殺してやる！」

おいおい、ホントにホルスターから銃抜いたよ。

「じょーだん。第一、んなことしたら正当防衛とはいえあんた辞職でしょ」

「うつせえ！・・・まあいい。ほら、お前も銃持ってこい」

「なるほど、ウェスタンよろしく合図と共に早撃ち勝負か」

「するか」

僕のジョークを一蹴する幸兄。
煩わしげに廊下の方を指差す。

「刑事の捜査における拳銃携帯には、なんかいろいろ事前にすることがあるからな。めんどくさいが」

「げえ」

「お前の仲間にも伝えとけ」

「はいよ」

僕は小田口さんの携帯をコールする。

出ない。

美咲さんも同様だった。

「出ない？」

「うん」

まあ捜査中だ。場合によっては気が付かないこともあるだろう。

そんな時、一瞬寒気がしたと思うと

「ういつす」

由希が現れた。

「なんだ、起きてたんだねゆーくん」

「私が起こした」

「井原さんが？・・・あの・・・」

「？」

「よくできましたね。ゆーくん、寝起き悪いのに」

そう。らしい。僕は全然覚えてないが。

「ガキの頃から知ってる腐れ縁には、わけないことさ」

何故か胸を張る幸兄。

それに尊敬の眼差しを向ける由希。

・・・なに？僕を起こすってそんな困難なの？

「あ、ところで由希」

「ん？」

「小田口さんたち今どこ？」

「今ごろ山を登頂したか冥界に行ったか、どっちかだね」
??

「わけわからんねやけど・・・」

僕は美咲さんがやっていることを聞いた。
にしても。

歩くのが嫌だから車で獣道を駆け上がったあ？

美咲さんらしいといえばそうだが、あの車が壊れて黒田さんのお怒りを被るのは僕なんだぞ？

なーんかやる気失せた。

車を壊すのだけはやめてくれと電話するために携帯を開いた。

・・・あれ。

やっぱ出ない。

「どうしたの？」

「や、出ない」

「お、おいおい、本気で事故ったんじゃないだろうなあ!？」
幸兄が慌てた声を出す。

「大丈夫だよ。美咲さんは殺しても死なない」

「あ、もしかして」

由希が声をあげる。

「忘れていったの力モ」

「・・・」

あり得る。

めっちゃくちやあり得る。もうあり得すぎて、はい！それ正解！と言っちゃいたいくらい。

24班の刑事部屋を調べたら、なかった。

やっぱりさすがに美咲さんでも忘れたりは・・・。

根気強くかけてたら繋がった。

「はい」

男の声？

「あの・・・美咲さんは？」

「あ、これ毒蝮警部補の携帯なのでありますか。会議室に置きっぱなしになっていて・・・」

おい。

「ところで、あなたは・・・」

遠慮がちな声。

「僕は同僚の矢嶋祐一といいます」

「矢嶋警部補でありましたか！ご苦労様です！」

それで分かった。

この人、門に立ってた人だ。

「あ、矢嶋警部補！恐縮ですが、もし毒蝮警部補や小田口巡査部長に連絡がとれるなら、用心するように伝えてもらえますでしょうか」

「用心？それはどういう・・・」

「ハッ！我々、毒蝮警部補指揮のもと、捜査を行ってきたのですが（捜査は、大体僕が思案したのと同じものだった。美咲さんのことだから自力で気付いたのだろうが）、他の地点を調べるにおいて、女を・・・その、つ、連れ込むのにはいい場所はないかと聞かれ、毒蝮警部補方が捜査に行かれた山荘を貸した、という人物がいたので。まだ捜査は続いてますが、我々の間ではその山荘が本命だろう、と・・・」

「・・・分かりました。伝えておきます」

電話を切るとすぐに小田口さんに電話。

・・・出ない。

僕はとんでもなく嫌な予感に襲われた。

「幸兄、美咲さんたち、拳銃は・・・」

幸兄にも僕の言わんとしてることが分かったのだろう。

幸兄は少し青い顔で首を振った。

「いや、持っていない・・・」

「そんな・・・」

由希が真っ青な顔でつぶやく。

幸兄の言葉を聞くや否や、僕は飛び出していた。

「待て祐一！どこへ行く！」

「山荘だ！決まってるだろう！」

「待て！拳銃持っていけ！」

「そんな暇・・・」

「命令だッ！」

幸兄が怒鳴った。

「・・・」

「細かい手続きは抜きだ。特例として俺がやっておく」

「分かった」

と、1つ思い出した。

黒田さんの車は美咲さんたちが使ってる。

今の僕には足といえるものがなかった。

「幸兄。車と、ドライバー用意できるかな？」

「任せる。うってつけの人材がいる」

僕はうなずいた。

「・・・どうした？早く行け」

「幸兄、ありがとう。いろいろ」

「・・・ま、まあ部下が死んだら上司の責任問題だからな・・・」

おら、お前もそんな気持ち悪いこと言ってる暇あったらさっさと行
つてきやがれ」

僕は軽く微笑むと駆け出した。

由希には、案内役としてついてきてもらうことにした。

僕と由希が玄関先で待っていると、一台のパトカーが止まった。出てきたのは若い男。

僕と同じかそれ以下か。

いわゆるおまわりさんの制服を着ている。

「チッス。あなた矢嶋警部補？」

「そうだけど」

「そっちの可愛い子は？矢嶋さんの彼女？」

「な・・・い、いやいやいや！」

慌てて首を振る。

由希はそっぽを向いてる。そんなに。

そんなに嫌か？彼女と言われたのが。

ちよつと落ち込む。

「俺は神流優。かなすくるヨロシクツス」

「そいつがドライバーだ」

ちよつと幸兄が玄関から出てきていた。

「ホレ、お前の銃」

ホルスターごと投げて寄越す。

「こいつは元走り屋だな。160キロなんて余裕で出せるぞ　　ま

あ車両にもよるが」

「このパトカーだって140は堅いツスよ。さ、乗って乗って！急いでるんでしょ？」

僕らは促されるままに車に乗り込んだ。

「頑張つてこいよ」

手を振る幸兄に僕は手を振り替えた。

神流は手早くミュージックプレーヤーを動かす。

パンクなロックが車内に響く。

「とおばすぜええっ！」

急発進。

ガジッ。

僕は舌を噛んだ。

「大の男がいつまでもウジウジと」

「らっへえ。らっへえ、痛いんらもん」

僕はほぼ泣いていた。

舌から血がにじむ。

グワアアアーツとものすごいエンジン音。

「ヒヤッホオーツ！」

神流は歓声をあげている。時速メーターは140キロ。とんでもない速度違反だがサイレンがそれを無効とする。

うーん、恐るべしサイレンの威力。

ドリフトなんてものはもう慣れた。いちいち驚かない。

元走り屋というのは伊達ではないようだ。

「神流・・・君だっけ？君、何歳？」

「19ツス！今年で20！バリバリの巡査ツス！」

僕よりは年下のような。

「いつもは交番勤務なんツスけどね！大恩ある井原のオヤッサンの頼みとくればもう、飛んできたツスよ！」

「大恩？」

「ええ！まあまあ昔いろいろありまして・・・」

ちょっと照れたような表情を浮かべたが、その間にも凄まじいドリフトをしてるのだから、これはもうスゴい。

「昔・・・といっても2、3年前ツスけど、ある事件の容疑者にされまして、自分。それを助けてくれたのが井原のオヤッサンだったツス！」

「そうなんだ・・・」

井原のオヤッサンって、幸兄まだ34歳なんだけど・・・。

そんなことを思いながら僕はまた小田口さんの携帯にかけてみる。

「おかけになった電話は電源が切られているか、電波の状態が悪いため、かかりません」

「ッ!？」

今まで呼び出し音はあった。

電源が切られたのではない。壊されたのではないか？不意にあの無惨な坂井の死体を思い出し、首を振った。

あんな事件、繰り返してはならない。

「神流くんっ！急いでっ！」

「い、急いで！って矢嶋サン？」

「いいから！人命がかかってるんだ！」

「・・・分かりました。舌が干切れても知りませんよっ！」

干切れるって。

グワアアアッ！

エンジン音がさらにすごくなる。

速度計は振り切れようとしている。

とんでもない速度のなか、僕は歯を食いしばり、ジリジリと神流くんのハンドルさばきを睨んでいた。

「あそこっ」

由希が叫んだ。

神流くんは無言でハンドルを回し、山道を登っていった。

ガタンガタンとかなり車内が揺れる。

大丈夫かと少し不安になるが・・・。

「あ！」

前方に2つの光。車だ。

「危ない！」

こんな山道に2車線の幅はない。

神流くんはハンドルを切って崖から落っこちるギリギリまで車を横付けた。

・・・すげえ。

向かいの車には2人の男が乗っていた。そして、あの車はとんでもなくボロボロだが、アレは・・・。

「黒田さんの車？」

由希が呟いた。

どうということだろう。

さっきの車に2人が乗っている様子はなかった。
となれば・・・。

「ますます嫌な予感がしてきた。急ごう！」

「了解ッス！」

キュルキュルキュルキュルッ！

タイヤのスピンの音とともに、車は勢いよく発進した。

「ここまでだな」

神流くんはブレーキを踏んだ。

「この獣道は歩いていった方が速いッスね」

「そうか。ありがとうっ！」

言うが早いか僕は飛び出した。

「あっ！ちよつと！」

道ともいえない場所を走りに走る。

後ろにはピッタリ由希が引っ付いている。

なんてったって背後霊だし。

もうちよつと後ろでは、必死に神流くんが追いかけてるようだ。

灯りだ。

ログハウスみたいな山荘が見えてきた。

「・・・！」

怒鳴り声のようなものが聞こえた。

僕は山登りでガタがきそうな両足を叱咤し、中へ飛び込んだ。
辺りを見回す。

何人もの男がノックアウトされている。

小田口さんと美咲さんの仕業か。

じゃあさっきの怒鳴り声は・・・？

小田口さんの美咲さんへのツッコミとか？

・・・まさかね。

あり得そうで怖い。

ガタンッ！

揉み合う音。

どこから？

「ゆーくん、あれっ！」

由希が指差す方をよく見たら奥に部屋がある。

「オダッチ！」

美咲さんの声。

僕はホルスターから銃を抜きながら、開けっ放しになっていた奥の部屋に飛び込む。

小田口さんに馬乗りになり銃口を向ける男がいた。

撃たれる！

僕は瞬間的に引き金を引いていた。

見下ろす男の顔がニヤリと歪んだ。

銃口がゆつくりと持ち上がる。

やられる！

俺は迎えるであろう衝撃を覚悟し、目を瞑った。

「・・・」

永遠ともいえる時間。

銃声が響いた。

俺の体を熱と痛みがかけめぐ・・・らない？

なんで？

恐る恐る目を開けるとそこには拳銃を取り落とし、手から血を滴らせている男。そしてその後ろに・・・

最近見慣れた顔が2つあった。

「・・・矢嶋、さん」

矢嶋さんは激しく息を切らせている。

「ハア、ハア、小田口、さん。確保！」

俺はニヤリと笑った。

「了解！」

うめく男の腹にパンチを打ち込み、黙らせた。

「・・・どうしましょうか、コレ。・・・いや、それよりまず救急車を！」

俺は美咲さんと志保里さんの方を指した。

「・・・ひどいことするな・・・」

矢嶋さんがうめいた。

美咲さんはすでに気を失っている。

「・・・応急措置だ」

手近のカーテンを切り裂いた矢嶋さんは手早く止血を始めた。

「弾は貫通してる。よかった」

「・・・大丈夫、なんですか？その人」

志保里さんが尋ねた。

矢嶋さんは苦笑する。

「ええ。・・・ていうより、自分の心配をしましょう。水谷志保里

さん」

「あ・・・」

なぜそれを？というように志保里さんは首を傾げた。

「まあ今はそれより救急車・・・あり？」

矢嶋さんがポケットをぐこそこそ。

「携帯無い」

「ゆーくん、携帯なら神流くんの車に置いてってたよ？」

由希さんが呆れたように言った。

「マジデ？」

「マジデ」

「美咲さんのこと笑えねえなあ・・・」

嘆く矢嶋さんだった。

「ぜえ、ぜえ・・・矢嶋さんたち速すぎッスよ」

駆け込んできたのは神流くんである。

「よ、遅かったな」

「さ、さーせんっした。でもひどいッスよ先輩。俺がサイドブレーキ引いたりなんやかんやしてるうちにもう星の彼方なんスもん」
先輩とか呼んでるし。

「とりあえず救急車呼んで。僕、携帯置いてきた」

「俺のも、ホラ」

小田口さんは穴の空いた携帯を見せる。

うなずいた神流くんは、自分の携帯で119番通報した。

「10分ほどで来るそうッス」

「早いな」

「近いらしいッス。消防署」

そうこう言ってるそばからサイレンが聞こえてきた。ホントに早い。

ガタン！

志保里さんが崩れ落ちていた。

「大丈夫ですか！？」

「す・・・すみません。なんか安心してしまっただけ・・・」

今にこの女性も署に呼ばれ質問三昧だろう。

僕はこの小さくなっている女性を気の毒に思った。

「救急隊！到着しましたッ！」

若い救急隊員5名が飛び込んできた。

「ご苦勞様です。この野郎共はウチで引き取るので女性の方をお願いします」

「分かりました！」

救急隊員はテキパキと美咲さんと志保里さんを担架にのせて、山を降りていった。

サイレンの音が聞こえなくなり、僕らはへたりこんでいた。

「終わったあ……」

由希がぐったりとトランプが飛び散っているテーブルに突っ伏した。
「何事も無くて良かったよ」

ホントそう思う。

もちろん、犯人たる男たちはまだそこらに転がってるわけで、安心はできないのだが。

「あの……ところで、彼は？」

小田口さんが尋ねた。

「ああ、彼は神流優くん。井原さんが紹介してくれた名ドライバーです」

「申し遅れました！派出所勤務！ペーペーの1年目ツス！よろしく願います！」

「同じ1年目ながら恐ろしいほど態度のでかい奴もいるけどな」

「誰ツスか？」

「誰です？」

2人の声が重なる。

「美咲さん」

「そうなんツスか？自分、タイプなのに」

「「やめといた方がいい」」

2人の声が重なった。

最初は好意すら覚えてたはずの小田口さんにこうも心変わりさせるとは。

美咲さん、何をしたんだろ。

「あ」

いきなり小田口さんが声をあげる。

「派出所勤務なら手錠持つてるでしょ。とりあえずこの一番危ない薬中野郎抑えといた方がいいよ。そツスよね？矢嶋さん」

小田口さんが僕に同意を求めた。

「そうですね。薬中は手錠するとして……あとは……なんか適

当に」

「今どき珍しい！洗濯用ロープがあつたツスよ！」

神流くんが太いロープをブンブン振り回す。

渡りに船。僕らは全員をロープで締め上げた。

これでとりあえず安心できる。

そんなとき、またサイレンの音が聞こえてきた。

さつきとは違うサイレン。ある意味聞き慣れた、パトカーのサイレンである。

「来たツスね」

「幸兄の回し者だな」

僕は呟いた。

このタイミングで警察を動かせるのは幸兄しかない。

ドカドカと刑事が踏み込み、男が全員連行され、形ばかりの事情聴取を受けたあと、ようやく僕らは解放された。

神流くんは解放されてすぐ、

「やべえ合コンに遅れる！」

と乗ってきたパトカーを140キロで飛ばし、そこにいた捜査官にこつてりしぼられていた。

「・・・これからどうしましょうか」

小田口さんが尋ねてくる。由希の姿は見えない。

由希は美咲さんと志保里さんの担ぎ込まれた病院へ向かった。

ガソリン代も電車賃もいらない。幽霊はこんなとき便利だ。

とりあえず一件落着いたが、これからどうするのか。確かに志保里さんの救出は成功したし、犯人グループも捕らえた。

犯人は今取り調べを受けているし、志保里さんは回復を待たないと話を聞くことはできないだろう。

とりあえず僕たちには急だつてやることは特に何も無かった。

僕は伸びをしながら言った。

「僕は、ちよつと報告してきます」

「報告？井原警視正にですか？」

「・・・いや、ちょっと、坂井に」

「あ・・・」

小田口さんは口を閉じた。坂井は誰よりも志保里さんの無事を祈っていた。知らせてやらないのは酷というものだろう。

「行つてらっしゃい」

僕は背中ですれを聞き、片手を挙げて応じた。

ヤバイ。僕カッコいい。

ハードボイルドきたんじゃないか？コレ。

と、立ち止まる。

神流くんは帰った。

黒田さんの車は犯人の一部が乗り逃げした。

足がない。

僕はその辺を歩いていたお巡りさんを捕まえる。

「ごめん、ちょっと乗せてつてくれないかな？」

・・・はあ。

カッコいいことしたのに最終的には無様にヒッチハイクと相成った。・・・車、買おうかなあ・・・。いや、運転下手なのは重々承知しているけど。捜査じゃ重宝するんだよなあ・・・。いや、僕が車を乗り回したら即刻ゴーアヘブンとなるのは目に見えてるんだけど。警視庁まで乗せていってもらった僕は数回首をひねった。

坂井の通夜は確か今夜だったはずだ。

・・・あ、喪服。

僕は頭を抱えた。

この前喪服虫食いされてて捨てちゃったんだよなあ・・・。
かといって今から買いに行けるような財政的余裕はない。
僕は非番である永森さんに電話をした。

「あ、永森さん？ちよつとお願いがあるんだけど・・・」
情けないハードボイルドである。

苦心のすえ、永森さんに喪服を借りた僕は、坂井の通夜会場に来ていた。

弔問客は驚くほど少ない。まあ調べによると、坂井はギャンブル漬けの毎日で、交友関係もあまりなかったようだ。

坂井は探偵と飲み仲間であり、交友関係といったらそれくらいか、あと柄の悪そうなギャンブル仲間が少々。

家族は、もう勘当したも同然らしく、一応通夜を開いたというだけのようだ。

・・・孤独なやつ。

僕はなんだか坂井という男が哀れになった。

探偵は死に、志保里さんは入院中。そうすると、この中に1人でも、奴の死を悲しんでいる者がいるだろうか？

僕は、坂井が収められている棺に近づいた。
死に顔は見られないようになってる。

それだけむごたらしいのだ。

僕は手を合わせると報告をし、踵を返した。

「あの・・・」

中年の女性が声をかけてきた。

「あなたは・・・？あの、息子とどういう関係ですか？あちらの方とは雰囲気が違うようなので・・・」

そう言つて彼女はギャンブル仲間の方を指した。

まあ雰囲気は違つたろう。あちらは喪服も着ず、酔っているのか通夜だというのに騒いでいる。

周りの人は、迷惑がつてはいるが怖くて何もいえないのか、チラチラと様子を伺うだけだ。

いい年した大人が・・・。僕は腹が立つた。そちらへ向かう。

「ちよつとすみません」

「ああ！？」

酒臭い息がかかる。

「通夜つてのはしめやかにやる物なんですよ。うるさくするなら出ててもらえますか？」

「つざけんなコラ！」

「何様だガキ！」

ガキつて。

僕もう今年で21になるんだけど・・・。

僕はスツと警察手帳を取り出す。

警察手帳といつてももう手帳ではなくなつてしまつた。刑事は別に手帳を持ち歩かないといけないので、現場の刑事には不評な革新である。

「警視庁捜査一課、矢嶋祐一警部補です。・・・なんだつたら署までご案内しましょうか？」

「け、警察！？」

全員後ずさりする。

「別に、あなた方をしょっぱいなんていうわけじゃないんです。ただ、お静かにお願いします」

「・・・」

ギャンブル仲間共は黙りこくった。

恐るべし警察手帳の威力。というかこいつら一体何をやらかしているんだ？

「あの・・・」

見ると、さっきの坂井の母親だ。

「警察の方だったのですか・・・」

「あ、はい。・・・息子さんにちよつと報告することがあります」「報告？」

「息子さんは、死ぬ間際、誘拐されてたある女性を助けるように僕に頼んでまして、今日、その女性が無事に保護されたので、その報告です」

「・・・そうだったんですか」

「女性を救出できたのも、犯人確保に近づいたのも、すべて息子さんが残してくれた手がかりのおかげです」

僕は深々と頭を下げた。

「いえ・・・でも、奔放でどうしようもない息子でしたが、最後に人様の役に立つことができたのですね・・・」

見ると、母親の目には光るものがあつた。

『この中に1人でも、奴の死を悲しんでいる者がいるだろうか？』

僕は、さっきの自分の言葉が間違いであることを悟った。

坂井、お前のことを思ってくれてる人はちゃんというよ。

ブブブブ

神流くんの車から取り出しておいた携帯が震えた。

「はい」

「大変だよお！」

由希？

「志保里さんが・・・いなくなっちゃった！」

「な、何イ！？」

僕は思わず大声を上げてしまった。

周りの人が驚いて僕を見る。

僕は慌てて声を潜めた。

「・・・どういうことだ？」

「とりあえず手当てが終わったところに刑事が何人か現れて、坂井さんが死んだって聞かされたら飛び出していつちゃって・・・」

「バツ力野郎がッ！」

精神的にもぼろぼろな彼女に、いきなりそんな話をする馬鹿がどこにいる。

きつと功を焦った馬鹿が何も考えず言っただけに違いない。

「・・・とにかく、志保里さんを探してくれ。もしかしたらまだ病院内にいるかもしれない」

「分かった！」

電話を切る。

クソッ！

その刑事、年に一回の剣道の全署員合同稽古で叩きのめしてやる！僕は心に決めた。

ジャブジャブジャブ・・・。

僕は顔を洗っていた。

あんなに寝たはずなのに、すでに睡魔が襲ってきていたのだ。とはいえ、まさか通夜の席でぐうすか寝るわけにもいかない。僕はそんな大物じゃない。

というわけで、お手洗いを借りて冷たい水で気合いを入れたのだ。

志保里さんが見つかったという話はまだ聞かない。

そろそろ僕も探しに行くべきだろうか。僕がいなくなるとあのギャンブル連中がまた騒ぎだしそうだが、やむを得ない。

僕は母親に挨拶しよう会場（といっても部屋の一室に過ぎないが）に戻った。

会場に戻ると何やらざわついて様子がおかしい。

ギャンブル連中が騒いだのかと思ったがそうではなかった。

ざわめきの中心には、場違いな白い清潔そうな服、病院着を着た女性が一人居た。

棺の前で慟哭している。

僕はその女性に声をかけた。

「志保里さん」

「あ」

ジッと見つめる黒い目。

その目からみるみる涙が溢れ出した。

「なんで！」

「えっ」

「なんで坂井さんは殺されなくちゃならなかったんですか！」

「・・・」

「教えて！教えて下さい刑事さん！」

「・・・」

「酷すぎですよ・・・こんなの。なんで先生も・・・坂井さんも・・・」

・
ー

泣き崩れる志保里さん。

僕は声をかけることができなかった。

ただ立ち尽くす。

静かな会場に泣き声だけがただ響き渡った。

（裏コーナー）

西岡：シリアスな空気をもぶち壊す！裏コーナーの時間がやって参りました！

敦司：毎度お馴染み、司会は空気読めない男A改め鳳敦司、空気読めない男B改め西岡研でお送りいたします

西岡：にしても最近文の量が多くなってきたねえ

敦司：調べによると、一番短い話（2話）と、一番長い話（前回）とを比べると、なんと7倍だって結果が出る

西岡：7倍！それはそれは・・・

敦司：・・・まあそれはそうと、今日のゲストいつてみよう

西岡：おおっ！可愛い子かつ！？

敦司：もついい加減諦めれば？この話には基本、『可愛い』だけの子はいないんだって

西岡：諦めるか！まだミドリちゃんがいる！

敦司：お前知らないのか・・・大川内さんは、女が好きなんだ
西岡：ぬわぁーにい！？まさか！そんな馬鹿なわぁぁん！

敦司：や、嘘だけど

西岡：わぁぁあん！うわぁぁあん！

敦司：聞いてないな。じゃ、ゲストはこの方

黒田：・・・

敦司：捜査一課24班、黒田警部です

黒田：ああ・・・私の車・・・

敦司：もういいですよ、車のことは。本編でたっぷり悲しんで下さい

黒田：・・・

西岡：お前もけっこうキツイ奴だね

敦司：スムーズな進行は司会の技量を反映する。・・・さて、黒田さん、ここに藁人形と五寸釘が1つずつあります。誰を呪いますか？

西岡：おい

黒田：・・・1つじゃ足りない！矢嶋！毒蝮！あと私の車をパクった馬鹿2人！ついでにハゲの捜査一課長！しめて5つ持ってこんかい！

西岡：あー、今のでみんなのまとめやく、冷静沈着黒田警部像が壊れたな

敦司：人はみな仮面を心に持っている。彼の場合、それが少しずれてしまっただけだ

西岡：・・・何いきなり哲学的なこと言ってるの

敦司：や、なんとなく

西岡：・・・

敦司：で、黒田さん。そのついでの禿野捜査一課長には何をされたんですか？

黒田：いや、禿野じゃなくて、頭が禿げている捜査一課長
敦司：つまり禿野捜査一課長でしょ？

黒田：いやいや！名前じゃなくて、禿げているんだって！

敦司：だから禿野なんでしょ？

黒田：なんで名前になる！？ハゲの捜査一課長なの！

敦司：だからさつきからそう言ってるじゃないですか・・・

黒田：だから・・・

30分後

黒田：いいか？ハゲというのはあくまで特徴であり、名前とは何の
関係もないんだ

敦司：だってあなたさつき禿野って言ったじゃないですか

黒田：だからそれがそもその間違いで

敦司：意味が分からない。西岡、お前分かるか？

西岡：・・・俺はお前らが延々30分ハゲやなんやで議論してるこ
との意味が分からない

敦司：だから禿野なんでしょ？

黒田：違う！

さらに30分後

西岡：馬鹿馬鹿し。今日は映画で『もののけ姫』やるんだっ
たな。
かーえろ

黒田：禿げているだけなの。頼むから分かってくれ・・・

敦司：禿野なんですよって！

黒田：違うつつつてんだろ！じゃあ何か？お前の頭の中じゃ道行く
頭皮過疎化のオジサンたちはみんな禿野って名前なのか！？

敦司：あ、じゃあ黒田さんも禿野入ってますね

黒田：だあまらっしやいつ！

敦司：だから禿野

黒田：ハゲの！

敦司：禿野

黒田：ハゲの！

敦司：禿野

黒田：ハアゲエのお！

敦司：ハーゲンダッツ？

黒田：ちやうわい！

| | | | |
|---|---|---|---|
| • | • | • | • |
| • | • | • | • |
| • | • | • | • |
| ! | ! | ! | ! |

敦司：・・・なるほど、ハゲのだったのか
黒田：禿野だって言ってるんだろがああつ

・ ・ ・ キリがないので。
了

24話 病院探索！27歳の少女と自称死神・1（前書き）

予告通り区切ってみました。区切るのが難しくてちょっと中途半端で切れてる部分等ありますがご容赦ください

24話 病院探索！27歳の少女と自称死神 - 1

一面に綺麗な水面が広がっている。

大きい湖だろうか。海みたいだ。

湖の近くには車が止まってる。

「ほら、白鳥さんだよ」

誰だ？あんたは誰なんだ？

「眠くなったらあの小屋で休んでいいからね」

誰だ？誰だつてんだ？

僕は叫ぶ。

しかし、夢の中のぼくは笑顔でうなずくと手に持ったパンを白鳥にあげようと湖に近づいた。

きれいな青くそまつた湖。白鳥は投げられたパンを優雅にくわえた。

え？

その美しい光景に似合わないもの。

立っている岸のちょうど真下辺りにゴミが浮かんでいる。

●●●●●

ゴ
///
.
.
.
?

いや、ゴリじゃない。

僕は分かっていた。あのゴミがゴミでないことに。最初から、分かっていた。

あれは。

あれは
・
・
・
。

「危ないよ、そんな所に立ってちゃ。落ちたらどうするんだい？」

誰だ誰だ誰だ誰だ誰だ誰だ誰だ誰だ誰だ誰だ
誰だ誰だ誰だあつ！

湖に浮かぶもの。

あれは・・・顔だった。

苦しみに歪む人間の顔。

死体。あれは紛れもない死体。

なんだ、なんだってんだ。僕はあの死体を、知っている・・・？

男が迫る。

「見たのかい？」

今までの優しい声が嘘のように冷たくなる。

いや、実際あの声は嘘なのだ。

「見たんだね？」

僕は泣きながら首をふる。だが、それは男の顔を笑みで醜く歪ませるものに過ぎなかった。

「嘘はいけないなあ」

男はゆっくり近づいてくる。

「嘘つきにはお仕置きしないとね・・・」

誰だ！

僕はなおも叫ぶ。

夢の中のぼくは恐怖で動けない。

「た、助けてえ・・・」

「いいね。もつと命乞いしなよ」

こいつ・・・！

「やめろ！」

誰かの声が響き渡った。

ガバツ！

跳ね起きた。

目の前には驚いた早紀の顔。

「・・・びっくりした」

「あゝ、ゴメン」

頭がぼんやりしている。あの夢のせいだろうか。

「・・・ん？ていうか。」

「つかお前のせいだろ。僕が寝込んだの」

早紀は呆れたようにため息をつく。

「あっちーが勝手に落ちたんでしょ？」

「ぐ・・・」

そうとも言えるかもしれないかもしれない。

「あ、でもありがとな」

「何が？」

「何って、看てくれたんだろ？僕を」

「ん・・・いや、違う・・・ププッ」

？

いきなり笑い出す早紀。

「なんか申し訳なくなってきた。ごめんね。あっちー」

よく分からないやつ。

「ところで西岡と大川内さんは？」

「ああ、あの2人は2階であっちーの生い立ちの記の手伝いっていつてアルバム漁ってるよ」

「ぬぁんだってえ！？」

僕は脱兎の如く飛び出した。

「あ！あっちー待って！鏡、鏡」

鏡がどうしたあ！

幼少期の写真を他人に見られるわけには・・・。

全力で階段をかけあがり、ドアを開け放つ。

「見たかつ!？」

そこにはせんべいを食べている西岡と大川内さん。目が点になっている。

アルバムは・・・開かれてる。間に合わなかった。てかこの2人なんでこんなに驚いてんだ？

見ると、西岡の顔がみるみる笑い顔になっていく。

「・・・ブツ!肉!肉ってお前・・・」

「は？」

何が肉だ。

「あ、ああ敦司君?なに?そ、その額の・・・ふ、ふふ、あははははっ!」

大川内さんも笑い出す。

あの。

西岡がポン、と肩に手を置く。

「鏡見てこい」

鏡?あ、そういえば早紀も鏡がどうか・・・。

僕は洗面所へ向かった。

・
・
・

「さあきいいいっ!」

怒り心頭な僕は、文句を言おうと早紀を探していた。が。いない。リビングにも。キッチンにも。どこにも。

となると、残るは早紀の部屋か。

「早紀い！いるかぁ！」

僕はドアをドンドンと叩く。

「ちょ、ちよつと待って・・・」

僕はニヤリと笑った。

「問答無用！」

ドアを開け放つ。

「御用あらためである！・・・あ」

「・・・」

お着替えの真つ最中？

早紀は下着姿で背中を向けて・・・。

「・・・」

早紀の背中中の傷痕に目が止まった。

忌まわしい傷痕。

以前よりは十分薄くなってきたが、それでも女の子には重い傷痕。

何よりも、早紀の心にはもっと深い傷痕が残っているだろう。そう。それは僕が小学6年生だったとき・・・。

「こんの・・・」

ハッ。

回想に浸ってる場合じゃないことに気が付く。

「ごめんなさいっ！」

慌てて部屋から逃げ出す。そして、鬼を交代しての鬼ごっこは、
0分近く続いたのだった。 3

24話 病院探索！27歳の少女と自称死神 その2（前書き）

24話、その5まで続きます。その後、25、26と続き、27話で一章完結の予定です（といっても一章の事件は最終章まで完結しません）現在26話執筆してます。乞うご期待です

・・・とか何とか

24話 病院探索！27歳の少女と自称死神 その2

「ぜーっ、ぜーっ」

「はーっ、はーっ」

「いい加減捕まって殴られなさいよ！」

「嫌だね。そんなことされたらまた意識飛ぶもん」

「人の着替え覗いという・・・」

「不可抗力だつてば。つかなんで着替えてんだよこんな時間に。だいたい、謝ってるだろ？さつきから」

「碧と買い物行くんだから部屋着から着替えんのは当たり前でしょ！第一、謝るつたつて逃げながらじゃない！そんなの心がこもってない！」

「逃げないと殴るくせに・・・」

「分かった。殴らないからちゃんと謝つて。そうしたら許してあげる」

「本当だろうな・・・」

僕は疑いながらも、まあ見ちゃったのは事実だしと頭を下げる。

「ごめんなさい」

ガシッ

「え」

「どりゃあつ」

ドスッ

「ツアアアア!？」

肩を掴んだ早紀は、みぞおちに膝を叩きこんだ。

まともに食らった僕は悶絶してフローリングの床を転げ回る。

「こ・・・こんにゃろ」

「あははっ、バーカ」

ガクッ。

僕は力尽きた。

「はーあ、すっきりした。しょうがないから許してあげるよ」

「・・・」

もうこいつには何を言っても無駄だろう。

「ハア・・・」

「何よそのため息は」

「なーんでも。にしても、良かったな」

「何が？」

早紀が首をかしげる。

「傷痕。薄くなって」

「ああ・・・」

早紀は背中をさすった。

「その傷見るとき、思っよ。申し訳ないって。僕の不甲斐ないばかりに」

「不甲斐ないって・・・そんな」

下を向く。

「私だって・・・申し訳ないよ。ボクシング、諦めなくちゃいけなくなっ」

なんだ。そんなこと気にしてたんだ。

僕はにつこり笑った。

「早紀らしくねーの。僕はいいんだよ。サッカー楽しむこともできたし、他にもいろいろ習うこともできて、楽しかったんだから」

「あっち・・・でも、でも目は、まだ・・・」

「目なんざどーでもいいんだよ」

僕は笑顔のまま言った。

「ホントに早紀らしくないな。しみったれちゃって。熱でもあるんじゃないの？」

「う、うるさいっ！」

「はは、そうそう。早紀はそうじゃないと」

「・・・」

「気持ち悪くてしょうがない」

「こんのアホッ！」

「ウッ！」

また蹴りを入れられた。

「せっかく人が、ちよつとかつこよくて見直したと思ったら！この！返せ！あたしの感動を返せ！」

「や、やめ・・・痛い！痛いから！」

「あっ！おいこら！」

脇から声。

「敦司こら！てめえいい加減手伝えよってかお前の用だろ？」

「に、西岡あ・・・助けて・・・」

「いい眺めだ」

「てめえコラ」

「あ、それと早紀ちゃん？ミドリちゃんが玄関で待ってたよ」

「え？ホント？大変」

ガスッ

とどめの一発。

今までで一番痛かった。

「はーっ、すつきりした。じゃね」

手を振って早紀は遠ざかっていった。

「・・・大丈夫か。敦司。かつこ笑い」

「口で（笑）っていうんじゃない．．．．．もう疲れたよ、パトラッシュ．．．」

「はいはい。オラ、行くぞ」

西岡は僕の腕を引きずり、アルバムが散乱する部屋まで運んでいった。

ところ変わってばあちゃんの部屋。

アルバムは、やはり５歳くらいの僕の写真が抜け落ちていた。

僕は当初の予定通り、ばあちゃんに話を聞くことにした。

「おや敦司、どうしたね？」

ばあちゃんは笑顔で僕を見つめた。

「ちよつと聞きたいことがあつてさ」

「ああ、生い立ちの記かい？公太から聞いてるよ」

公太は伯父さんのこと。とつさに誰のことか分からなくなる。

「じゃあ、さ。僕が５歳くらいの時のこと教えてくれる？」

「生まれた時の話じゃないのかい？」

「うん。それも聞きたいんだけど．．．じゃあまずそのことを」

ばあちゃんは上を向いて考えこんだ。

「あれは．．．そう。大変な難産じゃった」

「難産？」

初めて聞く。

「お母さんは救急車に運ばれて即手術。付き添いのお父さんも心配

「そうだな」

「・・・1つ聞きたいんだけど」

「なんだい？」

「ばあちゃんは、僕を母さんが産んでるところ見た？」

「見れるわけないだろう？手術してたんだから」

「あ、そうだよね・・・ごめん変なこと言つて」

くそ。その事実さえあればDNA検査の結果なんてなんとでもなるのに。

「じゃあ、その病院を覚えてくれないかな」

「病院？病院・・・はて。あの病院は大病院だったのだが、確か、医療ミスとかで潰れてしまったと思ったがのう」

「つ、潰れたの！？」

なんとついてない。

その時の執刀医に会えば真相が分かると思ったのだが。仕方ない。気を取り直して。

「じゃあ僕が5歳ぐらいの時のこと、教えてくれる？」

「・・・といってものお・・・何を話せばいいんだい？」

「何かさ、事件が起きたりしなかった？」

「事件・・・はて事件・・・」

ばあちゃんが思い出すのを辛抱強く待つ。

「ああ。何か大騒ぎした覚えがあるが・・・」

「なにっ！？なにそれ！」

「なんだったか・・・」

「殺人とか！？」

「そんな物騒なことなら覚えてそうなもんだが・・・」

それもそうか。近所の人も知らないって言ってたし。といってもこの辺りは最近ベッドタウンとして急速に発展している。近所の人も当時にあつた事件のことなんて知らないのかもしれないが。

「ごめんねえ。思い出せないよ」

「あ、僕こそごめん。変なこと聞いて」

僕はあちゃんに礼を言つて立ち上がった。

「あ、そうそう。じいちゃんは？」

僕の祖父は神社の神主。噂によると陰陽道にも通じているとか。

「おじいさんなら神社じゃよ」

「また泊まり！？」

じいちゃんは宿直室に泊まることもしばしば。

だけでもう歳なんだから……。

「ううむ、なにやらあの神社も取り壊されるらしくての。おじいさんも寂しいんじゃない？」

「あの神社壊すの！？」

それはそれで寂しい。

「お前たちが後を継がないせいじゃと嘆いておったぞ」
そう。確かに孫世代は後を継いでない。

現代の女子学生をゆく朱音姉さんや早紀に神社の跡継ぎという人生の選択肢はハナから無く、マッドサイエンティストの青龍兄さんは尚更だ。無論、僕も御免だ。

「んなもん、木葉さんに継がせりゃいいじゃん……」

このは木葉さんとは神社で働く巫女さんだ。何やら怪しげな術を施されたこともあつたつけ。

「あの子には別に仕事があつたじゃろうて」

「かまわーん！兼業しろ兼業！」

僕の言葉に、ばあちゃんは静かに笑った。

「まあそれはさておき。その例の病院つて今どうなってる？」

「……経営破綻したらしいからのお。今もそのまま残ってると思うが」

「そう。ありがとう」

まだ僕は諦めない。

僕はあちゃんの部屋を後にした。

24話 病院探索！27歳の少女と自称死神 その3（前書き）

人物紹介 No.009 神流 優 若き警察官にして走り屋。昔は暴走族として峠を飛ばしたりしていたが、とある事件で逮捕されてしまった時に、面倒をみ、無罪を証明して真犯人を捕らえた井原に心酔。警察官を目指し見事目標を達成した。現在は交番勤務兼非常時の井原専属運転手。時おり昔の血が騒ぐのか、とんでもない速度でパトカーをかつ飛ばし、その度始末書を書かされている。

24話 病院探索！27歳の少女と自称死神 その3

「よおなんだよこの写真なんかマジ傑作だろオイ」

部屋に戻ると西岡が僕にアルバムをつきだした。

それを払いのける。

「ああつ、ウルトラマンのパジャマ着たかわいい写真がつ」

「黙れ。てか遊んでんなコラ」

「いーじゃん別にさあ」

西岡は口を尖らせた。

「てなわけで肝だめしにいくぞ」

「どんなわけ!？」

さすがの西岡もツツコンだ。

「肝だめしだよ。季節的にはいい感じだろ？」

「いやちよつと早いよーな・・・」

「梅雨もさっさと明けて、最近めっちゃくちや暑いんだから問題ないだろ」

「・・・」

黙った。

「・・・で、なんでいきなり肝だめし？」

「何も僕は心霊スポットに遊びにいつて、お前にキヤーキヤー抱きつかれたいわけじゃないさ」

「俺だつてごめんだ」

「廃病院に用がある」

「廃病院？そりやまたおあつらえむきな」

僕は西岡にさっきばあちゃんに聞いた話を繰り返した。

「はあ・・・で、廃病院か」

「ああ。そこにはまだ僕の出産の記録が残されてるかもしれない」

「ふーん、で、俺が行く理由は？」

「ない」

きっぱり。

「でもお前行かないのか？」

「ハッ！なんで俺が廃病院なんか・・・」

「廃病院探索なんて、聡美さんへのいい土産話になると思っただけ
どなあ・・・」

「ッ！」

西岡の顔色が変わった。

なんで僕が西岡と一緒に行かせたいかというところ、怖いなんてわけ
はない。

こいつが大の怖がりだからだ。

聡美さんとの関わりで少しは改善されたようだが、まだまだ。所詮
は西岡である。

「・・・」

西岡は難しい顔で考えている。

「・・・いや、俺はやめとく」

「え」

これは予想外。

こいつの怖がりよりかは女好きのが優先されると思ったのだが。

「なんだ、いいの？」

「ネタ話は他で仕入れるさ！君子危うきに近寄らずってな！」

「あ・・・そう」

僕の残念そうな顔に西岡がニヤリと笑う。

「もしかして・・・怖いのか？」

僕もニヤリと笑い返す。

「いやあ、そうじゃなくて・・・お前の怖がる無様な姿を見れなく
て残念だなあって」

「・・・お前なんか悪霊に取り殺されちまえ」

西岡がボソツと呟いた。

「それはそうと、お前僕が病院行ってる間何してんの？」

僕は、横で悪霊降臨の呪文を唱えている西岡に聞いた。

「オンマンダラ・・・あ？そうだな・・・ま、適当に街ぶらついてるわ」

「1人で？」

「うつせえなあ。ホントはミドリちゃんたちと一緒にに行けりゃよかったんだけどよお」

「でもお前、第一印象最悪だよな」

「あ？」

「大川内さんには馴れ馴れしくしてスルーされてるし、早紀に至っては発狂よ？発狂」

「・・・」

黙りこくる西岡。

「・・・うるさいうるさいうるさーいつ！お前のせいだ！お前のお！わあああん！」

「な、泣くことないだろ・・・てかお前僕が何かしたか？」

「うるさーい！」

「つたく・・・」

時計を見る。そろそろ出ようかな。

「おい、もう行くぞ」

僕は泣く西岡を引き連れ、部屋を出た。

「あら。もう帰っちゃうの？」

洗濯物を持った伯母さんは残念そうに言った。

「ええ、すみません。お邪魔しました」

「おおっ！？帰るのか？」

ああ。平和に帰ろうとしたのに伯父さんに気付かれました。

「泊まってけ泊まってけ！今日は伯父さんと飲み明かそうぜ！」

「・・・明日は月曜ですんで」

「かぁっつ！学校くらいサボリやがれ！それでも俺の甥か！？伯父

さんはかなしーぞ」

「はあ。すみません」

いや待てなんで僕が謝らなきゃならない？

「じゃ・・・そういうことで」

「待て！そうだ君！君でもいいから！」

伯父さんは西岡に呼びかける。

「え・・・そうだなあ」

まずい。西岡は迷っている。

「よしじゃあ今夜はみゴファツ！？」

「お邪魔しましたあ！」

西岡の腹にパンチを入れ、崩れる西岡を抱えた僕は、逃げるように家を後にした。というか逃げた。

「・・・これ、入れんのかな」

僕は例の廃病院の前に立ち尽くしていた。

近くにスーパーやら百貨店やらができたことにより、廃れていった商店街を抜けた先に、この病院はある。立地条件も完璧な心霊スポット。

西岡を連れて来なかったのは惜しかった。

ちなみに、気絶した西岡は駅前ロータリーのベンチに放置しておいた。

今ごろ、鳩のフンにまみれているか、道行く人にホームレスと思わ

れてることだろう。

さて、その廃病院だが、フェンスで覆われており、そこには赤い字で『立入禁止』とある。ただしその横には暴走族のアート（落書き）がでかでかと描かれているが。

僕は、『チームNOZAWA夜露死苦！』と描かれたその落書きを横目に、ベタな落書きだなオイと思いつつ、フェンスに抜け穴がないか探し始めたのだった。

抜け穴はすぐに見つかった。

破られたフェンスが病院の裏側にあった。

6月とは思えない炎天下の中いつまでも探してるのはキツイので、ありがたい。このフェンスを破った名も知らぬ人に感謝する。

「よっ……」

僕はフェンスの針金で腕を傷つけないように苦労しながら穴を通り抜けた。

病院構内には当然ながら人の気配はない。

入院患者がリハビリのレクリエーションのために使っていたと思われる広場や遊歩道を抜けると、『いかにも』という感じの病院が姿を現す。

正面の大きな自動ドアは開かないので（当たり前か）近くの窓を手当たり次第に調べようと思ったら、なんと1つめからヒットした。セキュリティもへったくれもないな。

処分されてる可能性は極めて高い僕の出産時のカルテ、または院長や当時働いていたスタッフの住所でも見つければと淡い期待を持ってここまでやってきたが、これは、もしかするともしかするかもしれない。

窓を通り抜けた先はトイレだった。

花子さん・・・が出るのは学校のトイレか。

僕は出口に向かって

「っ!？」

振り向いた。

何もいない。当たり前だ。しかし、何か視線を感じた気がする。

僕は首を傾げながらトイレを出た。

「・・・うわ」

思わず声が出た。

涼しい。てか寒い。

汗が冷えてシャツが冷たくなる。

何か上に着込みたくても、上着なんか持つてゐるはずもない。

僕は両手で自分の肩を抱く形で、震えながら歩き始めた。

カルテってものがどこにあるか？

僕はとりあえず受付のカウンターを乗り越え、その奥にあるスタッ
フエリアの廊下を進み、よくテレビとかで看護師さんがカルテを取
り出してるような部屋（保管室とあった）の扉に手をかけた。

「・・・うん？」

ガチャガチャとノブを回す。

開かない？

今までの扉が普通に開いただけになんか納得いかない。

なんでここだけ鍵閉めるんだよ。

僕は引き返そうと今来たドアを開け

「あ、あれっ？」

開かない。いやさっきまで開いてたんだ。開かない訳がない。僕は何度もノブをひねる。しまいには体当たりしてみる。

しかしドアは開くことはなかった。

おいおい嘘だろ？

寒さがどんどん増してくる。

ヒタ、ヒタ、

なんか近づいてくる！

とはいえ逃げ場はない。

足音が止まる。

ノブがゆっくりと回され、僕は息を止める。

そして――

ガシッ

「えっ！？」

僕はいきなり反対側から腕を捕まれ、引っ張られていた。

24話 病院探索！27歳の少女と自称死神 その4

「まったく、馬鹿な人だね！」

「はあ、すみません」

僕は呆然としながら、なんか頭を下げてしまった。

僕がいるのは保管室の中。なぜ入れたのか。

そして僕を引っ張りこんだのは年端もいかない少女。まだ12歳くらいに見える。その少女が僕を叱ってるんだからおかしな構図だ。

「ねえ君・・・」

「だいたい、何が楽しくてこんなところ来るかな。あなたもアレでしょ？心霊スポットって面白半分で来たんでしょ？」

無視かい。

「んな暇じゃねーよ、僕は。だいたい君こそこんなところに1人でいるんだ？危ないよ・・・僕が悪いやつだったらどうするの」

最後は笑いを含めた声で言った。

「大丈夫だよ。わたし、幽霊だから」

「ふえっ？」

変な声を上げてしまう。

今なんて？

からかつてるのか？

「それより、気を付けないとだめだよ。みんながみんなわたしみたいな善良な幽霊じゃないんだから」

「はは、善良な幽霊ね。僕はどうも幽霊っていうと悪霊ってイメージがあるから」

てかまだ目の前の少女を幽霊と認めたわけではないし。

「まあ、普通はそうだね。でも悪霊ってそんな多くないよ？生きてる人と同じ。悪いことする人が目立って見えるだけ」

「あー、なるほど」

確かに僕らも犯罪者ばっかって訳じゃない。一般人のが多いのは当

たり前か。

「あ、でもさっきの足音聞いたでしょ？あれは悪いやつ。あれに捕まったら、お兄さん、アウトだよ」

「う」

やつぱり。なんとなくそんな気はした。寒気が半端無かったし。

「・・・なんにしても助けられたってわけだ。ありがとう」

僕は頭を下げる。

「アハハ、お兄さんいい人だね。子供にもちゃんと頭下げるんだ」

「うつせ。・・・あ。君、さ。ここの病院の患者だった？」

「うん」

「じゃあここのスタッフの連絡先とか分からないかな？」

「連絡先？」

「うん。僕はそのためにここに来た」

僕は彼女に事情を簡単に説明した。

「ふーん、なるほどね。まあさすがにカルテは処分しちゃったみたいだけど」

「あ、やつぱり」

保管室内を見回してみてもカルテらしき物は置いていない。

「まっかせなさい！この病院に住み着いて15年、このわたしがサポートしてあげる！」

「あ、ありがとう」

12歳くらいで死んで15年？・・・敬語を使うべきなのだろうか？

「まあまずは事務室かなあ。スタッフのお給料計算したりしてたから住所録くらいあるかも・・・」

なるほどね。

「ありがとう。じゃ、僕行くね」

「待った待った！サポートするって言ったじゃない。お兄さんここ出てすぐさっきの悪霊に捕まったらどうするのさ」

「あー、いや、でも」

「案内してあげる。ついてきて」

なんか、悪いなあ。

というわけで、僕は見た目12歳の女の子に仕切られる半ば情けない形で、病院内を歩き回ることになったのである。

驚いたこと。その1。

幽霊は彼女だけではなかった。部屋を移動する度、出るわ出るわ。もう幽霊の大盤振る舞いといった感じた。

彼女は会う度にスタッフの住所を知らないか聞き込み、捨てられないカルテがないか尋ねる。

もつとも、有益な情報を持つてる者はいないようだったが。

驚いたことその2。

やはりここは管理が極めてずさんだ。

資料管理室に、ここ数年のものならカルテが処分されずに残っていた。

僕のものは無かったが、これって問題なのでは？

驚いたことその3。

あの悪霊の正体だ。

他の何人かの幽霊が言うには、あれはこの病院で自殺した前院長の霊だとか。

なんとか話を聞く術はないかと思ったがどうやら話が通じないらしい。一声かけたところで倒れてきた書架に押し潰されそうになった。

「はぁ・・・疲れた」

数時間歩き回り、しかもあの悪霊が来てないか神経を張り巡らしていたので、疲労がたまる。

今はこうしてスタッフエリアの机の中身を全部ひっくり返し、捜索中である。

「やっぱないんじゃないかなあ、カルテも、住所録も」

ふと手を止めて女の子が言う。

「うう・・・じゃあ意地でもあの悪霊に話を」

「無理だよ。どうしたって話が通じないもん。それに、普通の人が不用意に近づいたら死んじゃうよ？しかも・・・」

「しかも？」

「死ぬばかりか、永遠にこの病院に縛られ続けることになる」

「え？」

女の子は女の子らしからぬ表情・・・そう、諦観の表情とでもいうのか、で笑った。

「普通、強い怨念とか心残りとかそういうのがないかぎり幽霊にはならないんだよ、死んでも」

「・・・でも、大抵の場合、心残りって多少なりともあるんじゃないの？大往生して死ぬおじいさんおばあさんはともかく」

「うん、でもよっぽど強い想いだよ。ほんとに強い想い。それにそれでもすぐに成仏してしまうんだって。1週間・・・長くても1ヶ月くらいで」

「なんか、いろいろあるんだな、幽霊にも」

とりあえずそう言ってみた。

オカルトには興味無かったし、成仏がどーのなんて突然言われて正直面喰らってしまったが、女の子の顔は、それを茶化したり、からかったりしていい雰囲気ではなかった。

女の子はそれまでの悲しげな表情からちょっと笑った。

「あはは、うん、そうだよ。でね、こういう場合成仏できない幽霊には2パターンあるんだ」

「2パターン？」

「うん。悪霊か守護霊になって成仏しないのを除けば。1つは、霊力のある人間に使役される使役霊になる場合、もう1つは、強い磁場に縛られて動けなくなる場合」

「じゃあこの場所は」

「うん、強い磁場だね。ここからあたし達は動けないんだ」

「・・・でもさ」

1つ腑に落ちないことがある。

「ここから動けない君が、なんでそういったルール？みたいなものを知ってるの？」

「ああ、教えてもらったんだよ」

「誰に？」

「それは あ、あの人！」

「え」

少女の指差すもの、それに僕は言葉を失った。

24話 病院探索！27歳の少女と自称死神！ その5（前書き）

ああ、話がオカルトで変な方向に……。この話のあとしばらく真面目な展開続きますからね。コメディで通すのが厳しくなってきた今日この頃です。その他、に変えようかなあ、ジャンル……

24話 病院探索！27歳の少女と自称死神！ その5

少女の指差す先に・・・頭があつた。

換気用窓に頭を挟まれジタバタしている。

顔がグリーンとこつちを見た。

「ちよつと！気付いてるなら助けてくれたまえよ君い！ふぬう・
・・抜けない」

「この変なの、誰？」

僕は尋ねながらその顔を引つ張る。

「変なのとはしつれ・・・あー！いたい痛い痛い痛いッ！」

引いてダメなら押してみる。

顔はあつさり抜け、ドスン！と外から何かが落ちた音がした。

「いつつう・・・痛いじゃないか君い！気をつけたまえ！」

怒鳴り声が外から聞こえる。

「助けてやったんだから礼の1つでもいいなさいな。つかこんなところから入ってくんな」

「そうですよお。正面から入って下さい」

しばらく何やらぶつぶつ言っていたようだがすぐに聞こえなくなつた。

ちゃんと回りこんでいったようだ。

「で、あの変なの、何？」

「えつと」

「聞いて驚けい！人間よ！」

騒々しくドアを開けてさっきのやつが入ってきた。

初めて全身を見たが、背の高い顔も整つた若い男だ。ダークスーツに身を包んでいる。

せっかくモテそうなのに、その変なしゃべり方のせいで台無しといったところだろう。

「早いな。どうでもいいが。てか人間よってなんだ。あんたヒト科

「じゃねーのか」

「我は全知全能なる死神だあ！崇め奉るがいい！」

「・・・あの、この人、コレ？」

頭を指差し、クルクルパーしてみせる。

「私はクルクルパーなどではないぞ君い！」

「えっと、ホントに死神。ハーゲンさん」

「ハーゲン？」

「そうさあ！全知全能死神ハーゲン様さあ！」

こいつに様どころか、さん、いや君すらつける気にはなれない。

「で、そのハーゲンがこの廃れた病院に何の用だ」

ハーゲンは顎に手をやった。

「うむ・・・調査といったところだろうか」

「調査？」

「うむ。ここに渦巻く磁場の根源をな。死神の仕事の1つは成仏できなかつた魂を成仏させることだ」

「あ、じゃあ」

「そ、ハーゲンさんはあたし達を成仏させるために来てるの」

「ん？でも」

記憶を探る。

「確か君が死んでから 15年だったよね。ってことは」

チラとハーゲンの方を見た。

ハーゲンは慌て出す。

「わ、私は多忙なのだよ！君い！だいたい、この件は根が深くていくら私でもなかなか・・・」

「さっき全知全能って言つてたくせに」

「うるさいよ！？君い！私だつてこの磁場は院長たちの負の感情が起こしたものとして、その原因を探ってるのだ！」

え。

「ま、待って。それは、院長の身の周りを？」

「うむ」

逸る心を抑える。

「じ、じゃあ院長の家族やスタッフの連絡先なんかは……」

「連絡先？住んでる場所なら分かるぞ」

「ハーゲン様！」

僕は180の角度で頭を下げた。

「教えて下さい！連絡先を！」

「おお、ようやく君にも私の威光が分かったか」

「はい！お願いします！是非とも！」

ハーゲンは満足気に頷いている。

「うむうむ。無知は罪ではないぞ」

「お兄ちゃん、プライドってもんがないの？」

「うるさい。男にはプライドより大事なものがあるんだ」

「おい、書くもの」

僕はペンとメモ帳を差し出す。

ハーゲンは達筆な日本語（上手い。ムカつく）でサラサラとペンを走らせ、僕に手渡した。

「当時の副院長　院長の弟の住所だ」

「ありがとうございますッ！」

やった。なんか思わぬところから収穫だ。

そうと決まったらこんなところに用はない。

「おっと、待った。その代わりに頼みがあるのだよ君い」
ガシッ

ハーゲンに肩を掴まれた。逃げようと思ったのに。

「はい？」

僕は笑顔を引きつらせ尋ねた。

「ついでに病院封鎖の裏についても聞いてくれたまえ。あの院長が成仏できないのも、この磁場も、おそらくそれが原因だろうからねえ」

「それはハーゲンさんの仕事……」

「まあさあかあ？タダで情報を得ようなんてムシのいいこと考え

てたわけじゃ、ないよねえ？」

考えてたが何か。

「まったく・・・めんどくさいからって」

「私は・・・そう。忙しいのだよ君い！」

さつきも同じこといったぞ。

僕はため息をついた。

どうやらうんと言わないとこの死神さんは帰してくれそうにない。

「分かりましたよ。ついでに聞いてくればいいんでしょう？」

「おお！話が分かるね君い！」

ハーゲン満面の笑み。

「じゃあ話を聞いたらこの番号に電話してくれたまえ」

ハーゲンが名刺を取り出す。

『死神

ハーゲン

TEL・・・』

何の冗談だ。

普通の人が見たらふざけてるとしか思えないだろう。・・・って僕はもはや普通の人じゃないのか？

・・・はあ。

・・・ん？

「って、携帯持つてんの！？」

「何を言ってるんだ君い。今のご時世、携帯なんて常識だよ？業務連絡もメールで来るくらいだからねえ。必需品さ、必需品」

いや、そりゃそうかもしれないけど。

「だからって死神が携帯つてのも、なんか・・・ねえ」

「君い！死神だからって差別はよくないよ」

「いや差別ってわけじゃ・・・」

「いいかい。死神だつて君らと同じ！みんなみんな生きているんだ
友達なんだだよ君い！」

「生きているのか？」

「ま。いい」

「いいのか。」

「まーとにかく電話してくれたまえ。んでわ」

「ハーゲンハスはスツと姿を消した。」

「・・・姿を消した？」

「おおっ！消えた！すげえ！」

「何を言ってるの？瞬間移動くらい死神なんだから当たり前じゃない」

「当たり前なのか？」

「にしても。本物だったんだな」

「だからそうだった」

「少女は呆れたように言った。」

「でもさ・・・？」

「？」

「あいつ、瞬間移動できるなら、なんでわざわざあの狭い窓から出てきたわけ？」

「あ・・・」

「そういえば、と少女も首をかしげる。」

「・・・挟まりたかったんじゃない？」

「んなバカな」

「僕は謎の死神の消えた場所を見て、立っているよりなかった。」

25話 ジョーカー争奪戦その1（前書き）

人物紹介 No.010 永森 俊一（兄） 警視庁捜査一課24班の巡査部長。昨年、巡査長から昇進するとともに本庁配属となった。弟を大切にしており、周囲からブラコンと冷やかされる。捜査の腕はまだ未熟だが、矢嶋や美咲と一緒に捜査することでどんどん成長している。

さて、まあた更新遅れましたね
え、あっはっは（反省の色なし）いやごめんなさい。では本編をど
ーぞ

25話 ジョーカー争奪戦その1

「じゃあ、皆さんどうもお世話になりました」

僕は家捜しに協力してくれた幽霊の皆さんに頭を下げていた。

「もう行っちゃうの？」

少女がぴよこんと前に出て尋ねた。

「ああ、もう夜だしね。僕も、あまり長居はできない」

「寂しいなあ」

嬉しいこと言ってくれる。少女を見ると、本当に悲しそうだった。変化のない病院に15年閉じ込められる。そんな人の気持ちに僕に分かるはずもないが、想像するのもはばかれるほど辛かったのだと思う。

僕の調査に嬉々として協力したのもそのためだろう。僕は、不意にこの目の前の少女が不憫になっていった。

「・・・どうしたの？」

「いや、別に」

少女が笑顔になる。

「また、遊びに来てくれる？」

「アハハ、二度とごめんだね」

笑顔が凍りついた。

「あの悪霊がいる限りは僕の生命が危うい。んなところに来れるかっつての」

「もう・・・それはそうかもしれないけど、もっと言い方ってもんが・・・女心が分かってないなあ」

「ま、なんだ」

ポリポリとあごを掻く。

「不本意にもハーゲンの手伝いすることになっちゃったから・・・。また来るよ。そして僕が次来る時は君らを成仏させる時だ。僕が、君らを苦しめてきた呪縛から絶対に解放させてやる」

僕は少女を見据える。

少女も僕を見つめる。

そのまま数秒。

「約束・・・してくれる？」

「ああ。絶対。約束は守るためにあるんだよ？」

僕は少女に笑ってみせる。不安げな表情を浮かべていた少女も、やがて笑顔を取り戻した。

「じゃ、約束」

少女が片手を差し伸べた。僕はそれを握る。

「指切りげんまんじゃないんだ」

「あのね。20過ぎたレディが指切りもないって」

「ませたガキだ」

「なんですって？」

手を握る力が強くなる。
痛い。

「まったくこのゴリラ女」

「え？・・・ごめんもう一回・・・言ってくれる・・・ッ？」

「あーッ！痛い痛い痛いっての！」

僕はあわてて手を振りほどいた。

「まったく。もう少しで指の骨がバラッバラになるところだった。」

「・・・じゃ」

「みんなで・・・待ってるからね」

僕は笑って手を振った。

僕は彼女たちを少しでも安心させることができただろうか？

ゆっくりと背を向ける。

ふわり。

暖かい風が僕の前髪をかきあげた。

チャラッチャラッチャラッチャラッ

マナーモードを解除しておいた僕の携帯が間抜けな音楽を響かせた。せつかくかつこいい場面だったのに、クソッ！

僕は携帯を睨み付けたが、携帯は素知らぬ顔で音を出し続ける。やむなく僕は携帯をとった。

西岡だ。

「・・・ああ？」

僕の声は不機嫌になる。

「あ、あれ？敦司くんご機嫌ななめ？」

「何の用だ」

「ちよっ、その喧嘩腰やめようぜ？」

「何の用だつて」

「ああ、そうそう！大変だよ！すぐに駅前通りの先にあるショッピングモールに行け！」

あわてているのは分かるがいまいち要領を得ない。

「・・・なんで？」

「ミドリちゃんと早紀ちゃんが大変らしい！さっきミドリちゃんから電話があつた！」

・・・こいついつの間にか大川内さんの番号を？抜け目ないやつだなと、そんなことより。

「大変つてどういうことだ！」

「わかんねーよ！俺は今から向かうとこだ！お前も急いでくれ！」

「ああ！」

電話が切れた。

・・・ったく、一難去ってまた一難。
ため息をつく、僕は駆け出した。

数十分前。 駅前通りショッピングモール

「あーあ！すっかり遅くなっちゃったね！」

早紀が碧の前で大きく伸びをした。
肩には大量の荷物。

「うん、楽しかったね。でも・・・」

碧は少し困り顔だ。

「帰るの遅くなっちゃうなあ」

辺りはすでに夜。

明日学校がある碧には帰る時間だけが気がかりだった。

「アハハ、大丈夫だよ。うちの馬鹿もまだ帰ってないだろうし」

「そうなの？」

「うん。きつとあの西岡っていうのとどっかほつつき歩いてるよ」

「そっか・・・。あ、それにいざとなったら新幹線で帰ればいいのか」

「そーだよ。アハハ」

ふと、足下にあるものを踏んづけた。

「ん？」

碧が手にとってみると、それはケースに入ったCD-ROMだった。踏んだせいでケースにヒビが入ってしまったが、中は無事のようなのだ。

「何？それ」

「分かんないけど・・・何も書いてない」

碧はそれを拾い上げ、調べてみた。

「音楽？誰かの落とし物かな」

「交番、行こうか」

駅のすぐ近くには交番がある。

碧はそこに行こうと歩き出した。

「・・・！」

「・・・！」

よく聞き取れないが、言い争うような声が聞こえてきた。

「ケンカ？」

「気にしない方がいいよ。交番行こ？」

早紀が碧を引き止める。

「でも・・・」

「み、見つけたあ！」

突然大声がする。

驚いて振り向いた2人の視線の先に立っていたのは金髪の若い男だった。

歳は、碧たちと同じくらいだろうか。

サツと男の前に早紀が立ち塞がる。

「なに？アンタ」

「よかった・・・それだよそれ。そのディスク。それ探してたんだ」

25話 ジョーカー争奪戦その2（前書き）

いや大会やら修学旅行やらありまして、2週間開きましたね。すみません。文自体はずいぶん前に出来たのですが……。ではどうぞ

25話 ジョーカー争奪戦その2

それよりさらに1時間前。野沢組事務所

「戻りました」

ブラックスーツの男が静かにドアを開けた。

手にはカバンとお茶のペットボトル。どこからみてもビジネスマン
とは思えない格好。ただし、その鋭い眼光は、彼が一般人ではな
いことを雄弁に物語っていた。

「おかえりなさい！柴咲さん！」

「おう」

男は事務所のソファからあわてて立ち上がった面々を座るように
促した。

「組長は？」

「奥に」

男は奥の所長室へと歩みを進めた。
軽くノックする。

「失礼します」

「よゝおかえり」

デスクの椅子がくるりと一回転して止まった。

野沢^{あきと}秋人。野沢組4代目組長その人である。ボサボサ頭に眠そうな

目。とても組長とは思えないが、弱冠17歳にして潰れかけていた
野沢組を引き継ぎ、わずか4年で1大勢力にのしあげた男だ。

そして、武闘派集まる野沢組の最強の男でもある。

前組長の甥である秋人の父が自己破産した際、金にするため海外に
売り飛ばされ、子供ながら戦争の一線にて多国籍部隊で活躍してい
た経歴を持つ、と柴咲は聞いたことがあった。

だが、普段のこの人は自堕落もいいところ。

普段は雑務庶務から組事業の指揮まで、すべて右腕の柴咲を始めとした直属の部下がやっているのが現状だった。

おかげで、最近野沢組の他のグループの連中から直属だっただけで威張り腐りやがって、と非難されてるのを、柴咲は知っていた。

「なんか収穫は？」

「分かりません。せっかく東京まで視察に言っただんですがね。分かったことといえばこの新製品の味がいただけないってことぐらいです」

柴咲はお茶のペットボトルを振ってみせた。

「落武者？ネーミングセンスからしてどうかと思うなあ」

苦笑する。

「そついや、帰りの電車でもしろい奴に会いました」

「おもしろい？」

「ええ、鳳の息子」

「鳳・・・あつれえどつかで聞いたような・・・」

「前話したでしょう、俺の恩人です」

「ああ・・・」

「会ったことはあるんですが、あちらは俺に気付きませんでした。ま、最後に会ったのはやつがガキの頃でしたからね」

柴咲は落武者最後の一口をグイと飲み干し、顔をしかめた。

「それより、そっちの方はどうなってます？」

柴咲は一番気になっていたことを聞いた。

「あー、進展ねーよ・・・ったく、岡崎のやるー、めんどくせえことしやがって」

「めんどくさいじゃすまされませんよ！僕の大事な作品が出来なくなるじゃないですか！」

柴咲の後ろから声が響いた。

スーツに縁なしメガネ、到底ヤクザの事務所には似合わない雰囲気なのは相木だ。

相木は東大卒の天才ハッカー。その筋では有名だが、今は野沢組の

組員となっている。

「だいたい、あんな貴重なものを、なんで金庫の中にも入れておかなかったんですか」

柴咲は腹が立つてきた。

組長相手にそんな口の聞き方をしようものなら、前に柴咲がいた組織ならいきなり腹に鉛玉ぶちこまれても文句は言えない。

4代目はいかんせん、カタギとして生きてきた分（多国籍軍隊がカタギといえるのかは微妙なところだが）ヤクザの世界の気構えというか、ルールというものを知らない。

だから舐められる。

「おい」

柴咲は相木を見据えた。

「組長相手になんだ、その口の聞き方は。・・・痛い目みねーとわからねえか？」

「ナンセンス！」

相木は指を突きつけた。

「自分の思っていることははっきり口に出さないといい組織にはならない。あなたもあなただ。あなたが岡崎さんを信用して事務所の留守を任せているうちにアレを盗まれたんですから。あなたたちでいう、落とし前ってやつをとってもらいましょうか」

「・・・チッ」

口では柴咲はこの男には勝てない。

「分かってるよ。事務所をあの男に任せたのは確かに俺だから・・・責任は、とる。いや、とらせる」

柴咲の目は、冷たく笑っていた。

「ディスクを落としたあ!？」

またある別の事務所では男の怒声が響いていた。関東連武会東海支本部事務所である。

部下の手酷い失態に、支本部長を任された貝塚のイライラは頂点に達しようとしていた。

「も、申し訳ありません!この」

「どこだ。どこで落とした!」

部下は首をすくめる。

「名古屋駅前周辺のどこかかと・・・サツに見つかって逃げてたもので。自分、ヤクの件で目えつけられてて・・・」

貝塚は舌打ちして部下の言葉を遮る。

「てめえの言い訳なんざどうでもいい・・・で、てめえ責任はどう取るつもりだ」

部下の顔が悲痛になる。

「は、はいッ!い、今すぐ包丁とまな板を・・・」

「笑わせんな」

「は・・・?」

バンッ!

貝塚は机を拳で叩く。

「はじゃねーよ。てめえはこの失態、エンコー本で済むと思ってんのか?」

「い、いえあの、その・・・」

「死ねよ。死んでてめえの保険金、組に献上しろ」

「な・・・」

「大丈夫、安心しろ。ちゃんと事故に見せかけて殺してやる」

「も、申し訳ありません！ですから、命だけはっ！命だけはっ！」

貝塚はソファ―に座ったままタバコに火をつけた。

「もう一度言う。死ね」

「う・・・うわあああっ！」

奇声を上げたかと思うと、部下の男はポケットからサバイバルナイフを取り出した。

そのままテーブルを乗り越え、ソファ―に座っている貝塚の胸にナイフを繰り出した。

貝塚は動揺ひとつしない。笑みすら見えた。

ふうと息をつくともナイフを繰り出した手をつかみ、ぐるとひねった。

それだけで、ナイフはそのまま突っ込んでくる部下の体に突き刺さった。

対ナイフ用の、ブラジリアン護身術である。

グチャッ！

貝塚の顔に赤い滴が飛び散った。

相手の胸に刺さるはずだったナイフが、自分の胸に刺さってるのを見て、部下の男は一瞬驚愕の表情を浮かべたが、そのまま力尽き、男はぐにやりと倒れた。

貝塚はそれを無表情で見つめている。

やがて、チツという舌打ちが響いた。

「・・・汚れちゃったな・・・おいっ！誰かいるか！」

1人、若い男が入ってきた。

「お呼びでしょうか」

「見ての通りだ。ゴミを片付けろ」

「ハッ、ただちに」

男は無表情でそう言うと、部下に指示を出し始める。貝塚はそれを

頼もしく見つめていた。

「あともうひとつ。ディスクを搜索してくれ」

「ご心配なく。すでに人手は出しております」

恭しく頭を下げる男に、貝塚は満足気に笑みを浮かべた。

25話 ジョーカー争奪戦その3（前書き）

人物紹介 No.011 ハーゲン 自称死神。外見は若い男。黙っていればカッコいいのだが、その奇抜な行動と独特のしゃべりで、他人からは引かれるのが通常。いつもは漆黒のタキシードで決めており、薄手の手袋を忘れない。彼なりのファッションなのだろ
うか。その他、詳細は不明。ちなみに言うと、死神はみんな変人な訳ではない。彼が個人的に変なだけ。作者としては、もっと使ってみたい存在。作者が彼をもっと取り上げた外伝的な話をつくるという噂もある。

25話 ジョーカー争奪戦その3

ところ変わって名古屋街中。

1人の若者が商店街を駆けずり回っていた。

彼の名前は村上駿^{むらかみしゅん}。地元の三流高校の3年生だ。

彼こそが、チーム野沢、敦司がありきたりの落書きに笑った地元不良高校生のチームの頭だ。

当然受験勉強に励んだりなんかはしない。野沢組就職を目指して一直線である。さて、彼、本来ならば今ごろは仲間と楽しくカラオケやっていたはずだった。

仲間を引き連れ、カラオケ店にさあ入ろうとしたとき、彼の携帯が鳴った。

柴咲からの指令だった。

「ディスクを探せ。ディスクは岡崎か蓮武会のやつらが持っている」
野沢組No.2の柴咲からの指令だ。チーム野沢として無視するわけにはいかない。岡崎という男が野沢組から寝返り、なにやらすごいディスクが盗まれたということは村上も聞いていた。

つていつても。村上は思う。
ディスクを持ったやつを見つけたとしても、俺らに何ができるんだろう。

取り返そうと襲いかかっても、あっさり返り討ちがオチだ。

野沢組には入りたいが死ぬのは嫌だ。

村上はディスクが見つからないことを祈った。

商店街を抜けるとショッピングモールに着いた。

「あーあ、疲れたあ。・・・ちよつと一服」

村上は手近の喫茶店に入ろうと足を進めた。

ここのコーヒーは割と美味い。サボるには最適。

「何？それ」

「分かんないけど・・・何も書いてない」

「ん？」

振り向いた。

そこには村上と同じくらいの歳の、かわいい二人組の女の子がCDを持って話している姿があった。

「み、見つけたあ！」

村上は驚き半分、喜び半分の思いで叫んだ。

女の子たちはいきなり金髪の村上が叫んだのを見て面食らったようだが、そんなことは村上にはどうでもよかった。

よっしゃあ！ ついてる！ なんか知らんがあいつらCD落としたらしいな。 とんだオマヌケだ。

「なに？ アンタ」彼女らがまさか蓮武会の人間ってことはないだろう。 一般人がディスクを拾ってるなんざ俺はなんてついてんだらう。 女の子のうちの、ショートカットのスポーティーな方がズイと前に立ちはだかった。

「よかった・・・それだよそれ。 そのディスク。 それ探してたんだ」手早く、ショッピングモール付近にディスクが落ちてて、それを拾った女の子からディスクを受けとる旨を柴咲にメールで送った。

村上のメール打ち速度はとんでもない。 普通の人がやったら指が十秒でつるぐらいの速さである。

「あんたのなの？ コレ」 「そう！ いやぁ良かった。 助かった」

「嘘はいけねえな、ボウヤ」
「っ！」

いきなり背後から冷たい声が聞こえたかと思うと後頭部に衝撃を受けた。

「！？」

「キヤーツ！」

頭がグワングワン鐘を鳴らすように響いている。

「さあ、それは俺達のものだ。 お嬢ちゃんたち、渡してもらおうか」
「シリ・・・」

男が一步前に出、女の子たちが下がる。

「テメエ、須川……！」

「ほお、ボウヤ、オジサンを知っていたのかい？」

「ふ……ふざけるな！それは俺達のものだ！」

須川はフツ、と笑った。

「粹がるな。ガキが」

パチンと指を鳴らす。

後ろに控えていたチンピラ……20人はいる。が、前に出てきた。

「あ、兄貴……」

「すみません、兄貴」

「タツ！リヨウ！」

そのチンピラに腕を抑えられ、ぼこぼこにされた顔で同じ高校の2年の弟分、タツとリヨウが前に引きずり出された。

「てめえら……！」

「来い……お嬢ちゃんたちもだ」

「待て！関係ないだろあの子たちは！」

須川は笑い出した。

「何がおかしい！」

「おかしいさボウヤ。ディスクを持っておいて無関係とはいかないだろう。俺にとっては、お前の方が関係ない。さつさとお帰り願いたいのだがね」

「く……っ！」

須川は裏通りの方へと進んでいく。

「待てっ！」

追おうとした村上の前にチンピラたちが立ちふさがった。

「チッ！」

舌打ちしながらファイティングポーズをとった村上に、1人の男が歩み出た。

「よお村上、久しぶりだな」

「お、お前は！」

かつて村上に喧嘩で鼻を折られた先輩。名前は……森だったか。

「ヒヤハハハッ！巡り合わせってのは面白いなあ村上！この鼻の礼を、できる日が来るなんてなあ！」

森は、整形で不自然に大きくなった鼻を指して言った。

「あ、それ自前だったの？てつきりパーティー用の付け鼻かと思つてたぜ」

「んだとお！？」

「いやあ、しつかしでつかい鼻だな。それじゃその鼻輪もずいぶんとビッグサイズになるだろ・・・や、失礼、そりや鼻ピアスカ」

「ぶっ殺す！」

森が走り出したのを合図に、全員がドタバタ走ってくる。

村上はニヤリと笑うとくるりと後ろを向いて走り出した。

「待ちやがれ！」

村上は中学時代は陸上部で鳴らしていた。ブランクはあるとはいえ、タバコやドラッグでボロボロの体の連中に追い付けるはずはなかった。

対して、村上は手加減しながら走る。距離が空きすぎてもいけない。追いかけるのを諦めたやつらが、さっきの女の子たちに何をするか察するに難くない。

村上とチンピラたちは一定の距離を保ったまま裏通りを走り続けた。一瞬、表通りを走り、そのまま交番に駆け込むということも考えたが打ち消した。

それでもやはり、報復として女の子たちに危害が及ぶかもしれないからだ。

村上はチンピラ20人を全員引き付けておく必要があったのだ。

曲がり角を曲がる。その場でヒラリと店の敷地内に入り込んだ。

1人目が気付かずに通りすぎる。

2人目・・・。

3人目・・・。

10人目が通り過ぎようとしたとき、村上は通りに躍り出た。

いきなり出てきた村上に目を見開かせた時には、村上の拳がすでに

みぞおちに決まっていた。

前方では9人目の姿が遠くなっていく。もう走るのに精一杯のようだ。その時11人目が曲がり角を曲がってきた。

森だった。

さすがにタバコやクスリでイカれた体じゃあこのマラソンは厳しかったらしい。村上はフンと鼻を鳴らした。

森の前に躍り出た。

森はたたずを踏んで立ち止まる。

驚愕の表情の森にニツコリと微笑みを送り。

村上の拳が唸った。

あとはもうベルトコンベアで作業しているようなものだった。

待つ。敵が来る。殴る。待つ。

ずっと走ってきたチンピラに、もう村上と戦える体力が残っているはずもなく。ただ倒されるのを待つのみだった。

ちなみにこの作戦は村上が考えたものではない。

野沢組長直々に、足の早い村上専用対多数戦対処法として、教えられたものである。野沢組は戦闘訓練として、組長や組長から戦闘技を叩き込まれた柴咲などから軍隊戦闘法を修練している。それはその一環である。

さすが多国籍部隊のエース、と村上は感激・・・したいところだったが、野沢はそれをエロ雑誌読みながら言っていたので、本当に大丈夫か？コレ。と、不安に思っていた。

まったくの無傷で11人を片付けた村上はもといった裏通りへと向かう。

村上にとって、この裏通りは庭のようなものだ。
最短ルートで走る。

全てはディスクを取り戻すため。

あとは奴をぶちのめすだけだった。

25話 ジョーカー争奪戦その4（前書き）

人物紹介No.012 鳳早紀 敦司の従妹。敦司の1つ下で
高校2年生。碧とは以前からの友人。幼少時から活発で、男勝り。
最近は少し落ち着いたがそれでも彼女の鉄拳制裁は敦司の脅威とな
っている。というか、空手を父親から習っている彼女の正拳突きは
命すら脅かしている。背中に傷痕あり。それに関しては近いうちに
明かされると思われる。（詳しく言うと26話の真ん中辺り？）

25話 ジョーカー争奪戦その4

「さあ、ディスクを渡してもらおうか、お嬢さん方？」

須川が冷たい薄ら笑いを浮かべて迫った。

ディスクを渡してしまうべきか。

早紀は考えた。

こいつはディスクを欲しがっている。

感じからしておそらくヤクザ。

そんな奴が本気で欲しがっているところを見ると、ろくなディスクではないのだろう。

ということは、この変なディスクを知ってしまった自分たちはタダでは済まないのではないか？

素直に渡したところで、待っているのは死、というのは十分考えられる。

どうにかしないと。

早紀は1つ、作戦を考えた。

成功すれば、少なくとも碧だけは逃がせる。
しかもディスクはやつらの手には渡らない。警察行きだ。

「ディスクってこれのこと？」

早紀が一枚のディスクを取り出してみせた。

須川の笑い皺じわがますます濃くなる。

「そうだ。さあ、それを渡せ」

「待つて」

早紀はディスクを引っ込めた。

「条件として、この子はすぐに逃がして」

「早紀ちゃん！？」

「・・・なぜそんなことをする必要がある」

須川のはなみはすっかり消え、あるのは無表情と、鋭い眼光だけだった。

「あんたたちなんて、信用できるもんですか。このあと私たちが危害を加えない保証がどこにあるの？」

「・・・」

須川は黙り込んだ。

「分かった。お前は逃げていい」

「早紀ちゃん」

「行つて！」

碧は走り出した。

よし、これでこのままバレなければ・・・。

「じゃあディスクを」

「お前はついてこい」

「え？」

「引き渡しは事務所で行う」

須川は、また顔を歪ませる。

「さっきのが警察を呼んで来ないとも限らんからなあ」

「・・・」

早紀は毅然とした態度を崩さなかったが、内心はかなり焦っていた。さつき見せたのは偽物。

早紀がダビング用に買ってきたただの空きCDである。本物は碧が持っている。おそらく警察に渡すだろう。それがバレた時、果たしてどうなるか・・・考えたくもない。

車がゆっくりと近づいてきた。

「俺の手配した車だ。さあ、事務所まで来てもらおうか」

「おい、チンタラしてらんねーからなあ。さっさとしろよ。ヒヤハハ！」

運転手が愉快げに笑った。不快な笑いだ。

車からは黒服が2人。さっきのチンピラのようなザコには見えなかった。

チンピラだったら早紀1人でもなんとかできる自信はあった。しかしこの黒服は違う。

隙は見えない。

訓練でもされてるのだろうか。

どうしようもない。

早紀は唇を噛んだ。

碧は1人走っていた。

どうしよう。

早紀ちゃんはある嘘についてあの人たちを騙そうとしてたけど、あの人たちがそう簡単に騙されるはずがない。

バレた時、早紀ちゃんは……。

碧は携帯を取り出した。

警察に行く前に電話しよう。1つの電話番号が頭に浮かんだ。

身内の一大事、本当はあの人に伝えたかったが、あいにく電話番号を知らない。碧は携帯を取り出した。

「もしもし、西岡くん？」

「須川さんらしくないねえ」

1人の男がその様子を眺めていた。

「こつちをマークしてないなんて、さ」

クチャクチャとガムを噛む音が響く。

この時男はすでに本物のディスクは彼女が持っているのだと見当をつけていた。そもそも、あの子1人を無理に逃がそうとしたところからして不自然だ。

「さて、と」

男はガムを吐き捨て、彼女の方に歩み寄った。

「ねえ、ちよつといいかな」

碧は不自然な男の登場に、警戒した。

「・・・なんですか」

「ああ、いや。その君が持つてるディスク。返してもらえると嬉しいなって」

男は適当に見当をつけ、肩に下がったバッグを指して言った。

当てずっぽうだったが、碧の顔には狼狽が走った。

「ディスク？な・・・なんのことですか？」

「隠しなさんな。嘘つくつてのは案外エネルギーがいるもんだ」

男はニヤツと笑った。

「あなた、何者ですか？やっぱりさっきのやつらの・・・」

「ああ、仲間っちゃあ仲間かな。若葉っていう。若葉慶太。よろしくな、素敵なお嬢さん」

「・・・」

碧は嫌悪感を露にした。

「で、話を戻すが。ディスク返してくれないか？」

シリ

碧はゆっくりあとずさりした。

若葉は苦笑する。

「1つ良いことを教えてやるよ」

「あなたから聞くことなんてありません」

若葉はまたニヤリと笑った。

「まあ聞けつて……。残ったもう1人……。なんていうのかな？
あの子、ディスクが偽物だってバレたらどうなるかな？きつとタイ
ヘンなことになるよねえ。須川さん、気性荒いからね。タダじゃ済
まないよ」

「……！」

「でも本物が出てくれば他のことなんざどうでもいい。場合によつ
ては逃がしてくれるかもよ？……。いや、なんなら逃がすように俺
から須川さんに言つてやつてもいい」

「でも……」

ニヤニヤ笑いがフツと真面目な顔になった若葉は息をついた。

「……なあ、ヤクザを甘くみちやいけない。その場がたとえうま
くいったとしても、後で必ず報復は来るもんさ。な？悪い条件じゃ
ないだろう？お嬢さんにとって、そのディスクはなんの必要もない
ものなんだから」

「待つて」

「ん？」

「あなたが早紀ちゃんを逃がしてくれる保証は？」

若葉は黙り込んだ。

「信用してくれ、っていうしかないな。ま、俺を信用なんかできな
いかもしれないけどな。でも、少なくとも俺はお嬢さんに危害を加
えてない。こんな取引なんかせずにごんごりや済む話なのにそれを
しなかった。そこに免じて、信用しちゃくれないか？」

「……」

しばらくの沈黙。やがて碧は口を開いた。

「分かった。信用します。これで早紀ちゃんを逃がして下さい」

「信用には応えるさ。君の友達は助けるよ。約束する」

ディスクを受け取った若葉は、ニツと笑ってみせると、闇の中へと
走って消えた。

碧は息をついた。

これで良かった

んだよね？

ディスクを渡さなかったら早紀ちゃんの命は危なかった。

西岡くんたちの到着を待つべきだったか？

いや、西岡くんが到着する前に早紀ちゃんが殺される可能性だってある。

これで、良かったのだ。

碧はもう一度、大きく息をついた。

25話 ジョーカー争奪戦その5（前書き）

今月は真面目に更新していこうと思ったのに1週間空いてしまいました。いや、機種変におけるゴタゴタと作者体調不良が重なりまして。てなわけで言い訳で始まる本編ですが、どうぞ

25話 ジョーカー争奪戦その5

「・・・」

早紀は無言でうつむいていた。

このままじゃ間違いなく命はない。

なんでこんなことしちゃったんだろう。

つまらない正義感さえ起こさなければ今ごろは家でシャワーでも浴びてるはずだった。

嫌な汗でベタついた体を思い起こし、思わず顔をしかめる。

「クク、どうした？トイレでも行きたいのか？」

落ち着かない早紀に須川は醜く笑った。

事務所に連れて行かれるのに怯えてる、と思っっているのだろうか。

怯えてはいる。しかしそれはこのあと起こるであろう事態への恐怖によるものだ。

ただ、ディスクが偽物だと分かったとき、この余裕綽々の顔は、どんな顔をするんだろう。

そう思うとこんな状況なのに少し笑えた。

しかしながら両脇に男。助手席に須川。それに運転手。

こんな状況では生まれた笑みもすぐに立ち消えた。

「・・・」

早紀は無言のままだ。

「黙りこくつて・・・ん？」

電子音が響いた。

須川の携帯だ。

須川は首をひねった。

こんな時に、誰だ？

「もしもし」

「俺だけど」

「・・・」

須川は思わず顔をしかめた。

若葉慶太。須川がもつとも嫌う男の1人だった。

若くして本部から回された東海支部のNo.2だ。

武闘派でありながら頭もキレる。

本部期待の若きエースは今まで須川が受けていた支部長である貝塚の信頼を一気にかつさらった。

最近是中国出身の王とかいう名前の偉そうな名前のやつが貝塚の腰巾着に収まり、時期幹部候補と囁かれているらしい。

長年蓮武会で生きてきた須川にとってはおもしろくない。

しかし、今はディスクという大手柄がある。

ガキめ。ざまあみる。須川は口元を緩ませた。

「どうした。こっちはディスクを手に入れたぜ？お前はどこで遊んでいたか知らんがなあ」

「遊んでいた、か。ハハ、確かな。女の子に声かけてた」

「何？」

須川は眉をひそめた。

「いやー、でも遊んでみるもんだねえ」

何が言いたい？

「いやね。その女の子、なんと持ってたんだわ、お探しの物を」

「お探しの物・・・ハッ！ディスクはここにあるぜ！」

「須川サン、なんか勘違いしてんじゃないかなあ。ディスクの面、よく見てみた？」

「・・・！」

須川はくるりと振り向いた。

早紀はビクリとする。

「おい！ディスクを出せ！」

「え・・・え？でも引き渡しは事務所って・・・」

「いいから出さねえかつ！」

「で、でも・・・ああっ！」

左隣の男にバッグをぶんどられる。

男はすぐにディスクを探し当てた。

終わりだ・・・。

早紀は目をつぶる。

「・・・！」

須川は愕然とした。

「・・・あつたかい？印。ハート・ダイヤ・スペード・クラブのトランプのマーク」

「・・・ない」

そうだった。

蓮武会が奪い、野沢組が取りかえそうとした、プログラミングの天才相木が造った世紀のコンピュータウイルス『ジョーカー』は、ディスクにトランプの4つのマークが刻んであるはずだったが、これがこれにはそれがない。ただのCDだ。

そもそも、コンピュータウイルス『ジョーカー』とは、販売目的で作ったものではなかった。

野沢組は、組長が変わってから表の事業を幅広くやってきた。

キャバクラなどはもちろん、不動産、IC、パソコン関連、警備会社、それに飲食店などだ。

今や『野沢商事』は表でも知る人ぞ知る企業。

しかし、相木率いるIC部門は、なにも普通に販売するわけではない。

データだけつくり、そのデータを大手パソコン会社に数億、数十億で売り付ける、それが野沢商事の常套の販売方法だった。

そもそも、『ジョーカー』は、相木が作った世界最高水準のウイルスバスターとテストとして戦わせるために作られた、いわばオマケに過ぎなかった。

しかし、オマケとはいっても世界最高峰のウイルスバスターと対するウイルスなら、必然的に世界最高のものとなる。

その情報をスパイだった岡崎から聞いた貝塚はウイルス奪取を指示、

現在にいたるといわけだ。

しかし、蓮武会がなぜコンピュータウイルスなどを必要としたのか？それは須川も不思議なところだったが。

「く・・・クソッ！」

『ジョーカー』ではない、ただのCDをつかまされ、その上若葉に出し抜かれたらしいことを知った須川は齒噛みして悔しがった。

「で」

若葉は言葉を続ける。

「須川サン、女の子拉致つたでしょ。マズイっしょ。関係ない子拉致つちゃ。その子すぐに解放しちゃくれませんか？」

「・・・何を企んでいる？」

「で、いいますと？」

「お前がガキ1人を心配するなんざ・・・」

「カタギにはなるべく迷惑は掛けない。当然のことっしょ？」

若葉は笑みを崩さず言った。

須川は低く笑った。

「今さら何を言ってる」

「俺はね須川サン、もう疲れたんですよ。罪の重荷を背負うのにはね」

「・・・フン、そんなやつはヤクザにや向いてねえんだよ。辞めちまえ」

「辞めちまえ？ハハハッ！」

若葉は笑い出す。

「辞めるなんて簡単にやできないことくらい、須川サンだって知ってるでしょ？」

「・・・」

「抜けられないんですよ。一度入っちゃったらそれまでだ。でもね、それはそれでいいんです。組に入った時から、覚悟してましたから」
若葉は自嘲したように笑う。

「てめえは上から殺せつて命令があれば、断るつもりか？」

若葉は笑った。それがどこか寂しそうに聞こえたのは須川の気のせいだったのかもしれない。

「命令とありや従いますよ、でもその辺は、おやっさんも分かっているとありますがね・・・」

若葉のいうおやっさんが蓮武会本部組長の蓮見遼太郎であることは須川にも分かった。

「だから、ね。その子を殺さないって約束してくれんならディスクはあなたが見つけたってことにしておきます」

ガキに施しを受けるほど墜ちちゃいねえ！と怒鳴りたいところだったが、魅力的な提案ではあった。

このままでは須川は二セモノ巡っててんでこ舞いしたただの間抜けだ。

「分かった。だがこのガキとディスクは引き換えだ。いいな」

はあ、というため息が受話器越しに聞こえた。

「信用ねえなあ、俺。まあいいや、約束ですよ」

「分かった。どこへ行けばいい」

「そうだな・・・戻ってきてください。生憎、こっちは足が無いんでね」

「分かった」

須川は電話を切ると近くの駐車場に適当に入り、Ｕターンした。

「これで俺も支部長に・・・」

もはや用済みになった早紀のことなどすっかり忘れた須川は上機嫌にアクセルを踏むのだった。

25話 ジョーカー争奪戦その6（前書き）

携帯替わったので執筆ペースが落ちてます。変換しようと思っても
できなかつたり……。慣れるにはまだ時間が かかりそうです（；
^ | ^ A

25話 ジョーカー争奪戦その6

西岡は走っていた。

聡美にお土産であげようとご当地キティちゃんを漁っていたのが15分前。

すぐに敦司に電話を入れたあと自身も目的地に向かっていったのだ。しっかし敦司のやつ、やたら喧嘩腰だったなあ。走りながら首をひねる。

問題のショッピングモールが見えてきた。

「・・・ん？」

正面の方に見るからに俺ヤンキーです的な金髪の男が走ってきた。男はキョロキョロ辺りを見回したが、やがて裏路地へ入っていった。怪しい。

西岡は男をつけて、路地へ入っていった。

路地裏に入った村上は1人佇むミドリの姿を見つけた。

1人。須川からよく逃げられたなと思いつつ、村上は声をかけた。

「ふう・・・大丈夫だったか？」

「あ・・・うん。でも、あなたは？」

「ハッ！楽勝楽勝！ノシて来たよ。・・・で、ディスクは？」

「俺が持つてるよ」

いきなり現れた男に村上は身構えた。

「あんたは？」

「俺？俺若葉。若葉慶太。よろしくね」

「お前・・・蓮武会か」

「まあね。・・・おっと、慌てんなよ」

若葉は村上のパンチをスイとかわし、楽しそうに笑った。

「人の話は最後まで聞くもんだ。いいか？俺はな、取引してんだ。このディスクを渡さないともう1人の女の子の命はねえんだ」

「・・・」

村上は辺りを見回した。

そういえばもう1人の女の子はどこにもいない。ただ単純に須川から逃げてきた訳ではなさそうだ。

村上は若葉を一瞥した。

「俺は野沢組だ。女の子なんざどうでもいい。ただお前からディスクを奪うだけだ」

「ハハハ」

「・・・何がおかしい」

「俺だつて野沢組の組風くらい知ってるさ。お前、おれからディスク奪つて、その結果女の子死んだらお前どうなる？なあ。何より義理を重んじる野沢のルーキーさんよ」

村上は苦い顔になる。

もつとも、野沢組のルーキーと言われたことに悪い気はしなかったが。

はあ、と息をはく。

これで盃もお預けか。

「・・・分かったよ。ディスクはいい。あの女の子は俺が巻き込んだようなもんだからな・・・」

笑みを浮かべた若葉を村上はキツと睨む。

「ただし、ちゃんと彼女が帰ってくるか見届けさせてもらう。蓮武会は信用できねえからな」

若葉は苦笑した。

「構わないよ。ただ、隠れてることだ。君がいると話がややこしくなる。あと」

若葉はチラリと村上の後ろを見た。

「その後ろのは、お仲間かい？」

「え」

「西岡くんっ！」

碧が声を上げた。

まさか気付かれてはいないだろうと思っていた西岡は焦ったが、結局素直に出ていくことにした。

「なるほど、彼女のお仲間ってワケね」

「あんだ、今の話は本当だろうな」

「嘘はつかない」

若葉はニンマリして西岡たち3人に下がっているよう命じた。

エンジン音とともに車がやってくる。

しかし、その車から降りた人物を見て、若葉の笑みは凍りついた。

「な・・・貝塚さん？」

降りてきたのは誰あろう、若葉たちにディスクを探せと命じた張本人、関東蓮武会東海支部長の貝塚その人だった。

サツと後ろにはワン（王）が控える。

「おお、ディスクは見つかったようだな。ご苦労だった」

貝塚は若葉の手にあるディスクを見て言った。

「ち、違うんです、これは・・・」

「違う？何が違うんだ」

なんてことだ。なんで貝塚さんが直々に？

若葉にもはやいつもの余裕の笑みはなかった。

貝塚が自ら現場に来る。それからしてすでに計算が狂っている。

「これを見つけたのは・・・その、須川さん、で」

「意味がわからない。じゃあ須川はどこにいるんだ？」

「それは・・・」

ブロロロロッ

最悪のタイミングだった。車がもう1台走ってくる。若葉は思わず

目を覆った。須川だった。

「や、やつぱりてめえ騙しやがったなっ！」

助手席から顔を出した須川がわめき散らした。

「ち、違う！これは・・・」

「うるせえっ！とうとう本性を現しやがったわけか、アア？」

「誤解だ！これは」

「何をわめいている。早く降りてこないか、須川」

貝塚が須川を睨み付けた。須川はすぐむ。

チクショウ、全てはこいつのせいなのに・・・！

須川の中でプツリと何かが切れた。

「貝塚さん・・・こんな奴に騙されてはいけませんっ！」

須川が何かを取り出した。その瞬間。

乾いた破裂音の後、体を捻るように若葉が倒れた。

車はそのまま走り去る。

「なっ・・・」

一瞬の沈黙の後、動いたのはワンだった。

拳銃を懷から取り出し車のタイヤを撃ち抜こうとする。

しかし引き金を引く前に、車はものすごいスピードで交差点を曲がっていった。タイヤの擦れる音が響いた。

ワンは貝塚に深々と頭を下げた。

「・・・申し訳ありません。仕留められませんでした」

「フン、気にすることはない。奴は我々を裏切った。それだけだ」

貝塚はそう言い捨て、若葉の方を見た。

「大丈夫か。・・・ワン、車を手配しろ。病院へ向かえ。この車に

は俺が乗って奴を追いかける」

「グ・・・ッ」

咄嗟に体を捻って急所から弾を外した若葉だったが、肩からは血を流している。しかし、その顔にはいつもの笑みが浮かんでいた。

「貝塚さん、大丈夫ですよ俺は。・・・これは誤解なんです。考えなくてもみてください。あの須川さんが、どうして組を裏切るんですか

？理由がないでしょう」

「・・・」

「ウツ・・・ク・・・。こ、これは、誤解から生じたものです。この一件、俺がまとめてみせます。・・・俺に任せて、くれませんか・・・・」

若葉は痛みを堪えながらも貝塚を見据えた。

「・・・ダメだ」

「貝塚さんっ！」

「これは命令だ。お前は病院へ行け。ワン、若葉を連れていけ」

「了解しました」

「・・・はい」

命令と言われれば、若葉は何も言えなかった。

曲がり角からヘッドライトが見えた。

手配した車が到着する。

ワンは若葉の前に回り、ドアを開けた。

下を向いて、車に乗り込む。

車のステップに足をかけた時、貝塚は口を開いた。

「・・・須川は生かして連れて戻す。一緒の子供は逃がす。それでいいんだな？」

「は、はいっ」

若葉の顔がパツと明るくなった。

若葉が深々と頭を下げるのを後ろに、貝塚は考えていた。

面倒なことになった。

ディスクは手に入ったが・・・。

車に乗り込もうとするワンを呼び止める。

「なんでしよう」

貝塚はディスクを手渡した。

「渡しておく」

それだけで通じたのか、ワンは一礼し、車に乗り込んだ。

それを見届け、貝塚は携帯を開いた。

「俺だ。ディスクは手に入った。手筈通り、進めろ。いいな」

25話 ジョーカー争奪戦その7（前書き）

・・・お久しぶりです。いろいろ大変なことがありまして小説から大分離れていました。m(_____)m え？大変なこととは何か？・・・諸事情です諸事情。口に出すのもおぞましい諸事情です。しかもそれは場合によってはまだ続く恐れがありまして・・・(@|@;) てなわけで小説、今まで以上に投稿ペースが下がるかも・・・全国の学生さんへ。みんな、勉強しようね(・・)

25話 ジョーカー争奪戦その7

車が走り出した時真つ先に動いたのは西岡だった。

ビルの影に隠れていた3人は、若葉が撃たれて倒れた瞬間を目の当たりにしていた。

動き出した車を西岡が走って追い始める。

「待って！」

「でも！」

「今出たら危ないよ！あんな奴らがいっぱいいるのに！」

「・・・ッ！」

確かにあの貝塚とかいう大ボスのおかげで、ヤクザな奴らはかなりの数だ。

西岡は地団駄を踏んだ。

そうしているうちに、車は角を曲がって見えなくなった。

ため息をつく。

「でもどうするよ？」

西岡は苛立ちを隠せない様子で言った。

「あの連中消えるまでずっと待ってるのか？俺はゴメンだぜ、そんなの」

「うーん・・・でも・・・あつ！」

碧が指したのはビルの裏。いくつか車が停まっている所に裏口があった。

「ここから出れば気付かれないよ」

「よし！行こう！」

碧と西岡が駆け出した。が、村上が動かなかったのでたたずを踏んだ。

村上は迷っていた。

早紀を巻き込んだのは自分の責任。しかし、自分の任務がディスクを持ち帰ることであるのもまた確かなのである。

しかし・・・。

村上はフウと息をついた。2人を見る。

「ちよっと待ってくれ」

柴咲に連絡をするため、村上は携帯を取り出した。

「・・・クソッ！なんでこんなことに・・・」

ガンッ！と何かを叩く音が聞こえた。

どうしよう。

早紀は焦っていた。

何がなんだかよくわからない。

ただ、前の須川とかいう男が発砲して、人を殺したのは確かだった。そしてこの男は怒りで興奮している。

このままじゃ殺される。そんな確信が早紀にはあった。

しかし、逃げ出そうにも両脇を固められては不可能。万事休す。

とりあえず武器になるものを探した。

何かあっただろうか。

買った物が入った買い物袋はさっきのゴタゴタで置いてきてしまった。

シオルダーバッグの中には財布にハンカチに簡単な化粧品。

・・・ダメだ。武器になりそうな物はない。

一瞬化粧品を投げつけようかとも思ったが、両脇の屈強なツインタワーとでも言うべき大男が、香水かなにかを吹きかけられた程度で

どうにかなると思えなかった。

しかも、失敗したら終わりだ。怒りで昂るこの助手席の男に殺されるのを待つのみ。

ポケットの中を探る。

ん。。。。

固いものに手が当たった。こういう表現をするとき、大抵中の物は黒光りする拳銃だったりするのだが、もちろんそんなことはない。ただの携帯電話だった。

携帯電話でどうしろっていうのよ。。。。

。。。ん？携帯電話？

そうだ！

ポケットの中に指をすりこませ、携帯を半開きにした。

ソフトキーを押せばメール画面に移行する。

まさか取り出す訳にもいかない。ブラインドタッチである。

5のボタンにあるポッチを起点に、間違えないように慎重にボタンを押していった。

あとは送信。。。。

作業が終わり、早紀は小さく息をついた。

もしかしたら意図したものと全然違う文章を打っていたかもしれないし、送信されてないかもしれない。

しかし、心配してもしょうがなかった。

お願い、うまくいって。。。！

早紀はただ祈るのだった。

26話 過去の誓い その1（前書き）

全然投稿できないんで、ここらで一挙に投稿します

26話 過去の誓い その1

「ゼエ、ゼエ」

僕は完璧に息切れしていた。

そもそも、走るといふ選択肢からして間違っていた。病院からショッピングモールまで、どのくらいあるのか。分かりやしない。

フルマラソンよりは短いだろうか。

なんとかここまで走ってきたが、体力は限界。病院のあったところは辺境の地なのでタクシーすら走っていない。困った。

こうしてる間にも早紀が大変なことになってるかもしれないのに。疲れた体に鞭打って走る。大きな道に出た。国道だろうか。

車が行き交う中、僕はタクシーかバス停を探して辺りをキョロキョロ見回しながら走った。

「・・・ぬ〜」

バスもタクシーも見当たらなかった。

クソッ！

焦りだけが募る。

その時、1台の車が目の前に停まった。

「よお、急いでるみたいだな」

「な・・・っ」

左ハンドルの運転席の窓から、思わぬ顔が飛び出した。

「あの時の・・・」

あの電車のスーツの兄さんだった。

「どうしたんだ、一体」

「柴咲さんっ！こんなところで油を売ってる場合ではないっ！」

助手席に座る神経質そうな眼鏡の男が大声を上げた。柴咲と言われた兄さんは眼鏡を一瞥するとこちらを見た。

「気にするな・・・で、どうした？」

彼に事情を話すべきか迷った。しかし、もしかしたら乗せていつてもらえるかもしれない。車に乗せてもらえるとすることは何事にも替えがたかった。

「実は・・・」

僕は太田内さんから西岡にヘルプのメールが来たことを話した。

「・・・で、駅前のショッピングモールに急がなくちゃならないんです」

「ショッピングモール・・・」

柴咲さんの目が鋭くなった。なるほど、こういう目は怖いかもしれない。

「よし、乗れ」

柴咲さんは車の後ろを指した。

「柴咲さんっ！部外者を連れ込むのは・・・！」

「俺はお前の上司だ。お前に決定権はない」

柴咲さんは冷たく言い放つと僕を促した。

眼鏡は憤りのためか唇を震わせ、僕を睨み付けた。

気まづくなりながら、僕は車に乗り込む。

「実はな」

車を発進させながら柴咲さんは口を開いた。

「俺たちもその女の子を追っているんだ」

「早紀をですか！？」

「ああ。彼女が巻き込まれたのは俺らの責任だ。だから俺らがしっかり連れ戻す」

「責任？」

「ああ、彼女は俺ら野沢組と、関東蓮武会のイザコザに巻き込まれたんだ」

「・・・じゃあ兄さん、ヤクザ？」

柴咲さんは薄く笑った。

「そういうことだ」

ヒュウ。

僕は心の中で口笛を吹いた。

彼がうちの父と同類という予想はある意味当たっていたのだ。

「柴咲さんディスクは・・・！」

「もう無駄だ。村上の話によるとディスクはもう貝塚の手の中らしい。今さら勝算も無しに突っ込むことはできない」

「・・・ッ！なら私の作品はどうなるというんだッ！」

「知るか。今はお前の作品云々よりも人命が大事。そういうことだ」
「それは・・・ッ。そうだが・・・」

眼鏡は黙り込んだ。

作品だのディスクだのよく分からないことを話していたが、なんとなく質問すると大変な気がして、黙っておいた。

と、携帯がリズムカルな音を鳴らし始め、この剣呑な雰囲気を変えて壊した。

「・・・」

2人がジロと僕を見る。

「あ・・・あはは。すみません・・・」

僕は笑いにならない笑いでごまかしつつ携帯を開いた。

メール？ちくしょう、一体誰から？

もし西岡だったらしめてやる・・・

「あっ！」

メールは早紀からだった。早紀からのメールには

『くにさかとおり』

とあった。

「これっ！早紀からです！」

僕は携帯を柴咲さんに突きつけた。

「貸せッ！」

「携帯見ながらの運転は感心しない。私が見よう」

柴咲さんに渡す前に眼鏡が携帯をぶんどった。

「お、おい！」

柴咲さんの抗議をよそに、眼鏡は無言でパソコンを引っ張り出した。

「何を？」

「くにさかとおり。国坂通りだ。通称グルメ通り」

「グルメ通り？」

「飲食店ばかりだからそういう名前がついた国道だよ」

柴咲さんが説明を引き取った。

「そういうことだ。そして・・・」

眼鏡がカシャカシャとキーボードを叩く。

「人気のないところを進むと仮定すればターゲットが行くルートは・・・」

カチカチツとマウスを叩く音。

「出た。次の道を右折。100キロで飛ばせ」

「ああ、分かった」

柴咲さんがグツとアクセルを踏み込んだ。

「さっきまで反対してた奴がヤケに積極的じゃねえか」

柴咲さんが笑った。

「人命優先というのは確かだからな。同じディスクは作れても、同じ命は作れない。・・・見つけるのが遅れるだけルート予測の精度も低くなる。さっさと見つけることだな」

「ハハ、言われんでも分かっているさ！」

速度メーターがグングン上がっていく。

80・・・

90・・・

100・・・

110・・・

120・・・

眼鏡のナビゲーションも的確だった。

車は渋滞のないルートをスイスイ進み、問題のグルメ通りを過ぎた。

「・・・そろそろ見えてもいい頃だが・・・」

「あっ！」

前方に無謀な運転にクラクションを鳴らされる黒い車があった。

と、車がいきなり速度を上げ始めた。

僕らが追っつけてくることに気付いたのだろう。

「間違いない！あれだっ！」

柴咲さんはさらにアクセルを踏み込む。

相手の車もスピードを上げていたが、こちらは最初から100キロ以上で飛ばしていた。

グングン距離が迫る。

「・・・パソコンしまっておけ。壊したくないならな」

慌てて眼鏡がパソコンをカバンに突っ込む。

「行くぞ！しっかり捕まってるよ！」

ガシャンッ！

柴咲さんは車を接近させ、ボディを擦り合わせた。

左ハンドルの柴咲さんと右ハンドルの相手の運転手が睨み合う。

ガシャンッ！

またぶつけた。僕は後部座席の窓から相手の車を見た。
いた！

後部座席に屈強そうな男2人に囲まれた早紀が僕を見ていた。

「早紀ッ！」

僕はドアを開け放った。

強い風が吹き込む。

「お、おいっ！馬鹿な真似はよせっ！」

眼鏡が叫ぶ。

柴咲さんはカーチェイスに必死だ。

ガシャンッ！

3度目の衝突。

開いていたドアは衝突で跳ね飛んだ。

風がさらに強くなる。

「ッッ！」

僕はカバンからタオルを取りだし、拳に巻き付けた。フウと息を吐き精神統一。そして。

「ツリヤア！」

接近に合わせ、相手の車の窓を叩き割った。

早紀の右の黒服は思わぬ事態に怯む。

「撃てッ！」

眼鏡が僕に何かを投げて寄越した。

黒くて固い、冷たいもの。拳銃だった。

「カタギの！しかもガキにそんなものを！」

「ナンセンスッ！状況を考えろ！」

柴咲さんの抗議に怒鳴り返す眼鏡。

僕はテレビで見たように安全レバーを引き、左目をつぶって照準を合わせた。

風が顔に吹き付ける。

「・・・！」

見えない。

目がバカみたいに霞み、目の前の車がぼやけた。

その理由を考えるのに一瞬かった。

その時。

キキキキッ！

相手の車はドリフト走行で左に伸びる脇道へと逸れた。

「しまったッ！」

柴咲さんが叫んだがもう遅い。

カーチェイスしていた車がいきなり曲がれる訳もなく、僕たちの車

は直進・・・。

くそっ！このまま逃がしたら早紀は・・・。

車が離れていくとき、早紀は何か叫んだ。

「・・・ッ！」

聴こえなくても分かった。『お兄ちゃんっ！』

早紀はそう叫んでいた。

その瞬間、僕の頭にある一瞬がフラッシュバックした。

あの時も早紀は叫んだ。『お兄ちゃんっ！』と。

だから、僕は飛び出した。あの時の、早紀を守るという約束を果たすために。

26話 過去の誓い その2（前書き）

人物紹介No.13 柴咲（下の名は不明） 東海地域で最近
力をつけている野沢組のNo.2。歳は30いくかないか。普
段は割と温厚だが、怒ると怖い。とても怖い。武闘派なので理知的
な相木とはあまり反りが合わない。組長がまったく働かないため、
毎日あっちこっちに飛び回り、忙しい日々。敦司の父親と知り合い
らしいが・・・。

26話 過去の誓い その2

私は思わず叫んでいた。

何をやってるんだろう。

もう頼らないって決めたのに。

お兄ちゃん・・・あっちーはすぐ無茶をしてしまっ。だからあの時決めたのだ。私は自分で自分の身を守る、と。

だから、諦めない。

あの時の悲劇を繰り返さないために。

早紀がストーカー被害に逢っている。

その事を初めて知ったのは中学に上がって最初の夏だった。

僕は夏休みの一時期に、ボクシングジムの練習をしばらく休み、
1人で早紀たちの家に遊びに来ていた。

当時青龍兄さんは高校2年生。

東京の一流高校に下宿して通っており、家にはいなかった。

あの人がいたらまだ話は変わって・・・なかったか。あの人に殴る蹴るのケンカを期待する方がバカつてもんだからな。

朱音姉さんは中学3年生。まだ家にいた。

受験勉強に忙しいながらも、妹の早紀のことをいたく心配して、勉強も手がつかないようだった。

そりゃ当然だろう。たった1人の可愛い妹が、よりもよってストーカーに逢うなんて。

当時から男勝りだった早紀は、小学6年にもなつて、近所のガキ（といっても自分もガキだったかな）どもと一緒に近所の川原に繰りだし、野球だドッジだサッカーだと日々遊びまくっていた。

両親としては心配なのであまり出歩かせたくない。しかし、そんな早紀を家から出さないというのも可哀想だ。そこで僕の登場だった。

ボクシングが強かった僕は、当然の成り行きで早紀のボディーパードとなり、滞在中一緒にくつついて遊び、ついでにストーカー野郎が近寄ってこないか見張ることになった。

昨年、全日本小学生ボクシング大会で3位となっていた当時、僕は有頂天だった。

ボクサーでもない限り、自分に勝てる奴なんかいない、と。

ましてや、早紀みたいなガキを狙うような変態ストーカー野郎になんか負けるはずもない。

今思うと、そのおごりがあの事態を引き起こしたのだ。悔やんでも悔やみ切れない。

ストーカー被害は、つけられてる気がする、無言電話、といった程度であり、本人は気味は悪いがそこまで気にしておらず、毎日元気に遊びに行っていた。

「・・・にしてもさあ」

いつものようにガキどもと遊んだ帰り、僕は早紀と話していた。

「お前をストーカーするなんて・・・どんな奴だよ、一体」

「うん・・・分かんないよ、そんなの」

「ロリコンか？」

「ろりこん・・・ってなに？」

「・・・い、いや、なんでもない」

いかんいかん、無垢な妹分に変な知識を吹き込むところだった・・・とかいっても自分も最近知った単語ではあったのだが。

「・・・変なお兄ちゃん」

「う、うつせえな」

会話をしながら歩いていた僕らの足が止まった。

家の前に影があった。

家に来てから数日、姿を見せないストーカーにすっかり油断していた僕は、慌てて身構えた。

影がゆつくりと出てくる。大柄な影。

男はメガネをかけた巨漢だった。

鼻息荒く、えらく太っていて、突き刺すような体臭に僕は顔をしかめた。

「・・・誰だよ。こいつ誰だよ！誰だあ！」

「・・・」

僕は無言で男を睨んだ。

中坊ごときの睨みで、男が怯むとは思えなかったが、なにもしないよりはマシだと思った。

しかし、反応は予想外のものだった。

「な、なんだよこのガキ！なに、に、にらんでんだよ！」

高い耳障りな声だった。

は、ハハ。こいつビビってやがる！

僕は男の予想外の情けない反応にすっかり自信をつけた。

「てめえ、早紀に手え出してみろ！俺が許さねえぞ！」

「さ、早紀。お前はこんな野蛮な奴と・・・。お前のフィアンセは僕のはずだろお！」

フィアンセときた。

僕は吹き出した。

「な、何がおかしい！」

「バカなもーそーもいい加減にしろ！」

「お、お前・・・！」

「お兄ちゃんはや蛮なんかじゃないもん！バーカッ！」

怒る男に早紀のとどめの一撃が入った。

「・・・ッ！」

男はかなりシヨックを受けたようだった。しかし、やがて

「フフ、フフフフフ」

男は不気味な笑い声を上げた。

「そうかい。そういうことかい。フフ、フフフフフ」

男は笑いながらくると背中を向け帰っていった。

「ハッ！おととい来やがれ！」

僕は男の背中に中指を立てた。

今思う。

あの頃の僕は確かに野蛮だったな。

それから数日、尾行も電話もなくなり、ストーカー行為はすっかり鳴りを潜めていた。

「やっぱ俺の啖呵が効いたのかな！」

僕は得意気に胸を反らせていた。自意識過剰なただの馬鹿。そんなある日だった。

帰り道、いつものように早紀と家の前の道路に差し掛かると、何やら血生臭い匂いがした。

道路が赤く染まっていた。中央にあるのは赤黒い物体。

「・・・ッ！」

早紀が声にならない悲鳴を上げる。

「・・・な、なんだ・・・？あれ」

僕は恐る恐る近づく。

原形をとどめておらず、それがカラスであったことに気付くまで少し時間がかかった。

羽はもがれ、目はくりぬかれている。

早紀は泣き出し、僕も吐き気を堪えるのに必死だった。

僕は、泣き声を聞き付けて慌てて家から出てきた伯母さんが、顔をしかめながら後始末をしているのを、ただぼんやり眺めていることしかできなかった。

酸っぱいものが、胃から込み上げ、僕は洗面所へ走った。

26話 過去の誓い その3（前書き）

人物紹介No.014 相木（下の名は不明） 「野沢商事」
技術部門総責任者にして、ハッキングやプログラミングのスペシャリスト。もともとは普通の会社員だったが、裏の顔はハッカー。評判を聞きつけた野沢組が彼をヘッドハンティング？する。新参者だが野沢組の表の仕事での大半の収益を誇るソフト開発の責任者であり、裏の仕事の能力も高い彼は事実上野沢組のNo.3である。そんな彼を快く思わない者は多い。

26話 過去の誓い その3

これは洒落にならない。

その日の夕飯、そういう話になった。

僕と早紀、伯母さんはとも夕飯なんて食べるものではなかった。大好物の鶏そぼろおにぎり、しばらく食べないな。

そんなことを思ったりした。

警察に連絡しよう。

伯父さんが言い出した。

善は急げ。

すぐさま僕と早紀、伯父さんは警察署の生活安全課へと向かった。あとは警察がなんとかしてくれる。

しかし、相談窓口で聞いた言葉は、予想だにしない言葉だった。

「そりゃ無理ですよ」

「・・・は？」

僕らはあつけにとられた。無理？

「そのカラスの件ですが、別にお宅の玄関にあつたんじゃなく、前の道路に捨てられていたわけでしょう？一応異臭などの被害から被害届けを出すことはできますがね。ストーカーにはなりませんよ」

「・・・」

「それに、無言電話に尾行でしたっけ？それもストーカー被害と関わりがあると言い切れません。はっきり言いますと、現状でストーカーの立件は不可能ですな」

「そんな！あいつがやったに決まってるんだ！あいつが！」

僕はわめいた。

「敦司。止めておけ」

「でも！」

「お役所仕事ってのはそういうもんだ」

「・・・ッ！」

「どうおっしゃっててもらっても構いませんがね。こっちは法律にそって仕事してるだけです。・・・用が済んだならお引き取り願えますか？」

「ふざけんなっ！」

「よせ・・・行くぞ」

憤る僕を伯父さんが止めた。

僕らは怒りに肩を震わせ、警察署をあとにしたのだった。

帰り道。

僕らは来た時の勢いむなく、肩を落としてとぼとぼ帰っていた。無言。

僕の中にはなんとも言えない思いが広がっていた。

「・・・ねえ、お役所仕事ってどれもそういうもののかな・・・父さんも・・・」

「すまん。そういうつもりで言った訳じゃないんだ。お前の父さんは立派な仕事してる。ただ、お役所仕事をしていると、必ずああいった輩が出てくる。そういうことだ」

伯父さんは僕に微笑んでみせた。

「父さんは・・・父さんは、違うよね」

「ああ、違うさ・・・さーてと、さっさと帰って、お子ちゃまはおねんねしろ！」

「お子ちゃまは、ってお父さんはどこに行くの？」

首を傾げる早紀。

「ん？パで始まって、コで終わる、大人のワンダーランド」

「・・・伯母さんに言いつけてやる」

「敦司い！お前って奴はあ！」

夜の帰り道に笑い声が響いた。

そして、あの日がやってきた。

忘れもしない、夏の日。前日に台風が過ぎ、台風一過でカラツカラに晴れた夏の日だった。

「いつてきまあす！」

「・・・いつてきます」

今日は、昨日遊べなかった分も遊ぼうと、張り切る早紀と、毎日遊ぶのがいい加減めんどくさくなってきた僕。2人で元気よく(?)家を出た。

「あ！かわいい！」

途中、道路の隅で毛繕いしている黒猫を見つけた。

「ねえ！かわいいよ！」

黒猫。

僕にはそれがただ不吉に思えてならなかった。
なんとなくの直感ってやつだが。

今日は野球だ。

といっても、18人もメンバーいないので、三角ベースのこじんま

りとした野球だった。

僕はポケーっとそれを眺めていた。

外野なんてほとんど球拾い。見てりゃいい。

あ、早紀がバッターだ。

「出るよー！」

「かつ飛ばせえ！」

声援に応え、ブルンと一回素振りしてみせる。

ピッチャー、第一投！

ガツン！真芯で捉えた！

僕はボールをぼんやり見送った。

初球からかつ飛んでいったボールはいつも遊んでいる広場を遠く超え、隣の敷地へと入っていった。

「あゝあ・・・」

しかし早紀はすごい運動神経だな。

男子だってあんなホームランは・・・。

「ごめーん！取ってくる！」

早紀は笑いながら走って隣の敷地へと入った。

隣の敷地は確か放置されっぱなしの工事現場だった。なにやら採算が合わなくなつて中止になつてそれっきりとか。

もしかしたら鉄鋼材かなんかが落ちてくるかもしれない。

大丈夫かな、とか思いつつ、

「おーい！チェンジだチェンジ！」

という声に、僕はすぐすごと味方チームのもとに向かうのだった。

しばらく経った。早紀が戻って来ないことに気付いたのはそれから二回ほどゲームが進んだ頃だった。

だんだん早紀の遊び仲間たちも心配し出す。

「早紀、遅くね？」

「もうボールはいいから、戻ってくるように言っておようか」
相手のピッチャーとボールの持ち主が話していた。

「じゃあ俺が行ってくるよ」

「あ、そう？じゃあよろしく」

軽く片手を挙げ、僕は隣の敷地を跨いだ。

「早紀？」

そこに早紀は見当たらなかった。

ガランとした敷地内に、僕の声だけが不気味に響き渡る。

「ニャア」

さつと振り向く。

「・・・黒猫」

いよいよ不安は増した。

・・・中か？

僕は放置されたままの建物を見上げた。

・・・ん？

足に何かが当たる。

ボールだった。

なんだよ、ボールちゃんとあるじゃん・・・。

その時だった。

「キヤアアアッ！」

悲鳴だった。

「早紀！」

早紀だった。

悲鳴は・・・中からだろうと見当をつけた。
とつさにその辺に転がってた鉄パイプをひっつかみ、その出来損な
った建物へと踏み込んでいった。

もはや使われることのない金属製の見取り図が玄関にあった。

この建物は大熊ビルというらしい。三階建ての建物。一階か二階か
三階か。

僕は辺りを見回した。

一階はほとんど完成していた。あとは塗装さえすれば普通の建物と
いったところ。

昼間だというのに薄暗い。窓に付いた大量の埃や砂のおかげで、光
が遮られているらしかった。

いない・・・。

どこだ。早紀！

ふと目の前に毛布にくるまれた何かがあるのに気付いた。

なんだ？

僕はゆっくりそれに手を伸ばそうと・・・

ドンッ！

上かつ！

僕は一気に階段を駆け上がった。

二階もわりと完成している。どうやらちゃんと建物の形になってい
ないのは三階だけのようだった。

二階には一階ほど埃や砂がすごかったりはしなかったが、それにし
ても薄暗いには変わらない。

早紀はきつとこの階にいる！

僕は油断なく目を巡らせる。

「キヤアッ！」

近かった。

僕は一番手前の仕切りの中へ飛び込んだ。

「早紀！」

早紀が、いた。

そしてその上にのし掛かっている太った男。

アイツだった。

奴は早紀の服に手をかけた。

「早紀に・・・早紀に触るんじゃないっ！」

僕は鉄パイプを床に置くと、持っていた野球ボールをヤツの頭めがけて投げつけた。

ガン！命中。

ヤツが一瞬動きを止める。その一瞬の間に僕はヤツの腹に拳を叩き込む・・・はずだった。

しかしその瞬間、ヤツの右手がギリりと光った。

銀色の何かが、迫ってきたのが見えた。

冷たい感触、そしてその一瞬後から激しい熱が右目を襲っていた。

「う・・・ああアアアアッ！」

目が・・・！目が痛い！熱い！苦しい！

崩れ落ちてもがき苦しむ。右目を閉じ、左目だけでストーカーのツラを見た。

キラリと光るのは白銀のナイフ。

目を押さえる。

涙と一緒に、白いドロツとした何かも流れていた。

ナイフで目を潰された。

そう初めて気付いた。

何かわめいているが、激痛で耳鳴りがガンガンする耳には何を言っているのか認識出来なかった。

「ウ・・・アア・・・」

声は声にならず、ただうめきになるだけだった。

「・・・！」

早紀がこっちを見て何か叫んでいる。

なんだよ・・・。何言ってるのか分かんないよ・・・。

一歩。

一歩。

ヤツが早紀へと近付いていく。

だ・・・ダメだ！近寄るな！

僕は全身に力をこめ、ゆっくり立ち上がった。

26話 過去の誓いその4（前書き）

人物紹介No.015 貝塚 関東蓮武会東海支部支部長。
歳は50半ば。蓮武会の長、蓮見とは知己の仲であり、蓮見の絶大な信頼がある。能力のある者にはいいが、能力のない者や敵にはまさに冷酷そのもの。無慈悲に命乞いすら切り捨てる。若い頃は拳銃相手も難なく倒す程のナイフ使いで、その腕は今でも健在。リング剥くのもお手の物。

26話 過去の誓いその4

「あ・・・ああ」

お兄ちゃんが、目を・・・。

私のせいだ。

私がヤツに抵抗出来なかったから。

「ぼ・・・僕は悪くない！こいつがいきなり突っ込んできたんだ！ハハ・・・そうさ！僕は悪くない！」

ヤツは叫んでいた。

こっちに近付いてくる。

途端に言い様のない怒りが私の中に巻き起こった。

ふざけるな・・・。

お前のせいでお兄ちゃんは・・・！

「お兄ちゃんはあああつ！」

気が付いたら私は男に突進していた。

なんとかしたかった。

殴つてでも蹴つ飛ばしてでも噛みついてでも、こいつに思い知らせてやりたかった。

でも私はあっさりと男に腕を捕まれた。

悔しかった。

悔しくて涙が止まらなかった。

「落ち着けよ・・・君は僕と一緒にいるべきなんだ。僕と・・・」

「わああああ！」

力任せに腕を振り払う。

男はポカンと口を開けて私を見た。

拒絶されたのが信じられないといった顔だ。

「なぜだよ？僕は君のために害虫を退治してやったんじゃないか！それを」

「害虫は・・・害虫はあんたよ！」

私は喚いた。

「ふ、ふふふ。そうかい、僕にそういう態度をとるといふなら

」

ナイフをゆつくりこちらに向けた。

「お仕置きしないとね。ふふふ」

気持ち悪い笑いが迫ってくる。

「い・・・嫌っ！お兄ちゃん・・・お兄ちゃん！」

私は頭を抱えてしゃがみこんだ。

次の瞬間、熱が背中を走った。

「お兄ちゃん！」

その声で僕は歩を進め始めた。

持っていた鉄パイプを杖にして歩く。

「や・・・やめろお」

歩きがだんだん走りに変わり、ヤツへと近づく。

あと一步の時だった。

ヤツは僕を見てニヤリと笑ってみせた。

そして、手のナイフを降り下ろした。

温かいものが頬にはねた。響き渡る早紀の悲鳴。

背中が深紅に染まっていた。

僕は眼の痛みを忘れて立ち尽くした。

「う・・・ああ・・・」

ウソだ。

ウソだ。

ヤツがまたナイフを振りかざした。

「わ・・・わあああっ！」

僕はヤツのでつぶりした腹めがけて思い切り鉄パイプを振った。

ドムツと鈍い音。

ヤツの脂肪が衝撃を吸収したようだが、それでもダメージは大きかった。

「うつ・・・ヴうつ・・・」

うめくヤツの体に拳を振るった。

一発。

二発。

三発。

「ワアアアッ」

僕はただ殴り続けた。

早紀を傷つけたこいつへの怒り。

みすみす目の前で早紀を傷つけられてしまった自分への憤り。

それら全ての怒りが、ただ僕を動かしていた。

拳が当たる度に聞こえていたうめきはいつしか聞こえなくなり、ヤ

ツの体から力が抜けても、僕は殴り続けた。

い・・・イヤだ。

このままじゃ僕は人を殺してしまう。

でも、拳は止まらなかった。

呼吸が荒くなる。

体が勝手に拳を動かす。

怖かった。

自分が怖かった。

誰か・・・。

誰か、僕を止めてくれ！

「やめてっ！」

後ろから手が伸びてきて僕を抱きしめた。

「さ．．．早紀．．．ハア、ハア．．．」

拳が、止まった。

「これ以上やったら、その人死んじゃうよ!」

「．．．ハア、ハア．．．」

早紀の背中からは血が流れ、僕の右目はもはや開かなかった。

残った左目で僕は早紀を見た。

早紀は、泣いていた。

「ごめん．．．ね。ごめん．．．私のせいで、目が．．．目があ．．．」

「目が目と言うな、ラピュタじゃあるまいし」

僕は笑ってみせた。

「．．．うん」

場違いな冗談。それでも早紀は少し笑ってくれた。

「俺こそ．．．悪かった。でかいこといろいろ言って、結局．．．結局、お前を．．．」

涙が出てきた。

めっちゃ痛い。

染みる。

しかし、早紀はこんなもんじゃなかった、と思い、涙は止めなかった。

「ハア．．．ごめん、私．．．なんか．．．ふらふらして．．．」

「早紀っ!」

早紀はカクリと首を落とした。

「早紀．．．早紀! しっかりしろ!」

くそ．．．と崩れる僕の耳に、耳障りなサイレンの音が、遠く聞こえた。

あの後、私が目を覚ましたのは病院のベッドの上だった。

あの場にいた3人のうち、もっとも軽傷は私だった。私が気を失ったあと、駆けつけたパトカーにお兄ちゃんは私を病院に運ぶようわめき散らしたらしい。

自身もすごい怪我だったにも関わらず。

「君、早く病院へ行かないと」

という警官の声に耳を貸さず、

「うるせえ！早紀を早く連れてけ！」

と聞く耳持たなかったらしい。

私たちは、名古屋市内の病院へ緊急輸送された。

それで、結局私は背中を縫うケガだけ。

お兄ちゃんはすぐに緊急手術。

手術の甲斐無く右目を失明した。

情けなくて泣きたくなる。ホントに。

ちなみに、一番怪我が酷かったのはストーカー。全治3ヶ月の重傷で、1週間は意識がなかった。

それは因果応報だとしても、お兄ちゃんはそのせいでボクシングを諦めざるを得なくなった。

私のせいで……。

だから私は決めた。

もう守られなくてもいいように強くなろうと。

私はその日から、父の道場に通うようになった。

情けなかった。

ただ情けなかった。

失明してボクシングが出来なくなったことなんかよりも、大口叩いて早紀を守れなかったことが情けなかった。

全ては僕の油断だ。僕の慢心だ。

早紀が軽傷で済んだのは運が良かったからに他ならない。

早紀は死んでいたかもしれない。

そう思うと情けなくてならなかった。

失明を改めて実感したのは手術が失敗して数日後のことだった。

喉が乾いたのでジュースでも買いに行こうと病院のベッドを出た時だ。

立ち上がった瞬間、目眩がしたかと思うと、僕は無様に倒れた。

失明による平衡感覚の喪失だった。

ただ、悲しかった。

さらに精神的に僕は追い打ちをかけられた。

お見舞いに来た父さんが開口一番言った言葉だ。

「今回、警察の方で処置が不手際であると考えられる事項があった。いいか、このことは他言無用だ。父親に迷惑かけるなよ」

「・・・」

「それで・・・今回は残念だ」

「」

「帰れよ」

「・・・」

「帰れよ！帰れ！早く帰れ！」

「・・・」

父さんは少し悲しそうな表情を浮かべた後、踵を返した。
許せなかった。

開口一番言った言葉が、僕や早紀への見舞いの言葉ではなく、警察
としての言葉だったことが許せなかった。

「はぁ・・・」

大きなため息。

僕は布団を被った。

お兄ちゃんのお見舞いに行った私は、お父さんと元司さんを帰る途中見かけた。お兄ちゃんは今も怒っていたようで、また落ち込んでいたようでもあった。

私が出るまでに何かあったのだろうか。

お父さんたちは何やら様子が変だった。

私は思わず聞き耳を立てた。

「どういうつもりだ」

「・・・なんの話だ」

「とぼけるなッ！」

お父さんの声が響く。

「お前なんのつもりだ。あんな態度が親の態度か！あぁ？」

「・・・聞き耳とは、いい趣味を持つてるみたいだな、兄さん」

私は思わず首を小さくした。

「ふざけるなッ！」

「あんたに分かるか。この気持ちだ」

「何？」

「敦司はあんなことしたからな、今警察にマークされてるんだ」

「マーク？あの変態野郎ならともかく敦司がマーク？」

「過剰防衛だよ。事情はどうあれ、あいつは気絶して無抵抗な人間を殴って半殺しにしたんだ」

「だがそれはっ」

「分かってる。だからこそ起訴もされてない。ただ、この状態で警察に都合の悪いことを言ったらどうなるか。これ以上余計な口をきかないようにムショ行きだ。警察の圧力を持ってしてな・・・つく、この国の本質はまだ戦前と変わっちゃいない。国にとって都合の悪いものは手を尽くして抹消さ。ま、表に現れないだけ、国民も平和でいられるがな」

「・・・」

「ああ言えば敦司は取材の記者連中が来ても何も言わないだろう」

「・・・しかし、ああ言われたら言うだろ、普通」

「奴は言わないよ。親の俺が言うんだ、間違いないさ」

「・・・」

話は半分しか理解できなかったが、お兄ちゃんが怒っていた理由が分かった気がした。

お父さんたちは2人でどこかへ去っていく。

私も行こう。

私は家へと向かった。

落ち込んでいた僕に、目の移植の話が持ち上がったのは、それから

すぐのことだった。

検査の結果、適応するドナーがいたとのこと。

一も二も無くその話を受けた僕は、移植手術に成功、リハビリのち、退院することができた。

しかしながら、視力は極端に落ちた。

左目は正常だが、右目はコンタクトをつけないとろくに見えない。いや、手術は関係ない。単にドナーの目が悪かったただけだ。

喜ぶ反面、どうせなら視力のいい目が欲しかったと思うのは、いささか罰当たりだろうか。

結局、ボクシングは止めざるを得なくなった。

いや、別に高みさえ目指さなきゃ続けることはできたが、全国3位だった僕が、地方大会で負けること、それを怪我のせいにしにくかった。

てなわけで、学業に復帰した僕は、空いた時間をいろいろ使い始めた。

当時の僕は荒れていた。

ボクシングができなくなったこと、父親に裏切られたこと、そして、早紀を守れなかったこと。

それら全ての怒りが僕を突き動かした。

強くならなきゃと思った。馬鹿みたいにいるんな格闘道場やら教室やらを訪ねてはいろんな手当たり次第に格闘技をやってみたりした。まあ広く浅くだからたかが知れているが。

そして、街に繰り出してはケンカをふっかけた。

当時中学チームのリーダーを張っていた西岡と知り合ったのもその頃だった。

年上とのケンカがほとんどだった。高校生、大学生、あるいはチンピラ。

そんな日々が1年続いた。この頃になると、強くなるとかよりも、ケンカすることで父親に反発することがメインになってきていた。ある日、僕は、僕がケンカに明け暮れていることを知った早紀に電話で呼び出された。

早紀は東京まで来ていた。そして聞かされた。

父さんのあの時言った言葉の真意を。

そして、目をくれたドナーが突然見つかったのは、父さんの手回しがあつたことを。

僕はひどく情けなかった。父さんに母さんに早紀に、僕はいろんな人に心配や迷惑をかけた。

僕は家に帰ると土下座する勢いで謝り、これからちゃんと更正することを誓った。

その頃、チームは僕と西岡のダブルヘッダーといった形になっていたので、僕が抜けると同時に西岡も脱退表明した時はどうなることかと思つたが、結局新しいリーダーのもとチームはまとまつたようだった。

こうして僕と西岡は健全……と言えるかは分からないが、まあ普通な学生生活を送ることになったのである。

しかし、そうなつてからも今まで、僕は心に誓い続けていること、それは早紀を護ることだった。

早紀だけじゃない。父さん、母さん、西岡……自分が大切だと思つている人は目の届く限り、全員護つてやる。これが僕の誓いだつた。

これを守るのは彼らのため……なんてカッコいい話じゃない。

守れなかった時、僕は壊れる。

自分を責めて崩壊する。

だからだ。

無茶するな、と早紀は言うが、無茶しないと僕は僕でいられない。だから、ごめんな、早紀。僕は、無茶をする。

26話 過去の誓いその4（後書き）

敦司と早紀の過去が明かされたわけですが、本当はここもつとたくさん書きたいところだったんですね。しかし、あんまり書きすぎると戻ってこれないところまで広がってしまいそうなのと、若干核心入りそうなのところがあったんで、泣く泣く省略。よって最後なーんか中途半端な感じがします。うーん……。筆力の無さが伺える。ビルの中で見つけた何か、や、鳳父が言ったことの意味、都合の良すぎる眼球ドナーについては今後明かされます。はい。

27話 VSヤクザのこわいひとたち その1（前書き）

この辺は・・・多分3ヶ月くらい前に書いたやつです。12、1とほとんど何も書いてなかったのでストックももうありません。が。なんかこの辺今と比べてもちよつと前と比べても執筆能力落ちてるような・・・まああの頃は忙しかったし（自己弁護）また書き直すとなるとめんどくさ・・・なんか前みたいに修正してるうちに話が違う方向へ向かってったりしそうなんでやめときます。ちなみに今も当初の話の予定とは大きく離れてます。それがいいか悪いかは別として、そうなると今のストック全部ポイですからねえ・・・。それは・・・ねえ（結局めんどくさい）

27話 VSヤクザのこわいひとたち その1

「もう車なんか見えないよ・・・」

碧がつぶやいた。

碧、西岡、村上の3人は裏路地を抜け出し、広い表通りを走っていた。

車が走り去ってからもう時間が経っていた。

見えないのは当たり前だった。

「諦めるなッ！諦めたらそこで試合終了！」

「なんの試合だよ」

村上が苛立たしげにつっこむ。

「あんたねえ、せっかくみんなの暗いムードを盛り上げようとギャグ言っただから、無粋なツッコミしちゃいけません！メッ！」

「チッ・・・ま、この国道はしばらく一本道だから・・・でも急がねーと見失う。タクシーでも来ねえかな」

車通りは多かった。

「タクシーねえ。お？いやあれだ！あれ使おう！」

西岡が指した方向には、ミニパトが走ってきていた。

ついてない。

神流優はつくづくそう思った。

いきなり呼び出され・・・いや、それはよかった。他ならぬ井原さんのお呼びだし、行かないわけにはいかない。

問題はそのあとだ。

合コンも控えていたのでさっさと帰ろうと思ったたらオッサン刑事にパトカーで速度違反とは何事かつ！と言われ、すっかりパトカーなんだからいいでしょう！と言い返したらもう説教の雨あられ、遅れるからと急いであら奴ら、もうすでに二次会行ったらしく、会場には誰もいない。

電話も出ない。

ム力ついたから飛ばそうと思ったたらまた井原さんから電話。

事情はよく分からないが秘密裏に動いて欲しいらしく、先の突入で逮捕した男の1人が名古屋にある組の男に指示されてやった、と口を割ったため、そいつを任意同行して欲しいとのことだった。

井原さんの頼みを断るわけにもいかず、俺は東名を140キロで走り抜け、こうして名古屋に辿り着いたわけだが・・・。

はぁ・・・。

なんか疲れた。

職務怠慢というわけではないが、日々の交番勤務はこれほどハードではない。

さらに、さっきまで続いてた渋滞が神流のストレスを高めていた。

ようやく渋滞は少し解消されてきたようだがまだ進みは遅い。

走り屋神流にとって渋滞は唾棄すべきものだった。

これが終わったら久しぶりに峠でも行ってみるかな・・・。

「ってぬうお！」

神流は慌ててブレーキを踏んだ。

前に高校生ぐらいのが3人、車の前に立ちはだかっていた。

「な、なんだなんだお前ら」

神流は窓から首を出す。

「お巡りさんお願いします！車を追ってください。友達が連れ去られてしまったんです」

女の子が言うと、後の2人もウンウンと頷く。

「え。　　っていつてもなあ・・・」

こういうのは報告しないと後々・・・。

しかも自分には任務が・・・。

パーツ！

クラクションが鳴り響く。神流は慌てて車を端に寄せた。

「早くしろよポリ公！一刻の猶予もないんだ！」

金髪のガラ悪そうなのが怒鳴る。

ム力。

だがまあしょうがないか。彼らの表情はとても嘘をついてるようには見えないし。

「・・・わかったよ！乗れ！」

3人はミニパトにぞろぞろと乗り込む。

「こつち行っただな？」神流は助手席に乗り込んだ女の子に聞いた。

「そうです。急いでください！」

「急いで・・・？」

神流は笑った。

急いで、ね。わかったよ。急いでやろう。

「舌嚙むなよ！」

ギュルルルルッ！

こつそり違法改造した神流のミニパトが唸る。

「う、うわあ！」

「きゃあっ」

「や・・・やべ・・・ひ、ひた嚙んだ・・・」

三者三様の反応を楽しみつつ、神流のミニパトは車の間を縫って走っていった。時速は100キロを越えた。誘拐したという被疑者の追跡という大義名分があれば公道速度違反だってなんのその。

神流は飛ばしたいというフラストレーションが解消されたことに満

足し、鼻歌混じりにパトカーを飛ばした。

「……んんおっ！あれは！」

悲鳴をあげつつ西岡が叫ぶ。

目前で、お目当ての車ともう一台がアクション映画顔負けのカーチエイスをしている。

ヒュウ、と神流は口笛を吹いた。

「やっこさん、ずいぶん派手にやってるじゃねえの。……でもあの車って……」

その時、派手にぶつかってた一方が脇道にそれた。

「つとお！」

ハンドルを切る。パトカーは火花を散らしながらカーブした。

「きゃあああっ！」

「ガチツ！また舌嚙んだあ！」

「見えた！もう少しだポリ公！」

言われんでも分かってるっての！

車は目前……

「ええっ！？」

神流たちは目の前の光景にあんぐり口を開けたのだった。

風がビュンビュンと全身に伝わってくる。

夢中だった。

僕の頭の中にはあの誓いしかない。

また僕は早紀を守れないのか……。

そう考えた時、僕の体は勝手に動いていたんだ。

しかし……うん。

いささか後悔してなくもない。

ちよつと無鉄砲過ぎたんじゃないかなあ、とか思う。うん。

僕は今屋根の上だ。

どこのつて？そりやもちろん怖い人たちの車の屋根さ。

必死で屋根に掴まったはいいものの、これからどうすりゃいいのか。ちよつと気を抜いたら車から投げ飛ばされ、よくて大怪我、悪けりやお陀仏。

ヤクザの車の屋根にしがみつき、片手には眼鏡からもらったピストル。

はたかりや見ればアクション映画の撮影としか思われない状況だ。

しかし、現実には甘くなかった。

「……くっ」

風圧も凄まじく、僕の手はもう痺れが出ていた。

「あ……ヤバイ……落ちる」

落ちるは受験生の禁句だ。絶対言わないと誓ったのに、まさかこんな所で言ってしまうとは。

「……って、うわっ」

車が蛇行を始めた。どうやらへばりついた僕の存在に気付いたらしかった。

て当然だ。僕の体はずり落ちて、多分やつらのバックミラー一杯に僕が写ってるだろう。

パンツ！

「どわあっ！」

う……撃ってきた？

ヤバイ！ヤバイヤバイ死ぬ死ぬ死ぬ！

僕はうんしょうんしょと屋根をよじ登った。

「ふう・・・手え痺れてたけど案外行けたな。火事場の馬鹿力って奴か」

僕はホッと一息・・・

キイイイイッ！

突然の急ブレーキ。

車と一緒に前に進んでた僕の体は、それに耐えられるはずもなく、ポオンと宙に投げ出されていた。

ドゴッ！

「うぐう・・・ッ」

遙か前方に投げ飛ばされた僕は、フラフラと立ち上がった。

咄嗟に受け身をとったので頭こそ打ってないが、いろんな所を擦りむいたようだ。

落としてしまった拳銃を拾う。と。

予想だにしないことが起こった。

パトカーだ。パトカーがすごい勢いで走ってきて、僕と車の間にギギャギャギャツ！と耳障りな音を立てて停止した。

そしてさらに驚いた。

「敦司！」

「敦司くん！」

なんとパトカーから出てきたのは西岡と大川内さん。状況が全く掴めない。

「え・・・え？なんでお前らここに・・・？」

「んなことより敦司！大丈夫かお前！」

「っ・・・ああ、問題ない」

「あ、敦司くん、それ・・・」

大川内さんが指したのは僕の右手がしつかりと握った拳銃だ。

「ああ・・・これ・・・。もらったんだ。ハハ」

「もらったって・・・」

「さ、話は後だ。早紀を助ける」

「おうっ！」

「大川内さんは・・・そうだ！あそこで待つて」

僕は近くの草陰を指差した。

「う、うん」

僕は拳銃をポケットに入れると、大川内さんに軽く手を振り、パトカーの向こう側へと歩いていった。

27話 VSヤクザのこわいひとたち その2（前書き）

遂にやってしまいました。『85日以上投稿されてません』。もうそんな経ったの？という感じですがなんともはや。申し開きもございません。書いてはいるので、これからバシバシ投稿していきたいと思います。（そしてしばらくしたらまた止まるのか・・・）（・・・）（

27話 VSヤクザのこわいひとたち その2

向こうでは、金髪の若者と警官、あと早紀を連れ去ったらしい3人と早紀が向かいあっていた。

「ようやく追いついたぜ、須川！」

「・・・黙れ。今ガキと遊んでる暇はねーんだ！早くしねえと・・・早く・・・！」

警官はへっぴり腰だ。

「なあ俺帰っていい？誘拐犯っていうから追ってきたのに、この方たち明らかにアレだよな。怖い人達だよな」

「ハッ！そーだな。早くしねーと殺されるよなあ仲間殺しが！」
「黙れっ！」

須川は早紀を抱えたまま拳銃を突き付ける。

「なあ待つてよ職業柄そんなもん出されたら何もしない訳にはいかなくなつちゃうじゃん。見なかったことにするからしまつて・・・」
「うるせえ！」

パン！

若い警官は音もなく倒れた。

警官は地面に伏せて動かなくなる。

・・・ん。

ん・・・！！

「なっ・・・！て、てめえ！」
金髪が憤る。

「次はお前を撃ち抜く」

銃口を金髪に向ける。

「ち、ちよつと待ったあ！」

僕は飛び出した。

「僕らとしたらその子返してもらえればそれでいいんだ。見逃すからその子返してくれないか？」

「見逃すから、だと？お前も自分の立場を分かってねえな。お前は俺に殺されるんだよ！」

イラッとした。

何が殺されるだ。

「話の分からない馬鹿だな。だったらさっさと撃ってこい！」

「貴様あ！」

須川の銃口がこちらに・・・

パン！

「うぐあああつ！」

神流は地面にバタリと伏せていた。
ひゃー。危ない危ない。

さっきの突入の時念のため防弾チョッキ着てて助かったぜ。
めんどくさいからって着替えなくてよかったあ。

気取られないように、ゆっくり腰のホルスターに手を伸ばす。

いや、あいつよくやってくれてるよ。倒れる寸前の俺のアイコンタクトによく気付いてくれた。

神流は名も知らぬ少年を頼もしく見つめた。

「だったらさっさと撃ってこい！」

「貴様あ！」

少年の挑発に乗った須川は少年に銃口を向ける。

その瞬間、人質の女の子と須川が少し離れる。
今だ！

神流はホルスターから銃を抜き出し、引き金をしばった。

「うぐあああつ！」

須川の悲鳴が響き渡る。
作戦成功。

須川は手を撃ち抜かれ、拳銃を取り落とした。
そこからは早かった。

「このっ！」

拳銃の脅威が無くなった早紀は須川の股間を蹴り上げ、捕まれている腕を振りほどいた。

須川は悶絶して倒れた。

「早紀ちゃん！」

西岡が早紀を守りつつ安全な場所まで動く。

同時に飛び出した金髪は須川の銃を確保。

思わぬ展開に黒服2人が慌てて懷に手を入れた時には、すでに僕と警官の銃口が彼らを捉えていた。

「ヒュ〜」

警官が楽しそうに口笛を吹いた。

「すごいなあお前ら。S A Tも顔負けの動きだ。警官にでもなったらどうだ？」

「ハッ！ふざけんじゃねえ」

金髪はそう言いながらも愉快そうに拳銃をクルクル回していた。

「ま、これで俺も義理果たしたことだし、さつさと帰るとすっかな」

「お、あぁっ！俺らもヤバイじゃん敦司い！明日平日だぜ！？」

「なあに、新幹線乗りや余裕だ。・・・西岡くん、金貸して」

「ま、待つて！」

早紀の声にみんなが振り向く。

「どうした？」

「1人・・・1人足りない！」

「へ？」

僕はすつとんきような声を上げた。

「それじゃどういふことが分かんないって」

金髪も声を上げる。

「私が捕まってたとき、助手席にこの須川って人、私の両脇に2人、

あと運転手」

「運転手？」

「だってここには3人しか・・・まさか！」

僕は嫌な予感に身を翻そうとした。

「おおっと！動くな！」

予感は的中した。

運転手の黒服。そいつが大川内さんに銃を突きつけていた。

・・・くそ！大川内さんを置いてったのは失敗だったか！

後悔するも、もう遅い。

運転手はジリジリと車に近づいていく。

残り2人は倒れた須川を無視して車へと後ずさる。

「動くなよ！動いたらこの女の顔が吹っ飛ぶぜ！ヒヤハア！」

ついに車へと辿り着く。

車に乗り込んだ奴らは、勢いよく車をスタートさせた。

・・・くそ！

僕は銃を構えると照準をしばった。

今度はちゃんと左目で合わせる。

さっきばやけたのは風で右目のコンタクトがずれたのが原因らしか
った。

運転席の男目掛けて引き金を引く。

パン！

だが僕の銃弾はその先にあつた道路標識を撃ち抜いていた。
くそ！思ったより反動があるな・・・。

「ヒヤハハ！残念だったなあ素人のボウヤ！あばよ！」
運転席から男が顔を出し車が動き出す。

「くそっ！」

悔しがる僕の肩に手が置かれる。

「・・・？」

「俺に任せな」

若い警官だった。

警官はゆっくり狙いを定めた。

そして・・・。

パン！

道路標識に2個目の穴が開いた。

27話 VSヤクザのこわいひとたち その3

「ヒヤハハハハハハ！」

車内に笑い声が響いていた。

「まったく、一時はどうなることかと思いましたけどね」

「だな。ヒヤハハ」

拐った女の子はみぞおちに一発入れて寝かしてある。運転席の男は上機嫌に笑った。

「まったく、あんなガキどもにやられるなんざ須川さんもヤキが回ったもんだなあオイ」

「まったくですね。今はあなたの時代ですよ。なんていっても蓮武会のために長きに渡ってスパイ活動したわけですから」

運転席と助手席で愉しげに会話が交わされる。

「・・・」

運転席の男が後部座席の男を見た。

「おい、てめえさつきから黙りこくってどうした！？ああ？」

「・・・マズインじゃねえですか？検問でも張られたら・・・」

「バアカそんなときやそんな時だ。それに奴らのパトカーはしっかりタイヤ撃ち抜いといた。足止めにやなるだろう」

「いよっ！さすがですねダンナあ」

「ヒヤハハ。分かったらお前は国外逃亡の手配でもしとけ」

「で・・・でも、どうすれば・・・」

「んなもん自分で考えろっ！」

「わ・・・分かりました。行ってきます」

「車は人目につかないところに移しとく。追って連絡するから携帯はちゃんと見とけ。いいな」

「は・・・はい」

男が1人、車から降り、暗闇へと駆けていった。

「さあて。帰ってくるのはいつになるかな」

「さあ・・・あいつどんくさいですからねえ」

「ヒヤハハ、じゃあ暇潰しにおたのしみといくか」

「おたのしみ？」

「ああ、拐った女は運のいいことに相当な上玉だからなあ。ヒヤハハ！」

「そいつはいいツスねえ！あははは！・・・ん？」

上機嫌に笑っていた2人は、妙な気配に外を見た。

「まったくホント使えねーなあんだ」
グサ。

金髪という言葉が胸に突き刺さる。

「・・・ゴメンナサイ」

「ごめんで済んだら警察は要らねーっての！って、あんた警察か。
ハハ」

うう・・・。

言い返せない・・・。

「今はそんなこと言ってる場合じゃないだろ」

あの俺のアイコンタクトに気付いてくれた少年がたしなめた。

「今は大川内さんを助けることだけ考えないと・・・早紀」

「・・・ん？」

さつきまで捕らわれていた少女が顔を上げた。

責任を感じているのか、活発そうなその顔に元気はない。

「大丈夫か？今からでもタクシー呼んで家まで送ってもらおうか？」

「・・・ううん。私も碧ちゃんを助けたい」

「そっか」

「・・・ありがとう、お兄ちゃん」

少年は、お兄ちゃんという言葉にちよつと目を見開き、ニコリと笑った。

「いえいえ。可愛い妹分のためです」

「・・・もう」

少女は少し笑った。

その笑みに少し寂しげなものが混じっていたように見えたのは俺の気のせいだろうか。

「さあ、ナンバーは覚えました。警察に連絡して検問張るなりしてもらいましょう。お巡りさんもヘコンする場合じゃありませんよ！」

「お、おう」

高校生に仕切られる警官。うう、不甲斐ない。

ともかく神流は地元の警察署に電話をかけた。

「　　というわけで検問を張って欲しいんすよ」

「あ？検問？」

電話越しの声が不機嫌なものになる。かなりドスのきいた声だ。

「そッス。あの、急いでくれませんか。言っただ通り、女の子がさらわれてるんすよ」

「馬鹿言ってんじゃないねえ！お前東京の巡査つつたな。なんで東京

の巡査が名古屋にいんだよ」

「それは・・・」

言えなかった。今回の行動は井原さんが上からの指示が出る前に動くために行った秘密裏行動だったからだ。

「言えねえのか！ハッ！どこのイタズラだか知らねえが、大概にしとけよ！」

くそ・・・。

「貸して」

会話が聞こえていたのか、パトカーで何度も舌を嚙んでいたお調子者っぽい少年が手を差し出した。

「え？い・・・いや」

「いいから」

少年は電話をひったくった。

「あっ」

「あーオホン」

「・・・！？」

神流は口をポカンと開けた。

ちよつとハスキー気味だった少年の声が、威厳ある男性のそれに変わっていたからである。

「ああ？なんだおめー」

「私は本庁警視の森田だ！どうやら上司との口の聞き方を知らないようだな」

「ほ、本庁警視？」

電話越しの声が裏返った。電話の向こうが慌ただしくなり、西岡は忍び笑いした。

「あ、あの、申し訳」

「それはいい！早く検問を張らないか！」

「はっはい！」

西岡は敦司から聞いたナンバーを伝え、怒ったように電話を叩ききった。

「な、な、な、な、な」

神流は目の前の少年がやってのけたことに驚きを隠せない。

「・・・これは西岡の得意技なんです。色んな声を出せるっていう」
「ケツ。大した芸だな」

「・・・すごい」

他の2人も多様に驚いている。

「これで検問は問題ナッシング！さ、俺らも追いかけてようぜ」

「お、おお！さ、乗った乗った」

神流は車のエンジンをかけ、アクセルを踏んだ。

ギョルギョルギョルギョルッ！

「あ、あれ？動かない・・・」

「お巡りさん！やられました！」

「あ、俺神流ね。で、どうしたって？」

「あ、鳳敦司です。・・・で、それよか！パンクさせられてます！
タイヤ！」

「ナニい！？」

神流は敦司の指差す方を見た。

「ああ・・・俺のミニパト・・・」

神流は崩れ落ちた。

「でも困りましたね。どうしましょう、これから」

敦司が皆を見渡した。

「よし、なら俺らの車に乗るといい」

「・・・！？」

いつの間にか見知らぬ男が1人、輪に加わっていた。

28話 血染めの車 その1（前書き）

今回の28話でちょっとグロテスクというかなんというかそんな表現が出てきます。苦手な人はご注意を。僕自身あまりそういうのは得意ではないので、表現も下手くそですし、もうあまり出したくはないなあとは思うものの、殺人では多かれ少なかれそういった要素は出てきてしまうのでどうなるかはわかりません。警告出さなきゃ駄目かなあ。問題のシーンの投稿時には警告出しておきたいと思っています。（でもその後何にもグロいの出なかったらなんか間抜けだなあ）

28話 血染めの車 その1

「誰・・・ですか？」

お巡りさんが慎重に尋ねた。

他の面々も緊張した面持ちだ。

金髪なんてあんぐり口を開けている。

そりゃそうだ。彼は一般的にいうコワモテである。

僕は苦笑した。

「「柴咲さん」」

僕はハモった相手を見た。金髪だった。こいつ、柴咲さんの知り合いなのか？舎弟とか？

「お、お前、柴咲さん知ってんのか」

「あ、まあね。そっちは？」

「あ？お前にや関係ないだろ」

「おいおい、村上。相変わらず口が悪いな」

「柴咲さんには言われたくないですよ」

「なんだとコラ」

「いい痛い痛い！」

柴咲さんは金髪のほつぺたをつねる。

「・・・あれ？眼鏡の人は」

「相木という。よろしく」

スツと眼鏡が現れた。

「あ。相木・・・さん？返します、コレ」

僕は右手の拳銃を差し出した。

受け渡すと、一気に手が軽くなったような気さえする。

「・・・弾が減ってる。撃ったのか？」

「ええ・・・っていつても」

僕は苦笑して穴の空いた標識を指した。

相木さんの口元も緩む。

「良かったよ。そんな歳で人を撃つたりしないで。・・・柴咲さんにも言われたがね。やはり君のような少年に拳銃を渡すなんてどうかしていた。例え、それがその時の最善の策だったとしてもね」

「相木・・・」

「済まなかったな柴咲さん。少々冷静さを欠いたようだ」

柴咲さんはニヤリと笑ってみせた。

「構わねーよ、別に」

「それで、彼女が君が探してた？」

「あ。はい。従妹の早紀です」

早紀はペコリと頭を下げた。

「早紀は助けられたんですがね・・・」

僕はいきさつを柴咲さんに話した。

「その変な笑い、おそらく岡崎だな。クソッ！」

「や、奴が岡崎だったんスカ！野郎、いちいち邪魔しやがって！」

村上が憤慨した。

「あ、こいつはどうする？」

西岡が早紀の金躑躅きんてきりでお陀仏した須川を指した。

「ああ、誘拐・銃刀法違反の現行犯だからな。俺がしょっぱくよ
バラバラバラバラ・・・」

「早く行こうぜ。奴ら逃げちまう」

村上の言葉に全員が頷く。

バラバラバラバラ・・・

「・・・で、あれは何？」

早紀が指した空には、一機のヘリコプターが盛大に音を立て、飛んでいた。

「・・・さあ」

「ハアーハッハッハア！君ら、乗ってけえ！」

夜空に声が響く。

と同時に縄ばしごがスルスルと落ちてきた。

相木さんが頭を抱え、柴咲さんはひきつった笑みをこぼす。

「誰ですかアレ」

「知らん。私は知らん」

相木さんが頭を抑えたままそっぽを向く。

「早くしろお！逃げられてもいいのかあ！？」

「俗に言う組長だ」

柴咲さんが言った。

「く・・・組長？あれが？」

「あ！でもこのヘリ4人乗りだから2人までな！乗るの！」

「いつもはめんどくさがり屋のバカ。一旦火が付くと暴走して止まらないバカになる・・・まあそれでも野沢組をここまで大きくしたのも、野沢組で一番強いのも彼なんだが」

「さあ！どーんとこーい！」

「って言ってますが」

「・・・確かにヘリ追跡は警察でもやってる手段だが・・・よし、乗りたい奴。手上げろ」

柴咲さんの言葉に僕は手を挙げた。

「よし。あとは？」

「柴咲さん。俺も行きます。自分が彼女らを巻き込みました。自分が助けます！」

「よし。鳳くんと村上だな。あとは俺の車で・・・」

「ちょっといいスカ。柴咲さんですよ？あなたは残ってもらえます？」

警官・・・神流さんが遮った。

「ん？ああ・・・。なら相木。お前運転しろ」

「ム・・・分かった。久しくペーパードライバーだったんだがな」

「ええつ。ちょっと。俺こんなとこで死ぬの嫌ですよ」

西岡が顔をひきつらせた。相木さんが西岡を見る。

「心配するな。事故になってもエアバッグがお前を守ってくれる」
「・・・」

そういう問題ではない。

「あの、やっぱ俺もそっちに・・・」

「おーい！はやく来ないと行っちゃーうよ」

頭上から変な歌が降り注ぐ。

焼きいも屋か。

行ってもらっちゃ困る。急がないと。

「待って！俺と代わって！」

神流さん、何するつもりだろう。

泣きすぎる西岡はスルーし、首を傾げながら僕は縄ばしごに足をかけた。

そして。何を血迷ったかへりは急上昇を始めた。

宙に足が浮いた瞬間、その疑問は先に上っていた村上と僕の悲鳴とともに夜空へきえていったのだった。

28話 血染めの車 その2（前書き）

本当は昨日電車の中で投稿しようと思ったのですが、友達が隣に座り込んで来たのでやめて、エンゼルプランの話をしてました。気持ち悪い学生（笑）。エンゼルプランとは子育てを支援する福祉についての条約で、確か1994年だけに発表されました。しかしこのエンゼルプランのネーミングセンスの悪いこと。エンゼルプランの改定版として新エンゼルプラン。ここまではいい。その更に改定版新新エンゼルプラン。・・・新新？もうそろそろまた改定の時期が来てるらしいですが、そうしたら新新新エンゼルプラン？・・・政府の不真面目さが伺えます。はい。

28話 血染めの車 その2

「よー、しばらくだな村下くん」

へりに乗り込むとすぐに声が出迎えた。

運転席に男、助手席に女。女は音楽を聞いてるようでリズムカルに体を揺らしている。

「違うヨ野沢。彼は村中だよ」

「村上です。わざと間違えてないスか？」

「あー、それはそうと・・・」

へりの運転席に座った男性が僕を見た。

「君は？」

「鳳です。鳳敦司。・・・連れ去られた女の子の知り合いです」

到着したらまず急上昇への苦情を言おうと思ったがなんとなくタイミングを逃してしまった。

僕は不機嫌に言った。

「ハハア、コレか」

ニヤリと男性が小指を立てる。

村上もブンとこつちを見た。なぜ？

「め、滅相もない。知り合ったの今日ですし」

僕は視線にしどろもどろになりながら釈明した。

男性が変なものを見るような目で僕を見る。

「はあ。今日知り合った女の子を追ってへりに乗るたあ君も酔狂だな」

「失礼な」

あの状況じゃ見捨てる方がどうかしてるだろう。

「いやいや・・・誉めてるのさ。そういうの、いいと思っぜ」

男性は1人面白そうに笑った。

変な人だ。

「俺が野沢だよ。よろしくね」

人懐こそうな笑みを浮かべる。

この人が組長ねえ。

と、ヘリの助手席から頭が出た。

「ハイ！ラリホッ！」

「・・・」

なんか変な人いる。

「・・・」

「ラリホッ！」

怒ってる。

怒って僕を睨み付けている。

「ラリホッ！」

「あの・・・」

「ラリホッ！」

「・・・」

「ラリホッ！」

「ら・・・らりほ」

「ラリホッ！」

笑顔になる。

なんだこの人。

僕の無言の訴えを感じたのか、野沢さんが彼女を紹介する。

「ワンレイ。中国人だ」

「それだけ！？」

「他になんて言う」

野沢さんは心底不思議そうに言った。

「この意味不明な挨拶とかについて！」

「ああ、これは彼女のマイブームだ。心配ない。適当に返しとけば
噛まないから」

「・・・返さなかったら噛みつくのか。」

「・・・ワンレイさん前会った時こんな挨拶してませんでしたけ
ど」

村上の疑問。

「んゝ、まあ俺が日本語でHelloはラリホってというのが今の流行りだつて吹き込んだんだけどさ」

あんたが犯人か。

村上と僕の白い目が野沢さんを見据えた。

「・・・ゴホン。じゃあいつちよ行きますか！発進！」
誤魔化した。

へリが速度を上げる。

「車はこつちに逃げたんだよなあ」

村上が指を指した。僕は頷く。

「こつちか。よしワンレイ隊員！サーチライト点灯！」

「ラジャー！」

夜の街が明々と照らされる。

「え？いやこんな深夜の街中で・・・」

「細かいことはドントマインド！略してドンマイだ！」

「・・・」

やっぱ変な人だ。

僕のヤクザに対するイメージ。いわゆるゴッドファーザー的なイメージが音を立てて崩れ去っていく。

村上が口を開いた。

「でも野沢さん、なんで俺らの動き分かってたんですか？」
そういえば。

いくらご都合主義な小説とはいえタイピングが良すぎとは思った。

「ワハハ、柴咲の車には俺が薦めたアロマがある。ありやもれなく盗聴機入りだ！」

「ひ、ひどいツスね。プライバシーもへったくれもない」

「ハッ！馬鹿だな君は」

村上を野沢さんが鼻で笑う。

「あなたにや言われたくない」

組長にぬけぬけという村上もすごい。いや組長の威厳がないのか。

「柴咲だつてそれくらい気付いてるさ。あの場合、俺に状況を分
らせた方が得策だつて考えたに過ぎない。助手席に女を乗せる時に
はしっかり車のアロマは変えてるだろう」
「ひゃあ。こいつはお見逸れしましたね」
村上は両手を挙げる。

「ふふ。野沢組に入るにはまだまだ修行が足りんなあ」

「へえへえ。努力しますよ」

「隊長！」

「どうした！ワンレイ副隊長！」

ん？昇進した。

「車発見！黒い高級車ダよ！」

「んゝ、どう？」

野沢さんが僕に聞く。

僕は窓から外を見た。

黒い高級車。型も同じようだ。しかし・・・。

「違いますね。奴らの車、窓割れてますよ」

「窓が？なんで。アレか？ファッションか？最近の流行りか？」

「・・・」

この人どこまで本気だ？

「僕が割つたんです」

「窓を？なんで。アレか？ファッションか？最近の流行りか？」

「すいません、一発おもいきり殴つていいですか？」

「たく。この人が柴咲さんや相木さんのトップとは。とても信じら
れない。」

「あ！見つけた！」

ワンレイ副隊長が叫んだ。下を見ると、確かに窓の派手に壊れた歪
みまくつた車。

目立たないように隅に寄せられて停まっている。

「あれです」

「・・・でも車が一台近くに停まってるな」

村上が首を傾げる。

「仲間だな仲間。よっし！ステルスアタックだ！まとめてぶっ潰せ！」

「なっ！」

僕は思わず絶句した。

野沢さんは飛行中のヘリのドアを開け放った。

「うっ！」

強い風。

ま、またコンタクトがずれる。

「じゃ、運転任せた！」

ワンレイさんにそう言い放つと、ヘリからロープを垂らし、スルスルと落ちていく。

なんだあの人。特殊部隊か？

「さ、続くヨお前ラ」

「あ、はい・・・って、ええ！？」

続くってあの人に？

いや、無理。ムリムリムリ。

「ほら、さっさと行きナヨ」

運転席に移ったワンレイさんが急かす。

「ちょ、いやあ・・・。村上！行けえ！」

「俺！？」

村上が焦る。

「だっってお前さっきアレじゃん。自分が彼女たちを巻き込みました。自分が助けます！ってなんかかつこいいこと言ってただろ」

「う・・・俺そんなこと言った？」

「言った」

「言ったヨ」

「いやいやあんたはわかんねえだろワンレイさん」

「ノリだ」

「・・・」

「・・・さ、観念して行ってみようか、村上くん」

「待て。待て待て。俺は降りるよ。だがお前も降りるよ?」

「いいから行けって」

ドン。

僕が押そうとした時、横から手が伸びて村上を突き飛ばした。

「あ」

「うわああああああああ・・・!」

村上は急降下しながらなんとかロープにしがみついた。

「こ、殺す気かあ!」

「いやいやいや!僕じゃないって!」

「ワンレイさんッ!」

「ほらあんたも行きなよ。それとも押してヤロウか?」

ちよつと待て。んなことされたら死ぬ。まず死ぬ。

「分かったよ行きますよ行きやあいいでしょ!」

ええい!もうなんとでもなれ。

僕はロープを握りしめ、ゆっくり降りて・・・

ゆっくり・・・

ゆっくり・・・

ドン。

「どわあああああ・・・!」

悲鳴が夜の街に響き渡った。

28話 血染めの車 その2（後書き）

前書きで長々と気持ち悪い話してすみませんでした。現代社会のテ
ストで撃沈して、かっとなってやった。今は後悔している。

28話 血染めの車 その3（前書き）

警告出しました。前にも言った通り残酷描写は得意ではないので、あまり使わないつもりでいます。なのでこの警告が果たしてどれほどの意味があるのか・・・。とはいえ初志貫徹、有言実行という言葉を知らない僕のほざいたことですので、これが大いに意味を持つ可能性も捨てきれないわけですが・・・

28話 血染めの車 その3

なんとかロープにしがみつき、下まで降りていった僕だったが、まったく生きた心地はしない。

僕と村上はげっ所りした顔で息をついた。

「寿命・・・縮んだ」

「俺も・・・」

下で飄々としている野沢さんはすごいと思う。

その野沢さんは須川たちの車を蹴っ飛ばしていた。

「おらおらあ！そこにいんのはわかってんだ！出てこい！出てこないと石でボデイに変なの落書きするぞコラ！」

反対側の窓が割れてるんだからそこから覗けばいいじゃないか。

僕は村上にそう言うのと村上はハッとして笑って言った。

「相手は拳銃構えて待ち構えてるかもしれないねえだろ。あの人はあの人でちゃんと用心してんだよ」

そうなのか。

僕は注意深く車内を見た。

中に人影が見えるがスモークガラスでよく分からない。

村上は辺りを見回した。

隣接した車はスモークではなかった。

中には誰もいない。

「・・・なんか怪しいですね。この車。・・・ちょっと周り見てきます」

村上が立ち去る。

なおも車を蹴る野沢さんと僕が取り残された。

「・・・え、出てこないの？やるよ？ホントにやるよ？」

野沢さんはその辺から石を拾ってくる。

「え、マジでやるんですか？だってそれ数千万・・・」

「それガッリガッリ」

野沢さんによつて数千万の車に得体のしれない生物が描かれていく。

「できた。ヘビウサギくん」

「へび？・・・どの辺が？」

「いや知らねえよ。・・・でもなんで出てこないんだろっ」

「つかさ、さつきから思つてただけどなんか生臭くねえか？」

「え・・・う。そういえば」

なんていうか、なんとも形容し難い臭いが漂っている。

野沢さんの顔が一瞬険しくなったような気がした。

「開けてみつか。ガチャリ」

「え！ちよつと！？」

用心はっ？

制止も聞かず野沢さんがドアを開けた。

生臭い臭いがいつそう強くなる。

「・・・なんだこりゃ」

野沢さんが今度ははつきりと顔をしかめた。初めて見る表情だ。

「どうしま・・・うっ」

見るんじゃなかった。

僕は口元を押さえながら激しく後悔した。

車内は赤でコーティングされていた。

もともと真っ赤な車のように。

入ってまず気が付いたことは、この車はスモークガラスでもなんでもなかったことだ。

ただ、車に執拗なまでに飛び散った血液でそう見えていただけ。

人影は窓に叩きつけられた人間の頭部。

一体どれだけの強さで叩かれたのか。防弾仕様のはずのフロントガラスはいくつもヒビが入り、頭部はパツクリと割れ、オレンジ色の液体が漏れだしている。

もう1つの大男の死体は顔が変形するまで殴られたようだった。血塗れでどこがどの顔のパーツがよく分からない。

着ている服は赤じゃなく、どす黒い、もはや黒に近い赤で染まって

いる。

その陰惨な光景と匂いに僕は意識が飛ばないようにするのに必死だった。

「ひどいな。こりゃ戦場でもなかなかお目にかかれない虐殺死体だ」
「・・・」

戦場という意味がよく分からなかったが、今の僕にそれを追求する頭はなかった。

込み上げる酸っぱさに、耐え切れず僕は茂みへ走った。

胃のなかをぶちまけた苦しさ、皮肉にも僕の意識を保たせてくれた。

「・・・あつ！」

恐ろしい想像をして僕は慌てて死体を確認した。

1・・・

2・・・

2体しかない。

もしやと思ったが大川内さんはいないようだ。

良かった・・・。

僕は脱力してへたりこんだ。

「・・・岡崎。死んでるな。こんなところで死んじゃうとは不憫なやつだな」

「野沢さん、こっちには誰も・・・ゲッ」

戻ってきた村上が広がる光景を見て絶句する。

「誰がこんな・・・」

「あんたか」

「「えっ」」

僕と村上は声を上げた。

数秒後、それが自分に向けられた言葉でないと理解する。

「いつから気付いてた」

背後から声が聞こえた。

「俺が母親の胎内にいた時からさ」

野沢さんが笑みをみせる。その笑みにいつの間にか現れた初老の男が応える。

全く気付かなかった。

男の両隣には男がいる。1人は血の気の多そうなゴリラ。もう1人は冷血そうな若い男。

「貝塚・・・！」

村上が初老の男を睨み付けた。

貝塚？今日は知らない人がよく現れる日だ。

「やんのかコラア！」

貝塚の右にいる男がお決まりの陳腐な台詞を怒鳴る。

「よせ、見苦しい」

貝塚というらしい男はそれを制した。

「・・・やはり貴様は逸材だな。今からでも遅くない。どうだ、野沢組なんてちつぽけな看板置んで、俺のところで働かないか。お前ならN.O.2間違いないだ」

「ハッ、じょーだん。あ、じょーだんじょーだん、とお」

野沢さんは変な踊りを始める。

「てめえ！ふざけやがって！」

ゴリラが拳を振り上げた。

「いい加減にしたらどうです。見苦しいというのが分かりませんか」
今まで黙ってた左の男が言った。

静かだが殺意みたいな冷たさが籠もった声。

「・・・グ」

ゴリラは黙りこんだ。

怖いな、この人。

そのやりとりも野沢さんのへんてこな踊りも眉一つ動かさずに見ていた貝塚は静かに言った。

「俺は至って真面目だよ。ウチに来ないか」

「・・・」

野沢さんは黙り込むと踊るのをやめる。

「ふーん、ならこつちも真面目に答えてやる。嫌だね」
平然と、喧嘩を売るような事を言う。

僕はキレたこいつらが襲い掛かってこないかとヒヤヒヤしながら野沢さんを見た。

「・・・なぜかな。よければ教えてもらいたいものだが」

貝塚という男は笑みを絶やさないまま聞く。

それがかえって不気味だった。

「簡単だ。能力の低いものが高いつのに従うのが摂理だ。高いものが低いものに従うなんて聞いたことがない」

つまりは俺はあんたより能力が高いつていい訳か。

・・・どんな自信だ。

「ハッハッハ。こいつは大物だな。まあそのくらい自信を持ってる奴の方が使えるかな」

「・・・まあ。俺が大物とかいう話はどうでもいい。話をすりかえないでもらおうか。俺は、これはあんたがやったのか、って聞いてんだ」

野沢さんは車を指して言った。

「フム・・・君は俺がやったと思うかね」

男が楽しそうに聞く。

野沢さんは黙りこくった。これはこの男がやったことではないのだろうか。だとしたら一体誰が・・・。

「ま、あんたらの仕業だったらもつとスマートに殺すだろうな。ナイフでひとつきとか。この惨状、まるで獣だ」

「獣か。確かに。分かってもらえて嬉しいよ。・・・岡崎はこちらとしてもまだまだ使える人材だったのだから。残念だよ」

「で、あんたは結局何を？」

貝塚は顎に手をあてた。

「フム。須川を追ってたらこれを見つけな。どうしたものかと思案してたところだよ」

僕は堪らず口を挟んだ。

「あなたが来た時、女の子を見ませんでしたか？」

貝塚は初めて僕を見た。

「女の子・・・さあ。ここで死んでるのは皆ウチの者だ。ただ・・・」

「ただ？」

「・・・1人足りない」

それを言ったのは村上だった。

「あ」

と、同時に僕も思い出した。

大川内さんを連れ去った奴らは3人いたはずなのだ。

「何？」

野沢さんが眉をひそめた。貝塚がうなづく。

「須川の仲間は3人いた。ここで死んでるのは2人。つまり、それと、その女の子はどこか消えちゃったってわけだ」
・・・・・・・・・・

僕らは押し黙った。

大川内さん。無事だろうか。

その時、野沢さんの携帯が鳴り響いた。

「俺だ。・・・」

野沢さんの顔が曇る。

「何だと・・・そうか、わかった」

ピッ

携帯をしまつと野沢さんは

「急用ができた。悪いがあんたとの話はこれまでだ」

「・・・」

すると、貝塚の隣の冷静そうな男が前に出てきた。

「おーおーこれまたかわいい顔したお坊ちゃんだねえ。お前、大丈夫か？あの後ろのオジサンにケツ掘られてないか？」

「・・・」

男の目が細められる。

こ、怖い。

しかし野沢さんは飄々とそれを受けとめる。

「まーまーそう怒りなさんなって。じょーだんだよ、じょーだん」

「・・・あなたにこれを渡しておく」

男は野沢さんに一枚のディスクを渡した。

「ん？おお！ジョーカーじゃないか。よかった、これで相木も喜ぶ」

「な・・・」

村上は驚きを隠せないようだ。

それは僕も同じだった。

なぜディスクを返したのだろう・・・。

「それと・・・あまり私の前で貝塚さんを侮辱するな」

「おー怖い怖い。あ、まさかもこのオジサンとはそういうかんけ・・・」

ヒュッ！

男がスーツのポケットから何かを取り出した。

キラリと光るもの。

ナイフだ！

そう気付いた時にはナイフは凄まじいスピードで振り抜かれていた。

「なっ！」

「野沢さん！」

僕と村上が同時に叫ぶ。

が・・・。

ナイフは野沢さんの手によって止められていた。

野沢さんはさつきと変わらない笑み。

男は力を込めているのか真っ赤になっている。

・・・。

僕はただ驚いていた。

「よおよお。短気は損気。そんなんじゃこの世界で長生きできないよ？」

「・・・！くそっ！」

「やめろ、王。お前じゃ適わん」

「・・・くっ！」

王と呼ばれた男は唇を噛んで下がった。

「んじゃ、俺らはいくんで」

何事もなかったかのように悠然と立ち去る野沢さん。この人ホントにすごかったんだ・・・。

僕たちは野沢さんの後を追った。

「す、すごかったですね野沢さん」

「はい！俺見直しました！」

「・・・」

「野沢さん？」

「ぬおおおおっ！」

野沢さんがいきなり雄叫びを上げた。

「・・・？」

「どうしました、野沢さん？」

「へりがなあああい！」

「あ」

そういえばバリバリやかましい音が聞こえなかった。あの人帰ったのか？

「わ、ワンレイさん呼び戻しましょう」

村上が慌てて携帯を取り出した。

「・・・出ない」

「どうしましょう、ここどこですか」

「早くしないと警察来てめんどくさいことに」

「おお！」

今までじっと考えてた野沢さんが手を叩く。

「何かアイディアが？」

「そういえばワンレイ、今日見たいドラマがあるから定時に帰るっ

て言ってたな」

「・・・」

沈黙。

「いや知らねーよ！今さらそんなこと気付いてもおせーんだよ！」

「てか定時ってなんだよ！今深夜だぞ！その前にヤクザに定時もクソもあるか！」

「彼女は夜勤だ」

「知るかあつ！てかドラマくらいビデオに撮れえつ！」

「いや・・・俺に言われても」

小さくなつた野沢さんがボソボソ言つた。

そりゃそうかもしれないが言わないでいられようか。野沢さんは落書きに使つた石でアスファルトにのの字を書いている。

「もういいですからとりあえずここから離れましょう」

村上の冷静な意見。

「だな。タクシーでも呼びましょう」

村上が携帯を取り出す。

「そういえば、さっきの電話、何だっ たんですか？」

僕は野沢さんに尋ねた。

「おお、忘れてた。・・・おい村上、敦司くん。警察に行くぞ」

「へ？・・・ああ。この事件を通報するんですか」

「いや。さっき相木から連絡があつてな。柴咲が警察につれてかれらしい」

「・・・へ？」

「・・・え」

「ええええっ！」

叫んだのは僕と村上だ。

「どういうことですか！柴咲さんが何をしたんですか！」

「さーなあ。ま、やる時はやる奴だとは思ってたよ。うん」

「野沢さんっ！？」

「まあ冗談はさておき、それを知るためにも警察いってこーか」

その時一台の車が止まった。

「お、迎えのタクシーだ」

「え、早いですね・・・え・・・」

村上が絶句する。

それはタクシーなどではなかった。

白と黒でコーティングされたやつだ。

彼らは慌ただしく車を降りると、車上の惨劇に騒然となって、何か通信したあと、僕らの方を向いた。

「・・・署までご同行願おうか。」

なんでもこうなるかな。

僕たち3人は期せずして警察まで連れていかれることとなった。ただし若干意図した物とは違う形になったわけだが・・・。

29話 連行、愛知県警 その1（前書き）

うつ・・・忙しい・・・。怠けとかじゃなくてマジで最近忙しいです・・・。勉強、講習、模試と、これからぐんぐん忙しくなり、週1日も満足に休めない・・・。怠け者の僕には辛いです。うつ・・・。高校入試ん時はそんなに忙しくなかったのに・・・（当たり前だ）

29話 連行、愛知県警 その1

6月 23日 月曜日

いつの間にかとつくに日付も替わった深夜。僕と村上、野沢さんは愛知県警にいた。

大川内さんを追っていたはずがこんなところに連れていかれ、いささかブルーである。

しかし、それはさておき心配なことがある。

すなわち、大川内さんのことだ。彼女とあと1人はあの惨劇から忽然と姿を消している。逃げたのか、はたまた……。

「だから！」

バン！と机を叩く音が響く。

「なんであんな所にこんな遅い時間にいた！」

髭面の刑事が怒鳴った。

その大声に思わずビクンとなる。

うう、耳鳴り……。

「だからいつてるじゃないか、喋ってほしけりやカツ丼を出せい！」意味不明な主張をしているのはもちろん野沢さん。

村上は村上で黙りこくっている。大川内さんが心配なのだろう。

「野沢さん、それはカツ丼さえ出れば何でも喋るってことですか？」

「おお！喋ってやるさ！ワンレイのスリーサイズから村上の初恋話までな！」

「ちよつと待った！その話は誰にも言っていないはず……」

「俺らの諜報網を甘くみるな。お前の同級生にちよつと金をくるめば……」

「あんたやること汚いなっ！」

「てめえらしい加減にしやがれっ！」

刑事が一喝する。

「それで、あの、大川内・・・被害者の人達と一緒にいた少女について・・・」

僕は気になっていたことを尋ねる。

「ああ、またその話か。一応この辺りで情報を募ったが女の子が保護されたような話は聞いてない。確かにその少女が実在すれば、重要な証人になるだろうがな・・・どこまで信用できるか」

「俺らは嘘なんかついてねえっ！」

村上が食ってかかった。

「まーまー。やましいことがなければただポケーツとしてりやいんだよ。下手に騒いでも警察怒らすだけ。短気は損気。さっき言ったる？そんな時は、ただでカツ丼食えると思えばあら不思議！ちよつとお得きぶーん」

「・・・だからカツ丼なんか食わせる気はサラサラねえつつってんだろ話し聞いてたかお前」

「でもその女の子は心配だねえ。おい、刑事、頑張つて捜査しろ！」

「・・・いい加減にしねえとぶつ殺すぞこらあああ！」

キレた。

まったく、どつちが警察怒らせてんだ。

「ま、待った待った！落ち着け！ぐ・・・ぐるじい・・・」

胸ぐらを掴まれた野沢さんはブンブン振り回されている。

「ちよ、むらがみい・・・組長のぴんちだ、助けるお・・・」

「いえ、あんたさつきからうるさいです。あんたは気絶したくらいがちようどいいかと」

「ぐえええっ・・・だすげで・・・う」

死んだ。

ちよつとかわいそうな気もする。

「ふう、これで落ち着いて話ができますね」

「まったくだ・・・時に、さつき組長がどうとか言ってたが」

「この伸びてるのが組長。俺は・・・まあ、下っぱです」

「へえ、お前もか。見た感じこいつよりは真面目に見えたが」

刑事が僕を見た。

「い、いやいや！僕は一般人！健全な高校生です」

「じゃあお前は暴力団とはなんの関係もない、と」

「ええ、僕は友達を誘拐され、彼らは大事な物を盗まれたこともあり、それに協力してくれたってわけです」

「大事な物？」

刑事は眉をひそめた。

「なんだいそれは」

「あ・・・っと」

僕はチラリと村上を見た。コンピュータウイルスですなんていいものののだろうか。

「・・・」

村上も言葉に困ったようだ。

「なんだ。言えないようなものなのか」

「企業秘密というか・・・ねえ」

いや、僕に振られても困る。

「怪しいな。やっぱり・・・」

「我が社の新製品のデータが入ったディスクです」

扉の開く音と共に男が入ってきた。

「新製品？」

「ええ。ウチの、いわばシャバの仕事で」

「相木さん！」

「やあ、災難だったな、鳳くん」

「ええ、相木さんも・・・」

言いながら僕は一瞬あれっ？と感じた。

「助かりました相木さん。組長じゃあ会話が成立しないので、困ってたんですよ」

村上が安心した表情を見せる。

「あっ、と・・・相木さん」

「どうした」

「僕、名乗りましたっけ？」

相木さんはフツと笑みを見せた。

「いや、名乗ってない」

「じゃあなんで・・・」

「柴咲さんが君を知っていたんだよ。・・・正確には君のお父さんをね」

「父さんを？」

柴咲さんが・・・。

「もつとも、彼が高校生くらいの時らしいが。君にも会ったことはあるらしい」

「そうだったんですか・・・。柴咲さんも人が悪いな。言ってくれればいいのに」

「まあ、もしかしたら・・・って程度だったらしいしな」

「そうですか・・・」

言いながら僕は辺りを見回した。

「あ！そうだ！その柴咲さんはどうなったんですか？」

「ああ。何やら今回のいざござとは全く別の件で任意同行を受けたらしい」

「別の件？」

「ああ。詳しくはよく分からないが」

何にしても、柴咲さんが警察にとっ捕まったのは事実のようだった。うう。なんでこう面倒な事態に・・・。

横では野沢さんが白目を剥いて寝ている。

僕はため息をついた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5710d/>

不機嫌な人々～変人達が織り成す事件簿～

2010年11月5日13時40分発行